
むりやり自宅警備員

白かぼちゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

むりやり自宅警備員

【Nコード】

N7736P

【作者名】

白かぼちゃ

【あらすじ】

異世界で暮らしていくことになった主人公。能力を得た代償としてむりやり自宅警備員に。そんな主人公がなんとかして充実した生活を送ろうと奮闘する物語です。若干ローテンション気味の主人公ですが頑張ってるみたいです。

※各話が基本短めです。ご了承ください。

プロローグ（前書き）

はじめまして。

皆様の小説が面白かったので、勢いのままに書き始めてしまいました。

初めてなもので至らないところも多いですが、皆様の暇潰しになれば幸いです。

白かぼちゃ

プロローグ

目が覚めると、そこは白い世界だった。

いったいここはどこなのだろう？

起き上がって周りを見渡してみるが、どこまでも何もない白い世界が続いていくだけだ。

そんな時、ふと気配を感じ振り向く。

そこには老人が立っていた。

胸まである立派な白いひげをたくわえ、穏やかな目でこちらを見ていた。

こんな人をマンガで見るたび思うことがある。

「そこのご老人、その髭はシャンプーで洗うのですか？」

彼は答える。

「ふむ、君は髪を洗う時にシャンプーを使わないのかね？」

これほどの量があればもちろん使うし、わしはトリートメントも使っておる」

うん、考えてみれば当然だ。

己の愚問を恥じる。

ってそうじゃない。聞かねばならんことがある。

「ところでここはどこで、あなたはどのような方でしょうか？」

申し遅れました、自分は斎藤 優と申します」

「おお、これは丁寧に。わしは君たちにはく神と呼ばれる存在じ

や」

「はあ、そうなのですか。ですが＜神＞とは立場ですよね？
お名前は何かとおっしゃるのでしょうか」

「ふむ……、この世に現れた時から神様と呼ばれておったから、名前がないことに気付かなかったのう。

これは傑作じゃ。ふおっふおっふおっふお」

「そうなのですか？ 面白い方だ。ハハハ……」

穏やかな時間が流れていく。こういう空気っていいよね。

「そのポケ二人！ ちょっとそこに直りなさい！」

声の方を振り向くと、そこには白い羽をもった金髪の女性が立っていた。

慈母のような微笑をたたえているが、なぜか口の端がひくついている。

いったいどうしたのだろう？

「斎藤さん！ あなた目が覚めたらいきなりこんなところにいて、もっと別の反応があるでしょう！？

神様もなに普通に会話してるんですか！ 彼に状況を説明してあげてください！」

よくわからないが、俺の態度が良くなかったらしい。素直に謝っておこう。

「すみません。なにぶんこんなこと初めてなもので、何か失礼をし

たなら謝ります」

「初めてに決まっているでしょう！」

「セラよ、彼も謝っておるではないか。許してあげなさい。

それにのうセラよ、初めての人と会う時には自己紹介と和やかな会話は大切なのじゃよ？」

「ダメだこいつら。話がかみ合わない……」

セラさんの顔が引きつっている。ダメだ、原因がわからない。

ああ、僕の力不足を許してください。

「斎藤さん、話が進まないなので私が説明します。ここは天界で、あなたのいた世界ではありません。

あなたは交通事故で亡くなったのですが、ちょうど天界・日本中部地区自動車事故の部に受け入れる余裕がありませんでした。

ですので別の世界で再び生きていただくということになりました。

思い出した。そういえばそうだった。

いやー、電車じゃなくてよかったよ。賠償金やばいからね。

「それでのう、急に別の世界に行っても満足に生きることも難しかろう。一つだけ能力を渡したいと思うのじゃ。

好きなものを選ぶとよい」

「ですが斎藤さん、注意してください。能力の大きさによって相應のデメリットもつきますし

イメージ通りの能力になるとも限りません」

ふむ、さすがに死ぬには若すぎたからもう一度生きられるのはありがたい。

だけど能力か、別に英雄になりたいとか名を残したいとかないからなあ。

生活力のありそうな能力がベストだね。

「決めました。食料や生活用品を生み出せる能力をください」

「……微妙な能力にしましたね。以前の方々は、不死身になるだとか錬金術が使えるようになるといったものだったのですが」

「楽しく過ごせれば平凡な人生でかまわないですよ。派手なのは柄じゃないもので」

「……わかりました。それでは行ってらっしゃいませ」

「がんばるのじゃぞ」

そうして俺は意識を失い新しい世界に旅立っていった。

プロローグ（後書き）

小市民ていいですね。

これはひどいんじゃないかな？ (前書き)

とりあえず2話目です。

店経営はもう少し先になると思いますがよろしくお願いします。

これはひどいんじゃないかな？

目が覚めると、そこは小さな家のベットだった。
中世ヨーロッパの農家、といった感じだろうか？
どうやら外は森のようで、鳥の音がすがすがしい。

プルルル……

場違いな電子音がする。なんで携帯電話があるんだよ。
まあほぼ確実に神様関係だろうからとりあえず出してみるか。

「もしもし」

「斎藤さん、天界でお会いしたセラです。おはようございます。
このたびは説明のためにお電話させていただきました」

どうやら天界のものだったようだ。アフターサービスまで充実しているとはさすが天界。

これなら顧客満足度も高いだろう。知らんけど。

「おはようございます、セラさん。わざわざありがとうございます」

「仕事の一環ですので、気にしていただくなくて大丈夫ですよ。それでは説明しますね。」

この世界はイスパニアといいます。イスパニアには魔法が存在しますので、斎藤さんの能力は魔法の一種という扱いです。それでは発動させてみてください」

無理だろ、とか思いつつも念じてみるとカタログのような画面が

出てきた。

なんか長ネギとかトマトとか載ってるし……。

「カタログの写真の下に数字がのっていますよね？」

そこにある分の魔力を使って、物を作り出すのがあなたの能力です。使っていくうちに品目が増えるようなので、どんどん使ってくださいね」

長ネギひと束（98）、トマト1個（100）。

……なんだろう、数字の後に円をつけたらファンタジー感が一気になくなる気がする。

「次は魔力についてです。この世界では魔力は自然には回復しません。一人ひとり違う<キー>と呼ばれる物質を吸収することで回復します。

最大魔力には上限がありますので、あるだけ一度に吸収しようと思ってもできないことがあるので注意してください」

「なるほど、ちなみに自分の<キー>はなんなのですか？」

「お金、ですね。この世界の通貨なのですが1フォルで（1）回復します。

学生の昼食が大体500フォル、普通にお店で食べると1000（1500フォルといったところでしょうか」

わー、なんだかとてもわかりやすいやー。

わかりやす過ぎてなんだか微妙な気分なんです。

「最後にこの家ですが、能力の一環として発生したものです。お城などは無理ですが、今の家と同じような規模の建物にでしたら

瞬時に変化することができます。

規模を大きくしたのでしたら魔力を使って強化してください。
なお今現在で月に（50,000）ほど魔力がかかります。家を強化していくと、かかる魔力も増加していくので注意してください。
以上で説明を終わります。このほかのことについては説明してはならないことになっているので、申し訳ありませんがご容赦願います」

なんだかわからないことが多すぎるけど、仕方ない。自分で調べていこう。

うーん、これでは顧客満足度ナンバー1にはなれんなあ。

「わかりました。ありがとうございます」

「それですね。これは個人的なお話なのですが……。

あの……その……ですね……」

セラさんにしては、珍しく歯切れが悪い。どうしたのだろうか？

「えーっと……。が、がんばってくださいね！

私、応援してます！ 強く生きてください！」

なんといい人なのだろう。

実はセラさんが神様だったりしません？

「ありがとうございます。頑張らせていただきますね」

「それでは失礼します。その……良い生活を……」

ピッ……

なんだろう、応援されて元気が出てきた。
よし、腹も減ってないしさっそく外に出てみよう。

外に出て確認してみる。

どうやらこの家は森の中、ぽっかり空いた空き地にポツンと建っているようだ。

家の周りを簡単な木の柵が入口と思しき部分を除いて囲っている。
周りの木のむこう側が見えないのでそれなりに森の深いところなのだろう。

それにしても空気おいしい。朝の涼しげな気温もあってなんともさわやかな気分だ。

「よし、食料の心配もないし一回森を抜けてみよう」

いざゆかん、と柵の外に出ようとしたが何かにぶつかった。

なんだよ痛いじゃないか。不思議に思っ手を手を当ててみるとなんだか壁みたいなのがかった。

なにこれ？　とりあえず柵を一周回って調べてみたが何処も同じようだ。

殴っても蹴ってもびくともしない。

途方に暮れていると、頭の中で声が響く。

<制約が発動しました。あなたは自宅より出ることができません>

……えっ。

一筋の汗が頬を伝う。

同時にセラさんとのやり取りが頭の中で再生されていく。
やばい、汗が止まらない。

「……まじですか？」

これはひどいんじゃないかな？（後書き）

やっぱり小説書くのは難しいです。

上手に書いてる皆さんほんと尊敬ですよ。

ただいま絶望中でございます。

とりあえず家の中に戻ってきました。

よしよし、落ちつけ落ちつくんだ。ビークールビークール。

……

椅子に座って前後にゆらゆら。

……2時間経過……

はっ、俺は一体何をしてたんだ？

「よし、腹が減ってるから暗くなるんだ。なんか食おう、なんか」

問題はひとまず置いておいて、魔法を発動させる。

S Fにありそうな電子画面が空中に出てきた。起動画面にはこんな文字

＜生活創造＞
まゐでつうはん

……うん。

……えーと。

何食べようかなー、迷っちゃうな。

ダメだ、テンション上げないと何かに潰される。

さすがに料理作る気力はないので、何かないか探してみる。

ご飯……米ならある（精米済み）

パン……小麦ならある

麺……パンに同じ

……そうだね。

確かに生み出せるの食料って言ったもんね。料理じゃないもんね。

仕方がないのでバナナ（198）をだしてかじる。

もちゃもちゃもちゃもちゃ……

なんだろう、主食になりそうな予感がする。

ふう。とりあえず腹も膨れたし鬱状態からは脱出できたかな。
しかしこれからどうしよう？

ふと携帯電話が目に残る。

あれ？　なんかあの携帯から後光が差してる気がするんですけど。

過去最高のスピードで携帯を開きリダイヤルで電話をかける。

携帯さま、今まで持ち歩くのがめんどくさいなどと暴言を吐いて申し訳ありませんでした。これからは首からさげるようにしておきます。アーメン。

プルルル……ガチャ

「もしもし？ 斎藤さんですか？」

ああ、わが女神セラさん。
あなたの声に癒されます。

「突然でまことに申し訳ありません。もうすぐそちらに行こうと思
いますのでよろしくお願いします」

「斎藤さん！？ 落ち着いてください！」

「はっはっは。何をいつているんですセラさん、ひどく落ち着いて
いますよ。」

七輪、練炭、ガムテープ。すべて生活用品ですからね。
あと1時間もしたらいけると思うのでよろしくお願いします」

「冷静に壊れてる！？ ま、待ってください！」

……そうだ！ 強く生きてくれると約束したじゃないですか！」

「む……。たしかに」

さすがにわが女神セラさんとの約束を破るわけにもいくまい。
くっ。退路を断たれた。

「わかりました。約束した以上は強く生きましょう。
ゴキブリのようにしたたかに生きようではないですか」

「もうちょつと綺麗に生きてほしい氣もしますが……。
なんにせよ持ち直してくれてよかったです。」

あなたの環境は苛酷ですが強く生きてくれることを祈っています」

「はい、ありがとうございます」

「本来、私はその世界との接触を禁止されています。これ以後話せることもないと思いますが、いつもあなたを見守っています」

ガチャ……ツーツーツー

携帯電話が光となって消えていった。

まあとりあえずやってみますか。もしだめでも天国行くのが遅いか早いかの違いでしょ。

だってよっぽどのことしない限り天国に行けるようじゃないと天国からここに送られた俺の立場ないしねえ？

さあやるぞー。

<通話時間3分 界際電話料金(1100)>

……やるぞー。

籠城は援軍がないとダメなのです。（前書き）

かつかつ書いてます。

評価してくださった方、お気に入りになってくださった方ありがとうございます！

こんな拙い文章ですがよろしくお願いします。

籠城は援軍がないとダメなのです。

さてさて、元氣もでたことだしいろいろやるとしましょうか。
まず制約について調べてみようかな？

柵の前まで来て壁みたいなのを押してみるが結果はハイレベルなパントマイムができただけ。

うーん、どうにも柵をこえられないなあ。

この壁みたいなのこわせないかな？

見せようではないか我が本気。前蹴りとび蹴り喧嘩キック。

あらん限りの打撃技を繰り出すが壁はびくともしやがらない。

「……魔法発動。かなづち（3，000）」

大きめのかなづちを出してみる。

これが本気の本気じゃー。人間様なめんどねー。

ちなみにハンマーは値段と重量の関係で却下されました。
ではバッター構えまして……。

「せーのー、それ」

フルスイングしたかなづちは壁のあるだろう場所をすり抜け飛んでいってしまった。

しまった、驚いてかなづち放しちゃったよ。飛んで行った先に被害が出ませんように。

……どうやら俺の完敗みたいだ。
かなづち結構高かったのになあ。

しかし今を見るに俺以外のものなら柵の外に出られるのかな？
試しに庭にあった石を投げてみるが当たり前のように柵の外へ飛んでいった。

なるほどなるほど。嫌われてるのは俺だけってことですね。

……次は魔法を調べてみようかな。

場所は移って家の中。魔法を発動してみる。

見れば見るほど商品カタログにしか見えん。

ファンタジー成分が足りてないんじゃないのか？

画面の左上をみると（195, 702）の数字が。

もしかして、これ残り魔力？

そこでふと気付く。

あれ、まずくないですか？

ここから出られないということは、お金が手に入らないというわけ
で。

つまり魔力がそのうち切れて、食べ物が出せなくなるわけで。

つまり……その……バットエンドといえますか……。

やばい、まちでやばいです。

とりあえず緊急の課題としてだれかに会おう。

コミュニケーションできれば人間じゃなくてもかまわない。

だって一応魔法あるし、ファンタジーなら亜人的な人もいるよね？

あははは。ファンタジー成分も補給できてちよいといいね。

きつとみんなやさしいもんね。ラブ&ピースだもんね。……ね？

オーケー、ブレイクブレイク。

さて、気を取り直して、まずは生き残ることを考えようか。

天に召されるにしても兵糧攻めの召され方は嫌だ。

それを避けるには外から来た人からお金や食べ物をもらえばいい。

何かもらえるのが一番だけど、最悪物々交換でも場合によっては食費が浮くかもしれないから問題ない。

魔法のおかげでいろいろありやすぜ。

……ならいつそお店でも開くといいかな？

何の店にするかはわからないけど、ちよつと考えておこう。

来てくれた人に何がいるのか聞いてもいいし。

最後に家の設備だ。

もちろん俺にだって譲れないものはある。

トイレは洋式ですよね。異論は認めますけど。

魔法の家の欄を見てみると

<水洗トイレ洋式改築 (30,000)>

ええ、即決でしたがなにか？

ほかにも調理関係を調べたけど厳しいです。

かまどとか正直使いこなせる気がしないので、コンロっぽいものを(10,000)で出しました。

火を出してると魔力が減っていきます。強火だと減りが早い気がします。

電気はないけど水についても同じ感じですよ。

……もうちよつとイージー設定でいいんじゃないでしょうか？

籠城は援軍がないとダメなのです。(後書き)

今回はただの現状認識です。
次回ぐらいから登場人物増やそうかと。

遭遇、お犬様。

こんにちはみなさん。

いかがお過ごしでしょうか。

はい、この3日間人っ子一人来やがりません。

動物すら見かけないってどうよ？

……

そんなわけで現在、門の前で膝を抱えて座ってます。
なーにか、こーないーかなー。

しばらく経ってうとうとしてきた時にそいつは来た。

ガサッ……ガサガサ

出てきたのは、真っ黒な毛並みに金色の目の子犬。つぶらな瞳が
キュートです。

ひさしぶりに見る生き物に俺のテンションは急上昇なんだぜ。

「お犬様じゃ、お犬様じゃ」

とことこと歩いてくる。

……なにこれかわいい。

「こ、怖くないよ。こっちにおいで」

「ワン！」

門のすぐ近くまで来ると鳴いてくれた。
あとすこし、あと少しで触れるんだ。
憎い、あまりにこの壁が憎い。

「こんにちは、俺はサイトウユウっていうんだ。
長く、できるだけ長くよろしくね」

「ワフ？」

「おいしいご飯上げるから、もっとこっちにおいで」

不審者丸出しのセリフでお犬様に呼びかける。

良い子のみんなはこんなこと言う人についていっちゃだめだよ？

すぐに魔法を発動して肉と水を出す。

肉は松阪、水は某天然水。

300グラムで(12,000)。

投資は惜しんではいけないのです。

来ました、来てくれました。

じつと肉を見つめた後パクツとかぶりつく。

一口食べて鳴いた後は一心不乱に食べている。

水もおいしそうに飲んでくれていたし気に入ってくれたみたいで良かった。

「ワン！」

食べ終わった後に鳴いてくれたときは、すごく満足そうだった。
……貢ぎたくなる人の気持ちがあった気がする。

そのあとしばらく膝に乗せ、撫でたりして至福の時間を過ごした。
顔がにやけっぱなしです。

そのうちにお犬様がこちらを向いて一鳴きすると森の方に歩いて
行ってしまった。

今まで野生だったのだ、急に居ついてくれるとは思っていない。
これから餌付けをしていっていずれはここに住んでもらえばいいの
ですよ。

テンション上げたのがいけなかったのか少し疲れたみたいだ。
バナナをつまんで水浴びしたらさっさと寝るとしよう。

あー、今日はいいい一日だった。

幕間…くるしゅうない、おもてをあげい。

皆のもの、楽にしてよいぞ。

わが名はアスフェル。

誇り高きフェンリルの血族にして、このく魔物の森を治める偉大なる父上の第一子である。

数日前よりこの森に突如現れた不審な輩がいるという。

害意は感じないというが、不安なので調査してほしいとの嘆願があった。

民の平穏を守ることも王族の務め。

その者を我自ら調べてこようぞ！

ガサツ……ガサガサ

ふむ、ここがそうか。

たしかに見慣れぬ者がおるわ。

人間のようなだが髪と目に我と同じ高貴なる黒を持つておる。

なるほど興味深い。しばらく観察してみるか。

「お犬様じゃ、お犬様じゃ」

ほお、わが高貴さがわかると見える。

犬ごとときと同一視されるのは屈辱だがわが一族は歴史の表には余り出ぬゆえ知らぬのだろう。

それにどうやら我の方が年若いようだ。寛容な心で無礼を許してやるとするか。

「こ、怖くないよ。こっちにおいで」

……うむ、敵意はないようだ。近づいてみるとするか。

「その者、名を申せ！」

「こんにちは、俺はサイトウユウっていうんだ。
長く、できるだけ長くよろしくね」

「珍しい名だな？」

「おいしいご飯上げるから、もっとこっちにおいで」

そう言っつてやつは何もない空間から肉と水を生み出しおった！
数ある魔法の中でも最上位である創造系の魔法を使うとは……。
よからう。頂くでしょう。

ふむ、赤身に美しく脂身がのっておる。
見るだけでも楽しませてくれるわ。
では頂くとするか。

……こ、これは！

この柔らかさ……以前食したペガサス以上か！？
そして微かにエールのようなニュアンスを感じる。おそらく丹精込
めて育てた肉なのだろう。

野生の肉にはない、作り込まれた芸術品のような感じを受ける。
水もうまい。軟水の中でも上質なものに違いない。

これほどのものを創造するには極めたとすら言える魔法の錬度をも
って、膨大な魔力を使わねばなるまい……。
そなたの歓迎、たしかに受け取った！

「美味なり！ 我は満足だ！」

食事が終わった後、やつは我を撫でようとしおった。未だに敵意を感じない。そのまま撫でられるとするか。悪くない、良い気持ちだ。

……はっ！ 寝てしまったようだ。
むう、不覚なり。

ゴホン、調査はこれでいいだろう。

民の嘆願でも害意はないとあったうえ、我も感じる事ができん。ところどころ馴れ馴れしいところもあるが概ね礼を尽くしておる。この者ならば民になるかは分らぬが、民を脅かすこともあるまい。

「よき隣人よ！この森はそなたを歓迎する！」

なかなか気持ちの良い者であった。

我に媚びるわけでなく、あれほどの魔法が使えるのに驕った態度もなかった。

それに、その……撫でるのもなかなかうまかったしな。また気が向いたらサイトウに会いに行くとするか。

我らが隣人に幸せが訪れんことを。

幕間…くるしゅうない、おもてをあげい。（後書き）

かなりやってしまった感満載です。

松阪牛は、一部ではビールを飲ませて育てるのだそうです。

ちなみに白かぼちゃは、一度松阪牛食べましたが舌が貧乏すぎて普通に通にうまいぐらいしかわかりませんでした。

身の程をわきまえろって話ですね。

森の愉快な仲間たち。 (前書き)

明けましておめでとうございます。

今回一度操作ミスで消してしまい泣きそうになりました。
年の初めから幸先悪い……。

森の愉快な仲間たち。

みなさんおはようございます。

こちらの世界でも布団の魔力は健在なようです。

顔洗って朝飯にみんな大好きバナナをもちやもちや。

そろそろ味噌汁とかつくるかなあ。

朝の支度も終わり、もはや仕事と化した外界観察をしようと外に出たところでなにかを蹴飛ばした。

どうやら玄関出たところに携帯ぐらいの大きさの水晶が置いてあったみたいだ。

魔力を感じるような気がするけど……。

まあいいや、もらっとけ。

……あれ、いつもと違ってファンタジーさんがたくさんいる。

なにあの狼、頭が三つもあるんですけど。

なにあの蛇、丸のみされそうならいでかいんですけど。

ほかにもなんか変なのがいるよ……。

ん？　なんかヘルメットかぶってグラサンつけた、でかいモグラがこっちにくる。

モグラの分際で二本の足で大地をふみしめてやがる。

「ようにいちゃん、いい朝だな！」

……（キヨロキヨロ）

「おいおい無視かよ。つれないねえ」

……やっぱこのモグラがしゃべってるよね。

「おはようございます。いい朝ですね。

いや、みなさんを急に見かけるようになって戸惑ってしましまして」

「ああ、そいつは悪かった。

数日前からいきなりこの森に人間が住みついたっていうじゃねえか。ちいとばかし警戒しちまってな。勘弁してくれ」

むう、何とできたモグラ。

これならいろいろなことを聞いてみるでもいいかもしれん。

「実際警戒してしまうのも無理ないですよ。

申し遅れました。自分サイトウユウといいます」

「そいや名乗ってなかったな。

俺はグランってんだ。この森で巣穴づくりを仕事にしてる。

まあ人間にゃ関係ないだろうが用があったら言ってくれよ。安くしとくぜ」

「そうなんですか。

また機会があればよろしくお願いしますね。

どうです？ 立ち話もなんですし上がっていきませんか？」

「おっ、いいのか？」

せっかくだしそれなら上がらしてもらうぜ」

椅子に座ってるモグラってなんかいいね。
ぬいぐるみにたようなものを感じる。

「粗茶ですが」

「なんだこりゃ？ 水じゃねえみたいだが」

そりゃ知らないか。

第一モグラがお茶とか入れてたら不自然さ全開だもんな。

「これはお茶といってお茶の葉を水に入れて火にかけたものです。
口に合わなかったら残しておいてください」

「ああ、自称ジェントルマンがそんなもん飲んでるっていったっけな。

ふうん、うまいじゃねえか。

ありがたくいただくぜ」

……まさかそいつ動物じゃないよな。

だとしたらどんなつわものだよ。

だめだ、ここの生き物は愉快すぎる。

「そんな人（？）がいるんですか。ぜひ会ってみたいですね。
そいえば聞きたかったんですけどなんで急に警戒を解いてもらえた
んですか？」

「王族の方が直々に調べてくださってな、問題ないと判断してくれただよ。」

住民の証が届いただろ？」

いつの間に調べたんだ？

きつと門の前におとなしく座っていたのが評価されたのだろう。見る目があるじゃありませんか。

……冗談です。不審者認定されなくてよかった。

俺なら速攻認定してたね。

でも住民の証ってなんだろう。蹴飛ばした水晶のことかな？

「住民の証ってこれですかね？」

「おう、それだ。」

その中には魔力が入っててな、この森で人間でいう金みたいに使えるぞ。

支払う時は相手の証に合わせて払う側が額を言えばいい」

「それは便利ですね。」

でもその魔力ってどうやって増やせばいいんですか？」

「森の警備とかで王様から頂く奴もいれば、俺みたいに商売をする奴もいるな。」

そのほかには懸賞金のついたならず者を捕まえるなんてものもある」

これは助かる。これがあれば自分の魔力の消費を抑えることができる。

しかしこうしてみるとやっぱデメリットがきついな……。

買い物は誰かに頼めばいいにしても店を開くぐらいしか稼ぐ方法が

ない。

「そう顔をしかめるなよ。

たしかに人間じゃあ警備はさせてもらえないかもしれないねえが、このお茶とかがありゃあ店も開けるだろうよ。俺が保証してやるぜ!」

くっ、なんていい男。

だめだ勝てる気がしない。

「ありがとうございます。頑張ってみますね」

「おう、がんばれよ。

なんか困ったことがあったら言ってくれよ。力貸してやらあ。住民の証、＜フォン＞っていうんだがちよいと貸しな」

「? どうぞ」

「よし、俺のフォンの波長を記録しといたから用があるときはこれで呼びな。

フォンに向かって記録したやつの名前呼べばつながるから」

なにこれすごい便利。

ひきこもりたる俺の必須アイテムじゃないですか。

「ありがとうございます。

遠慮なく頼らせてもらいますね」

「おう、任せとけ。

じゃあ邪魔したな」

「とんでもない。
また来てくださいね」

いや、いい雄^{おとこ}だった。

有意義な話もたくさん聞けたし良かったよ。
じゃあ生きてくためにもなんの店かは知らんけど開店目指してがんばろー。

森の仲間と開店準備(前)

おはようございますみなさん。

新しい朝です。希望の朝だといいですね。

昨日一晩かけて考えて、やっぱり店は飲食店にすることにした。ほかにもいろいろあるかもしれないけど、俺ができるのがそれくらいだからだ。

並行して薬草や食材の小売りをしてもいいかもしれないけど。

しかしそうなると問題が出てくる。

どう考えても場所が狭いのだ。やはり店をやる以上は改築しなきゃならんよな。

二階建てにして一階部分を店舗、二階部分を住居にするというのが土地の広さからしてもベストだと思う。

まあ大きさは喫茶店ぐらいあれば十分だろう。

なに？　そこまで決まってるならさっさと改築しろって？

いえいえ、先立つものがないのです。

改築に(150,000)でひと月当たり(70,000)……。

毎月の魔力を払えなかったらどうなるかわからんけど、おそらく家が消えたりするのだろう。

一か所から動けないホームレスとかまじ勘弁です。

でもなあ、店を開く以上はどうしても建物の改築はかせないんだよなあ。

だれかお金を貸してくれる人いないかなあ。

……グランさんに聞いてみよう。

えーとたしかフォンに向かって名前を言うんだよな。

「もしもし、グランさん？」

はたからみたらかなり間抜けな光景だよな。

石に向かっておっかなびっくり話しかける男。

うわシュール……。

やり方間違ってたら目も当てられない。

……「なんだ？ サイトウか？」

「（セーフ）グランさんですか？ サイトウです。おはようございます。

えーとですね、店を開店するために諸事情でお金がいるんですけど金貸しみたいなことやってる人知りませんかね？」

「フォンの魔力じゃだめなのか？」

俺の波長を記録したとき結構たまってるように感じたんだがな。まあいいか。

結論からいうとこの森には金は流通してねえ。つまり金貸しもいねえってことだ。

だが外と交流のある一部の奴らがこの森で行き倒れてる奴らを森の入口まで運ぶ代わりに、所持金の半分をいただいてるってのを聞いたことがある。

そういう奴等に頼めばかしてくれるかもしれない」

「えーと、このフォンって魔力結構たまってるんですか？」

意外だ、いつの間にたまってたんだろう。

「なんだ知らなかったのか。フォンに向かって＜ゲイン＞と唱えな。そうすりゃわかる。で金貸しの方はどうする？」

「とりあえず紹介してもらっていいですか？」

「おうよ。

そうだな……。

そうだ！ ミリアがいい！ 何でも屋をやってる奴なんだが知り合いになつていて損はねえ。

そうと決まれば善は急げだ！

ミリアに言ってそっち行かせるからまってろよ！」

正直頼む側なのに来てもらうのはどうかと思うが、ここから離れられない以上はともありがたい。お言葉に甘えましょう。

「ありがとうございます、助かります。

また店が開いたら来てくださいね。たっぷりサービスさせてもらいますよ」

「そいつは楽しみだ。じゃあまたな！」

さすがグランさん、頼りになります。そんなあなたにしばれます。

それはさておきフォンを調べてみるかな。

「ゲイン」

……えっ？

(300,000)もあるんですけど。だれかの落とし物だったりしない？

まあ落とし物だとしても一割はもらいますが。

ん？　なんかメッセージがある。

なにになに……。

『よき隣人よ。わが名はアスフェル。この森を治める王の第一子である。』

まずそなたを悪意あるものではないかと疑ったことを詫びたい。

王に伺ったところ、人の身にてこの森で生きていくことはつらからうということで援助することを許可していただいた。

そなたの魔法によって、この森の民たちが少しでも豊かに暮らせるようになることを祈っている』

……なんていい人なんですよ、この森の王族の人たち。

なんで俺の魔法を知ってるかは分らないけど別に隠してないしね。

どこかで見ていたのだろう。

これは頑張らねば。

さて、そろそろミリアさんを迎える準備をしますか。

コンコン

扉をたたく音がする。

ん？ 来たかな？

「はい、今開けますのでお待ちください」

扉をあけるとそこには、見ているだけで癒されそうな笑顔をしたおねえさんが立っていた。

金髪の上には形のいい耳がのっている。

……やばい、何かに目覚めちゃうかもしれない。

「こんにちは、ミリアさんですか？」

「こんにちは。何でも屋＜狐火＞をやってるミリアっていうの。よろしくね」

「自分は飲食店開業予定のサイトウといいます。こちらこそよろしく願います。

どうぞ、上がってください」

森の仲間と開店準備（後）（前書き）

お気に入り登録や評価をしてくださった方ありがとうございます！
これを糧にがんばっていききたいと思えますので、これからもよろしく
お願いします。

森の仲間と開店準備（後）

さっそくですが部屋に上がっていただきました。

綺麗なおねえさんと部屋で二人きりって緊張するよね。

えっ？ 何もあるわけないから緊張しなくてもいいって？

緊張を解そうとしてくれるなんてやさしいなあ。

「わざわざ来ていただいてありがとうございます。

どうぞ、粗茶ですが」

「ありがとう。」

これがグランちゃんの言ってたお茶ね？

たしかにおいしいわ」

……グランちゃん？

会った感じではちゃんづけされるようなキャラじゃなかったとおもうんだけど。

「グランさんとはどういう関係なんですか？」

「グランちゃんは小さい時からよく面倒見ていたわ。いまじゃ立派になっちゃって。

私の自慢の一つなのよ」

「……ちなみにお二人の年齢はどのぐらいなんですか？」

するとミリアさんの後ろから、見事な九本の尻尾が現れた。
波打つ姿はススキ野原のように美しい。

「グランちゃんは30ぐらいになると思うわ。

私はこの通り九尾だからもうちょつと長く生きてるわね。
でも女の人の歳はあんまり聞いちゃだめよ?」

たしか九尾って千年単位で生きてたような気が……。

「ね?」

泡立つ皮膚、震える膝に乾く喉。

初めて感じる。これが……殺気!

「失礼しました。

あまりに若々しくお綺麗なので、グランさんの面倒を見ていたとい
われて驚いてしまいました」

「やだ、恥ずかしいわ」

こうして照れてるの見てるとさっきのが勘違いだったんじゃない
いかと思えてくる。

そうだ、きっと勘違いだったんだ。そうに決まってる。

まあ今後年齢についてはミリアさんの前で口にしないけどね。

そんなことを考えていると、ふとミリアさんが心配そうな顔になっ
た。

「でもあなたも大変ね。

あなたを見て、グランちゃんが私に家に行ってやってくれて言っ
た意味がわかったわ」

「わかるんですか？」

「ええ、あなた自らの所有する空間の中から出られないみたいね。私だけじゃなくても、一定以上の力をもっている人ならある程度わかるはずよ」

そうだったんだ。

じゃあグランさんわかっててもわざわざ言わないでくれたんだ。

「これどうにかならないでしょうかね？」

「それは難しそうね……」。

それはあなたの魔法と切っても切れない関係にあるみたいなの。

魔法は魂に組み込まれ、修練によって強くなるもの。

もしどうにかできたとしてもあなたが無事では済まないと思うわ」

やっぱりそんなにうまくはいかないよなあ。

わかってはいたけど、どうしても気分が暗くなるよ。

「でもね、心配しなくてもいいのよ。

ここから出られなくなったら、私やグランちゃんが助けてあげるから大船に乗った気でいなさい」

「でも……」

「私もそれなりに生きてきたけど、ぐるぐる悩んで解決したことなんてほとんどないの。

あなたの悩みはつらいだろうけど、今すぐになんとかしなければいけないわけじゃないわ。だからいろんな人に相談したり助けてもら

ったりしてゆつくり解決していけばいいの。

だからもうこの話はここで終わり。」

それよりも今日私を呼んだのはお金が貸してほしいからだったわね？
私の金利は高いわよ？」

そう言って人の悪そうな笑みをこっちに向けてくる。

……あー、俺にはもったいないぐらいにいい人たちだ。

こんなに良くしてもらって、恩返しきれるかな？

「どんとこいですよ。」

でも出世払いでお願いしますね」

「ふふふ、期待してるわ。」

貸すだけじゃなくて、魔力との両替もしてあげるからしてほしかったら言ってね？」

「じゃあレートがわからないんですが（200,000）ほど両替してくれませんか？」

とりあえずこれだけあれば改築をしてもしばらく保つだろう

「だいたい同じぐらいの価値だから200,000フォルになるかしらね。」

それでいいかしら？」

「お願いします」

「はいはい、じゃあ200,000フォルね。」

この森に住んできると魔力の方が便利だから手数料は勘弁してあげる

わゝ」

「ありがとうございます。

じゃあ魔力をお渡ししますね」

「……はい、確かにいただきました。

今日の予定はこれで良かったかしら？

この後お仕事が入ってるからそろそろ失礼するわね。

何でも屋＜狐火＞、これからよろしくねゝ」

「またよろしく願いますね。

今日はありがとうございます」

頭を上げるともうそこにミリアさんはいなかった。

あの人って実はとんでもない人じゃなからうか。

「やっぱ伊達に長生きしてないってことなのかな？」

どこからともなく木の実が飛んできて頭に当たる。

……ミリアさん、痛いです。

なんという奇襲。(前書き)

なんと総合評価100pt突破です！
読んでくださっている皆様に感謝です。

今回はきりが悪かったのでいつもより長めです。

なんという奇襲。

やりました。ついにこの時がやってきました。
いよいよ店の完成です。

といっても魔法で簡単に改築もできれば仕入れもできるので、お金を集めて計画するだけだったけどね。

ミリアさんに両替してもらったお金は現段階では使う予定はないので全部吸収しておいた。これで手持ち魔力は、大体魔法に（340,000）とフォンに（100,000）となった。

「じゃあやりますか。自宅改築（150,000）」

変化がわかるように外に出ていたのだが、一瞬光ったと思ったら次の瞬間にはもう改築は終わっていた。
まったく、情緒も何もあったもんじゃない。

——うん、情緒のないでき方の割には悪くない。
中を調べてみると一階はいかにも町の小さな酒場といった内装で、二階はリビング、寝室、客室で3つの部屋があった。

あとは看板かな？

外に出てふと店の名前が決まっていなことに気がつく。

突然ですが皆さん、ネーミングセンスを売ってるところ知りませんか？（10,000）までなら出そうとおもいます。

……どーしよ。

「ワン！」

キュートでプリティーな声がする。

「おまえ来てくれたのか！。かわいい奴め」

来てくれるの2回目だしそろそろ名前決めてもいいよね？

それにしてもこいつ撫でるとほんと気持ちよさそうにするんだよね！。

ほれほれ、気持ちいいか？

「あらあらユウちゃん、楽しそうね」

ミリアさん急に出てくることもできるんだ。

本人がいなくても怖くて歳の話できねえよ。

「痛っ。……なんですかミリアさん」

「ごめんね？

よくわからないんだけどなんだか木の実をぶつけた方がいいような気がしたの」

考えることもダメだというのか……。

セキュリティが硬すぎる。

「ゴホン。とりあえずユウちゃんはやめてください。

全力で無視を決め込みたくなるぐらい恥ずかしいです」

「そう？

じゃあユウたんかユウりん、好きな方を選びなさい？」

だめだ、この人のネーミングセンス俺よりひどい。早くどうにかしないと。

仕方ない。肉を断たれても骨を守らなければ。

「せめてユウくんをお願いします」

「わかったわ、ユウくん。」

それにしても、もう王女様と仲良くなるなんて隅に置けないわね」

こらこらミリアさんに向かって吠えちゃダメだぞ？

あごの下、耳の後ろのコンボにはかなうまい。ふははははは。

「王女様ってだれですか？

お会いしたことがないと思うんですが」

「あらあら、気づいてなかったの？ えいつ」

「何に気づいてな……」

「サイトウ！ 我は王女だといったはずだが！？」

ん？ キュートでプリティーな声がする。しかも腕の中から。

おーけーおーけー。

とりあえずいつの間にかいた女の子を放して見てみる。

大体中学生ぐらいだろうか？

フリルの付いたノースリーブシャツに足首までの長いスカート。

黒い尻尾がピンと立ち、長く綺麗な黒髪の上には犬耳がぴこぴこしている。

よし、冷静に状況を判断しよう。

まず俺はこの子を見たことがない。訴えられるのは避けられないだろう。

それは仕方がないとしても譲れないこともある。

この子は少女であっても幼女ではない。

ここを強調して俺はロリコンではないと主張しよう。

最悪変態というのも落とし所の一つとし……アウチ。

そこのお嬢さん、人に向かって石を投げてはいけないよ？

「サイトウ！ まさか我がわからんとまでいうつもりではないだろうな！

わからんとは言わせんぞ！」

怒ったようにこっちをにらんでくる。

本能が告げている。冷静に、冷静に判断するんだ。

そう、決して

「あれ？ それってわかるしか言いようなくない？」

とか言っではいけない。

たぶん、というか間違いなくあのお犬様なのだろう。

耳や尻尾を見る限り。

よし、笑顔を浮かべるんだ。

「もちろんわかってるよ。

ただ名前を聞いてなかったからなんて呼べばいいのか困っちゃってね」

聞くも何もワンワン以外何も聞いてないけどね。

「な、なに？」

……すまない、思い返してみれば我は名乗っていなかった。

我はこの＜魔物の森＞を治める王の第一子、アスフェルという。

痛かったであろう？ 許してくれ……」

耳を伏せてペタンと座り込んでしまう。
痛い、石に当たった所より心が痛みます。

「許すからそんなに落ち込まないで。

ミリアさんにぶつけられた木の実の方がよっぽど痛かったよ。
俺はアスフェルちゃんが笑ってくれてた方がうれしいな」

「……感謝する。」

我も王族としてそなたのような寛容な心を持たねばならんな」

「とりあえずユウくんには木の実ぶつけて。」

お互い前より仲良くなれてよかったわね。」

痛い。理不尽だ。断固抗議する……のは無理。

「それにしてもミリアさんって動物を人間にできるんですか？」

「うふふ。さすがにそれは無理よ。」

その子はもともと人型になれるからちよっとなってもらっただけよ」

もちろん何ができるかは聞かない方針で。わかりますね？

「でもそれならアスフェルちゃん、最初から人型できてくれればよかったのに」

「そ、それはだな。我は年若い故サイトウが初めてあった人間なのだ。

それ故我の姿がおかしいのかどうかはわからん。

初対面で会うにあたって姿がおかしかったら格好がつかないであろう？

それで聞きたいのだが……そのだな。サイトウよ、私の格好はおかしいか？」

俺の目にはどう見てもかわいい女の子がテレながらこっちを見ているようにしか見えない。

ああ、てめえの顔とレベルが明らかに違うから同じ生き物に見えない。変じゃないかということですね？わかります。

「おかしいどころか今まで見た人の中で一番かわいいよ。
(ビクッ)……一番きれいなのはミリアさんかな」

「う、うむ。サイトウよ、世辞は言わなくてもよいぞ？」

「でもアスちゃん、そう思ってたなら言ってくればよかったのに。」

私たくさん人を見てきたからわかるわよ？」

「いや、行動を見るにそなたの名付けや美的な感性はいまいち信用ならんのでな」

なんとという冷静な判断。幼くとも王族というわけか。

「失礼な子ね。」

ただ私のセンスにみんながついてこれていないだけよ。」

この後しばらくの間二人の言い合いを見ていた。

なんという奇襲。(後書き)

登場人物が野郎優勢かと思ったらそうではなかったという。
わかった後も女に見えないのは勘弁してください。
奇襲成功してればうれしいです。

なんだか画面が華やかです。(前書き)

ぎりぎり本日中に投稿できました。
危なかった……。

※よろしければ感想や評価を頂けるとうれしいです。

なんだか画面が華やかです。

みなさんこんにちは。

現在言い合いも終わってそのままみんなでお茶を飲んでいます。

それにしても聞いていて思ったのですが、女の人に口で敵う気がしません。

特にミリアさん。圧倒的不利な戦いだったはずなのにふと気を抜くと納得しそうになってしまいます。

僕がツボ作るんでどこかで売ってきてくれませんか？

「むう、言い合いにしまったのは明らかな失策だった……」

「大丈夫よ」。

間違いは誰にでもあるもの」

「……それはそうと二人とも今日はどうしたんですか？」

「我はサイトウがうまく生活できておるか見に来たのだ。

援助だけして後は放置というのも無責任であろう」

「私は時間が空いたから遊びに来たの」

これはかなりうれしい。

少し前までの孤独生活が嘘みたいだ。

女の人だから余計うれしいと思ってしまった俺に罪はない。

「アスウェルちゃん、ミリアさん本当にありがとうございます。
どんどん遊びに来てください」

「ふふふ。そうさせてもらおう」

「ふむ？ やけに歓迎してくれるな。未だ知り合いが少ないのか？」

ああ、ミリアさんもみんなが分かるわけじゃないって言ったもんな。

「それもあるんだけど、いろいろな事情があって俺は自宅から出られないんだ。

まあ事情がなくなったら歓迎するけどね」

「何と！ 死活問題ではないか！」

「確かにそうなんだけど、グランさんやミリアさんが助けてくれるから大丈夫だよ。

それに俺には魔法があるからそう簡単にはくたばらないよ」

「それならよいが……。

危なくなったら遠慮なく頼るがよいぞ？」

この森の人たちほんとに優しいよな。

住む条件に聖人じゃないといけないとかあるんじゃないの？

もちろん俺も条件みたしてますけどね。はい。

「ありがとう。

俺の話もいいけど今度はアスウェルちゃんの話も聞きたいな。

気になってたんだけど女の人の名前とかって特に決まってないの？」

この流れで俺のことを聞かれ始めても困る。

もう少し交流を深めてからじゃないと、ほんとのことを話す気には

なれない。

この場だけならまだしも長期間嘘をつき続ける技術は持ち合わせていない。

多少強引だが話を変えさせてもらおう。

話術？なにそれおいしいの？

「ああ、我の名か。

我の名は特別でな、我が一族は男でも女でも定められた多数の名の中から無作為に選んだ名を名乗ることが決まっておるのだ。

その名とは別に一人づつ真名は持っておるがな」

「そうなんだ。でもなんでそんなことをしてるの？」

「我が一族は主と認めるものができた時、自分の真名を教え魂を縛り契約する。

我らにとって名は魂を縛るもの。それまでは極力自らの本質を示さぬ名を名乗るのだ」

この子の主になるような奴って一体どんなハイスpek野郎だよ。万が一に備えて生活用品の中で武器になりそうなものがないか探しておかないと。

「ユウくんもがんばるのよ。おねえさん応援するわ」

「サ、サイトウよ！ 撫でるのがうまいだけで主になれると思うなよ！」

そんなことわかってますって。

それでいいならツボを探すため秘孔まで網羅する勢いで勉強しますよ。

「ユウくん、そろそろ家の中に入れてくれないかしら。なんだか家が変わってたから気になってたのよ」

「うむ我も気になっておった、拝見させてくれ」

「そうですね。どうぞ入ってください」

とりあえず入ってもらったら店舗としてどうか意見を聞いてみよう。

……あれ？ 王族とミリアさんじゃ参考になる気がしないんですけど。

三人集まってもできないことはできません。

こんにちはみなさん。

先ほどお茶を出してしまったので「粗茶ですが」のセリフが使えません。

それにしても「粗茶ですが」っていい言葉だと思いませんか？

「おじゃまします」

「失礼するぞ」

「はいどうぞ」

とりあえずカウンターに座ってもらう。自分はカウンターの奥に。無駄なのはわかってるけど形式美として聞かねばなるまい。

「ここで飲食店を開こうと思ってるんですけどどうでしょう？」

「うむ、わからん」

「そうね、かわいさが足りないみたいだからピンクを基調に、と言いたいところだけど……」

おーけー。一人目は想定通りです。

しかしミリアさんがまともな意見を出しそうな異常事態。アスフェルちゃんも目を見開いております。

「男の子のお店なんだからかっこいい方がいいわよね。
任せなさい、私がたくさん武器とか剥製とか集めてきてあげるから」

おーけー。二人目も想定通りです。
あ、アスフェルちゃんが眉間押さえながらため息ついてる。

「ミリアさんありがとうございます。
でもそれじゃあ小さい子や女の人が入りにくいと思うんですよ。
お気持ちだけ頂いておきますね」

「そう？ 残念ね」

「それよりもミリアさんには商売していくうえで注意すべきことと
か聞きたいですね。
商売なんてするの初めてなのでよろしくお願いします」

「私はみんなに頼まれたことをしてお金をもらってるだけだからよ
くわからないわ。
ほとんど一人でできるから人を使ったこともないの」

なんという残念なハイスペック。センスも含めて切に思う。

「しかしサイトウよ。そなた失敗できないのであろう？
商売をしたことがないのなら、何を商うのかも含め一度その道の者に
相談した方がよいのではないか？」

たしかに正論だ。
いくら魔法があるといっても簡単にうまくいくほど商売は甘くない

はずだ。

相談できるならぜひともしたい。

「俺もそう思うよ。ミリアさん、グランさんなら知ってるでしょう
か？」

「たぶん知らないと思うわ。」

グランちゃんどうしても払えない人がいたらタダみたいな値段で巢
穴掘ってあげちゃうもの。知ってるとは思えないわ。」

男前ですグランさん。

そんなあなたがリアルに想像できます。

「でも安心して。私の知り合いにまさに商売人って子がいるから紹
介してあげる。

ただこれについては何でも屋として報酬をいただくわ」

「当然ですね。どのぐらいお支払いしましょうか？」

ミリアさん、満面の笑みが不安を催します。

「私にもアスちゃんと話すみたいに普通に話して。それが条件よ」

「そんなことでいいんですか？」

「距離置かれてる感じがしてちょっといやだったのよ？
じゃあ交渉成立ね。」

今連れてくるからちょっと待ってて」

そういうとすぐに扉から出て行ってしまった。

急いで追いかけるが当然のようにそこにはいない。
……あの人はほんとに何者だよ。

幕間：今日もお茶がおいしいです。

「……ねえアスフェルちゃん、いまさらだけどミリアさんってどういう人なの？」

「アスフェルでは呼びにくかろう。アスでよいぞ。
近しい者は皆そう呼ぶ」

「じゃあ改めて、アス、ミリアさんってどういう人なの？」

「うむ、ミリアについては謎が多くてな。

おじい様やおばあ様が幼い頃にはすでにこの森に住んでおったと聞いておるが、それより昔のことについては良く分かっておらん。

……なに頭を守っておるのだ？」

防衛本能といいますか経験といいますか。

どうやらこのラインはセーフらしい。

またひとつ生活の知恵が増えました。

「ミリアのことを尋ねたこともあったのだが、なぜか皆周りを警戒してあまり話してくださらなかった。

それ故我の知っていることしか話せぬがそれでもよいか？」

「もちろん。お願いするよ」

「ゴホン、では話すでしょう」

私の誕生日のことだった。

たくさんの方が祝いの品を持ってきてくれ、ミリアも持ってきてくれたのだ。

その頃の我がミリアについて知っていることといえば、父上にも一目置かれているすごい人ということぐらいだった。それ故そんな人が自分のために祝いの品を持ってきてくれたことを知って我は無邪気に喜んだ。

そしてそれが髪飾りだと聞くとすぐにつけてくれと頼んだのだ。……今なら間違っても頼まんのだな。

ミリアは「じゃあつけてあげるから目を閉じてて」というと我につけてくれたのだ。

最後に「とれないようにおまじないかけてあげる」といってな……。

そのあと父上に見せに行った時のことは忘れられん。父上が空を仰いで「言っておくんだった……」と呟いている光景を。

結局とれず一日中大きな半笑いのクマの髪飾りをつけておったのだ。

「……」

「……」

「アス、お茶飲まない？」

「うむ、頂こう」

「……（ズズッ）」

「……（ズズッ）」

「ところでミリアさんについて何か知ってることがあったら話してくれないかな？」

「よかろう、では話すでしょう」

あれはまだ我が幼い時、狩りで疲労した帰り道でキングリザードに襲われたのだ。

リザードマンの王たる者がそのあたりをうろついているはずがない。大方王の後継たる我を狙っていたのだろう。

万全の状態でも油断できぬ相手。疲労した状態では勝ち目が薄かった。

そんな時だ、ミリアが現れたのは。

ミリアは「もう大丈夫よ」

と私の頭を撫で9体の狐の使い魔を出したのだ。

ここからが戦いのはじまりだった。……いや、戦いと言うまい。

「我ら狐の使い魔部隊。ミリア様の命により成敗させていただく！」

そういった瞬間、キングリザードの後ろの地面から狐が出てきたのだ。

「馬鹿め！ 九尾の使い魔だから9体だと思ったか！」

そいつはキングリザードの口を魔道具で閉じブレスを封じた。

そのスキに2体の狐が両足を凍らせ動きを止め、1体の狐が剣を奪い、2体の狐が鎖で腕を縛り、2体が弱体化の呪文を唱え、2体が投石を始めたのだ。

それはもう我が不憫に思うほど一方的だった。

哀れになってきたて途中で「もう良いのではないか？」

と言うとミリアはその処刑をやめてくれた。

「今回リザちゃんは悪い子だったから木の実じゃなくて石にしたわ。

もうしちゃだめよ。反省した？」

「すいませんでしたすいませんでした生まれてきてごめんなさいもうしませんもうしません」

「反省してるみたいね。じゃあ後はちゃんと仲直りするのよ」

そうして我らは仲直りをし、我は無事に家に帰ったのだ。

「……」

「……」

「……（ズズッ）」

「……（ズズッ）」

「ミリアさんどこにいったんだろうね」

「人の紹介で報酬を要求したということはこの森の住人ではあるまい。」

どこまで行っておるかは知らんがそのうち帰ってくるだろう」

「ミリアさんだしね」

「だしな」

今日もお茶がおいしいです。

昇ってから落ちるとより痛いすよね。(前書き)

今回は切りが悪かったのでもより長めです。

昇ってから落ちるとより痛いですね。

「ただいま。二人ともお待ちせよ」

「ミリア、いったいなんなんだい！？
いい加減説明しなよ！」

ミリアさんが帰ってきました。
いったいこの人をテイクアウトしてきたのでしょうか。
まったく合意の上連れてきたように見えません
拉致でないことをただただ祈ります。

「ミリアさん、おかえりなさい。
そちらの方は？」

「この子ジルちゃんって言うの。
この森の北にあるサンライズって自由都市で商人をしてるのよ。
来てほしって言ったらすぐ来てくれたわ」

……オールオッケー。問題ありません。

「はじめましてジルさん、サイトウユウといいます。
どうぞ、粗茶ですが」

とりあえず四人掛けのテーブルについてもらい定型文を言っておく。

「あ、ああ。ありがとよ。
あたしはジルエバンスって言うんだ。

よろしくね」

「どうやら彼女は人間みたいだ。

スタイルがよく身長は高めで赤い髪を後ろでまとめている。

まさに男勝りという第一印象を受ける女性だ。

「ここで言っておきたいことがある。

脊髄反射をいうものをご存じだろうか。

脳にたどり着く前に脊髄が反応してしまうというあれである。

つまり何が言いたいかというところと服をすっかり押し上げている部分を凝視してしまったからといって、それは脳とかかわりがないことであって俺に罪はないということだ。

目から脳までにいくのに脊髄通らないなんて野暮なことはいいっとなしさ。

「アス、分かってくれるかい？」

みんながテーブルについて一心地つくときミリアさんが話し始めた。

「ジルちゃん、今日はこのユウくんに商売についていろいろ教えてあげてほしいのよ。

「ちゃんとお礼はするわ」

あれ、なんかジルさんの目つきが変わったぞ。

近所のおねえさんからキャリアウーマンって感じに。

「なんだいミリア、それならそうと始めからいやいいのに。

改めましてエバンス商会副代表、ジルⅡエバンスと申します。

本日はエバンス商会をご利用いただき誠にありがとうございます」

「ええと……、こちらこそよろしくお願いします」

「ミリア、あちらの方は？」

「アスフェルちゃんって言うの。」

この森の王女様よ」

「そうでしたか、失礼しました。」

『偉大なる森に永久とわの繁栄が訪れんことを』」

そう言って流れるような動作で片膝をつき左胸に手を当てる。

「よいよい、そこまでするのは王宮での儀式のときだけで十分だ。
それに我は堅苦しいのが苦手だな。入って来たときのような話し方
でよいぞ」

ジルさんはじっとアスの見つめた後俺の方を向いた。
俺もかまわないので頷いておく。

「わかったよ。お客様の要望を聞くのが商人だからね」

「うむ。それにしても人の身でありながらその作法を知っておると
はな」

「商人にとって礼儀は言葉と同じぐらい重要なものだからね。
大抵のものはできるようにしてあるのさ」

「ふふふ、私のなじみの商人なのよ。
すごいでしょ」

……この人ってかなり優秀なんじゃないの？

そんな人にコンサルティング頼むの？
費用によってはリアル死活問題になるんじゃないの？

「あたしのことはそれぐらいでいいさ。

それにしても依頼人さん、黒髪黒目とは珍しいね。
名乗り方からして東方の生まれかと思ってたけど、もしかしてあん
たもこの森の王族かい？」

「そんな高貴な存在じゃないただの人間ですよ。

東方の出身なのはあってますけど髪と目はたまたまです」

「そうかい？ まあいいさ。

じゃあお仕事の話でもしようかね。

とりあえず本題に入る前に聞いておきたいことがあるんだけど、ど
うして人間のアンタがこの森の中で商売をしようと思うんだい？」

「まあいろいろあって自宅から出ることができなくなってしまった
んですよ。

でも食べてかなきゃいけないので商売を始めようかと思ったんです」

「何だいそりゃ？ 何かに呪われてもしたのかい」

その反応は正しい。

誰もこれが神様の祝福の副作用だとは思えない。

本人でさえも呪われた副作用で魔法が使えるようになったんじゃない
いかと思っているのだから。

「そういう事情なら仕方ないか。

それならぜひとも物品のご用命はエバンス商会へ」

冗談めかしてニヤツと笑い大げさに頭を下げてくれた。
いちいち仕草が絵になるなあ。俺が同じことをしたらピエロ確定だ
というのに。

「また機会があったらお願いしますね。
それで本題なんです、ここで飲食店を開こうと思ってるんです。
何か助言を頂けたらと」

「飲食店か……。
ちなみにあんた料理はどのくらいできるんだい？」

「一人暮らしが問題ない程度ですね。
特別得意なわけじゃないんですが、この森で需要がありそうなで自
宅でできることがそれぐらいしか思いつかなかったんです」

「需要から考えるとやるじゃないか。ただ飲食店にするなら材料
はどうするんだい？」

「ここは結構森の奥みたいだから、外から輸送しようと思うとコスト
がかかりすぎる。」

「ミリアに運んでもらうにしても仕事でこの森にいないときはできな
い。」

「かといって森でとれるものだけじゃあ料理の種類が限られる。」

「八方ふさがりじゃないか」

「僕の魔法が『食料や生活用品を生み出せる』なのでその点は問題
ないです。」

「まあ<キー>がお金なんで万能ってわけじゃないんですけどね」

「なんだいそれは！？
魔法が使えるだけでも驚きなのに最上位の創造系かい！？」

食料や生活用品の定義は？
かかる＜キー＞の量と使う魔力は？
出せるものの質は？」

なんだか急にテンション上げられましたよ。
ミリアさんの話から魔法って強弱こそあれ、みんなが使えると思っ
てたけど違うんだ。

「食料は基本的に材料として売ってるものだと思います。加工品は
出せません。生活用品はよくわからないので、魔法を調べてみてあ
ったら出せるってぐらいの認識ですね。

コスト関係は、出したいものを普通に買うぐらいの＜キー＞が必要
です

質については使う魔力の量次第ですね。出したものは基本新鮮だと
思います」

「呆れた。

魂も寿命も使わずに多種類のものを出せるなんて。
商売のためにあるような魔法だよ」

「必要なものがすぐ出せるなんて何でも屋のためにあるような魔法
だわね」

「さすがはサイトウだ。いつでも兵糧が補給できるとは軍務や長期
の任務のためにあるような魔法ではないか」

みんなの評価が高いです。
でもデメリットのせいで微妙な気分。

「それなら問題ないね。

この森でとれないものを調理して出せば問題ないとおもうよ。
あとは……原価の計算とかはできるのかい？」

「基本的なものは全部できると思います」

そろばん通ってましたから。ちなみに簿記も多少できますぜ。
だからそんな鋭い目で見ないでください。

「……自分なりにはどんなふうに経営するつもりだったんだい？」

「開店の前にまずは下調べをしようと思っていました。

恥ずかしながらこの方たちの食生活が全く分からないので、ミリ
アさんと相談しないとメニューも決められないんですよ。

ライバル店もないみたいなので差別化なんて考えず、いろいろな価
格の料理を適当に出そうかと。後は開店時の宣伝と値引き、季節ご
との企画を作るぐらいしか考えてませんね」

まあ本もなくベットの途中で考えたんだからこの程度しか思いつか
んですよ。

だからそんな鋭い目で見ないでくださいってば。

「こいつは……！」

なあミリア、サイトウの呪いは具体的にはどんなものなんだい？」

「『自らの所有する空間の中から出られない』ね。

私の魔法で調べたから間違いないわ」

ジルさんが急に考え込んでしまった。

そのデメリットが解けたら最高なんですけどね。

「ミリアさんもやっぱり魔法が使えたんですね。いつも急にいなくなるのも魔法なんですか？」

「ジルちゃん連れて来たんだから報酬お願いね」

「そうですね。……ミリア、そうなの？」

「ふふふ。空間転移ふほうしんにゅうほじよって言って、連続で使えないし運べるものや距離に制限はあるけど瞬間移動ほりだしものさかしができるの。あと呪いが分かったのは詳細分析ほりだしものさかしって言って私に敵意をもっていない人の魔法や呪いが詳しく分かるのよ」

ああ、やっぱりこのデメリットって呪いで認識されてるんだ。異議なし。

「使い勝手よさそうだなあ。やっぱり魔法を二種類使える人って珍しいんだよね？」

「当たり前だ。父上とミリア以外で魔法が二種類使える者など我はしらんぞ。」

それに先ほど話していた使い魔も魔法だろう。まったく化け物じみておるわ」

さすがというかなんというか。伊達に……痛い。そうですか。話の流れで予測される場合もダメなんですか。というかこれ絶対魔法だよな。

そんな話をしているとジルさんが不意に口を開いた。

「なあサイトウ。あんたもしかしたら別の場所いけるかもしれないよ」

人參があればお馬さんも走るのです。

「どういうことですか？」

突然の言葉に鼓動が高まる。

しかしこのデメリットは神様によってつけられたものだ。そのレベルのものをどうにかできるのだろうかという思いもある。期待と不安の混ざった気持ちで言葉を待つ。

「あたしは商人だからね。商人の発想で考えさせてもらったよ。決まりごとがあるならその抜け道を考えればいいんじゃないかってね。

その呪いは『自らの所有する空間の中から出られない』っていうじゃないか。

つまり所有する空間を増やしても問題ないんだろう？

ミリアみたいな転移系の魔法は空間から空間への転移だから、離れた空間にも魔法を使えば移動できる。

そこら中の土地を買っちゃまいなよ」

背筋がゾクゾクするのを感じる。

一度は諦めた。この未知なる世界を自らの目で見て回ることを。

そして覚悟した。変わらぬ日常、変わらぬ風景、数人の友人たち。

それだけがすべての狭い世界で生きていくことを。

それが変わるかもしれない。

「自分にできるでしょうか」

意味のない問いだ。

「そんなこと知るもんかい。できるかどうかはあんた次第さ。まあ利益がでるようであればエバンス商会として手伝ってやるよ」

挑発するような笑みを浮かべてくる。

つられて笑っているのが自分でもわかる。

挑発されるまでもなく答えは決まっているのだ。

無茶だろうがなんだろうが知ったことか。

世界中の土地を買い漁ってやる。

「よろしくお願いします。」

どうもたくさん稼がないといけなくなったようなので」

それを聞くと一体どうしたのだろう。

みんなが三者三様に優しい目をして笑い始める。

にやにや笑いながらジルさんが言う。

「うちは慈善事業はしてないからね。せいぜい頑張りな」

にこにこ笑いながらミリアが言う。

「いろいろな人に相談してみるといいとは言ったけど、こんなに早く見つかるとは思わなかったわ。

私も移動のときには協力するわ」

くすくす笑いながらアスが言う。

「普段のサイトウも悪くないが今のようなのも悪くないぞ」

自分でも途方もない野望だってことは分かってる。

それでもみんなが協力してくれたらなんとかかなりそうな気がするから不思議だ。

まったく、彼女たちと出会えた幸運にこの世界で初めて『神に感謝』だよ。

「それでまずはどうするんだい？」

「そうですね……」

さてどうしたものか。

いろいろなところを見て回るためにもこの森から出る必要がある。そういえばミリアが転移に制限があるって言ってたっけ。

「そういえばミリア、魔法の移動距離に制限があるって言ってたけどどれぐらいなの？」

「そうねえ、ここは森の北側にあるから北に出るなら一回中継地点があれば大丈夫だと思うわ」

なるほどなんにしてもこの森に土地を持たなければいけないのか。

「じゃあこの森で土地を所有しないとな。」

アス、この森の土地はどう扱っているんだい？」

「もちろん王のものだ。とはいえ一部を除き自由にして良いことになっておるがな。」

どうしても所有したいようならこの森に貢献し王から賜るしかあるまい。

実際ミリアも賜っておるしな」

「私は滝の近くの土地をもらったわ。」

魔力の濃度が高くてそこからだと魔法で転移できる距離が長くなるのよ」

それは困った。

値段にもよるがお金は店を開けばある程度は稼ぐことができると思う。

しかし王に貢献といってもここから出られない以上難易度が高い。

「飲食店をやるつもりだし、食文化を発展させれば大丈夫かな?」

「うむ、問題ないであろう。」

ただこの森には調理するという文化があまりない故、この森にない料理でなく食物を広めるといふ形が望ましいな」

ならこの森にないものでみんなに好まれる物を探さないとな。

いつそのこと農場もやってしまおうか。

誰かできる人を募集して育ててもらい、その人に広めてもらう。

育てるものは店でだして人気が高かったものにすればいい。

どうせやるならそうした方が効率がいいだろう。

「ジルさん、食堂を開いていろいろな料理を出したいと思います。ある程度経ったら農場を開いて、店で好まれたものを育てて広めていきたいと思います」

「いいねえ、方針についてのアドバイスは必要ないね。細かいことについては口で教えたって身につくことじゃないんだ、やりながら覚えていきな。」

これで言うことはなくなったんだけど報酬はどうしてもらおうか。店についてはほとんど言ってあげられなかったから、土地を買う手段を教えたことに対する報酬になるね」

「どれぐらいお支払いしましょうか」

「まあ貸し一つってことにしといてもらおうか。あんたはなかなか頼れそうだからね」

「分かりました。少し怖いですけど……手伝えることがあったら言ってください」

「くくっ、怖いってことが分かれば十分さ。」

仕事は山積みだからね、そろそろ帰らせてもらおうよ」

「じゃあエバンス商会まで連れていくわね」

「本当にありがとうございました」

ミリアが手をつかんだと思ったら二人ともいなくなってしまった。たしかにあれで不法侵入されれば手の打ちようがない。

「では我也帰るとするかな。」

サイトウよ励むがよい」

「じゃあな、開店したら食べに来てくれよ」

こうしてアスも帰って行ったのだが……ドアからでる人に違和感を感じる不思議。

とりあえず当面の方針は決まったかな。

生きるために店を始めようと思ったのに土地を手に入れるという野望までできてしまった。

できるかどうかあやしいし大変になることも目に見えている。

それでもどこかわくわくしてしまう俺は楽道家なんだろう。

さて、がんばっていきますか。

人参があればお馬さんも走るのです。(後書き)

今回は少し真面目な感じのお話です。

……真面目になってたらいいな。

評価・感想よろしくお願いします。

サイトウはミリアの胃袋を捕まえた。

おはようございますみなさん。

今日から第二次開店準備です。

柄にもなく早起きしてしまいまるで遠足の日の小学生の気分です。

目が覚めるとさっさと布団の魔力を振り払い顔を洗う。

なんというやる気。まるで入学したての学生のようにだ。

バナナさん、毎朝お世話になってます。

ではさっそく始めますか。

昨日のうちに考えておいた計画通り足りない分の机や椅子、グラスや皿など店をやっていく上で必要なものを出していく。ちなみに椅子は高さが変えられるタイプだ。

費用はかさむが仕方あるまい。もし座って机に届かない人がいたら不憫すぎる。

＜魔法のレベルが上がりました。食料の創造範囲が広がります＞

突然頭の中に声が響く。

そういえばセラさんが使っていけば出せるものが増えていくっていてたっけ。

とりあえず確認してみるか……。

来た、来ましたよ俺の時代が。
みそにしょうゆ、各種調味料にうどん、そばなどの麺類。
今まで失っていた日本人のアイデンティティを取り戻そうではあり
ませんか。

俄然昼飯が楽しみになってきた。
さて準備を再開しますか。

……こんなもんでいいかな。
内装はできたし次はメニュー作らなきゃ。
誰に相談しよう……。

やっぱ何でも知ってそうだしミリアにするか。
どうせなら試食がてら昼飯も食べてもらおう。油揚げが好きという
発想は安易かなあ？

プルルル……

「もしもしミリア？」

『あらユウくんじゃない、どうしたの？』

「今時間ある？ そろそろメニューを作りたいから相談にのっ
てもらおうかと思って。」

よかったら昼食ご馳走するよ」

『うれしいわー。もうしばらくしたら行くからおいしいご飯期待し

てるわ』

良かった時間あるみたいだ。じゃあ油揚げ使った和食作りますか。ご飯、味噌汁、焼き魚。定番は外せないとして……やっぱ稲荷ずしだよな。

あと漬物。と言ってもキュウリを塩で揉んだだけ。調理実習でキュウリを壊滅させたのはいい思い出です。

炊飯ジャーなんて便利なものないから深鍋で米を炊く。魚は塩をすり込んで、曰くつきの七輪の上において準備だけ。油揚げを少しゆでて油抜きして煮汁に入れて煮込みその間に味噌汁の準備……。聞こえるのは煮込む音と包丁の音。

コトコト……

トントン……

そう、これぞ日本。和むわー。

おっと酢飯だけは冷ましとかなきゃ。

「こんにちわ。お店、いい感じになったじゃない」

「ありがとう。もうできるからそこに座ってて」

魚を焼き始めてと。作っておいた稲荷ずしを出しておく。

「はい、これ。魚が焼けるまでもう少しかかるからそれ食べてて」

「変わった食べ物ね。じゃあいただくわ」

パクッ……ピン！

おお……耳が立ちましたよ。

パクパク……コクン

「ユウくん、メニューのことだけどこれ一つでいいんじゃないかしら？」

「いやいやいや、それはまずいって」

安易な発想の勝利ですね。とりあえずメニュー第一号決定かな。

「じゃあ魚見てくるから」

言ったときにはもう二つ目に取り掛かっていた。

あそこまで幸せそうに食べてくれると嬉しいなあ。

「はい、お待たせー」

できた料理を持っていくととても満足そうなミリアがいた。

あの、これがメインなんですけど。

「あら、東方の国の料理に似てるわね」

「そうなの？ そっちの方にも土地がほしいな」

「じゃあ東方の出身じゃないのね？」

……しまった。

「えーっと……」

「大丈夫。この森にはそんなこと気にする人はいないわ。話したくなったら話してくれればいいのよ」

「ありがとう。でもいつか話すからね」

「ふふふ、じゃあ冷めちゃうから食べましょうか。いただきます」

「いただきます。東方にはこの習慣もあるんだね」

「そうよ。ん、おいしいわ」

「ごちそうさま、おいしかったわ」

「お粗末さまです」

綺麗に食べきってもらえとうれしい。なんだかやっていけそう
な気になってくる。

「でもやっぱり始めに食べたのが一番おいしかったわ」

「稲荷ずしですね。まだありますからよければ持ってきてきま……」

「お願いするわ」

最後まで言わせてもらえなかった……。

持ってくるとまたおいしそうに食べてくれた。
これならまた食べに来てくれそうだ。

<サイトウは常連候補を手に入れた>

自分でナレーションしてみる。

れんたんくん再登場かな？

昼食も食べ終わったのでお茶を飲んで一心地。

久しぶりの和食も堪能したしそろそろ本題に入りますか。

「ミリア、聞きたいんだけどこの森の人って普段何食べてるの？」

実はこれがかなり気になっている。

肉や野菜を食べてくれるなら全然問題はないのだ。

現にミリアも俺と同じものを食べてくれたし（食べてくれそうだったから昼飯に誘ったのだが）、アスも肉を食べてくれていた。

でももし虫とか食べる人がいたらどうしよう。

それにグランさんとかモグラだしミミズを食べるなんて言い出したら……。

「そうね。基本的にはみんな人間と同じようなものを食べるわよ」

「……………『基本的には』の部分と『同じようなもの』の部分詳しくお願い」

「そんなに警戒しなくても大丈夫よ。『基本的には』っていうのはお肉しか食べない人がいたりするだけだし、『同じようなもの』っていうのは人間には毒になるようなものも食べる人がいるってことなの」

よかった、正直人間にとって毒になるものは微妙なラインだけどほかの料理と並行してミミズのソテーとか作らなくてもよさそうだな。ほんとによかった。

「あとは気をつけた方がいいのは量ね。私なんか小食な方だけど大きな人だとたくさん食べるわよ」

予備に作っておいた稲荷ずしを壊滅させたミリアでさえ小食？
いったいどんな……痛い。

……ミリアってほんと小食だよな、あれだけでもつのかな？

「じゃあ量を調整できるようにしといたほうがいいね。
ほかに気をつけた方がいいことある？」

「後は普通に人間のための店みたいにして問題ないわよ」

「そっか、じゃあまたメニューが完成したら連絡するね。
開店の宣伝をしてもらいたいんだ」

「ふふふ、私に任せなさい」

「ありがと。今回のお礼は稲荷ずしでいいかな？
今はもうないけどまた作っとくよ」

「うれしいわー。じゃあそろそろ失礼するわね。
お店ができたら食べにくるわー」

いつも通り魔法で出て行ってしまった。
いらぬ子と化しているドアが哀愁を誘う。
大丈夫だよ、開店したらみんな使うからね。

片付けも終わったしメニューを考えようかな。

とりあえずは魔法で作った食材で料理することにしよう。
味見したらゲームオーバーといった事態を避けるために。

それに魔法で作った材料にすれば在庫を持つ必要がなくなる。そう
なればメニューが増えてもいろいろ仕入れておかなくていいし材料
が痛むこともない。ビバ魔法。

肝心のメニューだけど知らない料理が多いと思うから、料理ごと
に野菜、穀物、肉などマークをつけることにしよう。

肉食だったりする人たちにいちいち説明するのもどうかと思うし。
あとは料理の簡単な説明とだいたい量の量も書かなくちゃな。

……よし、完成だ。我ながらよくできていると思う。

しっかり清書した自信作だ。

さっそくミリアに電話しよう。

プルルル……

「もしもしミリア？ 何度も悪いね」

『平気よ。メニューができたの？』

「そうなんだ。だからさっそく宣伝してもらおうと思って」

「わかったわ。何を伝えればいいかしら？」

……びっくりした。いつの間にか背後にいるミリア。
そっか魔法使えば一瞬だもんね。

「伝えてほしいのは『3日後の昼に開店すること』、『開店から3日以内に来てくれた人にはサービスがある』ってことかな」

考えた結果値引きではなくデザートでもサービスすることにした。
単に値引きするより、食べなれていないであろう日本の料理を少しでも食べてほしかったからだ。

「わかったわ。そいえばこのお店の名前はなんなのかしら？」

それは前に看板を作ろうとした時からずっと考えていた。
以前は生きるためだけに店を開こうとしていたが今は違う。
世界中を見て回れるようになりたいと思っている。

「『ベイビーバード』にしようと思う。俺の故郷の言葉でヒナ鳥って意味なんだ。」

いつか世界中に飛び出せるようにね」

「ふふふ、いい名前ね。きっと飛び出せるわ」

少々恥ずかしい。正直やりすぎたと思っているけど、まあ悪くはないだろう。

「じゃあ宣伝しておくわね」

「報酬はどうすればいい？」

「私からの開店祝いってことにしておくわ。遠慮しなくてもいいわよ」

「えっと……、ありがとう。また今度ごちそうさせてね」

「楽しみにしてるわ」

これは油揚げメニュー開発しておかなきゃな。

こつこつ恩返ししていかなきゃそのうち頭が上がりなくなりそうだ。

「ところで完成したメニューを見せてくれないかしら？」

「いいよ、自信作なんだ」

見るがいいその優美な文字と完璧なレイアウトを。

「この文字ってユウくんの故郷のものかしら？」

東方のものに似てるみたいだけど……誰も読めないと思うわよ？」

「……………う、うあああああああああ」

そのあとメニューはミリアが書きなおしてくれた。
看板作る前でよかったよ……うん、よかったよかった……。

れんたんくん再登場かな？（後書き）

最近たくさんの方に読んでいただけているようでうれしいです。
これから宜しくお願いします！

※よろしければ評価・感想お願いします。していただけると白かぼ
ちやが喜びます。

ベイベーバード、本日開店でございます。(前書き)

わーい、わーい。

宣言通り喜んでおります。

……一体なにが起こったんでしょう？

見てみたらログインし直すぐらいポイントが増えておりました。

夢じゃないんですね？

過大評価していただいている感が満載ですがこれからも頑張らせていただきますのでよろしくお願いいたします。

ベイベーバード、本日開店でございます。

突然ですがみなさんは至高の朝食というものをご存知でしょうか？
熱きご飯と卵が織りなすハーモニー。そう卵かけごはんです。

こだわりでただの醤油ではなくだし醤油。朝っぱらから満足です。
ただ卵がやけに高めなのが気になります……。――

いよいよ今日が開店の日だ。

ミリアがちゃんと報告に来てくれたので宣伝は問題なし。

仕込みも済んだし看板も立てた。

えっと、もうやること残ってないよね？

掃除もしたし……もう一回しとくか。

さて、することがなくなってしまった。

まあもう少しで昼だし座って待ってるか。

「……魔法発動、切り花――タンポポ（50）」

お客さんが来る、ぷちっ。あんまり来ない、ぷちっ。まったく……

「こんにちは、それはなにをやってるのかしら？」

……後ろから声が。彼女しかない。

見られた、もうおしまいだって？ 否、ごまかしてみせる。

「こんにちは、これは店に飾るために花びらのバランスを整えてい

るんだ」

「花占いなんて久しぶりに見たわ」

もうおしまいだ。

「……どうしたの？」

「ご飯を食べに来たのよ。私が一番ね」

うれしい。うれしいんだけど……。

ドアから入って来てほしかったと思ってしまうのは贅沢なんでしょうか？

「ありがとう。」

改めまして、いらっしやいませ。『ベイビーバード』へようこそ」

とりあえずカウンターに座ってもらいメニューを渡す。

「ご注文は何に致しましょう？」

「そうね、おすすめは何かしら？」

あなたのためのメニューがありますとも。

「きつねうどんがおすすめですネ」

「じゃあそれをもらおうわ」

「はい、ではしばらくお待ちください」

厨房に戻りだしを加熱する。この3日間たくさんの料理を作り改良を重ねたが、その中でも一番力を入れた自信作だ。

どれぐらいて力を入れたかってしばらくうどんは食べたくないぐらい。

……よし今がアルデンテだ。うどんだろうがアルデンテだ。

「はい、お待たせしました」

「ありがと。いただきま〜す」

油揚げがたっぷりだしを吸い、立ち上る湯気がいかにも食欲をそそる。俺はまったくそそられないけどね。

「ん〜、おいしいわ〜。しあわせ〜」

蕩けそうな笑顔でうどんを食べる姿はこっちまで幸せな気分になさせてくれる。

それこそその笑顔を見ただけで飲食店にして良かったと思えるほどに。

「サイトウよ、来てやったぞ！」

「いらっしやいませ。ありがとね、アス」

ところが急に得意満面といったアスの表情が微妙に曇る。

「なんでミリアがおるのだ、昼からだったのではないのか？
せっかく一番に来て喜ばせてやろうと……」

まあ時計もないから大体での昼だしね。

それにしても最後の方なんていったんだろ？ うまく聞き取れない。

「とりあえず座ってよ。はい、こちらがメニューになります」

メニューを見るアスの百面相が面白い。

「こんな料理があるのか……」とか言ってるし案外グルメなのかな？

「ではこのハンバーグというものをそうだな……2個ほど頼む」

「はい、しばらくお待ちください」

作っておいた分を焼きソースをかける。

表面からあふれ出る肉汁がフライパンで跳ねる。うーん、いい音だ。

「はい、お待たせしました」

「うむ、おいしそうだ。では頂くとしよう」

一口食べた……ん？ 動きが止まった。

……と思ったらすごい勢いで食べ始める。えっと、のどに詰まらせ
ないようにね？

「なんということだ！ 肉をそのまま食すのではなく潰して混ぜ合
わせるとは！

それにより肉汁のうまみを配合するだけでなく様々な食感を楽しま

せるのか……！」

「そうなんだ。よくわかったね。」

……ごめんなさい。そこまで考えてませんでした。

「おう、邪魔するぜ！」

「いらっしやいませ。」

グランさんじゃないですか、来てくださってありがとうございます」

「なに、俺が来たくなったから勝手に来たただけだ。
こいつらもよろしく頼むぜ」

外を見ると直立二足歩行モグラ——略して直立モグラがわんさか。
これ、さばき切れるかな？

……修羅場一丁はいりまーす。

救世主様じゃー。(前書き)

祭りだ祭りだ。

PV100,000 ユニーク13,000突破しました。

うれしすぎます。

ハイなテンションで書いたのでもよりは気持ち長いです。
これからよろしくお願いします。

救世主様じゃー。

甘かった。そう言わざるを得ない。

甘く見ていたのだ。複数人に料理を出すことの大変さを、誰も雇っていないことの厳しさを、そしてやつらの胃袋を――。

話はモグラの団体さんが入ってきたところまでさかのぼる。

「こんな大勢で来てくださってありがとうございます。ご注文は何に致しましょう？」

しっかり椅子も高くしてある。ふっふっふ、想定通り。

「ハンバーグってのを2つと、この量なら……ステーキ（鳥）ってのを5つとパンを3つ。こいつらにも同じものを頼むぜ」

「……………」

「どうした？」

「ああ、すいません。この量ですと少々お時間を頂くことになってしまいますが……」

「まあなるべく早くしてくれよ？ こいつらも仕事上がりで腹減ってんだ」

「分かりました、しばらくお待ちください」

まずい。まずいまずい。

あんたら見た目もファンタジーだけど胃袋もファンタジーなのかよ。

来てくれたモグラーズはグランさんも入れて8人。

つまりオーダーされたのはハンバーグ16個、ステーキ(鳥)40個とパン24個。

「魔法発動、コンロ(10,000)、フライパン(3,000)」

くっ、多少無茶だがフライパンふたつで8個を同時に焼いて順次出していくしかない。

そして焼いている間も暇はない。

「こちらがサービスのリンゴになります」

そう、ミリア達だってまだいるのだ。

「私が今まで食べたどのリンゴよりもおいしいわ」

「うむ、大きさや食感、蜜の量までこの森になっているものとは段違いだ！」

うう……、うれしいけどゆっくり聞いてられないんです。

「お待たせいたしました。一度に出すと冷めてしまいますので、できた分からお出しします。ハンバーグ1つとパン3つになります」

「おお！ うまそうだ！」

8人それぞれに出し急いで厨房に戻る。

「うめえー！」

「こんなの食ったことねえよ！」

「次も早く持ってきてくれー！」

向こうから聞こえてくる声に力が湧いてくる。

よかった。気に入ってもらえたみたいだ。

じゃあどんどん作りますか。かかってこいやー。

もうだめだ。これ以上働いたら死んでしまう。

現在この店にいるのはお茶を飲んでくつろいでいるミリア、アス、グランさんにひん死状態の俺。みんなが手伝ってくれなければとてもさばききれなかっただろう。

それどころかピークが終わるまで生き残れたかどうか……。

「いやそれにしても俺たちが頼んだ時のサイトウの顔、あれはよかったな―」

「それも良かったけど、お肉の焼き方を『血の滴るレア』で注文された時もよかったと思うわ」

「いや、一番よかったのはヘビ型の者にナイフとフォークを出していることに気付いた時であろう」

くそうくそう。ヘビの人は純粹なミスだったけど、焼き方はそんな具体的なレア聞いたことなかったんだよ。

「ありがとうございます。みなさんが手伝ってくれていなかったらどうなっていたことか……。今日のお食事代はこちらに持たせてください。ミリアとアスにはお土産にリンゴも渡すね」

「うむ、そう気にするな。それにしても今日のリンゴが一体何だったのだ？」

この森にもリンゴがなっておるがそこまでのものは見たことがないぞ？」

「私も気になったわ。いろいろなところに行ってきたけど見たことないもの」

「これは俺の故郷のリンゴなんだ。いろいろな種類のリンゴと受粉させていいところりさせたリンゴなんだけど……」

「そんなことであるのかよ。確かにすげえうまいがかなり高いんじゃないねえのか？」

確かに言われてみれば不自然なほど高かった。日本にいたころは物や時期にもよるが1個200円もあれば買えたはずだ。それなのにここでは(800)もした。今日は忙しくてほかのものと変える暇がなかったが明日以降は変えるべきかもしれない。

「ちなみにこの森ではリンゴ1個どのくらいするんですか？」

「この森じゃあ売ってねえよ。基本的になってるのを勝手に取って食うだけだから誰も買わねえんだよ。代わりに取って来てもらうにしろ1個(20)がいいとこだろ」

「サンライズでも1個100フォルってところかしら。その場合でもなってるところまで取りに行くことに対する代金みたいなものね」

「どういうことだ？ この魔法を初めて見たとき、店で売ってるぐらいの値段だと思ったんだけどもしかしたらほかに基準があるのか？」

「グランさんには言ってなかったんですけど、自分の魔法は魔力を使って食料や生活用品を生み出すことができます。＜キー＞はフォルで、1フォルで(1)回復します。食料を生み出すにはフォンの買う場合と同じぐらいの魔力で済むと思っていたんですけど…。このリング、故郷で買うと(200)ぐらいのはずが魔法を使うと(800)もかかるんですよ」

「そういう魔法だったのか。なら確におかしいな。」

「何処探したってリング1個(800)で売ってるところなんてないと思うぞ」

「だが我はこのリング(800)ならば欲しいと思うぞ」

「どうということ?」

「確かに高いがこんな美味なリンゴは何処を探してもないだろう。味と比較して(800)ならば妥当であろうということだ」

「そうね。このリンゴなら(800)でも問題ないわ」

「そういう見方でいうなら、この森の結構なやつらが納得すると思うぞ」

そうなんだ。……ちょっと待った。もしかしたら……。

「聞きたいんだけどこの森で水を売るとしたらどのぐらいで売れる?」

「水もそのあたりの池から飲めばよいのだから値段はつかないであろう。

だがサイトウが以前くれた水ならば……このコップ一杯で(30)か(40)の値段がつくかもしれない」

「ありがとう。ミリアとグランさんにも評価して頂けませんか?」

コップに某天然水を注ぎ2人に飲んでもらう。

「たしかに悪くねえが(40)出す気にはなれねえな」

「(40)なら問題ないと思うわ。ただ水なんて飲めればいいって人は納得できないでしょうね」

やっぱりそうか。そう考えればいろいろなことが納得できる。

「考えるにこの魔法でかかる魔力は『多くの人が妥当と思える価格』じゃないでしょうか。どの程度の大きさの集団から認識するのは分りませんがたぶん間違いないと思います」

「なるほどな。その可能性は高いな」

「ミリアの魔法で分からんのか？」

「ごめんなさい、私の^{ほりだしものさがし}詳細分析じゃあそこまでは分からないの。
^{ストーリー予備軍 真性ストーリーカー}もっと上位の絶対分析や究極分析なら分かるかも知れないんだけど……」

なにその魔法、絶対受けたくない。

「まあたぶん合ってるから受けなくていいよ。それに正確に分かったところで特に使い道も浮かばないしね」

「それもそうね。じゃあもうそろそろ失礼しようかしら」

「俺もこの後仕事があるからそろそろ行くぜ」

「今日はありがとうございました。また食べに来てくださいね。
はい、ミリアとアスにはお土産のリンゴ」

今日はグランさんがいるからドアが使われるんだぜ。
な……グランさんも一緒に転移した……だと？
アスはまだいるからドアから出て行ってくれるんだね。

「サイトウよ、そなたは重大なことを忘れておるのではないか？」

「なんだっけ？」

「このまま一人で明日も店をやるつもりか？」

しまった。魔法のこと考えてて店のことすっかり忘れていた。

「顔が忘れておったと語っておるわ。どうだ、サイトウが望むなら……我が手伝ってやらんこともない……ぞ？」

「えっと、一応王族なんだよね？」

「一応とはなんだ一応とは。なに、この森の王子や王女は民を知るため森を自由に回り民と交流をするのだ。それに食文化を発展させるのである？ その手伝いをするのは森のためにもなる」

いいのかな？ まあ後がないのは事実だし本人も乗り気だしお願いしよう。

「本当にうれしいよ。ありがとう」

「ミリアが一番目に食べに来たことよりもか？」

「もちろんだよ」

「そうかそうか。ふふふふ。感謝の気持ちを込めて撫でるがよい」

ほんとにいい子だよなあ。感謝の気持ちを込めて撫でさせていただきますとも。

そうしてしばらくの間にここにこしているアスを撫でていた。

救世主様じゃー。(後書き)

※よろしければ評価・感想・ご意見などお願いします。していただく
けると白かぼちやが喜びます。

紳士って聞くとマイナスイメージが浮かぶのはなぜでしょう？ (前書き)

ぎりぎり間に合いましたかね？

紳士って聞くとマイナスイメージが浮かぶのはなぜでしょう？

さて本日は『ベイビーバード』開店二日目です。

昨日の疲れが残っているのか腕は筋肉痛だし起きるのはつらいし大変です。

布団が圧倒的な拘束力を持って離してくれません。

はい、分かっています。遊んでる暇なんてないですよ。

……がんばっていきましょう。

「サイトウよ、来てやったぞ！」

朝っぱらから元気なアスは何かいいことでもあったのかにこにこしながらやってきた。

ピンとたった耳からもテンションの高さがうかがえる。

「おはよー、今日からよろしく頼むよ。

はい、これ仕事中に着てもらおうエプロンね」

渡したのは汚れてもわかりにくいような黒っぽいエプロン。

ところどころにフリルがあしらってあるのを選んだのは義務感とでも言うべきだろうか。

多少高くついたがまったく後悔していない。いや……むしろ安すぎたか？

それにしても女性用の服とかはなかったのに、かわいいげなエプロンがあったのはどうしてだろう？ まさか俺が着るかもしれないっ

て認識されてるわけじゃないですよねえ、神様？

「アスには注文をとったり料理を運んだりしてもらおうと思ってるんだけどよかった？」

「うむ、任せておけ！ 我にかかればその程度造作もないわ」

「よろしくね。じゃあいろいろ準備して開店に備えよっか」

「ありがとうございましたー」

昼のピーク最後のお客さんが笑顔で店を後にする。

お客さんのいなくなった店内は今までの熱気がうそのように穏やかだ。

昨日と違いどこか爽やかさすら感じさせる疲れが体を満たす。

「みな満足して帰ったようだな。これもすべて我のおかげであろう？」

「半分ぐらいはアスのおかげかな？」

これで厨房のリングをつまみ食いしなかったらもっと満足してくれる人がいたんだけどね」

「サイトウよ、助けてくれ。実はある厳しい雇い主が物も食べずに働けというのだ」

二人でくすくす笑いながらアスは机を拭き、俺は簡単な賄いを作る。

優しい雇い主は従業員に料理をごちそうしましょうかね。

「それにしてもアスって随分舌が肥えてるよね。やっぱり王族だといいいもの食べてるの？」

まかないに作ったオムライスを食べながら気になっていたことを尋ねてみる。

中央に立てた旗を倒さないよう、周りから削るように食べてるアスを見ると親しみやすい王族もいたものだと思ふ。

「王族は多少なりいいものを食べてはいるが、私の舌が肥えているのは自称ジェントルマンがいろいろなものを食べさせてくれたおかげだな」

「ああ、そういえばグランさんがそんな人いるっていつてたっけなあ。どんな人なの？」

「実際ジェントルマンといっても問題ないぐらいの老人だぞ。もう今は隠居して余った時間を使いお茶を取り寄せたり料理を作ったりと気ままに過ごしておる。まあそのせいか食事には少々うるさいのが玉に傷だがな」

その説明だけ聞くと美食家の紳士を思い浮かべるけど……動物なんだよなあ。

お茶を優雅に飲んでる姿がどうがんばっても想像できない。

「失礼するよ」

「あ、いらっしやいませ」

扉の向こうに立っていたのはステッキを持ち、燕尾服を見事に着こなした二足歩行のウサギ。人型ではなくウサギ。立ち振る舞いが優雅であろうがウサギ。

ああ……こいつか。

「はじめまして、ミックと申します。お茶をいただきに来たのです
がよろしいですか？」

「はじめまして、この店をやっているサイトウといいます」

「ミックよ、店に来ていきなり名乗るでない」

「王女様、いらっしやったのですか。そういわれましてもジェントルマンとして礼儀を失するわけにはいかないのですよ」

「とりあえず立ち話もなんですしどうぞお座りください」

カウンターに座ってもらいステッキを預かる。ずしりと重いステッキは持ち主がまだまだ現役だと語ってくれているようだ。

「おいしい店ができたと聞きましたな。これは行かねばと思い来さ

せていただきました。食事は済ませていただきますのでお茶と何か合うものをもらえますかな？」

「はい、少々お待ちください」

まるでアフタヌーンティーではないですか。

できれば紅茶とスコーンでも出したかったが調理器具の都合でホットケーキに変更。

フォークが沈んでしまいそうな出来立てホットケーキにとろりとシロップをかけ出来上がり。

いい具合に蒸らした紅茶を暖めたカップに入れ一緒に持っていく。

「お待たせしました」

「今の話聞いておらんかっただろうな!？」

「何のこと？」

「なに、お気になさらず。それにしてもおいしそうだ」

目の前でウサギが優雅にお茶を飲んでいる。

現実には想像よりも奇なりといいますか。

「これはおいしい！ お茶については詳しくはなかったつもりですが私の知らないこんなにもすばらしいものがあったのですか！ このパンにしても私が知っているものよりはるかにやわらかく甘い。そのお年でこれほどのものを作る方がいらっしやるとは……この世にはまだまだ興味がつきませんな！」

自分の実力でもないものをここまで褒められるとなんだか気恥ず

かしい。

本当に褒められるべきはミックさんのように他人を素直に認められる人だというのに。

「いやいや、本当においしかったです。ぜひまた来させていただき
ますよ」

「ありがとうございます。お茶の販売もしているのでぜひご利用
ください」

「それ、さっさと帰るがよい」

口をへの字にして腕を組んでるってさすがに接客の態度じゃない
でしょう。

「アス、その態度はないと思うよ」

「私が口を滑らせてしまいましたてな。怒らないでやってください。
それでは王女様を『よろしく』頼みますよ」

「だまれー！　だまらぬかー！」

「？　もちろんですよ」

王女様を無体に扱うなんてことするわけないじゃないですか。

「サイトウよ、なんとなく腹が立つので蹴らせるがよい」

「痛い痛い。正確にひざ裏狙うのは止めて」

ミックさん、さっきの発言ってこれを予測していたんですか？
ぜひ今度あったとき予測の仕方教えてください。

紳士って聞くとマイナスイメージが浮かぶのはなぜでしょう？（後書き）

今回は少し書き方が変わってたかもしれないです。

※よろしければ評価・感想・ご意見などお願いします。していただけると白かぼちゃが喜びます。

持つべきものは仲間です。

「うまかったよ。ごちそうさん」

「ありがとうございます。また来てくださいね」

「うむ、また来るがよい」

怒涛のセール三日間も何とか終わり思わず大きく息を吐く。

前日二日間の評判がよかったのか、今日はセール中最多のお客さんが来てくれてアスともども目の回るような忙しさだった。それでもほとんどのお客さんが満足そうに出て行ってくれていたのを思い出すと思わず笑みがこぼれてくる。

「そのテーブルを片付け終わったら賄いできてるから食べてねー」

「待っておったぞ！ 今日はいったい何という料理なのだ？」

「親子丼って料理なんだ。熱いうちにどうぞ」

はじめはわしづかみだった箸も今ではそれなりに使えるようになってきたみたいだ。驚くべきは食への執念ということか……。

しばらくして二人とも食べ終わると、横日の差し込む店内でお茶をすすする。

「とりあえずお疲れ様。この三日間働いてみてどうだった？」

「うむ、なかなか興味深かったぞ。王族の仕事と違いこのようなんびりした仕事も悪くないな」

「そういえば王族の仕事って何やってるの？」

「主に治安維持だな。毎月みなから税を集めてそれを使い、治安維持部隊を整え自ら戦ったりもする。我はそれとは別に困ったものがあるようなら助けるようにしておるがな」

得意そうに腕を組む姿はどこか誇らしげに見える。俺がアスぐらの年だった頃と比べると
軽く苦笑してしまう。

「まあ王族の仕事はよいのだがこの仕事で気になったことがあったな。もう少し仕込みを増やしたほうがいいのではないか？」

そう、それが問題なのだ。開店してわかったのだが、この森には圧倒的に肉食の人が多い。そのためハンバーグにいたっては仕込みが足らず数量限定になってしまっている。商売人としてそれはどうなのよと思ひ冷蔵庫を出そうとしたのだが出せなかった。他にも電子レンジや炊飯ジャーが出せないことを考えると、どうやら電化製品は出すことができないみたいだ。ちっ、使えねえ。

「それは俺も思うんだけど保存がなあ。何か冷やして保存しておくものがあればいいんだけど……」

そんなことを言うと思議なものでも見るかのような目でアスが首を傾げてしまった。……なにかまずいこと言っちゃった？

「それは『フリーズボックス』を使ってはダメなのか？」

『フリーズボックス』、名前から察するに冷蔵庫のようなものなのだろう。いやそうに決まっている。どうする、なんて返せばいい。ひらめけマイブレイン。

「この森の中にもあるんだ。てっきりないものだと思ってたよ」

「ああ、そういうことか。確かにこの森の中に作れるものはおらんがサンライズにはいるようだから、ジルとミリアに頼めばすぐにも持ってきてくれると思うぞ」

何とかごまかせたかな？　ビバ単純な名前。思わず額の汗を拭うふりでもしたくなるが自重しておく。

「ちなみにここで買うと相場はどれぐらいなの？」

「この店で使うようなものなら（30,000）もあれば大丈夫なはずだ。ミリアに届けてもらうから実際にはもう少しかかるがな。そうと決まれば善は急げだ。さっそく連絡してみるぞ」

言うが早いか止める間もなくフォンを使い連絡している。

俺って買うとき本当にいるかなって悩んじゃってタイミング逃がす人だから、さくっと決められるアスはすごいと思う。

「ミリアか？　アスだが今大丈夫か？」

『王女様じゃないの。平気だけどどうしたの？』

「それがなベイビーバードで使うフリーズボックスが欲しいのだ。大きさは一般用の1.5倍ぐらいで、なるべく早くがよいのだがい

つぐらいなら大丈夫だ？」

『ジルちゃんしただけど急いでるなら明日の朝には間に合うと思うわ。予算はどれぐらいなの？』

「(30,000)までなら出せると伝えておいてくれ」

『わかったわ。じゃあまた明日ね』

「サイトウよ、何とかかなりそうだぞ……ってどうしたのだ？」

頭からきのこでも生えてきそうなぐらいどんよりした気分です。
あれ、俺っていららない子ですか？ 明日から王女様の食堂開店します。おめでとうございマース。

「いや、たいしたことじゃないよ。生きとし生けるものの存在理由についての考察を深めていただけだよ？ ……話は変わって優秀なアスの意見を伺いたいんだけど、食材をそのまま販売してみても思った？」

「それについてはあまり調子がいいとはいえないな……」

実は当初の予想と違い食材をそのまま販売する試みについては利益があまり伸びていない。ネックとなるのはやはり魔法でのコストだ。

先日推測したように魔法にかかるコストは『多くの人が妥当と思える価格』で間違いなさそうだ。しかしその性質上、かかるコストが

すでに販売するのに妥当な値段であり、それに利益を含めた値段ではなかなか買ってもらえない。一応最高級品ということで（800）で生み出せるリンゴを（900）で販売してはいるが、ものすごく気に入ってくれたお客さん以外買ってもらえないのが現状だ。けっ、ほんと使えねーなこの魔法。

「やっぱりこのままじゃだめだよなあ。またそれについては考えておかないとね……。

そういえばお客さんが特に気に入ってくれたような果物や野菜ってあった？」

「おおむね気に入っているとは思うぞ。まあその中でも馴染み深いリンゴが一番好まれているようだがな」

「じゃあとりあえず農場計画ではリンゴの栽培を始めればいいのかな。俺はここから出られないから、できれば森の人にやってもらいたいんだけど誰かやってくれそうな人知らない？」

本来は自分でやるべきなのだろうが俺がやっても柵の中でしか育てられない上、これから栽培方法を広めていくという面でも森の人にやってもらえたほうが断然メリットが大きいのだ。給料は出すから誰かやってくれないかなー。

「そういうことならグランのところに頼んではどうだ？ この森には新しく入ってくるものなどそうおらんから巣穴作りの仕事もそこまで忙しいものではないだろう。何より土いじりということにかけてあやつら以上に適任なものもそうおるまい」

「たしかに土いじりにかけてはこれ以上ない人選だね。じゃあ早速連絡してみるよ」

「もしもし、グランさんですか」

『おう、サイトウか？ お前なかなか料理うめえじゃねえか。また食いにいくからな』

「ありがとうございます。それで今日は頼みたいことがあるんですがお時間ありますか？」

『今狩りの最中だからもうすこししたらいくから待ってな』

「じゃあお願いしますね」

「というわけでもうしばらくしたらグランさんが来てくれる事になったから、それまでまってもらっていいかな？」

「うむ、我もこの店の一員だ。ぜひ残らせてもらうぞ」

「どうですか。けっして俺はいらない子じゃないのですよ。ベイビ―バード明日もやりますのでよろしくお願いします。」

「おう、じゃまするぜ」

「こんにち……は」

そこに立っていたのは夕日をバックに獲物を木にくくりつけたものを担いでいるグランさんだった。どうやって狩ったのだろう、その獲物は5mはあろうかという熊のような怪物で不自然なまでに発達した両腕はかすただけでも意識を刈り取られそうだ。俺だったらマシンガン持っても逃走しますよ。

「おっと、この熊はでか過ぎて入らねえな。入り口に置かせてもらうぜ。」

ところで今日は何の用だったんだ？」

酸欠の金魚みたいにパクパクしていたけど、グランさんが椅子に座るころには何とか正常な思考に戻ることができた。となりでアスは「大物ではないか」って笑ってるしこの森の人はみんな規格外なの？

「えっとですね、今日はお仕事を頼みたいなと思ったんです。今店を出しているリングをこの森に広められたらいいなと思って栽培しようかと考えてるんですけど、自分はこの通りここから出られないんで、グランさんたちにお願いできないかと思ひまして」

「なるほどな。仕事をもらえるなら嬉しい話だが、土いじりは別として作物なんか育てたことねえぞ？」

「その点はこちらがだいたい指示しますので大丈夫だと思います。どうですかね、種はこちら負担で給料として収穫の5割を払いますので受けていただけませんか？」

はじめての農業で給料はその5割。正直条件としていいかどうか分からないができればこれぐらいで受けてもらいたい。じっと見つめていたが意外にもすぐに返事をくれた。

「それならお安い御用だ。俺たちに任せてくれ！ 久しぶりに俺の魔法も活躍できそうだな！」

「グランさんも魔法が使えるんですか。いったいどんな魔法なんですか？」

「我もしらんぞ。教えてくれないか？」

期待のまなざしで見るのだがどうもお茶を濁すばかりだ。

「いや、な？ また今度見せるから今はいいじゃねえか。

それよりこの店の周りに50本ぐらい植えようかと思うんだが、種はいつまでに用意できる？」

「店を出したリンゴの種を取ってあるんで今からでもお渡しできますよ」

「そうか、今日は遅いしまった明日の昼過ぎに来るからそのとき頼むぜ。じゃあ今日は帰るが……ちよっと待ってろ」

そういつて外に出て行くとしばらくしてどこぞの妖精が傘にして

そんな大きさの葉っぱに何かを包んで持ってきてくれた。

「これは『ビックベアー』の腕の肉だ。なかなかうめえから一度食ってみてくれよ」

「ありがとうございます。またこれで料理を作れるようになっておきますね」

「おう、俺はこいつの肉が好きでな。楽しみにしてるぜ。じゃあまた明日来るぜ」

「では我も帰るとするか。ではまた明日な」

「じゃあね二人とも、また明日」

そう言って自分より明らかに大きな熊を担いだモグラと、スキップでもし始めそうな軽い足取りの女の子が森に入って見えなくなるまで見送っていた。

この魔法もうちよっと融通きかないかなあ。

「……もう起きるか」

今日は『フリーズボックス』を届けてもらうため、いつもより早くもぞもぞと動き始めた。

ボケボケしながら昨日のうちに煮込んでおいたビックベアーの肉を再び加熱する。

不審な肉はとりあえず甘辛に煮ておけば食えるだろうという安易な発想で作ったものだったが、これがなかなかおいしい。かなり噛み応えがあつてジャーキーのように噛めば噛むほど味が出てくる。
……この肉はいいつまみになりそうだ。

仕込みもあらかた終わり、お茶をすすっているとうちの従業員さんがやってきた。

バロメーターの耳がピクピクしていることから鑑みるに何かあるのかな？

「おはよう。今日は少し早いね」

「サイトウとこれを食べようと思ってな。これは見たことがないであろう？」

「これは……木の実を乾燥させたもの？」

しわの入った赤い木の実でつまんでみるとぷにぷにしている。さくらんぼのドライフルーツに似てるかな？

「うむ、ポルの実を日に干したもので我の好物なのだ」

食べてみると果物の甘みを凝縮したような上品な甘さがした。

よくあるドライフルーツのように砂糖の人工的な甘さがしない分とてもおいしく感じられる。

「これはおいしいね。アスが気に入るのも分かる気がするよ」

「ビックベアーもいいであろうがこれもよかろう。我はこの甘さが特に好きでな。遠慮せずに食べるがよいぞ」

「おはよう。頼まれたもの持ってきたわよ」

アスがきてしばらくするとミリアと大きな箱を背負ったジルさんがやってきた。

あれがフリーズボックスなのかな？ あのぐらいの大きさがあれば確かに不自由はしなさそうだ。

「おはよう、注文の品を持ってきたよ。ミラーセフィラス作中型フリーズボックス。中型として十分な機能を持ち、驚異の魔力保持率を誇るセフィラス製さ。値段も手数料込みで30,000フォル、掘り出し物だよ」

「しまった、フォルは全部吸収しちゃったんだった。申し訳ないん

ですけど魔力じゃだめですか？」

「じゃあ帰りにフォルを渡しておくからかった料金を私に魔力で払ってもらおうかしら。私のほうは（3，000）でいいからあわせて（33，000）になるわ」

「助かります。じゃあ……はい、お願いしますね」

よかったー。そういえばフォルを持ってないんだよね。この森の外との交流を考えれば全部吸収しておくのも考えものだな……。

「ちなみに魔力保持率って……」

「具体的には魔力の補充を三ヶ月に一回ぐらいすればいいよ。今日は補充用魔力を時間がなくて持って来られなかったけど、また注文があれば持って来るから安心しな」

どうも充電みたいに魔力を補充するみたいだ。三ヶ月に一度がどんなものなのか分からないけれど悪くはないんだろう。ジルさんが具体的な性能を聞いてると勘違いしてくれて助かったよ。

「さて取引も終わったことだし飯食っていてもいいかい？」

「もちろんですよ、どうぞお入りください」

「さて、なににしようかね……」

「狐うどんをお願いするわ」

じっくりメニューを見て考えるジルさんとメニューも開かず即断で頼むミリア。

気に入ってくれたのは嬉しいんだけど他の料理も見てもらえとなーなんて。

「あんたの魔法って食材を出せるって言ってたけどメニューはこれだけかい？」

「いえ、人気の出そうなものをメニューにただけで食材に関して言えば大体は出せると思いますよ」

なんだか目がいやに輝いているのが不安を催すんですが……。うちの小槌にはなれないと思うんですけどねえ。

「じゃあフライングフィッシュを食べたいんだけど一匹いくらぐらいだい？」

「待ってくださいね……えーっと一匹（8,000）……って高いですかこれ？」

何これ。とらふぐ的な高級魚だったするんですか？

「なるほどねえ。金は払うからちよっと出してみてくれないかい？」

ビクビクしながら出してみると焼き魚にするにはちょっと物足りない大ききの魚が一匹出てきた。

ちよつと責任者でて来いや。これで（8,000）はさすがに詐欺だろう。

詐欺の片棒担いしまったとあせりながらジルさんを見ているが、意外にもまったく怒っていない様子だった。

「ふうん。鮮度はまあまあで質も悪くないみたいだね」

「怒ってないんですか……？」

「ああ、あんた知らないのかい。このあたりは海が遠くて魚が手に入らないのさ。無理にでも手に入れようとする氷系の魔法使いが凍らせながら運んでこないといけないから、このぐらいの魚でも（8,000）ぐらいはするんだよ」

日本で暮らしていると気づかなかったが、運輸手段がしっかりしていなければ内陸のほうでは魚なんて手に入らないだろう。それにしてもここ、海遠かったんですね……。

「まあ値段が妥当すぎるからそんな大量には売れないだろうね。安く手に入れば稼いでやろうと思っていたのに残念だよ」

それができればよかったんですけどね。世の中うまくいかんものです。

「昨日調べてたんですけどこの魔法で物を出すときにかかるコストって『多くの人が妥当と思える価格』みたいなんですよ。魚のことを聞く限り、周辺に住んでる多くの人たちが対象なんでしょうね。まったく、おかげでこちらでも食材の販売では儲けられそうにありません」

せんよ」

顔を見合わせて苦笑する。考えることはみな同じですね。

「この魚だけじゃ足りないから他にも適当に料理を頼むよ。そうだね肉類でお願いしようかね」

「はい、しばらくお待ちください」

「おいしかったわ」

「いやうまかった、これなら十分やっていけるよ。どうだい、エバンス商会の飲食店部門の創立もやってみる気はないかい？」

「待て！ サイトウはこの店の主人だ。勝手なことを言うでない！」

「とてもじゃないけど今はこの店だけで精一杯ですよ」

それどころかこの店すらうまく回せてませんよ。ジルさんも分かっていたのかさして残念そうな様子も見せなかった。

「また気が向いたらいつとくれよ。じゃあごちそうになったね、うまかったよ」

「ユウくんまたね」

「ありがとうございます。またお越しく下さい」

なんでも中身が重要ですって。

「それにしても王女様、思ったよりしっかり働いてるじゃねえか」

「当然であろう我を誰だと思っておる」

「王女様だと思ってるから言うんじゃない」

お客さんもまばらになった店内、厨房で一休みしているとそんな声が聞こえてきた。

アスは森の人たちと仲がいい。混んでいるときは一声かけられるぐらいだが、すいてくるとよくこうして話をしている。今日はアルマジロの夫婦と思しき人たちだ。

「なあ、あんたもそう思うだろ？」

聞き耳を立てているのも悪いと思い片付けに集中していたのだが、声をかけられ何かと思ひ声のしたほうを向く。面白そうにしているお客さんと「当然違うであろう？」とばかりの表情のアスがこちらを向いていた。

「すいません、何のお話でしたか？」

「王女様の話だよ。最近やけに楽しそうにしてると思わないか？」

そう聞かれてもアスに会ったのが最近の俺としてはなんともいえない。ただここで働いているのが辛いようならそれはなんとも嬉しい話だ。

「最近会ったばかりなのでなんとも……。ですけど俺の知っている限りではいつも楽しそうですよ」

「そうなのか？ 前に森で見かけた時より楽しそうに見えたんだが気のせいだったか」

「分かったであろう、我はいつもどおりなのだ」

「あらあら、そうだったの」

おかしいなとばかりに頭をかいている旦那さんとは対照的に、何かわかったとばかりに笑みを深める奥さん。アスが軽くにらんでいるがまるでどこ吹く風だ。

「じゃあそろそろ帰るか。また来るぜ」

「ありがとうございます。またよろしく願いますね」

「さっさとその節穴の目を治してまた来るがよい」

「あの人もこれぐらい分かってもいいと思うのだけどねえ」

後ろ姿に手を振り上げて「何が分かるのだ何が！」といっているアスをなだめようとしてみたが、なぜかこちらにも飛び火してきた。……俺には鎮火できそうにない。

「と、ところで今日何を食いたい？ 好きなもの作るよ」

火が消えないなら逃げるしかない。三十六計逃げるにしかずとはよく言ったものだ。

「……ハンバーグがよい。二つで許してやろう」

なんだか賠償金を請求されているみたいだ。なんとなく理不尽な気がしないでもないが、

「ありがたき幸せでございます」

王女様の御心のままに、ってことで。

「よう、約束どおり来たぜ」

「グランさん、ありがとうございます」

ちわーっすとはかりに頭を下げているモグラたちを引き連れての登場だ。

その中でくりくりした目のモグラが一人、前に出てきた。

「こいつはモールってんだ。今回の仕事は基本こいつにやってもらうつもりだからよろしくしてやってくれ」

「自分モールって言います。ここの料理食わせてもらったんですけど感動しました！ お手伝いさせてただけならと志願してきま

したんで仕事があればどんどん言ってください。よろしく願います！」

「すごくうれしいよ。こちらこそよろしくお願いね」

彼の勢いに少々押されながらも笑って答える。きらきら輝くような彼の目は少々まぶしいけど、熱意のある人は大歓迎だ。――これはがんばって料理作らないとな。

「それで具体的にはどんな風に計画してるんだ？」

みなさんに椅子に座ってもらいお茶を出すとグランさんがそう切り出してきた。

「とっておいたリンゴの種をこの店の裏にでも植えてもらおうかなと思ってます。指示を出すとは言ったんですけど育てるのは初めてなので一緒に考えてもらえると嬉しいです。数は前回グランさんに言っていたいたように50本、報酬は収穫の半分です」

「おし、わかった。じゃあ早速取り掛かるぜ。おいお前ら、仕事だ！」

外に出るとそのまま店の裏手に回った。みんなが柵の外にすたす

た出て行くのを見るとなんともいえない気分になるが、アスは外に行かず柵の中にいてくれた。

——ありがとう。感謝をこめて頭をなでると「しっかり撫でるがよい」と笑いながら返してくれた。

「よしお前ら、ここ一帯の土を耕すぞ！」

おおっ、という勇ましい掛け声とともにモグラたちはいっせいに土の中に潜る。するとすぐに土が盛り上がってすごいスピードで動き始めた。

盛り上がりが縦横無尽に動き回るとあっという間にあたり一面の土が耕されてしまった。さすがモグラと感心するばかりだ。

「じゃあ種を渡してくれ」

いつの間にか隣にいたグランさんに言われるまま、数えておいた50個の種を渡した。

「おいお前ら、これを植えて土かぶせとけ」

種を渡すとグランさんは首を回し、軽く深呼吸すると目を閉じた。しばらくしてモグラたちの「終わりましたー」と言う声を聞くとスッと目を開けた。

「これを使うのは久しぶりだな——魔法発動！」

発動と同時に地面に手をつくとそのまま止まってしまった。しばらくシンとした空気が流れ、いたたまれずグランさんに声をかけようとしたときに変化は起きた。

——種を植えた場所からピョコッと芽がでてきたのだ。

「よし、うまくいったみたいだな」

「すごいではないか！」

「ほんとうですよ。一体どんな魔法なんですか？」

驚いたというほかない。今植えた種がもう芽を出したのだ。

「俺の魔法は大地の力を借りることができんだ。それで植物の成長にちよいと力を貸してもらったというわけさ」

「なるほどな、まさにグランらしい魔法ではないか。魔法名はなんと言うのだ？」

「……………たすけてママン大地母神」

「え、えつと……」

「言うな。何も言わないでくれ」

グランさんはそう言って後ろを向き、天を仰いだ。いつもは頼りになる大きな背中が少し小さく見えたのは気のせいではないだろう。

薄暗くなってきた空に一番星がきらりと光った。

なんでも中身が重要ですって。(後書き)

※よろしければ評価・感想・ご意見などお願いします。していただ
けると白かぼちゃが喜びます。

先生に教えていただきました。

グランさんに魔法をかけてもらってからもう一週間だ。

リングは恐ろしいぐらいに成長し、すでに花をつけている。

当初は見るたびに成長していくリングに、「もうちょっと自重してもいいんじゃない？」と突っ込んでいたが今はもう慣れた。……慣れって怖い。

「二人ともお疲れ様、賄いできてるからどうぞー」

「うむ、いただくぞ」

「待ってましたー！ いただきます！」

モールには5日ほど前から手伝ってもらっている。農場の仕事もあるし悪いと言ったのだが、本人の熱烈な希望に負けて厨房に入ってもらった。

「歓迎するぞ」といったアスの口が微妙に引きつっていたのが気になったが、なにも起きていないので問題ないだろう。

「それにしてもほんとうまいですね！ こんなの食べさせてもらえるなんて俺、幸せだー」

皿に残ったソースも舐めとらんばかりの勢いで完食してしまった。別に料理の修業をしていたわけでない俺としては、ここまで褒められると苦笑してしまう。

「ありがとう。それにしてもこの森の人って普段何を食べてるの？」

「そうですね、狩りで獲った肉を食べたり、適当に木の実食べたりぐらいですね。肉にしたってせいぜい焼くぐらいで料理なんてさっぱりですよ」

「我ら王族はもう少し手を加えるが、サイトウと比べるべくもないな。料理をしているといえるのはミックぐらいのものではないか？」

「ミックじいさんが何かしてるのは知ってたんですけどねー。ここまですくなるんだったら自分も教わっとけばよかったですよ」

「じゃあみんな肉を焼くぐらいのことはするんだ」

「我は食べることに専門だな！」

おい、と思わず突っ込む。

「料理が食べたくなればおぬしが作ってくれるであろう？」

作ってくれないとは微塵も思っていない様子で言うてくる。
まあ頼まれれば作りますけどね？

「はいはい、王女様の仰せのままに」

「ここまで敬意が感じられん『王女様』も珍しいな……」

呆れ顔のアスは滑らかにスルー。コンナニウヤマツテルノニネー。

「それは置いといて皆さん肉を焼いたりするんだったら、ステーキ用のソースとか売れるかな？」

客観的に見て俺は明らかに料理人と言えるレベルではない。そんな俺の店になぜ人が来てくれるのか？ その原因はおそらく味付けにあるのではないかと思う。

焼いただけの肉を食べていた人が、調味料などをしっかり使った肉を食べる。それならばそれなりのレベルでも多くの人が気に入ってくれるだろう。

その味付けをするソースならば売れるはずだ。

「絶対売れますよ！ 売ってたら俺買い込みますよ！」

「それはいいな！ あればぜひ買わせてもらおうぞ」

身を乗り出すモールにピンと耳が立つアス。

想像以上の好反応に口元が緩む。これは思った以上に名案だったのかもしれない。

ソースとして一手間かければ、材料をそのまま売るとの違い利益が出る値段でも売れるはずだ。いいね、やる気出てきた。

「じゃあ今から早速、明日売れるようにソース作ってみるよ。よければ手伝ってくれない？」

間髪いれずに二つの「もちろん！」という声。なんとも嬉しいじやありませんか。

「明日は試し売りだしこんなものかな？」

いろいろ手間取って時間がかかったとはいえ、やっぱり手伝ってもらうと楽だなー。

前に並ぶのはソースの入った空き缶ぐらいの大きさの樽30個。日本みたいにプラスチックの容器でもあればよかったんだけど残念がらなかった。

聞けばこの森にはそこまでフリーズボックスが普及しているわけではないらしい。ソースが悪くなってはいけないので小さめの容器にして、多めに買うお客さんにはしっかり説明するつもりだ。……こまめに店に来てくれるといいな、なんて思ってますんよ？

材料費を計算して店で見たことあるような値段にしたら、原価率5割以下になった。心配になって聞いてみたが問題なく売れるだろうとお墨付きをいただいた。全部売れた場面を想像してみる。笑いが止まりませんなあ。

「二人ともありがとう。これはお礼、また使ってみて感想教えてくれると嬉しいな」

二人ともに出来立てのソースを一つづつ渡す。もっと渡したい気分だけど痛むといけないのでこれぐらいで。

「料理っておもしろいんですね！ これ早速今日の夜にでも使わせてもらいます」

「うむ、父上や母上に食べてもらうのが楽しみだ」

「じゃあ今日はお疲れ様。気をつけて帰ってね」

二人は嬉しそうに笑うとソースを大事そうに抱え、小走りで自分たちの家に帰っていった。

「おはよう、今日もよろしくね」

いつもより早めでもうちの従業員さんは元気です。

「うむ、こちらこそな」

「昨日のソースはもう使ってくれた？」

「使ったぞ！　それでな、それでな、父上も母上も家族みんながおいしいと言ってくれたのだ！」

目をきらきらさせて体全体で喜びを表現するアスは心の底から嬉しそうだ。自分が作ったものをおいしいと言って食べてもらえることは他にはない、独特の喜びがある。――うれしいんだよね。

「あ……おはようございます。今日もよろしく願います」

モール、なんかいつもよりテンション低い？　いつもなら「おはようございます！」ってどこぞの野球部張りに大きな声で入ってくるのに。

「おはよう、なんか元気ないね？」

「あ、はい。ちょっと悲しいことがありますて……そのうち元気になりますんで気にしないでください」

「そう？　無理はしなくていいからね。あとアスには評判だったんだけど、昨日のソースどうだった？」

「おいしかったですよ……おいしかったです。俺、リング見てきますね」

明らかにテンションが低い。どうもソースが関係しているような気がするけど、昨日一緒に作った俺のもアスのもいい出来だったから問題ないと思うんだけど。よく分からんけど昼の賄いは大盛りにしてあげようかな？

「すみません、持ち帰りに三つください」

「二つよろしく」

売れ行きだけ見ればソースの販売は成功だった。会計を済ませるときにほとんどの人が買っていつてくれ、今後の販売が決定した

のは間違いない。

しかし大きな失敗があった。――ソースの数だ。昨日の二人の反応から判断してもう少し準備しておくべきだった。ほとんどのお客さんが2、3本づつ買っていてくれるからピークの序盤にはもうなくなってしまう。買えなかったお客さんには謝罪しておいたが、残念そうな顔を見るたび申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「ものは成功だったが失敗したな」

三人で食事兼ミーティングをしているとアスがそう口火を切った。

「そうだね。大体で作っちゃったけど、もっとお客さんの数とかを考えて作るべきだった」

「我も少し想像すれば分かったはずだ。この森に来たばかりのサイトウでは分からなくとも無理はない。我の失態だ」

食器の音も止まり食卓に重苦しい沈黙が流れる。

「お、王女様もサイトウさんもそんなに落ち込まないでくださいよ。確かに今日は失敗だったかも知れないけど明日からがんばればいいじゃないですか！」

暗くなってしまった雰囲気を明るくしようとがんばってくれているのがよく分かる。

両手を振ったり体を動かしたり明るい声を出してくれたり――。あんまり必死に励ましてくるから、落ち込む気もなくなってしまう

った。

「まったくその通りだ。反省はしても後悔はするべきじゃないね。くよくよしたって何も変わらないもんね」

「うむ、我らが落ち込んだところで客にとっていいことなど何も無いものな。モールよ、感謝するぞ」

二人で示し合わせたかのようにおかずをモールの皿に移す。「え、いいんですか？」という視線に笑みで答える。——いいからもらつて。

「さて、モール先生に怒られちゃったし食べ終わったら十分なソース作りと新作の開発がんばりますか」

「モール先生に怒られたくないものな。がんばろうではないか」

「ちよ、二人とも俺怒ってないですよー！」

さてさてこれから大忙しだ。

『ベイビーバード』総力を挙げてお客様のため、がんばらせていただきます。

幕間：彼ら（ソース）のその後

——早く家に着かぬものか。

サイトウと一緒に作ったソース。最後にほとんど一人で作らせてもらったこれは味見もすっかりし、うまくできたと自信を持って言えるものだ。——これならば喜んでもらえるに違いない。

いつもはなんともない道が、今日はやけに長く感じて、半ば小走りのようなスピードになってしまいうのも仕方のないことであろう。

「ただいま帰りました！」

「ああ、お帰りアスフェル」

「アス、お帰りなさい」

何をせずとも威厳あふれる豊かな黒髪の父上、優しく聡明な美しい黒髪の母上。二人とも私の自慢の両親だ。おじい様とおばあ様もいらっしゃるが少し離れたところに住んでおる。またお会いしにいかねばな。

「今日の夕食はなんですか？」

「ふふふ、お腹が空いてるの？ 今日夕食はビクベアーよ」

「今日狩ってきたなかなかの大物だ、しっかり食べてくれよ」

「はい！」

父上は王として討伐隊を指揮し『魔物』を討伐している。『魔物』とは我らのように『獣人』に属するものではなく、ただの動物がこの森で魔力を受け変化してしまったものを指す。魔物は例外なく凶暴であり強大だ。そのままにしておいてはどんな被害を及ぼすやもしれんから、この森で最も強いものが王となり被害がでる前に討伐するのだ。なんと気高き使命であろう、我も立派に引き継いで見せる！

「ところでそれは何を持ってるの？」

母上が不思議そうに尋ねてくるなどいつ以来であろうか。

「これはサイトウというものが作っている、肉にかけ味付けをするためのソースというものです。これはほとんど私が作りました！ぜひ食べてみてください！」

「それは楽しみね、食べさせてもらおうわ」

「お前が料理をなあ。よし、しっかり食わせてもらおうぞ」

こんなに嬉しそうにもらえるとは。しかし……少々不安だな。口に合わぬことはないであろうか？

「じゃあ食わせてもらおうぞ」

「私もいただくわね」

二人が焼けた肉の上に、ソースをかけて、ナイフで切って、フォークで刺して、口の中に――入った。だ、大丈夫であろうか？　やはりまだ我には早かったのでは――

「うまい！　うまいぞアス！」

「本当においしいわ！」

「ほ、本当ですか？」

大丈夫だったのか……？　気に入ってもらえたのか……？

「こんなことで嘘を言ってどうする。ほんとにうまいぞ？」

「そうよ。明日から食事の準備を変わってもらおうかしら？」

いつの間にか止まっていた息をはく……よかった。

なんだか胸の奥がじんわりする様な不思議な感じだ、だが――ひどく心地よい。

「お前も食ったらどうだ？　まだ手もつけてないじゃないか」

「は、はい。今食べようと思っていたところです」

……見るのに夢中で食べることを忘れておったわ。

「それにしてもアスが何度も話していたサイトウという奴、なかなかやるじゃないか」

「そうね。料理の腕もそうだけどアスに気に入られているのもたい

したものだと思うわ」

「ちょ、ちょっと待ってください。私は何度も話していませんし、気に入ったわけでもありません！」

「ここ最近毎日聞いてた気がするのは気のせいだったか？」

「朝支度の時間が長くなったのも気のせいだったかしら？」

「わー！　わー！」

うう、サイトウめ、おぬしのせいだ。明日行ったら蹴らしてもら
うぞ。これは正当な権利だ！

「ただいまー、今日の飯なにー？」

「なんだい帰ってくるなり。今日はホーンラビットだよ。さつと皿だしときな」

仕事から帰ってきたところなのに……。かあさんも俺じゃなくて、あそこで暇そうにしてる兄さんたちに頼めばいいじゃないか。

「兄さんも姉さんも手伝ってくれよー」

「よし、指示は任せろ」

「監督は任せなさい」

いつもどおり、使えないか……。何でうちの家族はこんなに理不尽なの？

「あんたたちもさつさと手伝いなさい！」

「何を言っているんですかお母様？ もう机は拭いておきましたよ」

「そうですわお母様。食器の準備も済ませましたし何もしていないのはモールだけですわ」

こいつら……。いつの間に！？ そんな「お母様の言うことは聞かないとだめだろ？」みたいな目で見るのは止めてよ。「まだまだ甘いな」って空気が隠せてないよ！？

「寛容な兄はそんな弟も許してやろう……。かあさん、そろそろ食おうぜー」

「かあさん、私もおなか空いたわー」

「はいはい、いま持っていくから待ちなさい」

「納得いかないー!」

「じゃあ食べようと思うんだが……モール、いま肉にかけてるそれなんだ?」

「これは『ベイベーバード』で売る予定のソースって言うんだ」

知らないでしょ、これほんとおいしいんだ。まあ優しい弟としては分けてあげてもいいけどね?

「たしかそこってお前が働きに行ってる飯屋だったよな。ふーん、かければいいんだな。ちよつともらうぜ」

「あ、私もー」

「私ももらおうかね」

ふふん、せいぜい驚くがいいよ。モール様を敬うのだー。

「うまつ!　なんだこれ!」

「おいしー!」

「ほんとにうれしいねえ！」

どうだどうだ。って……あれ？　ちょっとかけすぎじゃない？
無くなる、無くなるって！

あー。

「いや、ほんとう良かった。今回ばかりはお前の勝ちだな」

「そうね、悔しいけど異論はないわ」

「……………」

なんなの？　この試合に勝って勝負に負けた感覚は。

「耐えなさい、お前はよくやったよ」

と、父さん。肩に置いてくれた手があったかいよ。

常識人は父さんだけだよ……。

でも父さんも、もう少し影を濃くしたほうがいいと思うんだ。

……いたの気づかなかったもん。

幕間：彼ら（ソース）のその後（後書き）

※よろしければ評価・感想・ご意見などお願いします。していただ
けると白かぼちゃが喜びます。

踏まれても蹴られはしませんでした。(前書き)

たくさんの評価や感想ありがとうございます！

テンションが上がったので少し早いです。

その割には今回しっとりしてるんですけどね！。

踏まれても蹴られはしませんでした。

本格的にソースを売り始めて数日が過ぎた。

今の状態を一言で表すと、「余は満足じゃ」がぴったりだ。

売り物の数が足りず反省したあの日、三人で相談してマヨネーズも作ることにした。アス曰く「草食のものたちのためにも販売を始めるべきだ」とのこと。なんてきめ細かな気配りだろう。ちなみにアスはマヨネーズが大好物だ。

こうして本格的に販売し始めたソースとマヨネーズは爆発的に売れた。来てくれたお客さんのほとんどが買っていつてくれ、早くもリピーターまで現れ始めた。販売の相乗効果で売り上げもうなぎのぼり。お客さんが飽きないように違う味のソースを作る計画も立て始め、『ベイビーバード』は商売として完全に軌道に乗ったといえるだろう。

——しかし人生甘いばかりではないのだ。

それは昼食のピークも終わり一息ついている最中のモールの言葉だった。

「サイトウさん、リンゴのことなんですけどお話があります」

いつもは明るく元気なモールの声が信じられないぐらいに沈んでいた。それだけでも悪いことが起きたと判断できる。しかも俺が外に出るための鍵となるリンゴについて。自分でもはっきりわかるほど顔が引きつった。

「どうしたの？」

聞かなければいけないけど聞きたくない。

そんな気持ちを雄弁に語るように大きな間が空いてしまう。

それを察したのかうつむいていたモールがさらに小さくなり、細々と語った。

「植えたリンゴなんですけど、その……実がならないんです。なにかまらなかったのかと思って森に自生しているリンゴを親分に手伝ってもらってこのこと同じように育ててみたんですけどそっちは問題なく実がなりました。……正直に言って原因がわかりません」

ぼつりぼつりとつぶやかれる言葉は俺に十分な衝撃を与えた。

土地を手に入れなければ外に出ることのできないのに、その土地を手に入れようと思っていた手段が断たれたのだ。農作業なんてろくにすることもない素人だ。こうなることは可能性のひとつとして考えてはいたが実際なってみると——つらい。

「そっか……でもそれじゃ給料なくなっちゃうよね。さすがに申し訳ないから料理との引換券でも渡すよ」

「サイトウさん……」

「サイトウ……」

大丈夫だから。俺結構打たれ強いから。別の手段で土地を手に入ればいいから。

「二人ともどうしたのそんな落ち込んで。リンゴはだめになったけど、別の手段で土地を手に入れることにするよ。ほら、王様に貢献

すればいいって話だったからお金をためて王様に渡してもいいし。
だからそんなに暗くならないで」

二人が悲しんでくれているのを見ると微かに嬉しいと思ってしまう。

会って間もない俺なんかのために悲しんでくれることへの嬉しさだ。
——とは言え二人には笑っていて欲しいんだけどね。

「……サイトウよ、王族としていっておかねばならぬことがある。
おぬしがいくら金を渡してくれてもこの森の土地を渡すことはできない」

「ど、どういうこと？」

「王の使命は森を繁栄させること。すなわち王への貢献とは森にとって有益なことをするということなのだ。王が資金不足で森を繁栄させられないときならまだしも、そうでなければ渡したところで森の利益にはつながらん」

「な、ならソースをもっと広めればいいし……そうだ、調理の文化を根付かせてもいい」

「ソースは材料がこの森では手に入らぬし、サイトウがいなくなればそれまでだろう。一時的に貢献しているとは言え、ソースがなくなった後の影響を考えれば土地を渡すことができるほどではない。調理にしても根本的に材料や道具の少ないこの森ではできることが限られる上、最低限の調理はすでに広まっている以上厳しいというしかないだろう……」

絶句するしかない。他に一体なにができるというのだ。外の世界

はそんなにも遠いというのか。

「すまん、土地については王の仕事ゆえ王女の我が口出しするわけにはいかんだ。こんなときに助けることができずして何が王族なのか……！」

スカートを掴む両手は硬く握られ、肩は小刻みに震えている。うつむいてしまった顔はどんな表情をしているのだろうか。

アスには何の責任もない。リンゴの栽培について何も知らなかった俺が悪いんじゃないか。お願いだから顔を上げてくれ。そんなに自分を責めないでくれ。

「アス……」

そんな気持ちをこめて伸ばした手がアスに触れることはなかった。もう少しで触れるかという瞬間、アスは駆け出し大きな音を立てドアからでていったのだ。

いつも几帳面なはずのアスが出て行った扉は開いたままで、一顧だにせず走り去っていく後姿がよく見えた。

沈痛な表情で黙っているモールの横を通り扉にむかう。そしてアスが消えていった森を見つめ、扉を閉じた。

「最低だな、俺」

そう言う他ない。

「そんなことないですよ！ リンゴ育てるのだって初めてだって言ってたじゃないですか！ それに俺、サイトウさんががんばってる

のいつも見てました。だから自分のこと最低だなんて言わないでください！」

そんなやさしい言葉をかけてもらっているのに全力で否定してしまいたくなる。

そんなこと関係ないんだ、俺はあんな小さなアスを追い詰めてしまったんだ、と。

「ありがとね」

そう一言を返すだけで精一杯だ。果たして今の俺は笑いかけることができているのだろうか？

そんな俺の心境を察したのだろう。曖昧な表情を浮かべてモールも黙ってしまった。

静かな店内に後片付けの音だけがやけに大きく響く。

普段よりはるかに長く時間をかけた後片付けもとうとう終わってしまった。

仕方がないか……。

これ以上引き止めるわけにも行かないので一人欠けたまま解散した。帰るときもモールは励ましてくれたが曖昧な返事をするこゝしかで

きなかった。

モールが帰った後もなにもやる気が出ず、無気力に椅子に座っていたとき——彼女が帰ってきた。

大きな音をたてて扉を開き入ってくると、勢いよく俺の前の机にかごを置いた。いつもきれいな服はところどころほつれており、あちこち汚れている。

そしてアスは呆けている俺をよそ目に次々とかごの中身を出し始めた。

「これはヒメゲシヨウといってこの時期に咲く花の中で我が一番気に入っている花だ。これはポルの実で前食べたものの日に干す前のものだ。これは——」

「ちょ、ちょっと待ってよ。一体どうしたのさ？」

訳がわからない。アスは俺のせいで出て行ってしまったはずだ。それなのにこの状況はいったいなんなんだ？

そんな俺にアスは答えた。

「サイトウよ、たしかに我は王族としては無力でなにもしてやることはできん。しかし友としては無力でないのだ。外に出たいのならば共に考え案をだそう、時間がかかるならば外の物を持ってきて楽しませよう。だからあきらめるな——我はそんなおぬなど見たくないぞ？」

そういつて笑うアスの顔はお世辞にもきれいとはいえない。目の周りは赤く、ところどころ汚れている。

しかし、それでも――美しかった。

そこにいたのは真の王族。年齢など関係ない気高き存在。

――ああ、俺なんかじゃとても追い詰めることなんてできやしなかったんだ。

だんだん視界が悪くなってきてろくに前も見えなくなってきた。

「まったく、わがままな王女様だ。俺に自由意志はないんですか？」

「うむ、あるわけなからう」

根拠もないのにアスと一緒にならんとかなるんじゃないかと思っ
てしまうあたり、目だけじゃなく脳みそも正常に機能していないの
だろう。

二人で顔を見合わせ笑い合う。今度はしっかり笑えた気がした。

机上の空論からはじめませう。(前書き)

デメリツトから制約に変わりました。申し訳ないです。

机上の空論からはじめませう。

昨日のことで痛感した。もっと人を頼るべきだと。

俺の魔法は便利だ。うまく使うことができれば、この森の人達の生活水準を大きく上げることができるだろう。しかしその反面、制約のせいで誰かに助けてもらわなければまともに生きていくこともできない。この点が日本にいたときとはまったく違う。

日本にいたときはなるべく迷惑をかけないように――貸しをつくらないように生きてきた。でもここではそれじゃあ駄目だ。たくさん助けてもらってたくさん助けられるようにならなきゃいけないし、なりたいたい。だから――

「それではこれから、サイトウ主催第一回『俺が外に出るにはどうしたらいいんだろうね？ みんな助けてー』会議を始めたいと思います。アスさん、モールさん、ミリアさんよろしくお願いします」

「うむ、任せるがよい」

「がんばります！」

「任せて」

こうなりました。

ちなみにグランさんはお仕事で欠席です。決して呼ばなかったわ

けではありません。

「それではまずこの会議の目的ですが――」

「いや……それは言わなくてもよいと思うぞ？」

「そう？　じゃあ早速だけど本題に入ります。前方のホワイトボードをご覧ください」

現状をまとめるとこうだ。俺が外に出るためにはこの森の中に土地を所有することが必須。つまり王、ひいては森への貢献が必須だということだ。そして問題となってくるのがその方法。昨日アスカら聞きソースの普及、王への献金、料理文化の発展では駄目だということがわかったので俺でもできる他の方法を考えなければいけない。詰んでる気がするのは気のせい。

「森の中に土地が必要だという前提は間違っていないはずよ。私もいろいろなものを見てきたけど他に方法はないと思うもの」

「土地の所有のためには森への貢献が必須というのも間違いないな」

「という訳で何ができるかという話になってくるんだけど、俺は力も弱い一般人。やっぱり魔法を使うしかないと思うんだ」

「そうですね……普通の人じゃ俺たちに身体能力では敵いませんか
らね」

前リンゴを植えるときに見せてもらったけど、あれに勝てたら自主的に人間のカテゴリから外れるべきだと思う。

「ちなみに森への貢献って具体的にはどういうことなの？」

「森の保全と森の住人への貢献だな。森の保全は主に森を荒らす魔物の討伐で、例外的に森に発生した問題を解決することもある。住人への貢献はそのままの意味だが、森のバランスを崩さない限りにおいてという条件がつかない」

「土地を持ってる人のことを土地持ちって言うんですけど、木々の伝染病を沈静化させたミリアさんや立場の弱い人を積極的に助けている親分なんかもそうですね」

そのほかにも土地持ちの人のことを聞いたが、魔物をたくさん討伐した土地持ちの人は結構いるもののそれ以外の土地持ちの人は珍しいらしい。荒事かんべんな俺としては、声を大にしてもっと戦闘以外の事をしてる人を評価してあげてと言いたい。

「やっぱそう簡単には土地はもらえないか……。最悪転移用の飛び地でもいいんだけどなあ」

「基本好きなのところに住んでいいこの森で土地をもらうことは名誉みたいなものだから……。そういうわけにもいかんのだ」

「そんなこといってないで普通に土地をもらえるようにがんばりなさい？」

「りょーかいです」

結局その日は現状確認できたぐらいで具体的な方法は決まらなかったため、また明日ということで解散した。基本的に俺の魔法を使う方向でいいと思うんだけど、問題は俺がいなくなればそれまでということだ。技術を持ってるわけでもないし森にあるもので作ったものでもないから、珍しいものを売っている商人と変わらないし、生活用品を売っても修理すらできない事を考えるとむしろそれ以下だろう。

「結局は魔法以外にとりえがないことが問題か」

みんなが帰った後一人呟く。日本では普通にまじめな学生をやっている、それなりには優秀だったんじゃないかと思う。ただ俺が今までやっていたことは現代社会に対応するためのものだったというだけの話だ。

数学がわかっていても実際の使い方がわからない。科学がわかってても器具がない上活用できない。唯一役立ったのは大体の文明レベルを判断できる社会の知識ぐらいかな？
うーん、厳しい。

そんなことをもんもん考えながら眠りについた。

「いったいどうしたものかな」

店が終わり賄いを食べながらアスに相談する。

「我もあの後父上に相談してみたのだが、戦士の数が足りない以外に問題はないそうだ」

「それは手が出ないね……」

仮に討伐に参加できたとしても開始5秒でやられる自信がある。
二重の意味で問題外だ。

「まあみなで他の方法を考えればよい。それよりも今は会議後の食事の献立でも考えておこうではないか。ちなみに我はシチューがよいと思うぞ。鶏肉のやつだ！」

もうすでに決定じゃんと言ってしまった俺は悪くないはず。

「それではこれから、サイトウ主催第二回『俺が外に出るにはどうしたらいいんだろうね？ みんな助けてー』会議を始めたいと思います。今日は昨日のメンバーに加えグランさん、ジルさんもよろしくお願いします」

ジルさんは森の外の人にも混じったほうがいいだろうと連れてきてくれました。ええ、それはもうジルさんも喜んで来てくれたそうです。来たときの光景を見て、だいぶ強引に連れてきたんじゃないかと誤解してしまいましたよ。はい。

「初めての人もいますのでまずこの会議の目的ですが――」

「それはいいんじゃないかい？」

「そうですか？ では昨日の内容ですが――」

「なるほどね、だいたいわかったよ。つまり魔法以外にできることがないのに魔法も土地をもらうことには向かないって事だね？」

そのセリフを聞いたアスやモールがピクリと反応してくれたが手で制す。ありがとね、確かに否定はできないんだけどみんなに助けてもらえるから気にしてないよ。

「そんなところです」

そういうとジルさんはつかつかとこちらに歩いてきて盛大に頭を引っぱたいた。

「まったく、そんなことでどうするんだい！ あんたは商人としてこの店を軌道に乗せたし、これだけの人に助けてもらえている。こんなことできる奴なんてそうそういないんだからもっと自分に自信を持ちな！」

「そりゃそうだな。第一ただの人間がこの森で生き残ってるだけでもたいしたもんだぜ」

俺の周りって優しい人多すぎるよなあ。軽くにやけてしまう顔を

隠すため軽くうつむく。二人の言葉をかみ締めて幸せな気分に浸っていたが、聞き捨てならないセリフに気がついた。

「……この森って危険なんですか？」

「普通の人間じゃ太刀打ちできないような魔物が出てくるからなあ。俺らが討伐してるとはいえここは北の端で守りが完全じゃねえから人間にとっちゃそれなりに危険だと思うぞ？」

「とはいえ我がいるからな、そのような魔物が出てきたとしても心配するな！」

知られざる真実。なんてこったい、小市民の俺がそんな危険なところに住んでいたというのか。ウエイトレスのつもりだったけどアスってボディーガード兼ねてたんだね……。給料上げとかなくちや。

「とは言っても修行で森に来る人も結構いるのよ？ でもこの森って大きいから途中で力尽きちゃうみたいで私もよく外まで運んでるわ」

現代日本人の感覚で言うと思われられないがこの世界では普通のことなんだろう。その話を聞くまでそんな奇特な人がいるなんて想像すらしなかった。

しかしこれは使えるのではないだろうか？ アスの話ではこの森では戦士のなり手がいないといっていた。そこに修行で来るような人達を加えれば、大きな戦力になるはずだ。

「今思いついたんですけど、この森の警備に修行に来るような人達を加えるのってどうでしょうか？」

なかなかいいアイデアだと思ったのだが皆様の反応があまりよくない。苦笑してる人もいれば憮然とした顔の人もいる。

「サイトウさん、正直厳しい気がします。確かにあの人達が警備に参加してくれるようにできるなら土地をもらえるレベルの話だと思います。そしてもしその時、人間との交流が広まるなら快挙といってもいいです。でも……あの人達は俺らのこと怖がって絶対了解してくれません」

「ちがいねえ！ サイトウみたいに友好的にしてくりゃこっちも気持ちよく話せるってのに、あいつら怖がって近寄ってきさえしねえ。前に助けた奴なんて俺をみて逃げ出しやがったんだぞ！？」

憤然とするグランさんに対し、ジルさんが申し訳なさそうに言葉をかける。

「そいつが失礼なのは間違いないんだがある程度は理解してやって欲しいんだ。獣人は見た目も獣に近い上、身体能力は人間を軽く上回ってるからね。生き物として弱く、技術を磨き、集団戦術を磨くしかない人間からするとどうしても恐ろしいんだ。正直に言えば私だってお金がどうしても必要じゃなかったら、獣人の人と取引をし始めようなんて思わなかったはずだよ」

そういわれてしまうと確かにわからないこともない。その気になれば簡単に人間を屠ることのできる存在と仲良くするのは簡単なことではないのだ。

少し怒らせただけでも危ないかもしれない。しかも同じ人間ではないのだから、常識自体が通じないかも知れない。そう思ってしまうも仕方がないだろう。

もちろんお互いのことをしつかり知ることができれば共存は可能だ
と思うが、今まで特に交流もなかったのでは難しいだろう。

しかし実際に森で生活している人間の俺が説得すればどうだろうか
？

「皆さんは人間が嫌いというわけではないんですよね？」

「無論だ。でなければサイトウとこうして話しておくこともあるま
い」

まったく道理だ。

「じゃあ俺が説得して回って、戦えるような人を集めて来るっての
はどうでしょう？ 俺はこの森の人達のいいところをいっぱい知っ
ています。そんな俺が説得すればできるはずです」

希望が見え、自然と笑みがこぼれる。考えれば考えるほどこれし
かないような気がしてくる。

——俺の魔法はこれに必要な条件を満たしている。

「それはあたしも考えたことがあるんだけどね、ひとつの戦力とし
て考えられるような規模の奴らをこの森に住ませようと思うと、ど
うしても森の負担が大きいだよ」

「実はこの家、お金さえかければ相当大きくなるんです。それに魔
法を使えばお金しだい、何人だろうとかなりの長期間の食料を確
保できます」

この家を城近くまで大きくできるとセラさんに聞いたとき、そん

なに大きくすることもないだろうと思っていた。この魔法の効果がわかったとき、珍しいものを出すにはコストがかかるから微妙と思っていた。しかしそんなことはなかったのだ。

建物は多少リスクはあるものの、通常では考えられないような低価格でかなりの人が住める規模にすることができる。魔法は珍しいものを出すことには向いていないかも知れないが『お金さえかければ物資をどこでも、いくらでも出せる』のだ。こう考えれば使えないはずがない。

この方法でいけば食料や住居といった森への負担は抑えることができる。あとは前金だとか必要経費だとか言って王を説得し、転移用の土地をもらいそうした人達を連れてくる。そして俺が生きている間に関係を取り持ち、流通を確保すれば文句なしに問題解決だ。机上の空論？ たしかにそうだ。でもみんなが手伝ってくれば勝算は十分にある。

メンバー全員の顔にも理解の色が浮かぶ。

「希望が見えてきました。みなさん協力よろしくお願いします」

机上の空論からはじめませう。（後書き）

今回は会議なので会話が多めです。誰がしゃべってるかわかりますかね？

俺って人間万事塞翁が馬の体現だと思う。

その後も会議は進み、意見を煮詰めていったがもともとの発案と大きく変わることはなかった。

理由としてはこの中に警備を仕事にしている人がいないこと、計画的な人間との交流が初めてで予想もつかないことがあげられる。どのように戦闘に参加してもらうかにしても人間と獣人両者の反応や連携などわからないことが多すぎるのだ。

そのため最終的には、やるにしてもまず試験的に人間を住ませてみて、様子を見てだんだん増やしていくぐらいしかないのではないかということになった。もちろん王と交渉する際にされるであろう質問に対する返答についても考えたが、どちらかという意見を認めてもらうというより王の話を聞いて徐々に修正していくという方針だ。なんという出たとこ勝負。

あとの問題は王と会う事なのだが、それは思いのほか簡単にいきそうだった。王自身がアスの働いているところに興味があるらしく一度食事をしに来ようとしているらしい。

もちろん食事に来たところで相談を持ちかけるなんて失礼なので、前もってアスに手紙を渡してもらい話し合い兼食事という形にするつもりだ。いきなりフォンで連絡というのも無礼すぎる気がするし。

「はじめまして、王女に手伝っていただき『ベイビーバード』を経営しているサイトウと申します。このたびは——と、これでいいかな？」

王様に手紙を出した経験なんてもちろんないので書き方などわかるわけではない。

「いいと思うぞ。そもそもこの森に手紙を出す文化がないゆえこれといった形式がないのだ。それに手紙の形式が違うから無礼だなどという父上でもないからな」

「じゃあこれで終わりですね。さっそく飯にしましょうよ！ 俺もう腹が減って腹が減って」

「ごめんごめん、じゃあ皆様本日はありがとうございました。ささやかながらも夕食を用意しましたのでよければ食べてみてください」

そういつて帰る人はおらずみんなで夕食を食べることになった。会議で使ったものの片付けや食事の準備をアスとモールにしてもらい、自分は厨房で料理の準備をはじめた。大きめのなべでぐつぐつとシチューを煮込み、六枚の皿にお湯を張り、六人分のパンを用意する。ほかの料理に取りかかったときせつせと準備する自分を思い、少し笑った。

日本にいた頃の俺は、友達は少なくはなかったが多くもなかった。まさか自分のために動いてくれる人がこんなにできて、その人たちのために嬉々として料理を準備するなんて思いもしなかったなあ。

「二人とも、料理できたからこれ運んでー」

料理がテーブルに並ぶと、みんなそろっていただきます。

アス、二杯目を食べるのは全然かまわないんだけど鶏肉ばかりピンポイントで狙うのはどうかと思う。

モール、なんでそんなに急いで食べてるの？ え、大人数で食べるときは家を思い出してこうなっちゃうって？ ……よくわからない

けどゆっくり食べな。

ミリア、もしかしてと思って作っておいた稲荷ずしだけどそんなに喜んでくれてよかったよ。ただ作っというてなんだけどシチューに合わない？

グランさん、申し訳ないんですけど酒はないです。今度持ってきてくださいよ、一緒に飲みませんか？

ジルさん、シチューについてそんなに聞かれてもわざわざジルさんが商品化するようなものでもないと思いますよ。職業病ってやつですかねえ。

みんなで笑い、さわぎ時間が過ぎていく。

その日みんなで食べた夕食は、普段アスたちが帰った後に一人で食べている夕食よりもずっと、ずっとおいしかった。

「父上からの手紙を預かってきたぞ！」

「おはよう。助かるよ」

ドアが壊れるんじゃないかという勢いでアスが飛び込んできた。あいさつもそこそこに読め読めと急かしてくるので、掃除を中断して手紙を開く。中には無骨な文字で――読めない。

「ごめん、読んでくれない？」

「仕方のない奴だ。読んでやるからありがたく思うがよい」

得意そうに手紙を受け取るとゴホンとせき一つ、やけに仰々しく読み始めた。

だいたいの内容としては、明日の夜に妻と行くので食事をお願いしたいということ、娘が普段働いている場所を見たいのであるべく普段通りにしてほしいということが書いてあった。

「そっか、じゃあ料理を用意しておかないとね。王様たちってなにか好きなものがある？」

「普通に肉を食べているぐらいだが……あまり特別なものを用意しなくてもよいと思うぞ。普段をみたいと書いてあったのだから普通の料理でいいはずだ」

そんなものだろうか？ 日本でも偉い人を家に迎えるなんてことなかったからどんなものかよく知らないけど、王女さまが言うならそういうものだろう。

「了解。あと文化の違いもあるだろうから、営業が終わった後に最低限の礼儀だけでも教えてもらいたいんだけど……」

「それについては任せておけ。なに、最低限とは言わずできる限り教えてやろうではないか」

目の輝きがそぞろ不安を感じさせるんですが……お手柔らかに。

「なんだその立ち方は！ 背筋を伸ばすのだ背筋を！」

「いえっさー」

予想以上にアスは教育熱心でした。ハハッ。敬礼もしましょうか？

「なんだその返事は？」

「故郷の言葉で俺も詳しくは知らないんだけど、『わかりました』みたいな意味かな？」

「そうか、ならよい。では続きだ。」

後頭部に紐を付けて軽く吊り上げたような気持ちで！ 立ち姿の中に優雅さを、気高さを感じさせるのだー！」

ちょ、ハードル高いって。立ち姿でそんなもん表現できるの？

それにねー優雅さとか気高さなんて俺の成分表一番下まで見てもないからねー。感じさせるものがない以上無理だよー。とはいえ

「返事はどうしたのだー！」

「いえっさー」

というわけしかないですよ。

「うむ！ これだけでできればいつ父上や母上に会っても問題ないな！」

アスのありがたい講義も終わりお茶をすすり始めた。終わった直後なんて優雅さについて哲学的に考察し始めるぐらい混乱していたけど今は何とか落ち着いた。

「とりあえずありがとね。じゃあ明日は普通に営業した後、夕食のときに迎えることになるからよろしく頼むよ」

「うむ、『いえっさー』だ」

なにこのかわいい生き物。初めてあったとき、ゆくゆくはこの家に住んでもらう予定を立ててたけど本格的に考えるか？ いやしかし倫理、外聞、尊厳など各方面の問題が……。

「つ、使い方が違ったか？」

「いやいやいや、本場では駄目かも知れないけど確実に正しい使い方だよ。俺なんかよりよっぽど」

「……よくわからんが今の返事で問題ないんだな？」

「確実に。問題どころかむしろ推奨するよ」

久しぶりに暴走した気がする。でも後悔はしていない。

俺って人間万事塞翁が馬の体現だと思う。(後書き)

※よろしければ評価・感想・ご意見などお願いします。していただ
けると白かぼちやが喜びます。

私刑（死刑）フラグが立ちました。

「こっちの準備は終わったけど、そっちの片付けは終わった？」

「終わったぞ。これで後は父上たちを待つだけだな」

少し前までモールが手伝ってくれていたのだが、王様に会うなんて滅相もないとかいって少し早めに帰ってしまい、今は二人で準備をしている。

見上げた小市民っぷり、立場が許せばぜひ俺もそうしたいものだ。そんなことを考えているとホールの片づけを終わらせたアスが厨房のほうに入ってきた。あらかじめ用意しておいた椅子に座り、リラックスしている様子を見るといつでも来いといった気分なのだろう。準備も終わったのになんとなく立っている俺とはえらい違いだ。

「何をいつまでも立っておるのだ？　椅子があるのだから座ればいいだろう」

厨房に準備してあった俺たち用のサンドイッチをつまみながらそういった。アスにとっては父親たちが来るのだから緊張する理由はないかもしれないが、俺にとっては王様との初遭遇なのだ。緊張するなというほうが無理だろう。

「王様に会うのは初めてだからね。なんとなく緊張しちゃって……」

「緊張などしていてどうする。こういうときは我のように悠然と構えておればいいのだ」

そういつて腕を組み、得意そうに笑いかけてくる。確かに正論な

のだけど小市民にはそんなこと実行不可能だ。別に恥じるつもりはないが、かなり年下の女の子に言われると悔しいのもたしかかわけで。

「あれ、口元にマヨネーズがついてるよ？」

まずはジャブを放つ。アスはそれを聞くとすごいスピードで手拭を掴むが、何かに気がついたのかやけにゆっくり口元を拭いた。余裕があるように見せたいのだろうが、顔が少し赤くなっているので台無しだ。

「やっぱりアスも緊張してるんだね」

「何をいつているのだ。我が緊張などしているはずがなからう」

意地悪そうに笑ってみせる俺にすまし顔で答えてくる。わはははは、無駄な抵抗なのだよ。

「そうなんだ。緊張してるなら仕方ないと思ったけど、そうじゃないならもう大きいんだから口元汚したままで話してちゃ駄目だよ？」

構えていたストレートを放つ。

「……そうだな。私も緊張しておったようだ」

どうやらストレートが当たったみたいだ。苦笑いをしながら認めてくれた。うんうん、こんなときは緊張したって仕方ないよ。恥じることはない。

「だから緊張しているときに、とても物を食べる気持ちにならない

のはよくわかるのだ。せつかくの出来立てサンドイッチを残してしまっても勿体無い。ここは我がサイトウの分も食べてやろう」

まさかのカウンターが来た。止めようとしたが間に合わない。愛しのタマゴサンドが食べられていく。これ以上被害を出してなるものか。一人目の被害者は出てしまったが、正面から両手首を押さえ二人目の被害者を防ぐ。満面の笑みで向かい合う両者。無言の圧力が場を支配する。

「邪魔するぞ。今日はよろしくたの——」

このタイミングでいらっしまった王様と后様、つまりアスの両親。扉から入ってきた二人と目が合う。今彼らの目には何が映っているのだろうか、想像もしたくない。

さび付いた機械のような動作で向き直ると、九十度のお辞儀をしながらとりあえず一言。

「いらっしやいませ」

どうしよう、怖くて頭が上げられない。

その後ビクビクしながら頭を上げたのだが特に怒っているような様子はなく、むしろ笑っていた。言葉が切れてしまったのは、アス

はじやれているという珍しい光景に純粹に驚いたからだという。あんなことをしていた無礼者の存在に驚いたとかじゃなくてほんとによかった。

「はじめて会うな。俺はこの森で王なんてものをしている。一族の名前についてはアスが話したようだから説明は要らないだろう、単純に王とでも呼んでくれ」

「私も后とでも呼んでくださいね」

「承知しました王様、后様。私はここで『ベイビーバード』という店をやらせていただいています、サイトウと申します。『偉大なる森に永久の繁栄が訪れんことを』」

そういつて片膝をつき、左胸に手を当てる。先日からのスペシャルな特訓で教えてもらった作法だ。清々しいまでの付け焼刃だが、努力を認めて見逃しえてもらえると助かる。

「ちゃんと勉強しているようだな。だが今日は王として会いに来たわけではないから楽にしてくれていいぞ。むしろ普段が少しでも知りたいから楽にしてくれたほうがいいな」

「……善処します」

「父上も母上も今日はしっかり食べていってください！」

アス、俺の緊張少しいからもらってくれない？

「こちらがサラダになります」

アスに持っけていってもらったのはハムとレタスのサラダ。それにかかるドレッシングは、野菜にかけるのがマヨネーズだけではさびしいと実験を繰り返して作り上げた一品だ。普段はレタスを適当にちぎってハムと一緒に適当に盛り付けるぐらいなのだが、今日に限っては上品そうに盛り付けた。うん、これは仕方ない。

そんなことを考えているとホールから声が聞こえてきた。

「これはうまい！ ただ量が少し足りないな、もう一皿もらえるか？」

あわててホールを覗くと確かに王様の前の皿は空になっていた。そんなに考え込んでいたかと不安になるが、后様の前の皿にはまだほとんど残っている事を考えるとそうでもないようだ。食うの早いよ。

慌てて戻ってくるアスに次は俺が渡しに行くと言げる。すぐに大き目の皿にいつものように盛り付けると、ドレッシングも持って届けに行った。

「量が足りなかったようなので今度は多めに持ってきました。このドレッシングをご自由にかけしてお召し上がりください」

「悪いな。こいつの分はこのままでいいんだが、俺の分は盛り付けは気にしないでいいから多めに持っけてきてくれ」

俺が高級フランス料理に対して抱いてしまう感想と同じ様なことを言われた。――食べたことはないが。

ただこういってもらえてなんだか少し楽になった気がする。せかせかと厨房に戻ると再び料理を作り始めた。

「いや、うまかった。アスがすっかり仕事をしている姿も見えたことだし今日は満足だ」

「本当においしかったわ。またごちそうしてもらいに来るわね」

厨房にはかなりの数の皿が積まれている。王様、食べすぎ。しかしそれだけ食べてくれたのだから、満足してくれたというのは本当だろう。「ありがとうございます」とお礼を言ってテーブルの片づけをはじめめる。

「それで今日は話したいことがあるそうだが……」

テーブルの片づけが終わったところで王様がそう切り出してきた。お茶をすすりながらこちらを見る目はすでに一人の父親でも客でもなく、王のものになっていた。そのギャップに驚きながらもアスと二人分の椅子を出し前に座った。

「今日お話したいのはこの森の土地をただけなかないかということについてです。自分はある制約のために、自分の所有する土地にしか行くことができません。このままでは死ぬまでこの家から出ることができないでしょう。それを何とかするためにも、土地をいただきたいのです」

王は表情を変えないまま黙り込むと、しばらくしてから話始めた。

「お前はアスと仲良くしてくれた人間だ。心情的には助けてやりたいが、俺の都合で土地を渡すわけにはいかんのだ」

「もちろんそれはわかっています。ここでは森に貢献したものに土地が与えられるということ。自分は森に実際に住んでいる人間として獣人と人間との関係を取り持ち、修行に來た人間と獣人が協力して魔物の警備にあたれるようにしたいと考えています」

王は意外そうな顔をすると再び考え始めた。口が渴いてくるのにお茶にとつける気にもならない。判決を待つ被告人のような気持ちで待っていると王がゆっくりと口を開いた。

「その提案を受けるか受けないかで言えば『受けない』になる。たしかにこの森の戦士は足りていないが、人間の修行者を迎えたところで解決になるとは思えん」

一体どういうことだ？ 人間の修行者は十分戦力になるという話だったはず。

「理由を聞かせていただいても？」

「確かに人間の修行者は十分戦力になる。しかし今までの関係からしてもそう簡単に背中を合わせて戦えるようにはならないだろう。そうになると人間だけの独立部隊を作ることになるが、そのような武装集団を領内で活動させることはできない。監視を付けておくにしても、万が一のために人間たちと同じ程度の戦力は持たせておかねばならんから意味がない」

「ですが人間たちの中に信頼できる者たちも現れるのではないでし

ようか」

「確かにそうかもしれん。しかしそれは監視がいたからの行動であるかもしれん。民の命がかかっている以上軽々しく判断はできません。その上修行者はずっとここにいるわけではあるまい。信頼できる者がいなくなればまた同じことの繰り返しではないのか？」

「父上！　そこまで言わずとも！」

「静かにしなさいアスフェル。彼の言っていることには多くの命が関係してくる以上、王として言うておかねければならないの」

王や后様の言葉を一言一言胸に刻む。まったくその通りだ。この森に住んでいる人があまりにも優しいからどうやら忘れていたらしい。――世の中はいい人ばかりではないと。

悔しいような恥ずかしいような、なんともいえない気持ちが湧き上がってきてこぶしを握る。

「そういうわけでその話には乗ることはできんな」

そういわれてしまった。ここで今までの俺ならあきらめていたかも知れない。でも今の俺はそう簡単にはあきらめるわけにはいかないのだ。

隣で悔しそうに下を向いているアスのためにも、会議に参加してくれたみんなのためにも。

「王様は人間との交流については反対でしょうか」

「いや、交流自体については反対ではない。民を危険に晒す事が反対なのだ」

「でしたら人間との商業的な交流はどうでしょうか」

「商業についての細かいことは俺には分からん。おい、どう思う？」

王は隣に座っている后様に話しかけた。

「なんともいえませんね。この森は基本的に閉じていますから商業的な交流ができるようになれば有益でしょう。しかし経験豊富な人間の商人に騙されないとも限りませんし、戦力の持込を禁止・制限するなら人間のためになんらかの安全対策は必要でしょう」

「商人に騙されないかという点については大丈夫かと思っています。この森ですでに取引をしているジルⅡエバンスという商人がいます。彼女に仲介してもらえば大丈夫かと思っています」

ジルさんはすでに商人としてミリアと取引をしてるみたいだから、多少手間が増えても利益が上がるようなら問題ないはずだ。

「私もそこまで詳しいわけではないのでなんともいえませんが、実績のある人なら問題ないかも知れません。実験的に初めてみる価値は十分にあると思います」

「こいつがいうならそうなんだろう。そういう話なら乗ってもいいぞ」

これで第一段階はクリア。想定通りとはいかなかったが結果的に問題はないだろう。さて、第二段階だ。

「ありがとうございます。そこでお願いがあります。先ほども言っ

たとおり自分は土地がなければ人間に会いに行くこともままなりません。この交流を成功させるためにも初めにわずかばかりの土地をいただきたいのです」

「人間の町までということか？」

「いえ、ミリアが協力してくれるそうなので、サンライズ方向に小さな飛び地でもいただければと」

「ああ、ミリアは転移系の魔法を持っているからな……」

王しばらくの沈黙の後口を開いた。

「条件が三つある。一つに与える土地は完全に転移にしか使えないようなもので、通常と違い他の民がそこを通っても不問にすること。二つに土地の所有は名誉あるもののため、交流が実現するまで所有の事実を知らせるのは最低限にすること。三つに監視者を同行させ、その者の衣食住と安全の保証、だ」

「三つの条件すべて問題ありません。ご期待に沿えるよう頑張らせていただきますと思います」

椅子から立ち上がると片膝をつき、額の前で手を組み頭を下げる。これもアスに教えてもらっていた感謝を表す作法だ。本当に教えてもらってよかったと思う。この感謝を少しでも正確に伝えることができるのだから。

「期待しているぞ。それで監視者だが王族より王女アスフェルを指名する」

「ナイスアイデアね！」

「どういことですか!？」

……質問をアスに取られた。俺としては一緒にいて楽しいし頼りになるアスが同行してくれるなら嬉しくて仕方がないが、王女がそんなに簡単に森から離れてもいいのだろうか。

「どうしたもこうしたも監視者は森のことを考えられて彼と仲のよい者がいい。その条件にお前はピッタリじゃないか」

そういう王の目は、もう一人の父親のものになっていた。

「それはそうですが……いいのですか？」

「森のことは心配しなくてもいいから安心していい。ここで民と交流するのも悪くないが、親としてはお前に世界を見てきてほしいのだ。それにお前ならきっと彼を助けてやれる。森の未来のためにもよろしく頼むぞ」

「はい、わかりました！」

アスはそういって俺と同じ作法をとった。この作法が表すのは感謝。俺と同行することになってしまった訳だが、少しでも楽しみに感じてもらっているなら嬉しいと思う。

「という訳でうちの娘を監視につけるからよろしく頼むぞ。少しでも広い世界を見せてやってくれ」

王は肩に手を置いてそう言ってくれた。俺はこの人の期待にこた

えることができるのだろうか。答えは分からない、ただ全力でやりたいと思う。俺は姿勢を正し「はい」と答える。
そうしているとなぜか肩に置かれた手に力が籠ってきた。

「じゃあ条件、特に三番目の条件を守って頑張ってくれ。守ってくれなければお互いにとって大きな不幸が起きるだろうからね。サイトウユウくん」

アスのとは比べ物にならない笑顔のプレッシャーを受け、コクコク頷くことしかできない。本能が告げている、三番目の条件だけは命に変えても守れと。比喩的な意味ではなく。

「よしよし、じゃあ期待してるぞ。渡す土地については後日伝えるから、それまでに引継ぎでもしておいてくれ。その店はしっかり存続させるんだぞ」

そういうと王様と后様は帰っていった。森の中に消えていく二人の姿を見ていると、どうしようもない感謝の念が再び沸いてきた。こんな俺の話を受けてくれてありがとうございます。アスを同行させてくれてありがとうございます。

気がついたら俺は普通に頭を下げていた。どうやら付け焼刃ではなく、体に染み付いた感謝の作法が出たらしい。

二人が見えなくなったとアスに教えてもらうと数秒後頭を上げ、扉を閉めて後片付けを始めた。

「ところで一緒に帰ってもよかったのに何で残ってくれたの？」

「我はこの従業員なのだぞ。後片付けもせずに帰るものか」

どうやらうちの従業員さんはとてもよい従業員さんらしい。

「……今からご飯作るんだけど食べてく？」

「ぜひいただこう！」

アスの大好物のハンバーグを焼きテーブルへ向かうと彼女はいそいそとパンを準備しており、俺がお茶を持って行くと食器を揃えていた。二人そろって椅子に座り、二人そろって料理を食べはじめた。こんなほんわかした空気が移動先でも味わえるであろうことに感謝。アス、これからもよろしくね。

心も体も疲れました。(前書き)

投稿遅れて申し訳ないです。最近かなり忙しくなかなか時間が取れませんでした。ちゃんと生存はしています。こんなんですがよろしくお願いします。

心も体も疲れました。

王様より土地を頂けることになって数日、いつも通り朝の支度をしているとアスがなにやら小さな肩掛けカバンを持ってやってきた。普段なら入ってき次第元気に挨拶するはずなのにそれもなく、得意そうににやけながらゆっくりこちらに歩いてきた。

「いい朝ではないか、サイトウよ」

「？ おはよう、いい朝だね」

なんだか無駄に余裕を溢れさせようとしている様子が気になるがとりあえずはスルーしておく。ちなみに今日は朝から曇り気味だ。

「今日は王から手紙を預かってきたのだ。ありがたく受け取るがよい」

態度の理由をなんとなく理解。うーん、ここは乗っておこうか。膝をつき王様に対するような作法をとり「ありがたき幸せ」と返事をする。平伏して「へへーっ」とかジャパニーズな下々を演じようかとも思ったが、その後の反応によっては恥で死にかねないので自重。

そんな俺を見てアスは満足そうに笑うと手紙を渡してくれた。手紙を渡すとさっさと演技をやめ、早く見るように急かしてくる。

「ちよ、受け取った後の口上ぐらい言わせてよ」

「何を言っておるのだ。サイトウの言葉は我をこんなに感動させておるといふのに……！」

こいつ完全に無視する気だ。暴君が、暴君がここにいます。
……まあそんなことはどうでもいいので早速手紙を開いてみる。なんだかんだ言っても俺も早く見たいのだ。期待して見てみるが当然のごとく文字が読めない。

「ごめん、ちょっと読んでくれない？」

せかせかと手紙を開けていた身としてはなんとも恥ずかしい話だが我慢。アスのあきれたような視線も我慢。

「なにになに……要約すると＜ミケの丘＞の一部と＜森の境＞の一部を渡すと言うことが書いてあるな。

よかったではないか！ さすが父上だ、わかっておられる！」

「よく分からないんだけどいい土地がもらえたのかな？」

土地の名前を言われてもいきなりここに来た俺にはまったく分からない。つまり俺は手紙の文字も読めなければ土地の名前も分からないということだ。なんという無能。

「＜ミケの丘＞はミケという魔物が住んでいる丘だ。サンライズに行くにはどうしても魔物の生息地を経由しなければならないのだが、この丘はその中でもかなり危険の少ないところだ。それにここは見晴らしがよいからいい景色が見えると思うぞ。そして＜森の境＞はその名の通り森の北端だ」

どうやらだいぶ気を使ってもらったようだ。制約の関係でうろろできないので景色のいい土地は喉から手が出るほどほしいものだし、転移の関係からも森の端の土地はありがたい。

「だいたい土地をもらっちゃったね。これはますます失敗できなくなっちゃったよ」

「何を言っておるのだ、我在る以上失敗などするはずがなろう。そなたは安心して励めばよいのだ」

胸を張ってアスが言う。外に出たことがないといっていたから別に根拠のある自信じゃないんだろうけど、ここまではつきり言ってくれると根拠がありそうに聞こえてくるから不思議だ。小心者の俺には真似できない行為だからこそ、こう言ってくれるのすごいありがたい。

「その通りだと思いますよ？　じゃあそろそろ開店の準備に戻ろうか」

「……サイトウよ、その反応はどうなのだ？」

軽く睨まれたけど精神の安定のためにスルー。無駄に忙しそうにして厨房に向かった。

「こんにちは、今日もご馳走になりますよ」

「いらっしやいませ、何度も来ていただいてありがとうございます」

昼のピークもひと段落してお客さんが少なくなってきたあたりでミックさんが来てくれた。たびたびこの時間に足を運んでくれるの

だ。忙しいときはまるで余裕がないからこうやってきてくれるとありがたい。

ミックさんはいつも通りカウンターに座りメニューを開く。少し眺めた後、紅茶とスコーンを注文した。これはミックさんのお気に入りメニューでよく頼んでくれるものだ。

「この紅茶もスコーンも本当においしくて気に入っているのですよ。紅茶は何かなるのですがスコーンは教えていただいてもうまくできませんでしてな」

「あー、うまく焼けませんでしたか。まあこの店で食べてみてくださいよ」

あらかじめ準備してある生地をオーブンに入れ点火する。同時にやるとタイミングがずれてしまうので、時間を見て紅茶のお湯を沸かし始めた。スコーンが焼けてきたら夜の暇な時間に作ったジャムも温める。あまりに暇だったので作ってみたのだがこれが意外においしく、今ではスコーンの定番に成りつつあるのだ。

「お待たせいたしました、紅茶とスコーンです」

「ありがとう、うん、おいしそうだ」

他のお客さんがいなくなった店内でミックさんはゆっくり紅茶を楽しんでいる。ときおりカウンターの内側に座った俺たちと会話をするだけで基本的に静かな状態だ。相変わらずウサギハンドできれいにスコーンを食べる姿は興味深い。

「ありがとう、相変わらずおいしかったよ」

「お粗末さまです。申し訳ないんですがちょっとお時間よろしいですか？」

「なんですか？」

せっかくミックさんが来てくれたのだから引継ぎについてお願いしておきたいと思う。

「今度野暮用でサンライズにある程度の期間行くことになったんですが、店を閉めるのもどうかと思うのでその間誰かに任せられないかと思っています。そこでぜひ、ミックさんをお願いしたいと思うのですが引き受けていただけませんか？」

ミックさんは少し意外そうな顔をし、顎に手を当てて少し考える
と質問をしてきた。

「なかなか面白そうな話なのですが条件はどのようなものなのでしょうかな？」

「そうですね、毎日とは言いませんが七日に四日は営業してもらいたいです。材料は様子を見て自分が届補給しにきます。あとこの店は営業時間外であれば自由に使ってもらってかまわないです。給料は相談ということでは？」

「レシピの改変や追加はどうですか？」

「まあミックさんなら大丈夫だと思うんですけど。ただ改変についてはお客さんの反応によっては元に戻してもらいかもしれません」

それを聞くとミックさんはにんまりと笑いうなずいた。

「分かりました。力及ばずながら手伝わせていただきました。給料については常識の範囲内で結構ですが、材料の補給の際に私の個人的な分も代金を払うので補充させていただきたい」

「もちろんです。いつからお任せすることになるかは分かりませんが、どうかよろしく願います」

そういつてミックさんに頭を下げる。思ったよりも店の引継ぎが楽に決まってよかった。これのせいで数ヶ月かかることも覚悟していただければこれは大きい。これも日ごろの善行のおかげですね。

「さあ、そうと決まればいつ任されてもいいように早く料理を学ばなくてはなりません！早速今から教えていただけますかな？」

突然の申し出に動きが止まる。前向きに取り組んでくれるのはいいことなんだけど急すぎやしませんか？

アスの方をちらりと見ると厳肅な面持ちで首を振っていた。ああ、こうなったら止まらないんだね。

「そんなに熱心に取り組んでもらえると嬉しいですね。もう店も終わりですので休憩したら早速始めましょうか」

営業も終わり、片づけを済ませるといつも通り賄いを作り始めた。ミックさんの熱意はかなりのもので、この簡単な賄いにさえ興味を示し事細かに質問してきた。おかげでいつもより時間がかかってしまいアスに怒られないかビクビクしながらテーブルに持っていた

のだが、アスは悟ったような顔をしてテーブルに座っていた。何だよ、こうなることが分かってたなら教えてくれたっていいじゃないか。

もそもそと食べ終わると片づけをアスに任せ、待ち切れなさそうにうずうずしているミックさんに料理を教え始めた。

「えっと、まずはステーキに使うソースからですが……（前略）……次はパスタに関してですが……（中略）……もうそろそろ一度休憩した方がいいんじゃないで、そうですか……（後略）………以上で終わります」

うう、もうだめだ。俺の亡骸はベットに寝かせて定期的に食料と水を与えてください。というか誰だ、引継ぎが楽に決まってよかったと言った奴。かなりの苦難だったぞ、謝罪と訂正を要求する。……もういいや、空しい。

教え終わるとテーブルに倒れこみ燃え尽きた俺とは違い、ミックさんはエネルギー満タンといった様子でいい笑顔をしている。そんな満足そうにしてくれるとこの苦労も多少は報われる。

「なんというか……大変だったな。これでも飲んで元気を出せ」

アスはそういつて冷えたミルクケーキを出してくれた。これは果物からジュースを作ると結構な量がいるというケチ臭い理由から以前作られたものだ。主に子供のお客さんに人気の一品で、それとはまったく因果関係はないのだがアスも大好きだ。

冷たくて甘い感覚が疲れた体に心地よい。ミルクケーキを一息に飲み干すとアスにお礼を言った。

「おいしかったよ、ありがとう。それにしてもミックさんってあん

なに料理好きだったんだね」

そういうとアスは苦笑して答えた。

「ミックは自分の知らない料理に目がないのだ。ただでさえ知らない料理なのに、それが今まで食べたことのないほどおいしいとなればああなってしまうのだろう」

「その通りなのですよ！ サイトウさんの料理は魔法でしか出せない材料を使うものも多いですがどれもとても素晴らしいです！ いずれは魔法を使わずとも手に入る材料を使って、もっと素晴らしい料理を作って見せますよ」

ミックさんが話を聞いていたのかそう言ってきた。俺も日本にいた頃はおいしい店がないか食べ歩きをするぐらいには美食家だったので、ぜひこの世界にしかないものを使ったおいしい料理を食べてみたいと思う。

「それは楽しみです、期待してます」

「我は肉を使った料理がよいぞ」

「はい、任せてください」

ミックさんはそういつて優雅に一礼をした。そして頭を上げると胸ポケットから懐中時計のようなものを取り出し中を見た。

「ではそろそろいい時間ですので失礼させていただきますしうかな。サンライズに行く日が決まりましたらまたフォンで連絡ください。今日はどうもありがとうございました」

「こちらこそ引き受けていただきありがとうございました。また連絡することもあると思うのでよろしく願いします」

そう返事をするミツクさんはこっと笑い家に帰っていった。扉が閉まると、今日のやるべきことが終わった安堵感からどかっと椅子に崩れ落ちる。

「アスウー、なんとかなったよー」

「よかったではないか。多少の難はあれどもミツクなら十分にやってくれると思うぞ」

そう言ってアスは座っている俺の後ろにまわり、疲れを労うように肩を揉んでくれた。立っていると俺の胸ぐらの身長しかないアスだが座っていればちょうどいい高さになる。獣人ゆえか力は強いものの、揉んでくれる手はやっぱり小さくなんとかわいらしく感じる。長い髪が力を入れるたびに背中にあたり、普段は気づかなかったいい匂いがしてくる。確かになれた手つきで気持ちいいのだが、時間が経つにつれなんとなく恥ずかしくなってきた。

「ありがとう、気持ちよかったよ」

「もういいのか？　ときどき父上にして差し上げるから下手ではないと思うのだが……」

「いや、すごい気持ちよかったんだけどやってもらうのが悪くてね。今度は俺がやってあげるよ」

そう言ってアスを座らせると肩を揉み始める。想像以上に小さく

て細い肩に驚きながらも痛くないよう丁寧にマッサージをしていく。

「むっ、く、くすぐったいではないか。わわわっ！　もうよい、もうよいから！」

慌てた様に椅子から立ち上がるとくるりと回ってこちらを向いた。心なしか顔が赤いような気がする。

「わ、我はなれておらぬから別に揉んでくれなくともよいぞ」

たしかにマッサージってされなれてないとくすぐったくてしょうがないからね。でもせっかく揉んでもらって何もしないのも悪いと思ひ、テクテクと近づいていつて頭を撫でる。いつもは髪に沿って撫でるのだが、今日は気分の関係でわしゃわしゃといった感じで撫でる。アスも始めはびっくりしたような様子だったが、すぐに気持ちよさそうにし始めた。

撫で終わり、軽く乱れた髪のままにこっと笑ってアスは言う。

「やはり我は撫でてもらうほうがいいな。ではそろそろ失礼するでしょう」

「分かった、今日もありがとね」

俺がそう言い終わらないうちにアスは早足で出て行ってしまった。少し顔が赤かった気がしたから、やっぱり恥ずかしかったのだろう。まあいきなり撫でられれば恥ずかしいか。

そんなことを思っていると外で「わっ！」という声と転んだような音がした。そんなに早く帰りたいほど恥ずかしかったのかな？　これは反省しなければ。

珍しく出しっぱなしになっている食器や椅子を片付けていると、ある衝撃的な事実が気がつく。今日の俺って典型的なセクハラ野郎じゃねえ？

やっちまったやっちまった。セクハラなんて概念はないと思うけど、アスが王様に「サイトウが気持ち悪かった」とかいつて王様出陣。死亡フラグ回収なんて事態になりかねん。

えっ、こういう時ってフォンでフォローすればいいの？ でもセクハラじゃないっていても実際やっちゃったんだから完全無意味だよな？

終わった。まさか異世界にきてセクハラが原因で死ぬことになるとは思わなかった。どうせなら勇者っぽくドラゴンと戦ってとかのが何百倍もマシだよ。

そんな死刑囚の心境で待っていたが王様が突撃してくるような気配はない。……どうやら死刑執行を今日のところは見逃されたようだ。明日弁明して減刑を求めよう。もしかしたら命ばかりは助けてくれるかも知れない。

そんな一縷の望みにかけて弁明文の構成を考えると力尽きてベツトに倒れこんだ。

明日が命日になりませんよーに。

心も体も疲れました。（後書き）

※よろしければ評価・感想・ご意見などお願いします。していただく
けると白かぼちやが喜びます。

神に愛された俺（笑）

朝、日も昇る前に目が覚めた。

いつものように布団に留まることなく立ち上がる。意識は完全に覚醒していたが、染み入るような冷たさの水で顔を洗った。

無言のまま服を着替えると、扉を出て森に臨む。森の冷たい空気を肺いっぱい吸い込みゆっくり吐き出した。

「森の空気って、こんなにおいしかったのか……」

そう呟いていると微かに東の空が明るくなってきた。木々で確認することはできないがおそらく日が昇ったのだろう。徐々に明るくなっていく空を目に焼き付けると家の中に戻った。

いつもと変わらないメニューをいつもの倍の時間をかけゆっくりと咀嚼した。朝食を食べ、片付けが終わると普段通り仕込みを始めた。何をしているんだかと苦笑が漏れる。

アスが来る時間の少し前になると作業をやめ、身なりを整え椅子に座った。

「セラさん、もうすぐあなたの御許へ行きます」

目を瞑り弁明の流れを確認すると、自らの過去に思いを馳せた。

……足音は一つ、か。どうやら弁明する暇はありそうだな。

直後、勢いよく扉を開けてアスが入って来た。

「サイトウよ、今日も来てやったぞ！……なぜ何かを悟ったような顔をしておるのだ。なんだか不気味だぞ？」

……不気味？　ぐふっ、痛恨の一撃。

「ふふっ、気にしないで。それにしても……昨日はごめんね」

その言葉を聞くとアスは不思議そうな顔をした。

「一体何のことだ？」

アスの言葉に対し一瞬で想定パターンを検索。パターンF、油断したところに必殺の一撃と判断。

「いやね、もちろん悪いことをしたと思ってるんだ。でもあれは純粹に感謝の気持ちを示したかったからで……」

「何が言いたいのかまったくわからんぞ。それよりも今日の仕込みはもう終わったのか？」

これはどういうことだ、昨日のことが問題にされていない？　アスの顔を見る限り本当に何のことを言っているかわからないといった様子。

来た、来たぞこれは。困難に対し無人の野を行くが如し。そうか、これがご都合主義というやつか。

「ああ、仕込みだったね。もう終わったからテーブルの掃除でもしてよっか」

「うむ、おかしなことを言っていないですべきことをするべきだ」

「イエッサー」

いやー、今日の仕事は行動の一つ一つが新鮮に感じられたね。アスが不審そうな視線を向けてくるが無視。うん、今度からはもっと真摯に仕事に取り組むとしよう。

では生きていられるなら今後の活動でもしましうかね。フォンを起動させ、ミリアにつないだ。

「もしもしミリア？」

『はいはいミリアよ。土地のことに動きがあったの？』

「もらえる土地が正式に決まったんだ。それでサンライズの土地についてジルさんに相談したいんだけど、いつごろなら来てもらえそう？」

『そうね、そういう話なら今日の夜にでも予定を空けてくれると思うわ』

さすが商売人というべきか。

「助かるよ。料理用意して待ってるね。ではまた夜に」

会話が終わりフォンを停止させる。うん、良い感じだ。

「どうなったのだ？」

「ジルさんが今日の夜に来てくれるんだって。だから今からはそのための準備かな」

メニューはどうしようか。ミリアがいるから油揚げを使うのは確定として……。やっぱり肉かなあ。

そんなことを悩んでいるとアスが何かを決心したように話しかけてきた。

「サイトウよ、今日の料理は我に作らせてくれないか？」

さて、どうしたものか。アスには空いた時間を使って料理を教えているからそれなりにはできる。普段店に出すことはできないが、知り合いに出すぐらいならば十分だろう。

「分かった、少しは手伝わせてもらうけど任せるよ」

「うむ、任せてくれ！」

アスはそうやって胸の前で小さなこぶしを握った。重要な仕事を任されたといった様子で真剣な視線を向けてくる。なんと頼もしい。頑張ってくださいな。

「では今日のメニューはハンバーグにしたいと思います。今回は基本アスにやってもらうつもりだから頑張ってね」

「うむ！」

こだわりのフリル付きエプロンを着たアスが元氣よく頷く。その心境を表すように耳もピンと立っている。うん、やる氣十分だ。まず手を洗ってたまねぎを切ってもらおう。指を曲げて包丁に注意しているが、丸い玉ねぎをうまく切れないのはご愛嬌。トントンと切っている俺に比べれば確かに遅いが、ゆっくり丁寧に切っている姿は微笑ましい。

「む……むう？」

玉ねぎが目にしみたのか手首でこしこしと目をこする。器に水を張るのを忘れていたのだ。まあこれもまた勉強という事で。

切り終わったそれを炒め、各種材料と一緒にひき肉に混ぜてこね始めた。始めはぎこちなかったが、やって見せるとコツを理解したのかうまくこねるようになった。明日の分の仕込みもやってもらっているため結構な量なのだが、まるで問題はなさそうだ。

最後に形成だ。適当な大きさの塊を作って、ペタペタと両手でキャッチボールをする。

「我的手ではっ……何もつかむことができんのかっ……」

この世の終わりみたいな声が聞こえてきたのでそちらを向くと、自らの小さな手を見つめているアスがいた。

言っていることは分からないが、言いたいことは理解。自分の扱える塊の小ささに愕然としたのだろう。別にそんな声を出すほど小さい

わけでもないのだが。

「アス……君は一人じゃないんだ。苦しんでいるなら俺を頼ってくれ、俺が君の力になる」

「サイトウっ……！」

感極まったような声を出しこちらを向く。そしてそのまま数秒見つめ合った。

「では食べ応えのありそうな大きいのを頼むぞ」

「りょーかい。一個作つとくからは普通の大きさを我慢してね」

寸劇も終え通常の態度に戻る。日本にいた頃は友達とよくしていて、最近こちらでもするようになった。どこにしようが俺は俺ということだろう。軽く笑う。

ジルさんたちが来てから焼くのでこれで一段落だ。夜までしばらく時間があるから俺は付け合せの準備をし、アスには森に木の実などを取りに行ってもらった。

付け合せの準備をしながら考え事をする。モールのことだ。実はこの数日、彼は店のほうに顔を出していない。最後に見たのは王様と会った翌日だ。土地がもらえることになったと伝えたと彼は自分のことのように喜んでくれた。そしてその日の終わりに、しばらく店を休んでもいいかと聞いてきたのだ。

彼は善意で手伝ってくれていたのだから断る理由はないがとても驚いた。彼の任された畑ではしばしば見るのでこの森にはいるのだろうが、一体どうしてしまったのだろうか。

考えごとをしながらも手は動き、付け合せの準備を終えた。しばらくするとアスがきれいな果物らしきものを持って帰ってきた。こうしてやるのがなくなり、夜までの余った時間は得意そうに森のことを説明してくれるアスの話に耳を傾けていた。

「ユウくん、おめでと〜。頑張ったわね〜」

「やったじゃないか。これでこっちも安心して土地が売れるってんだよ」

辺りが少し暗くなり始めた頃、扉を勢いよく開けて二人が入ってきた。最近あの扉の扱いが雑だと思うのだが大丈夫だろうか？

「皆に手伝ってもらったおかげですよ、ありがとうございます。とりあえずご飯用意しますんで座っててください」

二人に座ってもらうとアスと一緒に厨房に向かった。俺は付け合せを作り、アスはハンバーグを焼き始める。コンロが少し高い位置にあるため台に乗り、ジュウジュウ音をたてるハンバーグを凝視している。フライパンを両手でしっかり握っている姿が微妙に不安を誘う。……ミリアとジルさんにあらかじめ言っとくか。

料理もテーブルに並び皆で食事を始めた。ハンバーグの表面が少しこげてしまい悔しそうなアスだが、中まで火が通っていて十分なレベルだと思う。ミリアとジルさんもおいしそうに食べてくれ、最後にアスがとってきてくれたマンゴーみたいな味の果物を食べた。そして食事も終わり、片付けを済ませるといよいよ土地の話に入った。

「ふーん、＜ミケの丘＞と＜森の境＞に土地がもらえたなんて王様も奮発してくれたじゃない」

「アスもそういつてくれたんだけどイマイチわかんなくて……」

「行ってみれば分かるわ。楽しみにしててね」

アスもミリアも太鼓判なことを考えると本当に良いところみたいだ。魔物が出るとは言っていたけど、これは本格的に楽しみになってきた。

「それは良いとしてサンライズの土地についても話そうじゃないか。とりあえずこれが大体の地価だから見てみな」

そういつてジルさんが羊皮紙を渡してくれた。汚さないようにそれを受けとり値段を見る。世界が止まった気がした。

「……土地ってこんな高いものなんですか？」

キリキリと首を動かし、ジルさんに尋ねる。大体日本の中規模都市ぐらいの地価を想像していたため驚きが隠せない。サンライズっ

て銀座にでもあるの？

「普通はこんなにしないよ。ただサンライズはある事情で馬鹿みたいに地価が高くてね。それでも良心的なほうなんだよ」

ジルさんが苦笑しながらそう告げる。俺も何とか苦笑を返すが表情が硬いのが自分でも分かる。どうしようかと頭を抱えると再びジルさんから声がかかった。

「でもこの値段じゃサイトウはこっちにこれないだろ？ あたしも心苦しくてね、いろいろ考えて解決策を思いついたのさ！」

「ほんとですか、助かります」

地獄に女神とはまさにこのこと。ジルさん、あなたについていきます。

「エバンス商会だって土地を持っているからね。本来販売用じゃないんだけどそれを売ってあげようって話さ。たいした土地じゃないからお金は五十万フォルでいいよ」

「それなら払えます。本当にありがとうございます」

ジルさんもうんうんと笑顔で頷いている。さすがご都合主義、今日のおれは神に愛されている。

「それでお金以外のことなんだけど、サイトウにエバンス商会の従業員になってほしいのさ。なに、働きによつては早く辞めてもらっても良いし労働条件もそれなりにしておくよ。ほら、これが契約書ね」

そんな調子に乗っている俺にジルさんが爆弾を落とした。いや、確かにあなたについていきますとか思ってたけど……。

とりあえずアスに内容を読んでもらう。

「うーむ、先ほどの地価を見るにこのぐらいの条件ならば妥当なのではないか？」

「別にあんたを騙すつもりはないからね、妥当な条件にしてあるつもりだよ」

晴れやかな笑顔で語りかけてくるジルさん。前もってサインするだけになっている契約書が気にならないわけでもないが、条件を読んでもらうと確かに納得できる内容だったため受けることにした。

「分かりました。よろしくお願いします」

「よし、これで契約完了だ！ いろいろあるだろうから急がなくても良いけど来る前に連絡しとくれよ」

ジルさんはそういうと良い笑顔でパチンと指を鳴らした。うん、お互い有益な取引になったみたいだ。

土地の話も終わるとミリアとジルさんは食事のお礼を言って帰っていき、アスも片づけが終わると帰っていった。

皆が帰り静まり返った店内、寝るための支度をしながら考える。だんだんこの店を離れることが現実味を持ってきたと。別に帰って来られなくなるわけではないのだが、しばらくの間はこの店の厨房に立てないだろう。

始めはお客さんにビビッていたものだが話してみると皆さん優しく、顔なじみといえる人も増えた。当分会えなくなるのは辛い、かといってずっとこの店にいるわけにもいかない。結局皆さんに挨拶してから行くのが一番なのだろう。お客さんには来てくれたときに挨拶するとして、特にお世話になった人達とは食事会でもしたいものだ。

今日はそんなことを考え、眠りについた。

神に愛された俺（笑）（後書き）

遅れて申し訳ないです。

本編についてはあと数話でサンライズにいけそうです。

ゆっくりしたペースで進んできた気がしますがなんとかここまでこれました。

これからよろしく願います。

友 ~ 出会いと別れ ~

「そうかい、もうすぐサンライズに行っちまうのか。まあなんだ、元気にやれよ」

「ありがとうございます。まあちよくちよく帰ってくるんですけどね」

ジルさんと契約を交わして数日、お客さんへの挨拶も順調に進んでいる。一応張り紙もしておいたので、こうやってお客さんのほうから声をかけてきてくれることもあり、それがとても嬉しい。なんというか、気にしてもらえているという感じがするというか、うまく言えないけど。

「そいや、紙にはミックスが引き継ぐって書いてあったが料理教えるのに苦労したんじゃないか？」

コップ片手からかうような感じで笑いかけてくる。微かに同情のようなものが見えるのは気のせいだろうか？ リザードマンの細かい表情まで読み取れるようになった不思議。人間やればできるんだなあ。

「そんな苦労なんて。ただミックスさんがちょっと……いえ、熱心すぎたんで教え甲斐があったぐらいですよ」

ちなみにこれは嘘ではない。料理を教えて以後、ミックスさんは来店するたび熱心に料理の質問をしてくるのだ。なんて教え甲斐があるのだろう。これに対して「二桁の質問は勘弁してください」とか「あー、紅茶第二ラウンドいっちゃうんですねー」とか思ってしまった

うのは贅沢なのだろうか？

「くくつ、物は言い様ってやつだな。じゃあそろそろいくぜ、ごちそうさん」

「ありがとうございますー」

最後のお客さんが帰ると小走りで厨房に向かう。朝のうちに用意しておいた肉じゃがを火にかけ、残ったご飯を茶碗によそう。あともう一品かな。

「テーブルの準備は終わったぞ。そちらはどうだ？」

雑巾片手にてくくとアスが歩いてきた。アスの声に耳を傾けながら茹でていたほうれん草を冷水で冷やす。

「おひたしができたら完成かな。肉じゃがとご飯だけ運んどいて」

そう言いながらほうれん草を絞る。そして適当な大きさに切ると皿に盛ってテーブルに運び椅子に座った。

「簡単なものでごめんね」

「なに、これで十分だ。それよりも早く＜ミケの丘＞に行って景色を楽しもうではないか」

ジャガイモを頬張りながらアスが笑う。

「そうだね。ほんと楽しみだよ」

こんなに昼食を急いでいた理由、実は今日ミリアが＜ミケの丘＞に連れて行ってくれることになっているのだ。サンライズに行くときは見ている暇がないので、今のうちに見ておこうということになったのだが……楽しみでしかたがない。

「何をにやや笑っておるのだ。気持ち分かるが怪しいぞ」

おっと、笑ってたか。それは確かに怪しいな。

「ごめんごめん、笑ってないでさっさと食べることにするよ」

ひととき大きなジャガイモを箸で掴むとご飯と一緒に掻きこんだ。

「お待たせ。もう準備はできた？」

昼食を食べ終わりフォンで連絡すると、ちょうど片づけが終わったところでミリアがやってきた。

「ばっちりですよ。今日はよろしくお願いしますね」

魔法のおかげで特に持ち物もいらない。こういうときに便利だなあ。

「今場所の確認をしてきたんだけど、なかなか良い場所だったわ。じゃあ早速だけど移動しましょうか。一緒に転移するために王女様とユウくんを手を繋いでもらえるかしら」

「う、うむ。そういうことならば仕方があるまい」

横を向いてこちらも見ずに手を差し出すアス。そんなアスの細く、柔らかい手を半ば包みこむように握る。軽く握り返してくるが、何を思ったのか急に手を離すと服で手を拭った。

「先ほど手を洗ったときの水がまだついていたみたいでな」

「そんなこと気にしないのに」

だから少し手が湿ってたのか、別にそれぐらいなんてことないのにね。しっかり拭けたようなのもう一度手を繋ぐ。

「うふふふふ、良いこと思いついちゃった」

露骨に不安を誘う発言の後、ビクビクしている俺にミリアが後ろから抱きつき手で目隠しをした。

「なっ……」

背中に感じる柔らかさ、首の後ろに当てられた頬の感触など想定外の感覚に思わず固まる。これは対シヨック体勢ではカバーしきれない。

これだけで考えれば幸運なのだろうが、アスと繋いだ手がSOSを叫び始めた。アスフェルさん、指を、潰さないでっ。

「じゃあ行くわよ」

分かっているだろうに、俺の状態はまったく無視してミリアが魔法を発動させた。あんまりだ。

エレベーターが止まる前のような浮遊感。一瞬のそれが消えると柔らかい草の上に足がついた。今まで聞こえなかった鳥の鳴き声が響き、部屋の中では感じないはずの流れる風が頬を撫でる。

「ここが＜ミケの丘＞よ」

そういつてミリアが目隠しを外すと、圧倒的な光景が俺の目に飛び込んできた。

「うわぁ……………」

それはどこまでも続いていく森。視線の先には山が見え、よほど遠くにあるのだろう、その向こうにも霞がかったように山々が見える。目下に広がる森もさまざまな表情を持ち、木々のない空き地が点在している。右を見れば信じられないほど大きな木が雄大な姿を示しており、左を見れば美しい湖が輝きながら広がっている。

「サイトウよ、いいかげん返事をせぬか！」

その光景に魂を奪われていると、ばしばしと背中を叩かれ呼び戻された。はっと振り返ると、腰に手を当てあきれたようなアスと口元を押さえて笑っているミリアがいた。

「夢中になるのは良いけどもう少し回りも気にしなきゃ駄目よ？」

王女様がさっきから何回も声をかけてたんだから」

「ごめん、今度から気を付ける。それにしてもそれにしても何これ！？
なんていうかもう……すごい景色だよ！」

日本にいた頃もちよくちよく旅行には行っていたのだが、もっと自然豊かなところに行っておけばよかったと心から思う。風景がここまで感動できるものだとは思ってもみなかった。

そんな俺の様子を見て、満足そうに腕を組むと得意満面でアスが言う。

「当たり前ではないか。この森は代々我が一族が守ってきた森なのだぞ」

この森を見れば、アスが王族ということにプライドを持っているのもよく分かる。もし俺がアスの立場だったら誇らしくて仕方がないだろう。

しかしこの森を見ていてふと思う。俺はこんな美しい森に人との交流を持ち込んでしまつて良いのだろうか？ 日本にいた頃、森林が伐採されているという話はよく聞いた。そのときは止めてほしいぐらいしか思わなかったが、今は違う。もしみんなの住んでいるこの森が壊されてしまったら、俺は……。

「どうしたのそんな顔して？」

「いや……この森に人との交流を持ち込んで良いのかって思って」

「そうねえ、ユウくんはどうしてサンライズが＜魔物の森＞の近くにあるか知っているかしら？」

話題に疑問を持ちながらもとりあえず首を振る。

「＜魔物の森＞では他の場所にはない珍しい植物や動物が手に入るの。そしてサンライズはそれを主な収入源の一つとしているのよ。魔物がいるから今はまだ極々浅いところにしか来ていないけれど、もしかしたら大規模化していくかもしれないわ」

「そんな、下手したら森が荒らされちゃうじゃないか」

「そう、だから取れる手段を一つでも増やすために人間との交流は遅かれ早かれ必要なのよ」

なるほど、人間との交流があれば成否は別にして条約を結んだり取引をしたりなど手段が増やせるということか。

そもそも考えてみれば俺は人間との架け橋になれるかも知れないが、それでできた交流をどう使うかは俺じゃなく王様たちが決めることだ。それに万が一何かを決めなくてはならないときは王様に相談すればいい。

「つまり俺は難しいことは考えず、人間と良い関係を作れるように努力すればいいってこと？」

ミリアは笑い、よくわかりましたといわんばかりに頷いた。

「なに、サイトウが無茶をしたところで父上が何とかしてくれるだろう。だから全力を尽くすがよい」

「ありがとうございます王女様」

そういつて一礼すると共に、いつも無茶振りをされているであろう王様の苦勞を偲んだ。

ニャオー。

その後どこまで移動可能か確かめながら風景を楽しんでいると、森のほうからそんな鳴き声が聞こえてきた。

声のするほうを見てみると真っ白な猫がいた。ただし、でかい。目の高さが俺と同じぐらいというビックサイズの猫だ。

ニャツ。

俺に向かって鳴いてくるが固まってしまつて動けない。キリキリと首だけ動かしてミリアたちに助けを求める。

「その子がくミケ>っていう魔物よ。危なくないからちゃんと挨拶を返してあげて」

なんという無茶振り。しかし猫様も不審そうにこちらを見ているから挨拶は返さねばなるまい。

「にやっ?」

もうすこし猫の鳴きまねを練習しておくんだったと後悔しながらも全力で鳴きまねをする。なかなか良い感じにできたんじゃないか

な？ 猫様も満足そうに一鳴きする。
どんなもんだとばかりにミリアたちのほうを向くと、二人とも蹲って震えていた。

「まさか猫語を使うとは。すまん、しばらく時間をくれ」

「完璧な鳴きまねだと思うわ」

あいつら笑いをこらえていやがった。

二人はしばらくすると立ち上がり、眉間にしわを寄せながらこちらに歩いてくると、そのまま猫様のほうを向き挨拶をした。二人とも普通の言葉で。

「いや、猫語を操るとは思ってもよらんかった。普通に挨拶すればよいと前もって言うておけばよかったな」

申し訳なさそうに言うてくるが口の端がヒクヒクしてるんだよねちくしょうめ。

「でもおかげでその子もユウくんの事気に入ったみたいよ」

完璧な慈母の笑みを浮かべるミリアのいう通り、先ほどの猫様は俺に懐いてくれたのか背中に顔をすり寄せてくる。

「危なくないんですね？」

「危害を加えない限りは大丈夫よ。ちょっとかまってあげたら？」

ごくりとのを鳴らし猫様のほうを振り向く。曇りのない瞳に怯えながらも言ってみる。

「お座り」

ニヤッ。

ポスンと腰を下ろす。

「伏せ」

ニヤッ。

ペタンと伏せる。

「お手」

ニヤッ。

出した手を無視して俺の頭に手を載せる。

……………なにこれかわいい。

「おお、いくら人懐っこいとはいえここまで懐いているのは始めてみるな」

頭に手が載ったまま感動している俺にアスが驚きの声を上げる。さすがのミリアもびっくりしているようだ。

「よっぽど相性がいいのかしらねえ。ミケはだいたいこの辺りにいるし、せっかくだから名前付けてあげたらどうかしら？」

「もちろんタマで」

迷うことなく即答。犬はポチ、猫はタマと決まっていますですよ。

「よしこれからお前はタマだ。よろしくなー」

顔を抱いて撫でてやると気持ちよさそうにのどを鳴らした。当然この名前に異論があろうはずもない。

そのまま皆で戯れていたのだが、楽しい時間はすぐに過ぎていくもの。あっという間に暗くなってきて帰らねばいけない時間になった。

「じゃあねー。また来るからねー」

ニャオーン。

ミリアと繋いでいないほうの手を大きく振る。それに応えるタマの鳴き声もなんだか少し悲しそうな気がした。

一通り別れを惜しんだところで魔法が発動し、浮遊感と共に店に戻る。

こうして有意義なくミケの丘へ訪問は終わりを告げた。

今度からあそこをくタマの丘と呼ぼうと思った。

友 ~ 出会いと別れ ~ (後書き)

※よろしければ評価・感想・ご意見などお願いします。していただく
けると白かぼちゃが喜びます。

感謝を込めて楽しみます。

「ありがとうございましたー」

扉までお客さんの見送りに出て頭を下げる。少し長めに下げている頭を上げ、振り返ってみてがもう店内にお客さんはいない。

「これで一区切り、だな」

隣にいるアスが笑って呟く。俺も笑って頷き、二人で店内を見渡した。見えるのは普段と何一つ変わらない店内。それがなぜこんなに特別に見えるのだろう。

「慣れてきたところだっていうのに俺の都合で振り回しちゃってごめんね」

思えば俺のアスに対する迷惑のかけ方はかなりのものだと思う。店を始めて手伝ってもらっただけでは飽き足らず、サンライズにまでついてきてもらうことになっている。不満が無いほうが不思議だ。

「まあ振り回しておるというのに間違いはない。だがそう気にせずともよいぞ」

しかしアスは問題ないとかばかりに腕を組み、胸を張った。

「サイトウは我が手伝ってやらねば何もできんからな。困っているものを助けるのも王族の務め、仕方がなからう」

堂々と言い放つ。

「いやいや、それは言い過ぎじゃないかな？ 俺だって頑張れば一人でできるんだよ」

さすがにその発言は受け入れられない。年下の女の子に手伝ってもらわなければ何もできないなんて、駄目人間にしても度が過ぎている。

「うむ、そうかそうか。一人で頑張っていたといえは開店初日だったか？」

「うう、初日も助けてもらった記憶があるけど……」

まずい、何か思い出さなくては。始め森に来て、アスたちに援助してもらって、店も初日から手伝ってもらって——あれ？

「いや、その、本気出す機会がなかったって言うか、星のめぐりが悪かったって言うか……もう駄目だ」

「ふはははは、我を崇め、敬い、奉るのだー！」

くそう、崇めたくない、敬いたくない、奉りたくない。でも反論できる材料が見当たらないっ。

「……アス大明神様、昼食の支度はすべて私めにお任せください」

「うむ」

萎れた俺に対し、アスは鷹揚に頷いた。

「それで今日の食事は全員来るのだな？」

結局準備を手伝ってくれたアスが、蕎麦をすすりながら訊ねてきた。

「うん、誰からも連絡が無いしみんなきてくれると思うよ」

今日はお世話になった人達に感謝の意を込め、食事を開くことになっている。せっかくなので盛大にやろうと朝のうちから下ごしらえをして、ジルさんやグランさんにお酒も頼みである。昼は蕎麦でセーブしておくのも当然と言えよう。

「楽しみだな。料理の方は期待しているのだろうか？」

「もちろん。朝のうちにメインの豆腐のステーキとこんにゃくの刺身、下ごしらえ済ましといたからね」

「……その、なんだ、その料理が嫌いというわけではないのだぞ？
だがもっと動物性というか、血と肉になりそうなものが食べたい
なー、なんて思ったり……」

斜め下を向き、微妙そうな顔でチラチラとこちらを見てくる。

「ははっ、冗談だよ。そもそもその二つに下ごしらえといった時点で気付こうよ」

それを聞き、アスは一瞬固まった後壮絶な笑みを浮かべた。ゆら

りと立ち上がり、ゆらゆら歩いてくる姿がやけに怖い。逃げようと試みるが足がいうことを聞かず、アスが近づいてくるのを見ていることしかできない。――ああ、これがヘビに睨まれたカエルというやつか。

「ふふふ、つまりこの口をどうにかすれば世界は平和になるのだなっ！」

「ひたい、ひたい」

あんまり伸びないから面白くも無いだろうに、俺の頬をつねり上げるアス。肩をぺしぺし叩いてギブアップを表明するが受け入れてもらえない。

「まったく、これに懲りたらそういう悪質な冗談はいうでないぞ」

つねられた頬がじんじん痛み、やめろやめろと語りかける。しかし俺は止まれない。現代に生まれた者として暴力に屈するわけにはいかないんだ。覚悟を決め、背筋を伸ばし断言する。

「俺が死んでも自由は死せずっ」

やり遂げた満足感が俺を包むがそれも束の間、再びアスがゆらりと立ち上がった。まずい、このままではまたやられる。

「昼食も食べ終わったことだしそろそろ片付けよっか」

言い終わる前に皿を持って厨房へ退避。ここならば攻撃はできない。

アスもそれを見て「逃したか」と呟き、自分の皿を持ってこちらに

歩いて来た。

「まったく、後片付けこそは自分だけでやりたいとはいいい心がけだな」

「……自分でもそう思うよ」

自業自得のような気がしないでもないのでおとなしく引き受けておく。やはりこの世界でもからかうのに犠牲はつきものということか。それでもやめる気にならない俺は業が深いのだろう。

「じゃあ今のうちにお使いにいつてもらっていいかな？」

「構わぬが……何を買ってくるのだ？」

「ビックベアーの干し肉を（3，000）分ぐらいお願い」

グランさんお勧めのおつまみを頼む。今日持ってきてくれるはずの酒に合うらしく、一度一緒に食べてみたかったのだ。

「うむ、任せておけ。しっかり留守番しているのだぞ」

「アスこそ道草食わずに帰ってくるんだよ」

口の減らないアスに憎まれ口で応じる。それを聞くとアスは「当然だろう」と鼻を鳴らし出て行った。

「じゃあ俺も黙々と準備をしますか」

「よし、これでいいかな」

思ったより店が遠かったのか、アスが帰ってくる前にあらかた今すべきことが終わってしまった。もともと店がどこにあるかといったことも知らないのだから予測のしようもないのだが。

「特に何も言っていなかったから、もうそろそろ帰ってくるとおもっただけだなあ」

まさか迷子になったんじゃないかと考えるが、森の王女様が森で迷子はないだろうと思いき直す。まあ気長に待てばいいか。

「サイトウ、今帰ったぞ！」

噂をすれば何とやらだ。おかえりと言おうとした時、アスの後ろにもう一つ人影が見えた。

「サイトウさん、お久しぶりです！」

「モール、久しぶりー。今までなにしてたのさ」

そこにいたのはしばらく休みをとっていたモールだった。なにがあったのか知らないが、ソースを持ち帰った時ぐらいにここにこしているのが微妙に気になる。

「それなんですけどね、これ見てくださいよ！」

じゃん！ と効果音が聞こえてきそうな勢いで差し出したのは布

を被せた大きな目のかご。そこから漂ってくるこの匂いは――

「リンゴ？」

布をとってみるとそこにあっただのは山盛りのリンゴ。赤々とした大粒の実で、もって見るとずっしり重い。

「あれ、俺ってこんなにリンゴ出したっけ？」

そう聞くとモールはイタズラが成功したような笑顔を見せた。

「実はこれ、サイトウさんのリンゴからできたリンゴなんですよ！サンライズに行く前に何とか成功させようと思って、今まで親分と一緒にいろいろ試してたんですよ。いいできだと思いませんか？」

しばらくあっけに取られていたが、徐々に頭に浸透してくるとどうしようもなく顔がにやけてくる。だって仕方ないじゃないか、こんなことされて無表情でいられるやつなんているものか。

「……なんか嬉しすぎて言葉も出ないよ。でもどうやったらできたの？」

「よくわかんないんですけど、この森にあったリンゴの傍に植えておいたらできたんですよ。これでサイトウさんが出さなくてもおいしいリンゴができますよ！」

同じ種類のリンゴ同士では受粉できなかったということだろうか？ はっきりした理由は分からないが実際にできたのだ、よしとしよう。

「今日の食事会でさっそくみんなに食べてもらおうよ。フリーズボックスで冷やしとくね」

モールからかごを受け取り厨房へ運ぶ。抱えたかごから漂う爽やかな香りに頬を緩ませながら、今日食べるであろう分だけフリーズボックスの中にしまっておく。

「そろそろ準備始めるからモールは椅子に座ってゆっくりしてて」

「何言ってるんですか。俺もこの店の一員なんですから手伝いますよ」

モールが自分の胸をどんと叩き、隣でアスもうむうむと頷いている。

「ありがと、じゃあモールは厨房で料理の手伝いをお願い。アスはテーブルのセッティングね」

三人が精力的に取り組むことでみるみる準備が進んでいく。一人で黙々とやるよりも、アスと二人でやるよりも。

テーブルのセッティングも終わり後は待つだけとなったとき、タイミングよく扉が開いた。

「本日もエバンス商会をご利用いただきありがとうございます、つてね。ほら、酒をたっぷり持ってきたよ！」

いくつも小さな樽を抱えて、ジルさんとミリアが入ってきた。

「こんにちは、今日はご馳走になるわ」

「どうぞどうぞ、がんがん食べちゃってね」

二人から樽を預かり手近な椅子に座ってもらう。樽がそれなりに重かったようで、ジルさんは腕を曲げたり伸ばしたりしている。女の人としては体格のいいはずのジルさんがそんな状態だというのに、細いはずのミリアは平然としているのはなぜだろう。獣人だからか、はたまたミリアだからか。個人的には後者だと思うが。

その瞬間、悪寒が駆け抜ける。とっさに頭を抱えると手に木の実が当たった。

「えっとミリア、どうしたの？」

「ごめんなさいね、久しぶりに木の実をぶつけておいたほうがいい気がしたの」

「ははっ、勘弁してよ」

笑いながら茶化すような反応をするものの内心は冷や汗だらだら。以前アスがミリアは何個魔法が使えるか分からないといっていたけど、絶対に読心系の魔法が使えると思う。いや、ほんとに。

「ミリアもこれを食べて落ち着くがよい」

フォローなのかはよく分からないが、先ほどのリングゴをアスが勧める。俺も食べてみたのだが、魔法で出したリングゴとはまた違った味わいでなかなかおいしかった。それは膨らんだアスの頬も証明している。

「このリングもユウ君がだしたの？ 前のリングとは違った味だけ
どおいしいわ」

「いや、これはモールが栽培したものだ」

「すごいじゃないか、こんなリングができるんだねえ」

ミリアとジルさんにも好評のようだ。「やったじゃん」とモール
をこづくと、恥ずかしそうに笑う。正当な評価なのだから恥ずかし
がらなくてもいいというのに。

その後も徐々にメンバーが集まり、最後にグランさんがやってき
た。

「おうサイトウ、こいつのリングは大したもんだっただろ？」

「ほんとに大したものでしたよ。びっくりしてしばらく唾然としち
やいましたよ」

グランさんは「ぜひ見たかったな！」といって笑い、みんなのい
るテーブルについた。

みんなが席に着き、飲み物を持ったのを確認すると前のほうにの
このこと出て行く。

「皆さん、わざわざ集まっていたいただきありがとうございます。感謝
の言葉は山ほどありますが……とりあえず！ 今日俺を破産させ
るつもりで飲み食いしちゃってください！ 乾杯！」

『かんぱーい！』

みんなで勢いよくコップを突き出し中身がはねる。

飲み、食い、騒ぎ、ふざけあう。日本でもほとんどいなかったんじゃないかと思えるぐらい親密な友人たちと心ゆくまで楽しんだ。

そんな暖かな一ページ。生涯忘れることはないんじゃないかと思う。

実は気軽に戻ってこれるっていう……。 (前書き)

うあああああ、忙しいしうまく書けないしこれなんて二重苦なんですよ？

実は気軽に戻ってこれるっていう……。

食事会の翌日、いつもより少し遅めに目が覚めた。

こちらの世界に来てからというもののほぼ毎日、早寝早起きの健康優良児を貫いていたため久々の夜更かしが響いたのだろう。

未だにくつつこうとしている臉をこすりこすり顔を洗いに行く。

顔を洗ってなお俺を布団に誘う眠気には感心するが、昼前にはミツクさんとモールが来るので素直に従ってやるわけにはいかない。

かごからリングゴを一つ取ると外に出て深呼吸一つ、その場でリングゴをかじり始める。——うん、やっぱりおいしい。

しばらくシャクシャクとリングゴをかじっていたが……一つ丸ごとは多かった。室内に戻り、残った分をフリーズボックスの中に入れておく。気分で丸かじりしないで最初から切っておくべきだったなあ。

微妙な反省を残した朝食を終えようとやることが無くなってしまった。移動のための休業ということで、今日明日と店を休みにしてあるので仕込みをする必要もない。仕方がないので以前暇なときに作っておいた紙製のオセロを取り出す。手作りなので粗末なものだが、アスと一緒に楽しめることもありなかなか優秀だ。

ペタン、クルツ、ペタン……………

「……よし、白が四つ角を取ったぞ」

一人オセロという荒業をこなしていたが気分がだんだんと寂しくなってきた。駄目だ、このまましていると人間として大切な何かを失ってしまう気がする。

「サイトウよ、来てやったぞって……なにをしておるのだ？」

来た、救いの女神よ。

「おはよう、見ての通りオセロだよ」

「いや、それは分かるのだが……それは二人でやるものと教わった気がするのだが？」

アスは不思議そうに、至極まっとうな質問をしてくる。

「うん、そう教えた記憶があるね」

「一人でやって楽しいのか？」

「楽しそうに見える？」

それを聞くとアスは聖母とか、その辺のレベルの笑みを浮かべた。極悪人すら救われそうな笑みなのになぜか今の俺にはそれが痛い。

「サイトウ、遅くなって悪かったな、退屈だったであろう。我が相手をしてやるからな」

真摯な言葉が胸に刺さる。優しさは時に凶器になりえると知ったある日の朝。

そんなこんなで時間を潰しているとモール、続いてミックさんがやってきた。さすがにオセロをしながらではまずいと思い、うーうー唸っているアスを放置して挨拶に行く。

「こーするとあーなって、あーするところになって……うぬー！」

ミックさんを出迎えていると後ろからそんな声が聞こえてきた。その盤面はすでに詰んでいるのさっ。

「じゃあアスは無視してさっそく始めてもらってもいいですか」

「はい、お任せください」

意外に苛烈なミックさんのスルーに驚きつつもくると振りかえると、へたりと倒れているアスを慰めていたモールにも声をかける。

「任せてください！」

モールの元気な返事を聞き、にこりと頷くと再びアスの前に座る。アスも少しは回復してきたのか、「もう一回勝負だ」とせっついてきた。

「料理が運ばれてきたら終わりだからね」

「もちろんだ！」

厨房から聞こえてくる調理の音をBGMにオセロを始める。今度は先ほどとは違い白熱した戦いになった。

「ふはははは！ この角はもらったー！」

「なんの。その隅一列はすべて埋めさせてもらうよ」

一進一退の攻防が続く。そして……

「お待たせしましたー」

お約束のように料理が届いた。

「このタイミング、どう思いますアスさん？」

「いやー、さすがにないであろう」

「え、え！？ なにかまずかったですか？」

「冗談冗談。ありがとねモール」

おろおろと困惑するモールに謝りオセロをどかし、料理を受け取る。受け取った皿に乗っているのはこの店一番の人気商品であるハンバーグ。湯気を出す表面からは押さえきれないとばかりに肉汁が溢れてくる。なんと食欲を刺激する光景だろうか。

「いただきます」

程よい硬さに焼きあがったハンバーグをナイフとフォークで切り分け、口に運ぶ。

……やばい、うめえ。

味付けは同じながらも、焼き方などの差から明らかに俺の作った

ものよりうまい。多少悔しい気がしないでもないが、それはそれ、これはこれ。今は素直に楽しむことにしよう。

「いかかですか」

一心不乱に貪っていると横から穏やかな声が聞こえてきた。

「明らかに俺よりうまいじゃないですか。これなら文句なしですよ」

「それはよかった。長年料理を嗜んできた者として、基本的な調理については若い方に負けてられませんからな」

少しばかり得意そうな顔をして笑みをこぼすミックさん。

「あのー、結果が出たなら俺も食べていいですか？　もう腹ペコで……」

ただでさえ空腹な上、食欲をそそる匂いにやられたのだろう。了解の意を示すと脱兎のごときスピードで厨房に走っていった。二重の意味でミックさんをさしおいて。

「それじゃあご苦勞様でした。明後日からはよろしくお願いしますね」

「お任せください、それでは失礼します」

優雅に一礼して去っていくミックさん。最終リハーサルのため

だったが、調理、配膳、片付けすべての点で問題なさそうだ。これで安心して任せられる。

「じゃあ二人もお疲れ様。今日はもうやることなくっちゃったけどどうする？」

「俺はリンゴの世話とかがあるんで失礼します。明日は見送りに来ますからね！」

そういつてモールはぶんぶん手を振りながら出て行った。

「アスはどうするの？」

「我は特にすることがないからな。サイトウの相手をしてやろうではないか」

無駄に偉そうな態度に突っ込んでやりたいものの、朝の様子を見られている以上手痛いカウンターが飛んでくるのは目に見えている。喉元まで出掛かっている言葉を飲み込みスルーに徹する。

「やれやれ、手のかかる者の監視役になってしまったものだ」

「アスに言われたくないっ」

我慢を意識していたはずなのに、気がついたら突っ込んでいた。まあ年下にこんなことを言われてしまったては反射的に言い返してしまうのも無理なからぬことだろう。その後もくだらない言い争いを続けたりして時間を潰した。

そして次の日。

アスがやってきてしばらくするとミリアとジルさんがやってきた。

「ちょっと渡したい物もあったからこっちに来ちゃったよ」

そういうとジルさんは判の押された書類のようなものを渡してくれた。なんだか重要そうな感じはするのだが如何せん字が読めない。これはエバンス商会で働くにあたり本格的に字の勉強をする必要がありそうだ。

「これは？」

「それはジルⅡエバンスがユウⅡサイトウに土地を売り渡したっていう契約書さ。あんたの制約は聞いたけど、どうすれば所有したことになるか分からなかったからね。万が一を考えて作らせてもらったのさ。一応対価のところに勤労としたから、条件を確認したらサインしといてよ」

どうしようもないのでアスに渡して読んでもらう。確認後「問題ないぞ」と教えてくれたが、なけなしのプライドがダメージを受ける。うう、尊厳のためにも字の勉強をしなければ……。心の痛みに耐えながらもサインをしてジルさんに渡す。

「はいよ……確かに。ところで気になってたんだけど、アスちゃんも来るのかい？」

「そのつもりなんですけど……まずかったですか？」

「いやあたしとしては問題ないんだけどね……少々嫌な目にあうかもしれないよ？」

「無論覚悟の上だ。気遣い感謝するぞ」

腕を組み、不敵な笑みで言い放つ。

「くくっ、あんたいい女になるよ。そういうことなら問題ないけど、無駄にトラブル持ち込まないためにも耳と尻尾を隠すものは持つてくんだよ」

「むう、生憎そのようなもの持つておらんぞ」

そんなときこそ俺の出番でしょう。

魔法発動――

広げた手のひらに現れたのは真っ白なベレー帽。どこぞの芸術家が被っていきそうなタイプではなく、頭をすっぽりと覆うことができる。そんな大きな目のものだ。

「はぁ、やっぱり便利な魔法だねえ」

「アスに選んでももらえればもっと便利なんですけどね」

以前試したのだがどうやら魔法で現れる画面を見ることができないのは俺だけらしい。食料品や生活用品を出すだけならまるで問題はないのだが、服などを出すときには少々不自由を感じる。

「というわけで、俺のセンスで申し訳ないんだけどこれで我慢してくれないかな？」

おずおずと帽子を渡すとアスは両手でそれを受け取り訊ねてきた。

「これはサイトウが真剣に選んだのだな？」

「うん、まあ」

「我に似合うと思ったのだな？」

「う、うん」

「ならよい」

そういつてアスは帽子をきゅっと抱きしめた。そして両端を引っ張るようにして帽子を被ると二カツと笑いかけてきた。

「似合うか？」

「あー、そのつもりで選んだからね」

「はいはい、二人の世界を作るのは結構けどもうそろそろ出発してもいいかい？」

横からかかった声ではっと振り向くと生暖かい目をしたミリアとジルさんが立っていた。事実言い訳できない状況だったため気恥ずかしい。アスも帽子を顔まで下ろして赤くなっている。

「もう準備はいいかしら」

そういつてなぜか扉を開けるミリア。そして扉の向こうには王様、后様、グランさんにミックさんにモールといったこの森でお世話になった人達が勢ぞろいしていた。

口々に見送りの言葉をくれる人達。俺は「いつてきます」といつて頭を下げることにしかできなかった。ふいに目頭が熱くなつてきて瞼を強く閉じる。

「じゃあいくわよ」

ミリアは俺の肩に手を置くと魔法を発動した。光る円の中に俺たち四人を入れて光が舞い上がる。

こうして俺は第二の故郷たる森を離れた。

ただ「タマの丘」に着いた後、一週間後に帰ってくことを思い出し微妙に恥ずかしくなったのは内緒だ。

実は気軽に戻ってこれるっていう……。 (後書き)

ようよう森から抜け出しました。のろのろして申し訳ない。
次話からはサンライズ編に入ります。

※よろしければ評価・感想・ご意見などお願いします。していただく
けると白かぼちゃが喜びます。

筋肉と料理の腕は比例するっ。　　かなあ？

商業都市サンライズ

サンライズについて俺が知っていることは少ない。せいぜい商業都市であり、エバンス商会の本拠地であるということぐらいだ。しかし、だからこそとても楽しみなのだ。一体なにがあるのだろうか、一体どんな人がいるのだろうか――

そんな期待を胸に目を開けると、そこは民家の中だった。こじんまりとしたタンス、きれいに整えられたベット。窓から見るにおそらく二階だろうか？

「サイトウ、アスちゃん」

名前を呼ばれそちらを向くと、腕を組みにんまり笑ったジルさんがこちらを見ていた。

「商業都市サンライズ、エバンス商会副代表、ジルⅡエバンス」

ジルさんは窓に向かってつかつかと歩いていく。

「二人の来訪を歓迎するよ！」

バン！　と勢いよく窓が開き、街の空気が、雑踏の賑わいが飛び込んでくる。

考える間もなく、光に群がる虫のように窓に向かいそして――

「だっ！　…………うおおお」

顔から制約の壁にぶつかった。

「……………」

「……………」

「……………」

「ミリア……頼んでいいかい？」

「任せて」

目に涙をためてうずくまっていると再び転移の浮遊感。何事かと思っ
て顔を上げると、そこは屋根の上だった。そして聞こえる咳払い一つ。

「二人の来訪を歓迎するよ！」

……ちょっと待ってもらっていいですか？

「悪かったね。この家って道に面してるからそうなることを予想し
とくべきだったよ」

「普通そんなところまで気が回りませんって。気にしないでくださ
いよ」

申し訳なさそうに頭をかくジルさんに、気にしていないと笑いかける。まだ納得していない様子だったが本人が問題ないといっているのだ、これで終わりということにさせてもらおう。

さて改めてサンライズの風景に目を向けると、そこには久しぶりに見る『人の町』が広がっていた。眼下の道にはたくさんの人が闊歩し、道の両端に立てられている屋台で行われている商売が独特の熱気を作り出している。いたるところに人工物が溢れ、自然物なんて門の外にしかないのではないだろうか。

「人だ、人がこんなにおるぞ！」

「サンライズはそれなりの大きさの都市だからね。でも王都のほうにはもっと人がいる都市がいくつもあるんだよ」

そんなジルさんの解説を、聞いているのかいないのか、「おー」と眼下の光景に釘付けになっているアス。そういえば人と会ったのは俺が初めてとか言ってたっけ。それならこの光景に目を奪われるのも仕方ないのかも知れない。

「で、だ。せっかくだから簡単に、サンライズの地理について説明しておくよ」

「はい、先生」

無駄に笑顔で手を上げながら返事をする。それを見て、アスも遅れて手を上げる。

「ふふっ、いい返事だ。じゃあ説明するよ。まず左手に見えるのがあんたたちのいたく魔物の森さ。それとは逆側、つまり右手のほ

うが王都だったりがある方向になるね」

説明をしながらその方角に向かって指をさす。

「それで後ろに見える山が＜サンライズ鉱山＞、それで正面のほうに見えるひとときわ大きな建物が市長の邸宅だよ」

そういつてジルさんが指差す邸宅は、ここからでも分かるほど豪華な造りになっていて明らかに周りの建物から浮いているように感じる。

「あれ、貴族みたいな人でも住んでるんですか？」

「うーん、そういえばそうなんだけどね……まあそれはおいおい説明するよ。この場で説明しなきゃいけないことはこれぐらいかねえ？
下に人を待たせてるからそろそろ降りてくよ」

「って人待たせてるなら早く降りないと駄目じゃないですか」

「ああ、そのことなら気にしないでいいよ。前もってこうなることは言っているしあいつらのことだ、適当に何かして時間つぶしてるさ」

いつもは細かいところにまで気をつけているはずのジルさんにしては珍しい発言だ。よほど親しい関係なのだろうか？

いきなり現れては驚かせてしまうというミリアの提案で一度二階へ、その後階段で一階に下りていった。ここに来る際まず二階にやってきたのもそういう理由らしい。俺のところに来た時のことを思い出しミリアを見ると、「親しい相手なら問題ないわ」と嬉しい

のか嬉しくないのか微妙な一言をいただいた。

そうして階段を下りていくと、スパゲッティを食べる大男と分厚い本読む女の子がいた。

「待たせたね、話してた通りこっちの子が新しくうちの従業員になる子だよ！」

そのセリフとともにばしんと叩かれた背中 of 痛みに耐えながら、とりあえず笑って挨拶をしておく。

そしてそれに真っ先に反応したのは女の子のほうだった。今まで読んでいた分厚い本をしおりも挟まず閉じると、椅子を倒すんじゃないかという勢いで立ち上がりこちらに歩いてきた。

「ミラⅡセフィラスという。よろしく」

非常に簡潔な自己紹介とともに手を伸ばしてくるのは高校生ぐらいであろう女の子。大きな魔女っぽい帽子をかぶり、その下に見える無表情の顔からは少々暗そうな印象を受ける。しかしその中に不釣り合いなほど光輝く瞳があり、それはこちらを見つめていた。

「ええっと、こちらこそよろしくね」

「へえ、ミラが初対面の人にこんなに興味を示すところなんて初めてみたよ。とりあえず立ち話もなんだし座らないかい？」

じっと見つめられ戸惑う俺を助けるように、茶化した様子でそう提案するジルさん。ミラ……さんも納得したようでテーブルのほうに戻っていく。

それにしてもなんで俺はミラさんに睨まれたのだろう。もちろん

初対面だから失礼なことをするタイミングもないし……まあ聞いてみればいいか。

「ところでこの男は一体何なのだ？」

全員が椅子に座ったところでアスがそう切り出す。彼はミラさんと挨拶しているときも、みんなが椅子に座ろうとしているときも、視線こそちらを向いていたがずっとスパゲッティをたべていたのだ。気にするなというほうが無理だろう。

「あー、こいつはねえ……」

「悪いな……モグ……俺は……モグ……」

「『ごめんなさい、僕はザックⅡラグといいます』と言ってる」

ミラさん、さすがにその口調は無理が……

「ミラ……モグ……そんなこと……言って……」

「『ミラちゃん』……きもい。『ミラ、代弁してくれてありがとう』と言ってる」

「あー、もう！ ミラはふざけた翻訳をしない！ ザックは食べるか喋るかどっちかにしな！」

「わかった」

「……モグモグ」

ついにジルさんの雷が落ち、事態は収束した。俺なんか余波だけでびくっとしてしまったというのに、二人はいたって慣れた様子だ。ザックさんにいたっては、食べ続けるというありえない選択すらしてしまっている。

「……はあ、とりあえずサイトウとアスちゃんから自己紹介してもらっていいかい？ この二人は信頼できるけど、あんたたちのことはほとんど話してないから……そのつもりでね」

少し含みを持った言葉を聞き考える、つまり彼らは俺の魔法や今まで住んでいた場所、アスの種族を知らないという訳だ。はてさて、どうしたものだろう？

俺のサンライズでの目標は人間と獣人の関係をよくすること、土地購入のためにお金を稼ぐこと、ジルさんの役に立つこと、だ。

すべての目標達成に必要なため魔法のことについて話すのは確定なのだが、住んでいた場所については少し迷う。ミリアを見ても特に反応がないところを見ると、獣人に対する固定観念は持っていないようだが……アスに対しても同じ反応とは限らない。

一つ目の目標達成のためには住んでいた場所を話すのは必須なのだが、それを言えば高確率でアスの種族が疑われてしまうだろう。それでアスに不利益があるようだ……。

だめだ、考えがまとまらない。

半ば助けを求めるように視線を向けると、こちらを見ていたアスと目が合った。アスはニヤリと笑うと言。

「我は自分の生まれを恥じたことなど一度もない」

その一言で覚悟が決まる。どうせ隠し事などうまくないのだ。

「始めまして。＜魔物の森＞から来ました人間、ユウ＝サイトウと申します。このたびはエバンス商会の従業員にしてくださいだきサンライズにやってきました。一応創造系の魔法を使えます。えっと……よろしく願います」

「我は＜魔物の森＞の王女、アスフェルという。今回はサイトウの監視という形でサンライズに来た。よろしく頼むぞ」

そう言つてアスはかぶっていた帽子を脱ぐ。そこには威風堂々と、獣人の証たる耳がピンと立っていた。

二人とも俺たちを見て驚いたように目を見開いた。それでもザックさんはスパゲッティを食べ続け、食べ終わったところでジルさんに向けてこう言った。

「おまえ、こんな面白そうな奴らどうやって引っ掛けてきたんだ？」

……えっ？

「あたしが引っ掛けたのはサイトウだけで、アスちゃんもサイトウについてきたのさ。引っ掛け方は……成り行きかねえ？」

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ。他に言うべきことがあるんじゃないですか？」

「魔法は見せてほしい」

ミラさんの平坦な声音が滑り込む。

「ミラさんもそうじゃなくて」

「ミラでいい」

駄目だ、話がかみ合わない。

「お前が言いたいのは獣人うんぬんのことだろ？ 俺らはミリアを知っているから偏見はない、さらに……俺は獣人だろうが怖くねえ！」

そう言っただでさえすさまじい、極太ワイヤーを束ねたような筋肉をさらに隆起させる。まるで獣人だろうが負けはしないと主張するように。

「種族の違いで排除するならザツクのほうが先。これのが人から遠い」

……ミラは堂々と問題発言ぶちかましてるし。

「うむ！ 気持ちのよい者たちではないか」

「あたしが信頼してるんだ、当然じゃないか」

「ふふふ、二人とも相変わらずね」

なにこれ、順応できてないのって俺だけなの？ 正真正銘、常識を知らない奴だけが常識に縛られているという現実。一体なんの皮肉なんだか。

……まあいっか、いい人に巡り合えたってことで。

「あ、はい、もう納得しました」

「よし、なら次は俺の番だな。俺はザックⅡラグ、ここサンライズで<闘魂亭>っていう店を経営してる料理人だ」

あれ、おかしいな。アスと二人、顔を見合わせもう一度確認する。

「すいません、店の名前はいいんです、職業だけもう一度いってもらっていいですか？」

「料理人だが？」

.....。

「あなた達の『コロシラムに帰れ』だとか『丸焼き生食いは料理じゃない』という気持ちはよく分かる」

「ところがどっこい、こいつは結構な料理人でね。その上『料理はできたてのうちに食べなくてはいけない』っていう信条まで持つ料理バカときたもんだ」

「つたりまえだ。できる限り最高の状態で食べることが、食材に対するせめてもの礼儀だろうが」

なるほど、だから挨拶もそこそこスパゲティを食べていたのか。どうやらザックさんは戦士どころか想像以上に料理人らしい。今度何か食材をプレゼントしよう、きっと大切に使うってくれるはずだ。

「じゃあもう一度ミラも自己紹介してくれるかい？」

「ミラⅡセフィラスという。魔具士をしている。よろしく」

相変わらず簡潔な自己紹介が返ってきた。

しかし、ミラⅡセフィラス……どこかで聞いたことがあるような……。

「もしかして店で使ってたフリーズボックス作ってくれた人ですか？」

「そうさ、よく覚えてたね。

ミラ、この前作ってもらったフリーズボックスはこの子たちの注文さ」

再びこちらをじっと見つめてくるミラ。感情の変化が乏しいのか無表情ながらも、しっかりと力を持つ瞳に見つめられるとなんか、ひるむ。

「しっかり動いてる？」

「うん、使っててまったく不自由しなかったよ」

「そう」

満足したのか満足してないのかよく分からない返事が返ってきた。自分の作ったものの確認をしてきた以上、仕事に対して熱心でありいい子なのだろう。少々会話について違和感を感じないでもないが十分許容範囲内だ。

「じゃあ自己紹介も終わったことだし、次はサイトウの今後について話をしようかね」

筋肉と料理の腕は比例するっ。 かなあ？ (後書き)

新キャラ二匹追加です。

それにしても名前考えるのってほんと難しいですね。

従業員がひきこもりってどうなんでしょう？

「俺の今後について、ですか……よろしく願いします」

「なに暗くなってるんだい。あんたの魔法をどうしたら有効に使うことができるか考えようって話じゃないか」

笑いかけてくれるジルさんに対して曖昧に頷くことしかできない。何せ俺は普通の従業員ができるような仕事をするのができないのだ。

店番を頼まれても店に行くことができず、配達や荷物の運搬なんて考えるまでもない。ならば事務仕事ができるかと言われれば、現段階では数字はともかく字が入ればもうお手上げというだめっぷり。魔法以外でまったく役に立ちやしない。

そんなことを考えていると背中に息が詰まるほどの衝撃が響く。

「なにを考えてるか知らないけどね、あたしはあんたの良いところも悪いところも考えたうえで雇ってるんだ。ごちゃごちゃ考えてないでできることに全力を尽くしな」

……なんてこったい、俺の悩みがごちゃごちゃで片付けられてしまったよ。

まあ今はどうしようもないことなんだからその通りかも知れないけど。

「了解です。ミラとザックさんはそのために呼んだんですね」

「その通りさ、だからまず魔法の説明から頼むよ」

途端照射されたミラとザックさんの熱い視線を身に受ける。もしかして創造系の魔法といったから期待しているのだろうか？ 森で検証してもせいぜい料理の材料を出すぐらいしか有効な使い道が思いつかなかただけにあまり期待されても少し困るのだが。

「えっと、あんまり期待しないでくださいね？ 俺の魔法は生活創造^{はん}っていう創造系の魔法です。生活用品や食料を出せる魔法なんです。費用として皆さんが妥当と思うぐらいのお金が必要なんで微妙な使い勝手ですよ」

「それは本当!？」

「それは本当か!？」

あれ、おかしいな。俺のなけなしの表現力を使って微妙な魔法ということのアピールしたはずなのに、二人からの食いつきが半端じゃない。

「あー、あんたたちそんなに期待してもたぶん無駄だと思うよ」

「二人ともなにを期待してるんですか？」

「とりあえずあんたの魔法で<マナ>っていう霊草を出してくれないかい？」

何も分らないがとりあえず言われるままに魔法を発動する。

「マナ、マナっと……ないみたいです」

そう呟いた途端ミラとザックさんの方から大きなため息が聞こえ、なぜかジルさんの顔にもどこか苦笑のようなものが広がった。

「マナは生活用品でもなければ食料でもないからね、こうなるのも当然ってもんさ。第一ミラはともかくとしてあんたまでため息つく必要ないじゃないか」

「いや、なあ、市長の野郎腹立つじゃねえか」

「あんた余計なことと言って睨まれないようにしなよ」

「そうするとザックはしゃべれなくなる」

ザックさんが集中砲火を受けているがなにが何やらさっぱり分らない。ちようどいいし助け舟がてら質問してみよう。

「すいません、まだ事態が飲み込めないんですけど……」

「おっと、ごめんよ。マナっていうのは霊草でね、魔具を作るために使う魔法の＜キー＞の中でも最上のもののさ」

「最上って……キーが何種類もあるんですか？」

ちよっと待って、そんな話聞いてない。

「大抵の魔法にはあるよ。あんたの魔法はお金がキーっていったから、どの硬貨でもいいっていうのがそれにあたるんじゃないのかい?」

なるほど、そういう仕組みになっていたのか。特定のキーを手

入れられない人達に優しい仕組みだと思ふ反面、相変わらず神様は俺のこと嫌いなのだと悟る。

「そういえばいい忘れてたけど、あんたの魔法については他言無用にしてくれよ」

「知られるとまずいことでもあるんですか？」

最上級の魔法とか言ってたし、不都合でもあるのだろうか。もともと目立ちたいとは思ってないから秘密にする分にはまったく問題ないのだけど。

「まあ珍しいものだから言いふらして問題が起きてもつまらないってことさ。じゃあサイトウの魔法の使い道に戻るんだけど、誰かい意見はないかい？」

「それについてなんですけどまず言っておきたいことが。俺の魔法はさっきも言ったとおり『多くの人が妥当と思える価格』にあたるお金が必要なので、単純に物を出して販売することは難しいと思います」

「分かりにくいな、もうちょっと分かりやすく説明してくれねえか？」

ザックさんに了解の意を示し、魔法を発動させる。

「たとえばリンゴなんですけど900フォル……って1000フォル値上がりしてる？」

確か前にリンゴを出したときは800フォルあれば出すことがで

きたはず、なのにサンライズでの不当な値上がりは一体なんだ。

「それが妥当な価格って訳だね。魔物の森ではリングはただみtainなもんだろうけど、サンライズでは街の外に採りにいく分費用がかかるからね。それが値上がり分だろうよ」

どうやら相変わらずのジビアらしい。

「あー、なんだ、要するに安くものが出せるわけじゃねえってことだな？」

「想定通りの理解力」

「それはそうとして生活用品のほうはどうなっているんだい？」

ザックさんの酷評に対する華麗なまでのスルーが気になるが、おそらく日常的過ぎてつつこむ気も起きないのだろう。俺も学ぶべきなのだろうか。

「それについては本当にあるものは出せるといった感じですね。たとえばこんなのか」

そういつて魔法を発動しコンロを出す。電気がない以上、創造できるもののレベルを示すためにはこれがちょうどいいだろう。

「これはコンロといって火を出して調理に使ったりするものです」

「『ファイアボックス』と同じようなものかね……ミラ」

「任せて」

答えるが早いかミラは神速とも言える速度でコンロを分解し、あつという間にパーツの群れにしてしまった。

「おー！」

アスがぱちぱちと拍手する気持ちも分かる。目にも留まらぬ早業はそれが一つの芸とも言えるレベルだった。

「どうだ！ こいつはこの若さで最高位の魔具士に認定される天才なんだぜ！」

「あなたが言わない」

「それで分解してみてどうだったんだい？」

スルーを覚えよう。そう決めた。

「基本的な構造は魔具と変わらない。ただ魔力の補給がサイトウから直接行われるという珍しいタイプではある」

そういうとミラは俺なんかでは練習してもできないであろう速度でコンロを組み立てなおした。珍しいタイプのコンロをこのスピードで分解修復できるのだ、なるほど、天才という看板に偽りなしだ。

「じゃあ以上のことをふまえて意見を出してくれるかい？」

しんと静まりかえる室内。皆それぞれが頭をひねるが「うーん」という唸り声だけが響くだけだ。

そんな中どうしたものかと悩んでいるとふいにミリアが沈黙を破

った。

「やっぱり高くても買ってくれる人に売るべきだと思うわ。たとえば私なら油揚げは多少高くても買っちゃうもの」

その例には一片の疑う余地もない。

「ミックも紅茶はよく買っておったな。好きなものであれば高くても買うということだな？」

「こだわりのあるもの、と言い換えてもいいかも知れないね」

「それは言えるかも知れねえな。俺もいい食材でありゃあ料理人ではないような奴らに比べて高い金を出す気はするぜ」

一つ意見が出てくると得てして話し合いは進むものだ。

その後も俺が魔法の考察を述べ、ミリアが経験を生かした意見を出す。アスが意外性のあるアイデアを出したかと思えばミラが考えを深めジルさんがまとめる。

わあ、なんて完璧なコンビネーションなんだろう。一部を除いて。

「じゃあとりあえずは飲食店への食材の供給、品揃えが増えたことの宣伝とその販売といったところで問題ないね？」

ジルさんが皆をぐるっと見回し確認する。

「問題もないみたいだから今日のところは解散にするよ」

その言葉を皮切りに各自ぞろぞろと立ち上がり、凝った体をほぐし始める。長時間座った後の伸びの気持ちよさは分かるが、ジルさんについては身体的特徴を考慮して向こうを向いて欲しいと思ったり思わなかったり。

「なんだお前、またでかくな——」

一閃。上に伸ばしていたジルの右腕がまったく無駄のない軌道で強襲。ザックさんのアゴを斜め上から打ち下ろす。

脳を揺らされしゃがみこむザックさん、しかしそれだけでは終わらない。位置の下がったアゴは格好の的となり、全身を使ったミラの掌底が吸い込まれるように直撃する。まさに阿吽の呼吸とも言えるべき芸術的な連携だった。

「そ、それはさすがにやりすぎではないのか？」

急所狙いの二連撃に慄きながらの質問にも二人はまるで動じない。

「言葉には注意しろと何回言っても直せないこいつが悪いのさ。口で言っても駄目なら体で覚えてもらうしかないだろう？」

「始めからアゴを狙っていたわけではない。他の場所では私たちのほうが痛いから仕方なく。それにこの程度でなんとできる下級バカではない」

そんなものとザックさんを見ると、なるほどそんなものだった。しっかりと二本の足で立ち上がり「がははは、悪い悪い」とのたまっていた。……あれだけくらってテンカウント以内に立ち上がると

か人間から遠いというミラの気持ち分かる気がする。

「じゃあ俺は帰るぜ。夜だけでも営業しねえと料理人が廃^{すた}るっってもんだぜ」

「そんなこと言って、あんたちよくちよく休むじゃないかい」

「まあそれはそれ、これはこれだな」

がはははと俺様理論を展開する様はここまでくるともはや清々しい。

「また来る」

会話をさえぎるようなタイミングで言葉を滑り込ませるのはミラ。はるかに大きいザックさんを蹴りだすように追い払う姿は違和感全開だが、二人とも慣れた様子でこれが日常なのだろう。性格正反対な二人がどうやってここまで仲良くなったのか、また聞いてみても面白いかもしれない。

「あたしとミリアも行くけどアスちゃんはどうするんだい？」

「我はサイトウの監視という仕事があるからな、ここに住むつもりだが？」

ちょっと待った。アス、君は俺に地雷原の中で生活しろというのですか。

「そうかい、じゃあアスちゃんの分のベットも後で届けるように手配しとくよ。それとも余計なお世話だったかい？」

「います、絶対必要です。それがないと森の王様が直々に棺桶届けてくれちゃいます」

「くくつ、冗談だよ。他にもなにか用があつたらこの先のエバンス商会にきとくれよ」

いやほんと冗談じゃありませんから、それ。くすくす笑いながら出て行くお姉さま二人組みを見送り軽くため息。なんだか疲れたよ。

「な、なあサイトウよ。さすがに父上もここまでは来ないだろうからそこまで気にしなくても……よいぞ?」

軽く首を傾げる姿は殺人的にかわいく、これから仕事と言われても全力で突貫していけそうだ。マイナスイオンなんかもでてるんじゃないの、これ?

「気持ちには本当に嬉しいよ、でもあの王様が絶対に来ないと言い切る?」

「あー、まあ、……………」

その沈黙が答えなのです。

渡る世間にゃ敵もいます。

どうやら商業都市の朝というものは思ったよりも早いようだ。普段の俺もそれなりの時間に起きているつもりだったが、サンライズで目が覚めるとすでに道には人が溢れていた。おそらく多くの人が商人なのだろう。時は金なりとばかりにあくせく足を動かす姿は、どこか日本の朝を思い出させる。

「一応商人のカテゴリーに入ってるわけだしそろそろ起きますか」

ジルさんと約束した時間にはまだ余裕で間に合うものの、外を見ていたら眠気が覚めてしまったためそもそもそとベットから這い出した。

エバンス商会は過去に不動産を扱っていたこともあったらしい。数ある物件の中からエバンス商会本館の近くであり、かつ現在使っていないという理由で選ばれたファミリー向けであろうこの家は、ありがたいことに二階に二つの個室を備えている。

いや、一部屋じゃなくてほんとによかった。

着替えを終えた俺はそんなことを思いながら隣の部屋で寝ているアスを起こさぬよう、ゆっくりとした足取りで階下に向かう。一人で暮らしていたときには必要のなかった気づかいなのだが大変だろうと思うなかれ、気づかいできることが嬉しいのだ。気をつかうということは誰かを意識することであり、その意識が一人ではないの

だと実感させてくれる。

そんなことを考えながらちびちびと紅茶を飲んでいると二階からガチャリと音が聞こえてきた。

「おはよー」

「……………うむ」

ほとんど目を瞑ったままぱたん、ぱたんとする気のない足音を響かせやってくる王女様。新しく入れた紅茶を渡そうと思うんだけど……………歩きながら眠ってるんじゃない？

「熱いから気をつけなよ？」

「……………うむ」

「……………今日の天気は？」

「……………うむ」

「今日から一週間洗い物は任せた」

「……………うむっ!？」

おいしい、その返事では言質が取れないじゃないか。

「起きた?」

「爽やかではないがな」

微妙な表情のアスに笑いながら紅茶を渡す。まあまあ、やけどしてはいけないという優しさしかありませんでしたって。

目を伏せ、俺同様ちびちびと紅茶を飲むアスをぼーっと鑑賞している、ふと目があって声を掛けられた。

「ところで今日の予定はどうなっているのだ？」

「八時ごろにジルさんが来ることになってるけど、今分かってる予定はそれぐらいかな」

魔物の森では時計がなく待ち合わせに苦労していたが、サンライズには時計っぽいものがあったて助かる。

「ちなみに今は何時なのだ？」

まだ時計を読めないアスの代わりに見てみると……まずい、もう七時過ぎてる。

「うん、ちょっとまずい。朝食簡単なもの作るから身支度整えてきて」

自分一人じゃないからバナナかじるだけというのも釈然としない。まさかこっちでも騒がしい朝を過ごすなんてなあ。

「おはよう、調子はどうだい？」

「おはようございます。いい家に住ませていただけたおかげでばかりですよ」

歯磨きまでをぎりぎりで済ませたことなどおくびにも出さず、あくまでゆとりのある態度を取り繕う。なけなしだろうがプライドがあるのです。

「ところで後ろの方々はどなたでしょうか？」

少々汚れた服を着た、明らかに商人ではなく職人といった方々。雰囲気的にはグランさんに似ているだろうか？

「この人達はこの家を改装するために来てもらったのさ。じゃあよろしく願いますよ」

「おう、任せとけ」

職人さんたちが道具を取り出し、ぞろぞろと入り口近くの窓に向かっていく姿はそぞろ不安を誘うが、「いいから、いいから」と笑顔のジルさんに連れられアスともども二階の自室にむかった。

「とりあえず説明を要求します」

室内に入り二人に椅子を勧めた後、間髪入れずに手を挙げ権利を主張する。

「もちろんさ。とりあえず昨日決めた今後の方針は覚えてるかい？」

確か飲食店への食材供給とエバンス商会で扱っていなかった商品の販売だったはず。

さすがに昨日のことだ、頷いて肯定する。

「もし販売場所をエバンス商会にしちまうと、すべての売り物を前もって出しておくわけにもいかないから、注文を受けてすぐここまですりくるか後から配達するぐらいしかなくなるだろう？ 商店相手ならまだしも一般のお客さん相手にそれはまずいんだよ」

……なんだか話が見えてきた気がする。

「それを解決するためにここで直接販売してもらうことにしたのさ！
そうすればすぐに商品も渡せるし、在庫も必要ないからね」

なるほど、商売をする上で優先されるべき合理的判断だ。俺としても魔法で物を出すだけで人との交流なしという、駄目な感じのひきこもり生活をしないですむ魅力的だ。

「俺はいいんですけど……アスはそれでもよかった？」

「問題ない。それに我はもともと監視に來ただけなのだ、そこまで気にしてくれなくてもよいぞ」

アスは当然とばかりに頷く。

「急な話で悪いけど勘弁しとくれ……っと、もうそろそろ時間がまづいね。あたしはやることあるから商会に戻るけど、あんたたち

は適当に時間潰しといっておくれよ。用事が片付いたらまた来るからさ」

ジルさんは言うが早いかなぁという間に部屋から走り出していった。いやー、忙しい人は大変ですね。

「ありがとうございましたー」

窓のところで作業していた職人さんたちは、昼休みとして休憩はしたもののそれ以外は淀みない動きで働き続け、三時過ぎには改築を終わらせてしまった。完成した昔のたばこ屋のような窓口は決して雑というわけではなく、少なくとも素人目には非の打ち所が見当たらないレベルだ。

「また何かあったら呼んでくれや」

そう言い残し去っていく職人さんと入れ違いに走ってジルさんがやってきた。

「遅くなって悪かったよ、ちょっと厄介な客が来ちまってね」

「そんなことないですよ、お疲れ様です」

とりあえず家の中に入ってもらい、椅子を勧めてから飲み物を出した。

「助かるよ、昼から何も飲んでなくてね」

よほど喉が渴いていたのだろう、喉を鳴らし一気に飲み干す姿は
かなり清々しい。空になったコップを再び満たしジルさんが落ち着
くのを待つ。

「ありがとね、落ち着いたよ。……それでどうだい、あの窓の出来
栄えは？」

「文句なしですね、すごい職人さんたちです」

「うむ、獣人ではとてもできぬ見事な人の技だったぞ」

そんな取り繕っちゃって、後半なんて膝を抱えて作業に釘付けだ
ったくせに。

「だろう？ ああいった人達がいないとあたしたち商人は立ち行か
ないからね、その気持ちを忘れないでおくれ」

「もちろんですよ」

「いい返事だ。さて、今後の商売の話に移るんだけどね、この店舗
についてはあんた一人に任せようと思うんだ」

おおっと、それは少々無茶ってもんでしょう。俺がつい最近まで
素人だったということを知っての暴挙ですか？

「無茶、無理、無謀の三重苦ですね。再考をお勧めしますが……」

「あんたは何でそんなに自信がないかねえ」

苦笑されても自信がないのは小市民の基本技能なのです。

「いいかい？　まずこの店舗ではお客さんから注文を受けて魔法を発動、それを渡すという形になる。つまりあんた以外の人の手が入る余地がほとんどないんだよ。それにあんた立派に飲食店経営してたじゃないか、まずいと思ったら口出しはするけど基本任せたほうがいい結果になる気がするんだよ」

確かに俺はベイビーバードでそれなりにやれていたけど、それは客層がよかったからというか大きいと思っている。あとは出してた料理自体が珍しかったからとか……。

「しかたないねえ、雇い主命令でやるかチャレンジ精神旺盛な従業員が率先してやるか、好きなほう選べな」

「ジルさん任せてください、きっと繁盛させて見せますよ」

「よく言った！　営業は明日から、宣伝はこっちのほうでやっつくから気張りなよ！」

まだまだ仕事があるのだろう、若干軽い足取りで商会に戻っていくジルさんとは対照的に若干沈む俺。そんな時、ふと右肩に手の感触。

「大丈夫だ、なんとかかなると思うぞ」

ありがとう。ただそこは嘘でもいいから断言してほしかったなあ。

さて日は変わって翌日。サンライズの朝は早い上、朝営業がなかった飲食店と同列に語るわけにはいかないだろうということ。朝八時から店自体は開くことにした。アスに営業中の看板も出してもらい準備万端なのだが……人が来ない。

この家は商店や露店の多い区画に立っており、目の前の道にはそれなりに人が通っている。そういった人達は周りの店にちらほら入っていき買い物をしていくのだが、ここで買い物をしていく人は皆無だ。看板に気づいて近づいて来てくれる人はいるものの、食料品・生活用品を謳いながら店先にまったく商品が出ていない奇特な店舗なためか説明する間もなく去っていつてしまう。

結局朝っぱらから店を開いておきながら、午前中の客数ゼロという不名誉な記録を打ち立ててしまった。

「まずい、非常にまずい」

昼食を食べながらうーんと頭を抱える。アスも若干心配そうだが、サンドイッチを食べる手は止まっていけないが。

「助言をしてやりたくとも我は商売などまったく分からんからな……」

「あー、だいじょぶだって、きっと何とかなるはずだよ」

言葉の節々から不安が溢れるがどうしようもない。午前中も客寄せにと声を出してみたがなれない声だしでは素人臭丸出しで、お客

がこないどころかアスに「止めた方がよいのではないか？」と心配される始末。うわー、情けない。

そんな時窓を叩く音が響く。もしかしてお客さんかと思い振り向くと、そこにはこの店の前の露店で野菜を売っているおっちゃんが立っていた。

「いらっしやいませ、なにをお求めでしょうか？」

「違う違う、俺は客じゃねえよ」

ぞんざいに手を振り小馬鹿にしたような笑みを浮かべるおっさん。

「一体なんでしょうか」

「午前中から見てたけどよ、新規開店の日だっていうのに客が一人も入ってねえじゃねえか。素人さんがいきなり店を開くにはこの通りは厳しいと思うぜ？」

「ご高説ありがとうございます。素人だろうとここを任された以上は全力でやり抜きますよ」

「こりゃいい、まだ俺たちから客をとれるつもりでいるのかよ！素人さんの全力ってやつを見せてもらいましょかね」

言いたいことを言い終えると、がはははと下品に笑いながら自分の店に戻っていくおやじ。言ってる内容自体はあながち間違いないものの、いかんせん、ムカツク。

「サイトウよ、不愉快なのは我だけだろうか？」

「もちろん俺も不愉快だよ」

素人に近いとはいえ店を開いていた俺だ、あそこまで言われれば反感を持つぐらいのプライドはある。さて今後どうやってあのおやじからお客を取ってやろうかと考えていると、再び背後から窓を叩く音がした。

「……いらっしやいませ、なにをお求めでしょうか？」

つい先ほどのことなので返事も微妙にぎこちない。

「くくっ、俺はさっきの奴みたいにぐちぐち言いに来たわけじゃねえよ」

軽く笑ってそういうのは赤い髪を撫で付けた二十台後半ぐらいのお客さん。背が高く全体的にきっちりした格好をしており、まさに伊達男といった感じだ。

「さっきので少し気が立ってたみたいです、申し訳ありませんでした」

「気にすんな、あいつの口上は俺ならその場でぶん殴るぐらいうざってえからな」

さすがにそこまでやる気にはならないが、その気持ちはよく分かる。それにしてもお客さんの口調から察するにあのおやじの嫌がらせは初めてではないのだろうか？

「あの人っていつもあんなことしてるんですか？」

「この通りで新しく店が出たときはだいたいな。まったくばからしい」

ほんとに呆れたおやじだ。そんな奴の店がここよりなお繁盛しているから余計に腹立たしい。

「つつてもこの通りで開いた店の何件かは、業績不振のところにあの嫌がらせくらって店じまいしてるから性質^{たち}わりいんだがな。俺としてはそんなくだらねえことで店が減るのもつまらんからこうやって声をかけた訳だ」

「ありがとうございます、あんなおやじの言葉程度に負けたりしませんよ」

それを聞くとお客さんは上出来だとばかりに笑う。

「ああ、あいつの店を潰すつもりでやっちまえ。俺もせっかく来たんだし何か買ってくか、そうだな……リンゴ一つくれ」

「リンゴですと味には自信があるんですが、少々お高く千フォルになりますかよろしいですか？」

「大した強気だな。まあいい、小金には不自由してねえから持ってきてくれ」

「分かりました、少々お待ちください」

注文を受け店の奥のほうに入っていく、窓口から見えない位置まで来ると魔法を発動させる。その場で出せば楽なのだがジルさんと

の約束の手前このような方法をとっているのだ。

「お待たせしました。千フォルになります」

千フォルと引き換えにリングを渡すと彼はその場でリングに齧りついた。粗野な動作のはずなのにかっこいい人がやると全然そう見えなからずるい。

しばらくリングを咀嚼するしゃりしゃりという音が響く。

「おいおい、ありえねえだろこれは。一体どこで仕入れたんだ？」

「えーっと、商売上の秘密ということで」

「いくらなら教える？」

「申し訳ありませんが……」

心が動かないでもないが、このリングは創造魔法で出したものなのだ。お客さんには悪いがジルさんと約束している以上教えるわけにはいかない。

「仕方ねえか、まあこれをうまく使えれば潰れるようなことにはならねえだろ」

「この値段ですからうまく使うのが難しいんですけどね……」

実際いくら味がいいとはいえ、相場の十倍では買い手は限られる。エンゲル係数が異様に高い森でならそれなりに売れていたが、フォルを使うところがたくさんある人間の町ではそう簡単にはいかないだろう。

「贅沢すればするほど偉くなれるって勘違いしてる馬鹿どもに売れりゃ楽なんだが、今エバンス商会にそこまでのコネはねえからな」

「その辺りは頑張っと思って考えられますよ」

「ああ、それでいい。やるだけやって駄目なら骨は拾ってやるよ、せいぜい足掻いてみな」

そう言っただけ彼はリング片手に歩いていった。話し方はちよつと荒いけどわざわざ説明しに来てくれたのだ、きつといい人なのだろう、また来てくれたら名前を聞いてみようか？

「あんな奴がいたのだ、負けられぬ理由がまた一つ増えてしまったな」

「まったくだよ、これは何とかしないとね」

ここで負けてしまうとアスにジルさん、見知らぬお客さんの期待を裏切ることになってしまう。……改めて考えると胃が痛くなりそうな展開だなあ、こんなの柄じゃないのに。

とりあえず椅子に座り、武士の情けで残された最後のサンドイッチに齧りつく。

「さて、なんとか頑張ってみましようかね」

物語の王女様とかってダイエットしてるのかな？

「とはいえ一体どうするのだ？」

机に戻ってサンドイッチを齧っているとアスにそう話しかけられた。

「いろいろやっていくつもりだよ。とりあえず今からは試食を試してみようかな？」

幸い日本に住んでいたおかげで、詳しい仕組みまでは分からないもののある程度の工夫は思い浮かぶ。まあ思い出しているだけなので偉そうにいえたことではないのだが。

「試食？ 初めて聞く言葉だな」

「試食っていうのは、商品を知ってもらうために試しに食べてもらうことなんだ。それで気に入れば買っていつでももらえるかも知れないからね」

「よし、私も試食しようではないか！」

「アスはもう商品を知ってるでしょうが」

なんでやねんとばかりにツツコミを入れる。

「そんなことはないぞ。我が食べたことのないものだってまだたくさんあるではないか」

ええ、そりやありますとも。でも俺の魔法を知っている王女様は一体どれだけ食べるおつもりなのでしょうか？

「まああるけど……つまり気に入ったら買ってくれるということだよね？」

「……気に入ったら食事のときに頼もうではないか」

こら、そこ、俺の目を見て話さない。

「そういう人には試食をしてもらうわけにはいかないね」

「うう……」

別に食べさせてあげることぐらい全然構わないんだけど、ここで許すと癖になりそうだ。しょんぼりしているアスを見ると決意が揺らぎそうになるので、お客さんを探すふりをして窓を向く。

「じゃあそろそろ営業を再開しましょうかね」

「うむ」

そう答える返事にも微妙に張りが無い。やっぱり……でも………
…はあ。

「手伝ってくれたらいろいろ食べさせてあげるけどどうする？」

「いや！ 今のはわがままなのだ、気にしなくても……！」

「手伝ってくれたら、だよ。ご褒美だから気にしないで」

果たしてもらう言い訳、あげる言い訳、どちらを作っているのやら。自分でもあきれるほどの甘さだ、でもまあ――

「……ありがとう」

この言葉も聞けたし良しとしますか。

「それで何を手伝えばいいのだ？」

「とりあえず椅子と机を外に持って行ってほしいな」

アスはそれを聞くと駆け足で椅子と机を外に運び出した。そこからさらに指示を出し、窓口の上の屋根で日陰になるような位置に椅子を移してもらう。

「動かしたが次はどうするのだ？」

「後はそこに座ってひたすら試食してくれればいいよ」

「う……む？」

こてんと首を傾げたアスに苦笑しながらも説明する。

「俺が渡したものを食べてくれればいいんだけど、お客さんが来たらそれを分けてあげて欲しいんだ。ただ試食をするよりそうしたほうがお客さんが来てくれそうだと思うわない？」

アスにして欲しいのは客引き兼試食係だ。アスが店先でおいしそうに食べてくれれば人も来るだろうし、その上で試食を薦めれば効果も高いだろう。少なくとも俺がやるよりは確実に。

「なるほど、我のカリスマで客を呼ぼうというわけだな」

「そうそう」

カリスマというより可愛らしさとかだと思う、言わないけど。

「うむ、任せておけ！」

「じゃあ第一弾のバナナね、皮むいて食べてみて」

興味しんしんといったアスに黄色の房を丸ごと渡す。なぜバナナかというと食べやすく、またこのあたりの気候が暖かいためか比較的安い値段で出すことができたためだ。

「どうやってむけばよいのだ？」

「上のほうを持ってこう……ぐいっと」

「ぐいっと？」

バナナを一本渡してもらい、実演しながら説明する。アスはすると簡単にむけていく様子を面白そうに観察し、真似して自分の分をむくと躊躇なく齧りついた。

「む、これは……ゴアの実に似ているな」

「ゴアの実って？」

「このあたりで採れる甘い木の実だ。味はいいのだがいかんせん食べにくくてな、ちょうど硬い殻の中にこのバナナというものが入っているような感じだ」

説明を聞いて納得する。なるほど、だからリンゴに比べてあんなに安かったのか。これは今までの生活で分かったことなのだがアスは味に敏感だ、そのアスがこう言うのなら味自体はそこまで変わらないということになる。ならばバナナの優位は食べやすさだけ、値段が落ち着いていたのはそういう理由だろう。

「そうなんだ、じゃあこれとかは？」

奥にいつて魔法を発動、試食の分も合わせて安めの果物を何種類か、食べやすいように切った後アスに差し出し食べてもらう。

「これもそれも似たような味の木の実はあるぞ。形や色は違うが、味のほうはリンゴほど違うわけではないな」

やはり味が決定的に違う限りは常識的な値段になるということだろう。俺だって味がそこまで変わらなければ高い金出そうとは思わない。

そんなことを考えていると見知った人が一人、こちらに向かって歩いてきた。

「こんなに広げて何やってんですか？」

声をかけてきてくれたのは先日改築をしてくれた職人さんの一人だ。

「あははは、できればお気になさらず。それよりバナナっていうものなんですけど、お一ついかがですか？」

試食用にと切ってあった果物の中からバナナを勧める。

「いいんですか！？　じゃあ遠慮なく」

「もちろんです、ただおいしかったら買っていたださいね」

職人さんは面白そうに笑うと御礼を言いながらバナナを一切れ口に運ぶ。もぐもぐと咀嚼した後一言、

「あはは、ゴアの実に似た果物がおいしくないわけじゃないですか。約束どおり買っていきますよ、いくらですか？」

「ありがとうございます、一本100フォルになります」

適正な利益率など分らないので、適当に利益を含めた値段を提示する。日本だったらケンカ売ってるような値段だが、これで売れなければまともな利益なんかでりやしない。まったく、ほんとにこの魔法は単なる販売に向いてないよ。

「うーん、ちょっと高いなあ。親方たちの分も合わせて20本買っていくんで一本90フォルにしてくれませんか？」

気持ちちは分かるがそれは厳しい。もともと大した利益をのせてないからそんなことをしては日銭すら稼げなくなってしまう。

「こちらも厳しいんで勘弁してください。100フォルはちょっと高いと思うかもしれないですけど、バナナって吸収がよくて食べるとすぐに元気が出てきますから職人さんにはきつと気に入ってもらえると思いますよ」

「はは、分かりました。じゃあ100フォルで20本ください」

「ありがとうございます」

奥に入って行きバナナを出し、窓口に戻り彼に手渡す。

「はい、20本になります。重いですので注意してください」

「確かに。気に入ったらまた利用させてもらいますね」

彼は大量のバナナを抱えるとすたすたと向こうに歩いていった。やっとお客さん一人、このペースでやっていけるのだろうか？ 先行き不安だなあ。

と、そんなことを思いながらの営業だったがその後は思いのほかお客さんが来てくれた。やはりと言うべきか商品がまったく見当たらなかったのが悪かったようで、バナナやリングゴなどの商品を並べアスが声を出してくれることで午前中のような失態を晒さずにすんだ。ただ値段についてはどうしようもなく、試食で気に入ってもらえてもたくさんは買っていてももらえないのが実情だ。

「ありがとね、もうそろそろ終わりにしようか」

辺りがだんだん暗くなり、周りがぼつぼつ店をたたみ始めたところ
本日の営業を終えた。

「午前中はどうなることかと思ったが予想以上に客が来てくれたな」

「人数は、ね。でも問題も多いよ」

「買っていく数が少ないことか？」

気づいてたんだ。意外、といったら失礼だろうか？

「それもあるんだけどね、珍しいものしか買ってもらえなかったのも問題かな」

今日お客さんが買っていったくれたのは、バナナなどこの辺り（もしくはこの世界）にはないものがほとんどだ。このあたりで手に入るものも並べておいたのだが、この店で買うより他の店で買ったほうが確実に安いので当然売れ行きはよくない。なんとかしなければ珍しいものが定着しなかったときに目も当てられないことになってしまうだろう。

「むう、まあ今は客が増えたことを喜ばうではないか」

「うーん」

「まったく、今考えてすぐに答えが出るものでもあるまい。そんな根をつめなくてもよいと思うぞ」

まあ確かにこの場ですぐに考え付くようなものでもないか。せっかく今日の仕事も終わったんだし、アスの言ってることのほうが正しい気がする。

「そう通りだ。よし、仕事のことは忘れて晩御飯にしようか」

「我はオムライスがよいぞ！」

あれだけ食つといてまだ食べる気満々ですか。……明日から本格的に運動させたほうがいいかもしれない。

それから数日は何の問題もなく営業を続けていった。口コミが広がったのだろう、初日より多くのお客さんが連日訪れてくれる。とはいっても珍しいものの頼りの販売は以前解決しておらず、「バナナとか定着してくれー」と祈りをささげる毎日なのだが。

そんなある日の夕方、背中に袋を背負ったザックさんが店にやってきた。

「お前ら調子はどうだ？」

「ぼちぼちですよ。ザックさんはこんな時間にふらふらしていいんですか？」

そろそろ店じまいをする店が出てくるこの時間帯は、夕食を食べる客を狙うのに絶好のタイミングだ。

「今日は定休日だから問題ないぞ。そんなことよりお前が魔法で出したっていう食材みせてくれよ」

そういえばそんな定休日があるっていつてたっけ。ならば問題ない、お客さんとしてお金を落としていつてもらおう。

「了解です、出せるものは結構あるんですけど材料とか、調味料とかどんなものがいいですか？」

「そうだな……とりあえず調味料で何かないか」

さて調味料か、一体何を出すべきだろう？ この辺りの人達がどんなものを好んでいるのか分からないのでクセの強いものは駄目。じゃあ無難なものを出せばよいのだが数が多すぎてどれに絞ったらいいか分からない。

「うーん、調味料でも結構数があるんですよ。もう少し絞れませんかね」

「んなこと言われてもなあ。調味料なんかそれこそ料理人しだいで何に使えるか分からんからこれ以上は絞れんぞ」

ザックさんの言うことはもつともだ、なにかいいアイデアはないものか。新しい調味料なんかは味見しなければいまいち買いにくいだろうけど、出す時点で対価をもらえなければこちらの財布が大変なことになってしまう。お金をもらえば手っ取り早いのもかもしれないけど、知り合いからそんなにたくさんもらうのも気が引ける。なにか、なにか……。

「ザックさんの店って材料をどこから買ってますか？」

「新しいものは別として、基本的には決まった商人から仕入れてるぞ。昔からの付き合いでいいもの揃えてくれるからな」

予想通りお得意様になってもらう案は却下。

「……なら知り合いに食材仕入れてくれるような人っていますか？」

「なんだお前、なんか考えてくれてんのか？ 食材についてケチるつもりはねえから普通に売ってくれて構わんぞ」

「でも……」

「……大したお人よしだな。一応言つとくと仕入れてほどじゃねえが買ってくれそうな奴らならいるぞ」

「ほんとですか！」

驚いた、聞きはしたもののほとんど期待してなかったのに。

「ああ、うちの客だ」

「お客さん……ですか？」

「うちの客を舐めるなよ。俺の店は材料にも妥協してねえから値段が若干高いんだ。もちろん味は保障するが別の店に流れてく奴も多い。そんな中でも俺の店に来てくれる奴ら、特に常連の奴らなんかはうまい飯のためなら平気で他の生活費削るような料理馬鹿だらけだぞ」

そう話すザックさんの顔はどこか誇らしげだ。

それにしてもおいしい店に残るお客さんか……単純に材料を販売しても利益が出そうだけでもっと――

「ザックさん、提案があります。俺が調味料一式とある程度の材料、それらを使ったレシピを教えます。代わりにその料理をメニューに加え、材料を売っているのはこの店だと宣伝してくれませんか」

「なにか思いついたか、……まあ宣伝するのは構わん。だがメニューに加えるかは味次第だ、まずけりゃ死んでも加えんぞ」

「当然です」

この提案の目的は俺しか出せない材料を使っておいしいものを作るということにある。以前のようにソースを作って販売してもいいのだが、俺が作った程度のものがこの街でそこまで認められるとも思えないし何より進歩がない。

ではどうするか、専門家の手を借りればいいのだ。

この店にしかない材料を使ったおいしい料理を作り、レシピともどもそれを広める。お客さんが味を覚え他の店もまねしようと動き始めてくれたらしめたもの、材料を喜んで販売させてもらおう。実現したらなんとも面白そうな話じゃないか。

「なんだ、急にいい目になりやがって。いいだろう、その話のつてやろうじゃねえか！」

「ありがとうございます。じゃあ説明したいんで今時間いいですか？ その料理はラーメンっていうんですけど――」



「あいつ思ったよりやるじゃねえか」

レシピを聞き材料を受け取った帰り道、サイトウの店から出た辺りで思わず本音がこぼれた。

ジルが連れてきたのを初めて見たときは、何でこの時期にこんな普通そうな奴を雇ったのか疑問を持った。魔法を使えることを聞いてからは納得したものの、魔法のために雇ったのかという評価に変わっただけに過ぎない。ところがどうだ――

「おもしれえ」

あそこまで強大な魔法を持っていながら振り回されず、目的のために徹底的に利用している。利用する方法にしたって俺なんかじやとても思いつかないような発想で考えられたものだ。普通と思っていた奴がとんでもない、今ジルにあつたらもう一度言いたい「こんな面白そうな奴らどうやって引っ掛けてきたんだ？」と。

くつくつ笑いながら見慣れた道を曲がり、自らの店を見るとジルが扉の前に立っていた。

「おまえこんな時間になにしてんだ？」

「なんでこんなに帰るのが遅いんだい！ 急にここの料理が食べなくなったから待っていたってのにちっとも帰ってこない、早くいれとくれよ」

自分勝手な幼馴染は今日も健在らしい。こうなったこいつは聞く耳を持たないので諦めて店に入れる。

「余ってるもんで作るからそれで我慢しとけ」

「我慢しといてあげるよ。ところであんた何背負ってるんだい？」

「あ、ああ、ただの荷物だから気にすんな」

あれの中身をジルに知られるわけにはいかない。おれ自身が知られたくないと言うのもあるし、あの女との約束も破ることになってしまう。

「何を持ってるか教えてくれないし、急に増やした定休日にごに行ってるかも教えてくれないし。あんたもよそよそしくなったねえ」

「別に俺は変わってねえよ。んなこと言ったらお前だって従業員雇おうとしてることなんて一言もいってなかったじゃねえか」

サイトを雇う前にもちよくちよく飲んでいたがそんな話は一言も出なかった。よそよそしいなどとは思わないが急なことで驚いたのは確かだ。

「あの二人の事情は聞いたろ？ 事前情報として言えることがあま

りに少ないから言わなかったただけだよ。……それより聞きたいんだけどさ、あの二人うまくやってると思うかい？」

ジルはカウンターに置いてある、半ば専用になっているボトルを開けると自分でコップに注ぎ飲み始めた。どうやら管を巻く気満々らしい。

「俺が見る限りじゃうまくやってるぞ。あいつらなかなかおもしれえよ」

余り物で適当なつまみを作りながら答えるがなかなか返答が来ない。どうしたのかとジルのほうを向いてみると酒の入ったコップに目を落としていた。

「やっぱりあの子たちは自分で何とかする力を持ってるんだ。それなのに土地をたてにうちに引きずり込んで、あの子達あたしのこと恨んでるだろうなあ」

「なに馬鹿なこと言ってんだ。そんな話はしてねえがお前を恨んでる様子なんかまったく感じなかったぞ」

「でもさあ……」

「あーこれ食え、これ。あとペース速すぎだ、酒はそれで終わりにしとけ」

若干不満そうながらもボトルを閉めたところを見ると自分でも分かっていたのだろう。いつの間にかこっそり減っているボトルを元の位置に戻すと、無言でつまみを食べ始めた。

「あいつらはお前のこと恨んでなんかいねえから、俺が保障してる」

「ふふっ、あんたに保障されてもねえ。……でももうそろそろ限界がくるって聞いても保障できるかい？」

思わず苦々しい顔になる。

「……もうやばいのか」

「いろいろ動いてはいるけど一年は持たないだろうね」

「サイトウたちだって頑張ってる、だから何とか――」

「難しいってことは分かってるんだろう？」

言われるまでもない。どうすれば解決できるか散々考えた。だが駄目だ、根本的な部分を解決しなければどうにもならないのだ。

「あー、今日はどうも格別に悪い酒みたいだね。もう帰って寝るよ」

ジルはきれいに空になった皿をこちらに渡すとゆっくりと立ち上がった。普段通りのつもりか知らないが、歩く足取りが少しおぼつかない。

「そんな足取りで帰るつもりか、水飲んで少し休んでけ」

「水だけもらっとくよ、早く寝ないとまずいんでね」

大き目のコップに入った水を渡すと、ジルはその水を一気に飲み

干した。

「じゃあ帰るよ、ごちそうさんね」

「送ってくか？」

「ははっ、あんたうちまでの距離知ってんだろう？ 見た目に反してどれだけ心配性なんだい」

ひらひらと手を振り扉から出て行くジル。まったくこいつは、酔っ払いの自覚はあるのか？ とはいえ言い出したら聞かないのがこいつだ。

せめてもと扉から出て見えなくなるまで目で追う。時々ふらついてはいるが千鳥足と言うほどでもない、角を曲がればサイトウの店もあるし大丈夫だろう。

酔っ払いの見送りを終え、店内に戻り片付けをしながらジルの姿を思い出し、考える。

どうにかならないものか。

酔っ払っても悩み続けるジルを見るたび強く思う。考えることが苦手なことは自覚している、しかし考えずにはいられないのだ。

背負ってきた袋に目をやため息をつく。今まで考え付いたことと言えば、十人が十人無理だと言うようなこの方法だけ。そして成果も上がっていない。

片付けを終わらせ袋を担ぎ外に出る。もう遅いがあいつのことだ、新しい魔具でも作っているのだろう。

おそらく駄目であろう今日の成果を確かめるため、重い足取りで店を出た。

面接失敗でクビとかないよね？

吸い込まれそうな青い空。さんさんと太陽光が降り注ぎ、涼しげな風が頬を撫でる。そんな思わず外に出て昼寝でもしたくなるような日に俺たちは――

「暇だねえ」

「暇だな」

暇を持て余していた。

ザックさんにラーメンの話を持ちかけた翌日。早くラーメン完成してくれと祈るもののそんな簡単に完成するわけもなく、俺たちは暇を持て余しながらも平常営業をしていた。

「このままでは眠ってしまうぞ」

うとうとした目にはつきりとしなない口調、アスが椅子にしな垂れ掛かりながらそう呟く。

「営業中だからそれは勘弁ね」

そう言って注意はするものの眠りたい気持ちはよく分かる。午前中はそれなりにお客さんが来てくれたのだが、昼食直後であるこの時間帯は人通り自体少なく仕事がない。接客も少なければ腹も満ち、

その上昼寝日和ときたら眠くならないほうがおかしいだろう。

お客は来ないかときよろきよろしている、こちらに歩いてくる人が目に入る。その人はゆっくり近づいてくるとカウンターの上に肘を置いた。

「よう、なかなか足掻いてるみたいじゃねえか」

「もちろんですよ」

前回同様きつちりとした格好をした赤髪のお客さんにそう答える。

「つつてもまだまだがな。この様子じゃ繁盛してるとは言いがたいんだろ？」

「あー、これから繁盛していく予定です」

「ならあそこで眠そうにしてるガキは起こしとけよ」

お客さんは軽く笑いながらアスに目をやる。視線の先にはうつらうつらと船をこぐアスが今にも椅子からおちそうな体勢で座っていた。

生憎窓から手が出せないの「アス、起きな」と声をかける。二、三度声をかけようやく覚醒した王女様に夕食減量を宣告。青い空に抗議の声が響く。

「醜態をお見せしました。ところで今日は何をお求めでしょうか」

「厳密にはなんか買いにきたわけじゃねえんだがな。冷やかしに来たのと少し聞きたいことがあって、な」

別にこれ自体はなんともない普通の会話。しかし空気が、変わった。

表面上は世間話をしていたときと変わらない様子でありながら、雰囲気はまるで商談のそれ。これからする話は世間話ではないと否応なしに認識させられる。

「……何でしょうか？」

「お前がエバンス商会に入った理由が聞きたい」

お客さんは人をくったような笑みを引っ込めると、少し目を細めこちらを見た。その目はごまかしを許さないという意味に満ちており、とてもじゃないが『少し聞きたい』といった様子ではない。

「……正直エバンス商会に入れてもらったのは成り行きに近かったです。でも後悔していませんし、恩あるジルさんの力になればと思います」

なぜそんなことを真剣に聞かれるのかは分からない。しかし嘘をつくまでもなく答えは一つだ。

それを聞くとお客さんは嬉しそうに、そしてどこか悲しそうに笑った。

「後悔してないならいい。突然悪かったな、侘びになんか買わしてもらおう」

「えーっと、ありがとうございます」

お礼を言った頃には先ほどまでの重苦しい空気はどこかに消え去り、お客さんが来た当初の雰囲気に戻ってた。あまりの変化に重い空気なんてなかったんじゃないかと錯覚しそうなほどだ。

「じゃあバナナとその桃ってやつをくれ」

お客さんはさんざん質問したあげくその二つを注文した。何があるかを詳しく聞かれ「大体何でもある」と答えるわけにもいかないので少々困った部分もあったが、危なげながらもなんとか魔法のことは秘密にしたまま説明できたんじゃないかと思う。

商品を渡すとお客さんは満足したようで、「じゃあな」と言ってお帰っていった。

「サイトウよ、少し危なかったのではないか？」

お客さんが離れていく姿を見ながらアスがそう話しかけてきた。おそらく先ほどの説明のことだろう。

「やっぱりそう思ったよね。今後のために何とかしておかないと」

質問を受けている最中にも感じていたが、商品リストのようなものでも作っておいたほうがよさそうだ。あらかじめリストを作っておくことで商品ラインナップが広がりすぎるのを防ぐことができるし、お客さんが商品を選ぶ際の助けにもなる。こう考えてみると今までなかったのが信じられないほどだ。

しかし完璧な作戦と自画自賛する俺はある事実気づきテンションが下がった。相変わらず俺は字が書けないのだ。

残念ながらアスもそこまで字がうまいわけでもないので、ジルさんの助けを借りることになるだろう。ジルさんの力になればと宣

言した直後に締まらないがこれについてはどうしようもない。

営業が終わったらアスにお使いに行ってもらおうと考え再び通りに目を向けた。

「お疲れさまでしたー」

お客さんが帰り、ちょうどいいぐらいの時間になったところで本日の営業を切り上げた。周りの店も片付けを始めておりどこに夕食を食べに行くかという会話が聞こえてくる。

本来ならば俺たちも夕食の支度に取り掛かる時間なのだが、今日は昼が早かったためかつい間食をしてしまい腹具合は微妙だ。

アスにも訊ねてみるが空腹というわけでもないらしい。ここで調理を始めてもいいのだが今はちょうどやることがあるので、もう少ししてから食べることにしよう。

「終わってすぐで悪いんだけど、エバンス商会までお使いに行ってくる？」

「話しておった商品リストのことだな？ 行ってこようではないか」

こうして頼んでいるのだが、実際のところエバンス商会は二階に上があればこの建物からでも見えるほど近い距離にある。なまじ目で見えてしまうがためにこんな距離でも頼まなければならないのがもどかしい。

「では行ってくるぞ」

手を振り出て行くアスを見送ると、俺は椅子に座り商品リストに載せるものを考え始めた。まずは今まで売ったことのあるものは確定で、後は安めのものを中心に。もちろん高級品もある程度用意して値段はこれぐらいにして……。

そうやってしばらく考えていると扉を叩く音が聞こえた。おそらくアスが帰ってきたのだろう。

「お帰りー」

扉を開け迎えるが、そこに立っていたのはミラだった。以前あったとき同様の無表情でじっとこちらを見つめている。

「ただいま」

「……ごめんなさい勘弁してください」

返答としては妥当なのだが無表情で言われるとダメージがでかい。前会ったときも感情表現豊かって感じじゃなかったから意識してやってくるわけじゃないだろうけど。

「……いらっしやいませ、かな？」

「何かを買いにきたわけじゃない。魔具について話がしたい。今、いい？」

ミラはそう言うと言と首を傾けこちらの様子を伺ってきた。俺としては別に構わないのだが夕食が微妙なタイミングになってしまう。遅らせたのが裏目に出たか。

「もう夕食済んだ？」

ミラはふるふると横に首を振る。

「俺もアスも夕食まだでさ、今から用意するからよければ食べた後でどう？」

「よろこんで」

快諾したミラを家の中に招く。とりあえず椅子に座ってもらい献立を考えるが……何にしよう。

「何か苦手なものとかある？」

「まずいもの」

そりゃそうだろうけども。

「食べれないものはないんだね？」

「おいしければ大丈夫」

ならば問題なし。じゃあ今日の献立は焼きそばにしよう。早めに行けるし失敗は少ないし。

魔法で材料を出しフライパンでいためていく。豚肉、キャベツに麺の順。

「む、なぜミラがおるのだ？」

フライパンの中でキャベツがしんなりしてきたころアスが扉を開けて入ってきた。当然のごとくノックはなし。考えてみればアスがノックをする可能性は性格的に低いわけで、己のうかつを改めて呪う。

「魔具のことで話があるんだって。あ、焼きそば作ってるから皿と出してもらえる？」

「う、うむ。任せておけ」

アスはいまいち状況が飲み込めてないみたいだけど俺も飲み込めてないから問題なし。夕食のときにミラが話してくれるでしょ。

焼きそばを作り終わりアスの出してくれた皿に載せる二人の待つテーブルに持っていった。ミラは相変わらずの無表情であり、アスは喜色満面で足と耳がぱたぱた動いている。――ここまで違うと面白い。

「じゃあいただきます」

冷めてはもったいないのでさっそく焼きそばを食べ始める。太麺にしつかりしたソースの味、野菜にもちゃんと火が通っており肉もそれほど硬くない。うーん、70点ってどこか。

二人のほうに目をやるとがつつ食べるアスとちびちび食べるミラが目に入る。

「口に合わなかったら残してくれてもいいよ？」

「そんなことない。とてもおいしい」

ミラはそれだけ答えると再び焼きそばを食べ始めた。
そもそもアスの食べるスピードを基準に考えていたのが間違だったのかもしれない。たしかにちびちびと食べてはいるが口に運ぶスピード自体は早いし、食べる顔からも嫌そうな感じもしない。もっとも表情は変わっていないという意味なのだけれども。

「それで話って何かな？」

食器の片付けも終わり一息ついたあたりでミラに切り出した。お茶を飲む音が止まる。

「あなたが出せる魔具について教えてもらいたい」

「……理由を聞かせてもらっても？」

「仕組みを知りたい」

思わず苦笑がにじみ、とりあえずお茶を啜る。はてさてどうしたものか。

「申し訳ないんだけど俺が出せるものは実際に出すまで簡単な説明しか分からないんだ。仕組みを知りたいなら分解すると思うんだけど、そうなるを買ってもらう形になるんだけどいいかな」

「構わない」

ミラは迷うことなく即答した。魔具自体がそれなりに高いことを

ミラが知らないはずないからきっとお金持ちなのだろう。――なんと羨ましい。

「ミラは裕福なのだな」

「ちょっと待って。そんなにたくさんあるの？」

ミラの表情が微妙に動く。

「まあそれなりには。十や二十じゃきかないのは確かだね」

この世界に來た当初は電気を使うものは出せなかったのだが、森を出る少し前に出せるようになったので数が大幅に増えた。その中には炊飯ジャーなどこの世界であまり需要がなさそうなものも含まれるが、大体のものはこの世界でも役に立ってくれそうなものだ。

「そんなにお金……ない」

それだけ言うとミラはテーブルに視線を落とした。

「もしかして全部分解するつもりだったの？」

問いかけるとミラは頷いて肯定する。一体どれだけ研究熱心なんだよ。

「俺もそこまで余裕があるわけじゃないからなあ。とりあえず興味がある分野のものだけにしてみたら？」

「……転移に関するものがいい」

ミラは俺の意見に頷いた後一息いれるとそう言った。その顔は若干真剣さの色が増したように感じる。

「ごめん、転移に関するものはないんだ」

俺の魔法で出せる生活用品は基本的に日本の製品がベースになっている。転移というトワープ装置にでもなるのだろうが日本に存在しない以上出せるはずがない。

「そう……」

「だ、大丈夫だぞ。他にも何か気に入るものがきつとあるはずだ！」

アスはそう言って落ち込んだミラを身振り手振りも使い必死に励ました。こちらが思わず笑ってしまいそうな必死さがミラにも伝わったのだろう。ミラ手を伸ばしアスの頭をぽふぽふと撫で始めた。

「ありがとう。そこまで落ち込んでたわけじゃない。サイトウの道具は興味深いから他のものでも十分参考になると思う」

撫でられるアスはその答えを聞き安心したのだろう、にっこりとミラに対し笑いかけた。

微笑ましすぎる光景に乾杯。

しばらくそうしているとミラは再びこちらを向いた。

「では普通のものと比較するため小さめのフリーズボックスを出して欲しい」

「了解。じゃあ（15,000）フォルになります」

ミラからお金を受け取るとその場で吸収し代わりに一番小さい冷蔵庫、もといフリーズボックスを出した。一番小さいといってもミラが持って帰るには少々重いだろうからまたアスにお願いしなきゃならないだろう。

「お買い上げありがとうございます。持って帰るのはアスも手伝ってくれと思うから安心して。俺はここから出られないから手伝えなくてごめんね」

と言っても実際のところは俺よりアスのほうが力が強い。いくら年下の女の子とはいえ獣人、一般的凡人の俺ではとても適わないのだ。――情けないことだが。

「また帰るときにお願いする」

「あれ、他にも何か用事があったの？」

俺の問いにミラは無言で頷く。

「あなたがジルのことをどう思ってるか聞きたい」

ミラが問いかけてきたのは昼にも聞かれたような質問。今日は俺の面接が組まれてたりするのだろうか？

冗談はさておきミラがこう言ってくる意図はなんだろう。まさか恋愛関係とかは言わないだろうから、おそらく知り合いとしての心配からくる質問のはず。

俺としてはジルさんに危害を加える気はさらさらなし正直に答えれば問題ないだろう。

「ジルさんはとても気持ちのいい人だと思ってるよ。ジルさんのと

ここで働くことになって全然後悔してないし、恩もあるからできる限り力になりたいね」

「どのぐらい思ってる？」

「この店は任せたって無茶振りされてもまだ思ってるぐらいかな」

ミラは一瞬遠い目をした後、「それだけ思ってるれば十分」と言った。

「それがどうかしたの？」

「あなたに手伝ってもらいたいことがある」

ミラは机に乗り出すようにしてこちらを見つめた。ジルさんのことについて聞いたのだから当然ジルさんにも関係することだろう。まさか無茶振りされたから手伝って欲しいとか？

事実さっきまで魔具についての話をしていたわけだからその可能性は十分にある。なんてこったい。

「えっと……何を？」

「ジルを助けて欲しい」

弛緩していた空気が一気に引き締まる。椅子に座りなおしミラに向け口を開く。

「どういうこと？」

ミラは真剣な面持ちでエバンス商会について話し始めた。

あれ、俺だけ役立たずっぽい？

「あなたたちはエバンス商会についてどこまで知ってる？」

ミラはあくまで確認するように訊ねてきた。

ある程度のことは当然知っているという前提なのだろうが、生憎俺はエバンス商会についてほとんど知識を持っていない。始めに土地をもらえる上ジルさん本人も優秀そうだったため、恥ずかしながら何とかなるだろうと楽観的にしか考えていなかったのだ。せいぜい知っていることといえば、サンライズを中心に活動していることと不動産を扱っていたらしいということぐらいだろうか。

「いや……実はほとんど……」

「そう……。それなら何も知らないつもりで話す」

申し訳ないがそうしてもらおうほかない。せめて一言も聞き漏らさないようにと集中して耳を傾ける。

「エバンス商会は、ジルの祖父がサンライズに設立した商会。主な業務はマナの輸入」

「マナって魔具を作るために使う魔法の＜キー＞だっけ？」

「そう。付加系魔法の＜キー＞の中で一番効率がいい霊草。ただこの辺りでは育たないので手に入れるには別の国から輸入してくるしかない」

俺とアスは理解を示すため頷く。

「マナを必要とする魔具は生活になくてはならないもの。エバンス商会はマナの輸入で成長を続け、最盛期にはサンライズのマナ市場を独占するほどになったらしい。でもその栄光もダミス——現市長が来たことで終わりを告げた」

「何か圧力があつたの？」

「違う。ダミスは魔法を持っていた。マナを生み出す創造魔法を」

創造魔法。その単語を聞き、思わず動きが止まる。当然のことながらダミスという人と俺は何のかかわりもない。しかし感情的に同じ魔法を持つ人間と仲良くするようなことができるのだろうか。そう思い始めると考えは悪いほうにどんどん流れていく。

本当はジルさんやミラたちは俺のことを嫌っているんじゃないだろうか。そんな思考が頭の中を回り始め、頭の中がぐちゃぐちゃになっていった。

必死に何かを口にしようとしても出てくるのは意味を持たない音ばかり。

「落ち着いて。あなたとは関係ない。だから気にすることじゃない、誰もあなたを嫌ってなんかいない」

ミラは俺の目を見てゆっくりと、語りかけるようにそう言った。アスも椅子から立ち上がりぽんぽんと俺の背中を叩いてくれる。

初めて聞くミラの穏やかな声と背中に感じる心地良いリズムで激しかった鼓動も止み、徐々に落ち着き始めてきた。

なんとも居た堪れない気持ちでアスとミラにお礼を言うと、アスから「明日はご馳走だな」との返事。軽く笑いを漏らす頃にはもう完全に落ち着いていた。

「ごめん、話の腰を折っちゃったね」

「……話を戻す」

ミラはコホンと咳払いを一つして再び話し始めた。

「ダミスの魔法で出されるマナはサンライズで販売されていたものより安く、エバンス商会はマナの輸入から撤退せざるをえなくなった。輸入に関してマナしか取り扱っていなかったエバンス商会はこれを契機に衰退していくことになる」

そこまで話終えるとミラは一口お茶を含んだ。

「衰退してからでも輸入に関しては別のものを輸入することでそれなりの利益を上げた。でもサンライズ内の事業に関してはダミスに負けていき軒並み駄目になった」

「……それでどうなったの？」

「ジルの父は借金をし事業を始めるものの失敗。今は借金を返すため別の町で商売をしている」

……ジルさんは一体どんな気持ちで働いているのだろう。考えるだけで胸がつまる。

だからか、「お金が必要でなかったら取引をしようと思わなかった」と言っていた獣人の人たちと取引を始めたのは。

「ダミスというものはなんということをするのだ！」

アスが怒ったような、悲しいような顔をして机をどんと叩く。

「落ち着いて。確かにエバンス商会は追い詰められてしまったけど、ダミス側のしたことは商売として問題ないことばかり。そのことで責めるのは間違ってる」

ミラは平静な声で答えるが表情は硬い。商売として問題ないことは分かっているけど納得はできていないのだろう。その心情がありありと伝わってくる。

気持ちには痛いほど分かるがここで沈んでいてもどうにもならない。意識して明るい声を出し質問をする。

「そういえばどうしてエバンス商会はマナしか輸入してなかったの？」

「サンライズは近くの鉱山でテルミナ鉱石が大量に採掘できる。だから魔具産業が盛んで需要があった」

「でもマナは<キー>の中で一番効率がいいって言ってたのに、そんなに使うものなの？」

そう言う途端にミラは怪訝そうな顔になった。

「魔具の作成や魔力付加にマナは必要。何を言ってるの？」

「えっと……その……」

「もしかして魔具についてもほとんど知らない？」

ミラの問いかけに頷いて答える。穴があったら入りたいとはこう

いう気分のことを言うのだろう。いや、それどころか穴を掘ってでも入りたい気分だ。

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、ミラは淡々と説明を始めた。

「魔具はテルミナを中心に各種回路を刻んだ金属を組み合わせたで作られる」

ミラはローブからライターのような魔具を出し分解し始めた。中からいくつかのパーツを取り出し俺に渡す。

「魔具の性能は回路と金属の組み合わせで決まる。ファイアボックスなら太陽の回路とテルミナ、鉄の組み合わせが最適とされている」

渡されたパーツを良く見ると何か光る線が書かれていた。おそらくこれが回路なのだろう。

一通り見終えパーツを返すと分解された魔具は再び組み立てられ、机の上に置かれた。

「でもこれだけではただの置物。ファイアボックスなら燃料として炎の魔力を付加することで初めて動く」

「フリーズボックスなら氷の魔力ってこと？」

ミラは頷いて肯定し、魔具をローブにしまった。

「回路を作るときも魔力を付加するときも付加魔法は必要。だからテルミナが採掘でき、魔具の作成が盛んなこの町はマナの需要が大きかった」

「ありがとうございます。よく分かりました」

座ったまま机の上に土下座するような感じに頭を下げ感謝を示す。顔を上げてミラを見ると表情に変化なし。ちよつとやりにくい。

「すまんサイトウよ、難しい話が多くて疲れた。一度休憩せぬか？」

アスのほうを見るとたしかに少し疲れていそうだ。ミラのほうに目をやると頷いてくれたので、休憩することにして甘いものでも取りに行く。

探したけれど適当なものが見つからないので、試食用に出しておいた果物をフリーズボックスから取り出し持って行った。事実残り物なので悪い気がしないでもないが、痛んでるわけでもないし今から出すよりも冷えている分おいしいので勘弁してもらおう。

そんなことを考えながらテーブルに戻るとコミュニケーションをとろうと奮闘するアスに淡々と返事をするミラ、といった状況に出くわした。

会話を聞く限りコミュニケーション自体は取れているのだが、ミラの無表情と端的過ぎる返答がネックになっていいるのだろう。アスは俺が椅子に戻ると微かに助かったというような表情をみせた。

「よく冷えた果物だよー」

おどけたような声を出し果物をテーブルに載せると、二人ともお礼を言って手を伸ばした。

「アスちゃんはいいい子」

三人で果物をつまんでいるとミラがそう呟いた。

「う、うむ」

なぜそう言われたのか分からないのだろう、少々驚いた様子でアスが答える。

驚きながらも肯定するあたり、「さすがアス」と思わないでもない。

「どうしたの急に？」

「果物を取りに行ってくれている間に話してそう思った」

「あの会話の中で我の良さに気づくとはなかなかやるではないか」

アスが当然だとばかりに胸を張った。褒めてもらった理由が分かったから得意そうにし始めたのだろうけど、そんなことをしていると微妙な評価になるんじゃないだろうかと余計な心配が頭を掠める。

果物を食べ終わり一息つくともミラが再び話し始めた。

「状況としてはさっき話した通り。どうにかお金を稼ぐ手段を見つけてエバンス商会を助けたい」

「……状況は分かったし助けてあげたいけど、恥ずかしながら何をしたいのか分からないよ」

もちろん恩あるジルさんを助けてあげたい。しかし商会を立て直すような大きな話になってはうまく想像すらできない。

「私も商人じゃないからそんなに分かってるわけじゃない。ただ魔具士としてマナに関わっているから、マナの輸入をどうにかできればエバンス商會が立ち直るのは分かる」

ミラは決意に溢れる目で語る。

「だから私は長距離転移を可能にする魔具を開発している。それで輸送費を抑えることができればダミスに十分対抗できる」

何がミラをそこまで駆り立てるのかは分からない。しかし何が何でも開発するという意思はしっかりと伝わってくる。

「それで転移用の魔具がないか聞いてきたんだね」

「創造魔法ならもしかしたらと思った」

ああ、ジルさんのためにここまで頑張っている人がいるのに恩ある俺が動かないなんて嘘だろう。

「分かった。俺もなにか考えてみるよ」

「我也だ。何とかしてやろうではないか」

少し目を潤ませたアスも頷く。

「ありがとう。ジルを助けてあげて欲しい」

ミラは椅子から立ち上がり帽子をとると、深々と頭を下げた。

「また息抜きがてら遊びに来てね」

「歓迎するぞ」

「……ありがとう」

ミラは帽子のツバを下げうつむくと、いつも通りの平坦な声でそう言った。

「このことはジルには言わないで欲しい」

「どうして？」

「転移用の魔具はまだ完成の目処が立っていない。このことを言えば完成するまでの間ジルはずっと気に病む。それにザックのしていることもばれるわけにはいかない」

一体どこまでいい子なんだろう。どうしようもなくミラを撫でてあげたい気持ちに駆られる。会って二回目ではさすがに自重するが。

「ところでザックさんって何してるの？」

「魔物の森でマナの代用品を単独搜索」

俺とアス、そろって噴出す。

「ザックとはバカか、バカなのか!？」

「否定は不可能、する気もない」

「魔物の森って危ないんじゃないの？」

「危ないなんてものではない。人間の単独搜索などもはや自殺行為だ！」

アスのあんまりな言いように苦笑しながらも以前会ったミケを思い出す。

人を超える大きさに鈍重さを感じさせないしなやかな動き。ミケは穏やかだといっていたが、仮に襲い掛かってきた場合を考えると……うん、無理。

「あのバカにとっては自殺行為でないらしい。何度言ってもやめない上、毎回大きな怪我をすることなく帰ってくる。心配は無駄だと悟った」

「……でもミリアに頼めばいいんじゃない？」

「頼めるところは頼んだ後らしい。バカが行くのはミリアが探索できない危険なところ」

「……ミリアの行けぬ所で単独搜索か。もう我はザックを人間とは認めんぞ……」

何かに疲れたようにアスはため息をつく。

「ミリアって無敵のイメージがあったけどそうでもないの？」

「単純な戦闘では強め、と言ったところだな。捌め手を使えばかな

りのものだし、我はいくら強くなっても勝てる気がしない……雰囲気的に」

イメージに変更なし、っと。

そんな会話をしているとミラがおもむろに口を開いた。

「ただあのバカもバカなりに評価してあげて欲しい。森に行くことも自分にできることなんてこれぐらいだからと決めたことだし、店を休みにしてまで搜索に行っている」

前にザックさんは店をちよくちよく休むと聞いていたけどこれが理由だったらしい。本当にジルさんはいい仲間を持ったものだ。

「……なんとも優しいバカではないか」

アスの言葉に俺も笑って頷く。

「そろそろミラも帰ったほうがいいよ。アス、悪いけど送ってあげてくれないかな」

「うむ、任せておけ」

女の子に付き添いを頼むというのも相当あれだが、アスは獣人なセーフということにしておらおう。不甲斐ないけど。

そんなことを考えながらミラとフリーズボックスを頭に載せたアスを見送った。



月の明かりと窓からの明かり。その二つで頼りなく照らされる夜道をアスちゃんと二人で歩く。

「——というわけだな、ベイビーバードは大盛況だったのだ！」

「そう。私も一度食べに行ってみたい」

なんて気の利かない返事だろう。自分で言っていて呆れてしまう。

私は人と話すのがうまくない。ううん、はっきりと苦手。

笑っていても無表情と言わるし普通に喋っても不機嫌なのかと言われる。直そうと努力もしてみたけれど結局どうにもならなくて、随分前に諦めた。

だから誰かと二人でいても無言でいることなんて珍しくなかったし、会って間もない人と普通に話をする事なんてほとんどなかった。

なのに——

「うむ、ミリアに頼んで一緒に行こうではないか！」

この子はどうしてこんなに良くしてくれるのだろうか？

私と話しても楽しくないことなんてもう分かっているはずなのに……。

静かな夜道に話し声が染み込んでいく。明るく楽しそうな声に暗い抑揚のない声。それはセフィラス魔具店に着くまで続いていた。

「ここが私の家。お礼にお菓子を渡したい」

「心遣い感謝するぞ！」

扉を開いてにこにこ嬉しそうなアスちゃんを店の中に招き、ほとんど使われていない店舗部分を抜け工房まで案内した。人に入ってもらったことなんてほとんどない工房はお世辞にもきれいとはいえない。机の上のごちゃごちゃとしたものをどけフリーズボックスを置いてもらい、奥から発掘してきた椅子に座ってもらった。

「なかなか面白い場所だな」

アスちゃんは足をぷらぷらさせながら工房を見回した。

「そういつてもらえると嬉しい。いろいろ見せてあげたいけど今日はもう遅いから帰ったほうがいい」

工房にあるお菓子箱からお勧めのものをいくつか取り出しながらそう言った。興味を持ってくれたのなら是非説明してあげたいけど、あまり遅くなってはサイトウも心配するだろう。ここは我慢。

「そうだな。また来たときに見せてもらおう」

『また来たとき』。それはサンライズに来るまで商人にしか言われたことのなかった言葉。

私の作る魔具が目的で来る人達が言っても嬉しいと思ってしまった言葉。

そんな言葉をアスちゃんに言ってもらって嬉しくないはずがなくて、

「歓迎する」

『満面の笑み』がこぼれた。

「ではな、また来るぞ」

「うん」

まるで友達のように手を振って見送る。その動作は別れを表すはずなのに、できることがとても嬉しい。

アスちゃんが見えなくなるまで手を振り、暖かな気持ちで工房に戻った。

「私、幸せ」

ポスンと音を立てて作業椅子に座り一言呟く。

『絶対後悔させないよ!』

その言葉とともに連れてこられたサンライズでの生活は、後悔するどころか感謝することばかりだ。嫌がらせをしてくる魔具士の同僚もいなければ、私のことを『魔具を作る魔具』としてしか見ない商人もない。それどころか優しくしてくれる人達に会うことができたこの生活を幸せ以外になんと表せようか。

「だから今度は私がジルを幸せにする番」

思考を切り替え、作業台の上に載っている魔具に目をやった。

転移系魔具。それは長い間数多くの魔具士たちが挑戦したにも関わらず、未だ完成されない最高難度の魔具の一つ。転移系魔法の使い手が少ないこともさることながら、転移の魔力が魔具に定着しないことが最大の原因である。どんな回路、どんな金属を試しても転移の魔力はうまく定着してくれないのだ。

かく言う私もそれを解決することができず、開発はそこから一步も進んでいない。――借金の回収まであと一年しかないというのに。

もしかしたらできないのではという不安を吹き飛ばすように頭を振り、金庫の中から白金を取り出す。先日届いたこの金属は魔具の材料の中でも特別に高価な貴重品だ。

――昨日設計した回路と白金ならできるはず。

成功してくれと思いを込め、白金に回路を刻み始めた。

あれ、俺だけ役立たずっぽい？（後書き）

全然書けない時ってあるんですね……。
非常に遅くなって申し訳ないです。

結局食べきった俺。頑張ったと思う。

ミラからジルさんのことを聞いた翌日。俺が悩みを一つ持ったからと言って世界は変わることもなく、いつもと変わらない清々しい朝が訪れた。

窓を開け澄み切った空気を部屋に取り込み眠った頭を覚醒させる。大あくびしながらも着替えを終えた頃には完全に目が覚め、王女様を起こすために部屋を出た。

「アスー、朝だよー」

なぜ今日に限ってアスを起こすのかと問われればアスに頼まれたからと答えるほかない。

昨日ミラの店から遅くに帰ってきたアスは朝起きれるか不安だったのだろう。俺に朝起こしてくれるよう頼んできたのだ。

「アスー、ご飯できたよー」

これで起きたら面白いなと思いながらも一度声をかけるが反応がない。よほどぐっすり寝ているようだ。

このまま寝かしてやりたい気もするが頼まれた以上は起こさねばなるまい。

ガチャリと派手に音をたてて部屋に入った。

「起きなー」

声をかけながらベットにずんずんと近づいていくがまるで反応なし。……この子、森で暮らしてたんだよねえ？

あまりの無防備さに呆れ、布団を引っぺがしてやろうかと企むが

いざ寝顔を見るとそんな気も失せてしまった。

「悩み、なにそれおいしいの？」と言わんばかりの幸せそうな寝顔。時折ぴくりと動く犬——狼の耳が日本にいた頃にはなかった、なんとも言えない和みを提供してくれる。

「なんだか……ねえ？」

布団を引っぺがすという無体な方法をとる気はなくなってしまったが、こんな寝顔を見ているとなんとなくからかってやりたい気分になる。

とりあえずは気の向くままにほっぺをつまんでみた。

できもの一つないすべすべとした手触りにもっちりと感じるつまみ心地。うん、これは世界を狙える。

ふにふにと至高の触感を楽しんでいたが素晴らしい時間は短いもの。「んっ」という声と共に起きたアスと目が合った。

……やべえ、ミスった。

心境を表す感想としてこれ以上のものはない。

眠っている女の子の部屋に入っている。これは起こすという理由があるから問題ない、はず。じゃあ現在進行形でつまんでいるほっぺは？ ……正攻法での勝ち目はないだろう。

「おはよう。今日もいい天気だよ」

できる限り自然に手を放し、自分史上最高の爽やかさなんじゃないかと思う笑顔であいさつする。

もちろん現状に対する質問の機会なんて与えてはいけなない。幸いアスはまだ頭が回っていないようだからなんとかなるはずだ。

こすこすと目を擦るに対し、心の中でファイティングポーズをと

る。

「……うむ、いい朝だな。ところでなぜ我の頬をつまんで——」

「まったく、何回声かけても起きないんだもん。困っちゃったよ」

「……すまん。それはさておきなせ——」

「あ、もうこんな時間か。ご飯作っとくから着替えて降りてきてね」

やましきなんて一片も感じさせない……ことを希望する笑顔で言いたいことだけ言うとは颯爽と扉から出て行く。よし、完璧だ。

扉を閉め冷や汗を拭うと危機を乗り切った開放感を胸に階下に向かった。

「さて朝食の支度でもしましうかね」

本日のメニューはご飯、漬物、味噌汁に昨日の残りの焼きそば。大体朝はこんなメニューで、「こんな生活感のある異世界なんぞあっていいのか」とか以前は突っ込みたいたい気分になっていたものだ。ずずずと味噌汁をすするアスを見たとき諦めたけど。

そんなどうでもいいことを考えながら朝食の支度をしているとドンドンと扉を叩く音が聞こえた。

こんなに早くお客さんでも来たのだろうか。多少の期待を持って扉を開けるとつぼのようなものを持ったザックさんが立っていた。

「早くに悪いな、じゃまするぞ」

「はぁ、とりあえずどうぞ」

訳が分からないがとりあえず扉を開け中に招く。

「なんだ、立派な朝飯ができてるじゃねえか」

「まだ準備途中ですよ。ところでこんな朝早くどうしたんですか？」

「ああ、じつは――」

「む、ザックではないかどうしたのだ？」

ザックさん丁度喋ろうとしたタイミングでアスが着替えを済ませ降りてきた。始めは不思議そうにザックさんを見ていたのだが、一体何に気がついたのだろうか。途中で鼻をひくひくさせたかと思うとやけにいい笑顔を見せ始めた。

「その大なべには何が入っておるのだ？」

「いい鼻してるな。サイトウに聞いたラーメンの試作ができたから持ってきたんだ」

ふたを開け見せてもらうと確かにスープのようなものが入っていた。そこまで熱いわけではない上アスとなべの距離はそれなりにある。にもかかわらず香りでもって反応するとは……これが獣人の力ということかっ。

「うむ、では早速味見しようではないか」

「いいのか？ サイトウの奴がすっかり朝飯作ってくれたみたいだぞ？」

「ふつ、我を誰だと思っておる。誇り高き森の王女アスフェル！
どちらも食べてみせようぞ！」

ザックさんはそれを聞くと大笑いを始めた。

なんと余裕溢れる態度だろうか。俺なんか「いや、王女関係なし」というツツコミをこらえるのに必死だというのに。

「そりゃいい！ ならぜひ食べて感想を聞かせてくれ」

どうやらこの流れは俺も食べないわけにはいかなさそうだ。以前のザックさんの様子を見るに食べ残しは絶対に駄目だろう。朝は小食なのになあ……。

「さあ、食ってくれ！」

朝食を食べ終えたタイミングで、俺たちの前に圧倒的威圧感を持ったラーメンが置かれる。いや、決して不味そうという訳ではない。ただ胃袋が完食は無理と訴えているだけだ。

「ではいただきます！」

アスはそんな俺を尻目に、まるで好敵手に会った戦士のような笑

みを浮かべラーメンに取り掛かった。

「ん！」

一口食べ固まるアス。なんだなんだと覗き込むと再びはふはふと食べ始める。様子から察するにどうやらお気に召したようだ。

……アスを観察してないでそろそろ俺も食うか。

目の前で湯気上げるラーメンに手を伸ばした。

「あ、おいしい」

食べてみて思わず感想が口から出る。見た目がしっかりしていたからある程度は期待していたけど、これは想像以上だ。材料はこちらのもので作ってもらったので俺が知っている味とは違うが、とにかくおいしい。日本で出てきても問題ないレベルだ。

「そうか、うまいか！」

「大体の作り方を教えたとはいえ、ここまでのものをこんなに早く作ってもらえるなんて思いもしませんでしたよ」

「なに、他のスープの作り方を応用しただけだ。麺は完全にお前任せだしな」

他のスープを応用したといってもこのラーメンを作るためには料理の腕はもちろんのこと、相当のセンスも必要はず。以前は戦士が天職なんじゃないかと思っていたが、どうやら本格的に認識を改めなくてはいいけないらしい。

「いえ、それでもザックさんの腕は想像以上でした。この味なら言

うことなしなのでがんがん売っちゃってください」

お互いにやりと笑いながらしっかりと握手を交わす。
決めのシーンなのに横から「美味だった」と空気を読まない声がしたのはご愛嬌。

「じゃあ材料買ってつてもいいか？」

「もちろんですよ。むしろこちらからお願いします」

もともとこちらはそれ目当てだったのだから断わる理由なんてケラも存在しない。

ザックさんと相談し、とりあえず百食分ほどの材料を買ってもらうことになった。

「そうと決まればちゃっちゃと出しちゃいますね」

机の上に清潔な布を敷き麵を出すスペースを確保。そしてその間にアスが適度な大きさの樽を店の奥から持ってくる。

この辺りは慣れたもので、もはやアイコンタクトすら要らないコンビネーションに仕上がっている。

鍛え上げられたうちの従業員さんに満足感を味わいいつも魔法を発動。布の上に麵を、樽の中に醤油を出していく。

「いつ見てもすげえ魔法だな」

何回か見ているはずなのだがザックさんが腕を組み、呆れたように呟いた。

「いやいや、そんなことないですよ」

ザックさんに返事を返すが別にこれは日本伝統の謙遜でもなんでもない。

そりゃ確かにこの場面だけ見たら何もない空間から食材が出てくるすごい魔法だろう。しかし実際はお金もしっかり払っているし外出のできない呪い付き。そんな裏方火の車っぷりを現在進行形で体感している身としては、『そんなことない』どころか『絶対違う』と断言したいところだ。

「お前からしたらそりゃそうだろうな」

ザックさんは苦笑しつつ、ひょいと食材と空になったつぼを持つ。もうそろそろ行くつもりなのだろう。

「ザックさんこれからどこいくんですか？」

「市場で他の食材を仕入れてから店に戻るな」

まだ市場に寄っていくということはザックさんの店は昼からということだろうか？

そんなことを考えていると、ふといい考えが頭に浮かんだ。

「申し訳ないんですけどアスも市場に連れて行ってくれませんか？」

「ん？ 別に構わんぞ」

まさに即答。

ザックさんにも予定があるだろうし、獣人であるアスを市場に連れていけばバレた時に何らかの面倒ごとになるかもしれない。そん

な懸念もあり正直駄目もとでのお願いだったのだが、予想外なほどあっさり連れて行ってもらえることが決まり軽く笑みがこぼれる。

「待つのだサイトウよ。我はおぬしが働いておる最中にのうのと街に出ている気はないぞ！」

かと思ったら横からアスの突っ込みが入った。やはり人生そう思い通りにはいかないらしい。

「いやそれは前も聞いたけどさあ……」

アスがこうやって町の散策を拒否するのは初めてではない。店に来てくれたお客さんからの誘いは論外としても、ジルさんの店の人の提案も断わっているのだ。

俺を氣遣ってくれることは確かに嬉しい。しかし今度の休みには森に帰っているいろしてこなくてはならないので、アスの言い分をそのまま聞いていては町の散策はまた随分延期ということになってしまう。

「第一我がいなくては売上が落ちるのではないか？」

得意げに、そして意地悪そうにアスが笑いかけてくる。

事実アスは少々偉そうながらも可愛げのある接客に加え、一度来てくれた人が道の前を通れば声をかけ商品を買ってもらおうという荒業までこなし、ひれ伏して感謝しなければならぬほどの貢献を見せているのだ。そんなアスが抜ければ確かに売上は落ちるだろう。

——しかしまあ、引けない時というのものもあるわけで。

「……うん、決めた。アスにはやっぱり市場に行ってもらおうよ。で、

売上の落ちた分をカバーできるぐらいの発見をしてきてもらいます。
ちなみに業務命令なので悪しからず」

語尾に音符でも付きそうな口調であるか怪しい、いや確実でない
命令権をを振りかざす。

そのままちらりとザックさんに視線を移しアイコンタクト。あらかた事情を察してくれたのだろう、ザックさんもいい笑顔を返してくれた。

「おーし、アス！ 業務命令なら聞かなきゃいかんぞ」

ザックさんは未だ混乱しているアスを担ぎ上げると食材を持ち、
有無を言わさぬ速度で店から出て行った。

彼女の旅に幸多からんことを。台所にあつた手ぬぐいで目元を押さえてみた。



普段とはまるで高さの違う視点。がやがやと活気溢れる人の多い大通りをザックに担がれ進んでいく。

正氣に戻った直後は暴れたものだが、がっちりと固められた腕はびくともせずわずか数秒で無駄を悟った。

小さい頃は不届き者に連れて行かれないよう注意しろと父上に言われたものだが、まさかこの年になってから連れて行かれるとは。恥ずかしくてとても誰かに話せるものではないな……。

「ザックよ、もう逃げたりせぬから下ろしてくれ」

「やっと観念したか。ほれ」

意外にも丁寧に地面に下ろされ視線がゆっくりと元の高さに戻る。地に足を着け何度か足踏みし前を見ると、少々真面目そうな目をしたザックがこちらを見ていた。

「まったく逃げようとしなくたっていいじゃねえか。街に出るのが嫌なのか？」

「……そうではないのだ」

道の真ん中で止まっている訳にも行かないのだろう。ザックに促され歩きだし、ぽつぽつと話し始めた。

「我だって始めて来た人間の街なのだ。いろいろな者と話してみたいし、いろいろな場所を見てみたい」

昨日だってベットに入ってしばらくはミラの店までの街並みや会話を思い出し、なかなか眠ることができなかった。

「だが我は街に出ることができてもサイトウは出ることができないのだ。それなのに我だけがこのこと街に出て楽しむなどできるはずがなかろう」

今でも覚えておる。森で畑を作ったとき、柵の外に出ることのできなかったサイトウの悲しそうな顔を。

一通り話し終わるとザックと二人、無言で足を進めていく。回りの喧騒もどこか遠くに聞こえるような沈黙の中、おもむろにザックが口を開いた。

「そんな難しく考えなくてもいいんじゃないか？」

「なっ……!!」

予想外の言葉に思わず足を止めザックのほうを向く。我の心境など全く気にしないようにザックはそのまま言葉を続けた。

「俺が見る限りサイトウはお前に街を見てきて欲しそうだったが違ったか？」

「いや、その通りだと思うぞ」

この街に来てからたびたび勧めてくれるうえ、今だって半ば無理やり送り出してくれたのだ。おそらく間違いないだろう。

「そしてお前は街を見て回りたかった」

「……うむ」

「なら話は簡単だ。お前が街を見て回ればいい」

「……………は？」

さも当然とばかりにザックが言う。

「まったくいつもこいつも難しく考えすぎなんだよ。行かせたい奴と行きたい奴がいるなら問題なくそこで解決じゃねえか」

あまりに簡単な答えに呆然としている我を無視してザックは喋り続ける。ジルだって遠慮しすぎだとか何とか。

話を聞いてもらっておるのか話を聞いてやっておるのか分からなくなってきた頃になると、なんだかうだうだと考えおったのがバカらしくなってきた。

そもそもここまで来てしまっている時点で街に出てしまったことに変わりはないのだしな。

「ザックよ、あの店はなんだ？」

ザックがなにやら言っておるのを無視して疑問を投げかける

「ん？ あれは服屋だな。なかなか仕立ての腕がいいと評判だぞ」

「ザックよ、あれはなんだ？」

「あれは中央時計だな。よく待ち合わせに使われる……って急にど

うした？」

我が突然質問し始めたのが不思議なのだろう。怪訝な顔で訊ねてくる。

「ふふん、我は散策を楽しむことに決めたのだ。ザックも覚悟するがよい。どんどん質問していくぞ！」

我がそう答えると何が面白いのか、ザックは大きな声で笑い始めた。人がやる気を出したというのに、まったく失礼な奴だ。

「そうだぞ、それでいいんだ！　よし、どんどん答えてやるから質問してこいやあ！」

ほほう、言ったな？　我は人間の街に来るのは初めてで分からない物だらけだからな、遠慮はせぬぞ。

それに……売上を補える発見をせねばならんからな！

まずは――

「ザックよ！　あれはなんだ？」

結局食べきった俺。頑張ったと思う。（後書き）

お久しぶりです。

憶えてくださっている方はいらっしやるでしょうか？

明日の朝は頑張って起きねばな。

「毎度あり、またよってくれよ！」

野菜を大量に買っていったザックに、少し太った店主が声をかける。

おそらく常連と言っても良いぐらいの間柄なのだろう。ザックは「値引きしたら考えてやるぞ」とぞんざいに返し、店主も「釣りはいらねえぐらい言ったら考えてやるよ」とそれに応じる。

そんな言葉通りでない、気安くふざけた会話を聞いていると思わず頬が緩んだ。

森では立場ゆえ親しくもどこか遠慮した関係が多かった我だが、この街でこんな会話ができるようになるだろうか？ 新たな地での新たな可能性に思いを巡らせていると自分が話していた訳でもないのになんだか楽しい気分になり、笑いながら店主に手を振った。

「俺は店に戻るがお前は どうする？」

何件か回り買った肉や野菜といった大荷物をこぼさないよう、首だけこちらに向けザックが問いかけてきた。

「我はまだ他のところもを見て回ろうと思う。世話になったな」

せっかく街に出てきたのだからザックの店で昼食を食べたいとは

思っているが、時間的にまだ早い上、朝食をしつかり食べたこともあり今はまだ食べる気分ではない。腹ごなしも兼ねて適度に散策し、昼を少し過ぎた辺りでザックの店に行けばちょうど良いぐらいだろう。

「おう。じゃあ俺は行くが昼は絶対うちに食いに来いよ！ 場所はこの道をしばらくまっすぐ行って曲がったところだ。まあ、分かんかったらそこら辺の奴に聞きゃ何とかなるだろ」

なんとも雑なセリフを残すとザックは笑いながら店があるという方向に歩きだし、角を曲がりすぐに見えなくなった。

「さてどこへ行ったものか」

ザックと別れ一人になると腕を組み呟く。

ザックの話によるとサンライズに来た当初に聞いたサンライズ鉱山や市長の家は、行っても外から見ることしかできずつまらないらしい。山を掘り石を探すという鉱山や、この街のいわば王であろう市長の家は一度見ておきたかったものだが外からしか見えぬのでは仕方がない。今日のところはザックの勧め通り中央広場という所に行くとするか。

もと来た道を振り返り、建物の上に文字盤をのぞかせる中央時計の下を目指し足を進めた。

「おおっ！」

さまざまな物からの誘惑を振り切りやつのことでたどり着いた我を待っていたのは、他の場所とは一線を画す活気を見せる露天の集まりだった。狭いスペースにこれでもかというほど商品を並べ、目立ったものが者が勝ちだともいうように声を張り上げる商人たち。客も良いものを探すためいくつもの露天を見て回り、じつと商品を見ていたかと思うと値段交渉で店主と激論を交わす。森ではありえない、まるで狩りのような熱気を放つ商売の場がそこにはあった。

「露天が我を呼んでおるわ！」

そんな光景を見ていると居ても立ってもいられなくなり、早速露天の一つに駆け込んだ。

「らっしゃい！ 満を持して王都からやってきた首飾りがありますよ！ 見てってくださいな！」

「うむ、見せてもらおうぞ」

王都からやってきたという言葉に若干の期待を持ち、台の上に載る首飾りに目をやった。

……が果たしてこれは良いものなのだろうか？ 激しい主張をする石がいくつも付けられており、確かに豪華な印象は受けるがセンスがないと感じてしまう。こんなものを自信満々で紹介しておるとはもしかしたら人間と獣人とは感性が違うのかもしれない。

自分の中で結論を出すと早々にその露天を後にした。

その後はふらふらと何件もの露天を回ったが始めの店とは違い軒並み満足のいくものだった。

中でもさまざまな模様の織物を売っていた露天は格別で、飾り布

を一枚買ってしまうのも仕方のないことと言えよう。

買った飾り布を脇に抱えながら八件目に入る店を探していると、前方の露天に人が集まっておるのが見えた。

「おいてめえ、もういっぺん言ってみろ！」

「一回で聞き取れボケが。詐欺師は消えろつつったんだ」

なにやら大声が聞こえてくる。気になって人垣を掻き分けていくと、以前店に來た赤髪オールバックと店主であろう髭づらの男が言い争っているのが見えた。

「俺が詐欺師だと！？」　　言いがかりつけてんじゃねえ！」

どうやら赤髪が店主のことを詐欺師だと言い、店主がそれを怒っているらしい。

それにしても詐欺師とは穏当でないな。一体どうしたというのだろうか？

「お前さっきこの客にそれをアコルって言ったよな」

「物を知らねえ奴は黙ってろ！」

「へえ、これがアコルなあ？」

そう言つて赤髪は筋の入った長細い木の実を取るとひどく面白そうな、バカにしたような笑みを浮かべた。

「アコル。西方に分布する香辛料で主に肉料理の香り付けに使われ

る。特徴的ながら上品な風味で西方や王都の富裕層を中心に人気が高い」

途端、店主の顔色が変わる。

「そんなアコルだが一つ注意すべきことがある。それはアコルという香辛料だ。見た目がアコルに似ていて、味もまあ……アコルのような感じがすると言えなくもない」

「こ、これがアコルタだって証拠がどこにある！」

「筋五本がアコルで六本がアコルタだろうが。そこまで言わせんな」

迫力に押されたのか赤髪が言い切ると店主は言葉を詰まらせ黙ってしまった。我は筋が五本だからどうしたといったことは分からぬが、雰囲気から察するに赤髪の言うことが正しく店主が嘘をついていたのだろう。

一連の会話を聞いていた客が怒りを顕わにし、店主に騙そうとしたのかと怒鳴り散らし始めた。

「もうすぐ兵士どもが来るだろ。言いたいことがあるなら商人ギルドの奴でも呼んでもらって言ってみたらどうだ？」

赤髪がそれだけ言うところ以上の面倒はごめんだとばかりに人垣を掻き分け歩き始め、周りの者たちも興味を失ったのかばらばらと散らばりだした。

もしかしたら再び露天巡りをするより赤髪に話かけた方が面白いかも知れんな。

そんなことを考え赤髪を後ろを追いかけた。

「その赤髪の者よ、待つのだ」

足の長さのせいか小走りになりながらも赤髪に追いつき声をかける。

「……それは俺に言ってるのか？」

赤髪は足を止め辺りを見回した後、めんどくさそうな顔をしてこちらを向きそう言った。

「うむ、先ほどの様子を見ていたが騙されようとしている者を助けるとはやるではないか」

ずっと見ていたわけではないだろうに騙されようとしている者に気が付く技量といい、強面の店主にそれを問いただす心がけといい見事なものだ。そう考え心からの賛辞を送ったのだが、赤髪が何かに気が付いたような顔をして放った言葉はひどいものだった。

「ああ、エバンスのところで眠ってたガキか」

よし、落ち着こうではないか。

「……よく聞こえなかった。もう一度言ってくれぬか？」

「ああ、エバンスのところで眠ってたガキか」

「……そういえば自己紹介がまだだったな。我が名はアスフェル、アスと呼んでくれ」

「そうか、ガキ」

「……ぬおおお！」

確かに名乗ってもいない身なれば一回目は許そう。しかし私の言葉の意図を察したであろう後に言った二回目、完全に笑うのをこらえておった三回目は明らかにわざとであろう！ 無礼者、無礼者めっ！

「痛え、痛え！ 悪かったからそう叩くな！」

まったく、なんと口が悪いのだ。きっと先ほどのことも騙される者を思っていたことでなく、店主の方が気に入らなかったなどの理由でしたに違いない！

我が叩くのをやめると赤髪は目元を拭いたあとバカに真面目な顔で話しかけてきた。

「失礼、リトルレディ。あなたがあまりに可愛らしかったものでつい調子に乗ってしまいました」

確かにその姿は赤髪の容貌も相まり様になっており、心底謝っているように見えるのだろう。しかし――

「この期に及んでそんなことで誤魔化されるわけなからうがー！」

さんざんからかわれた我からすれば謝罪どころかそれはまさにか

らかいの一環。迫真の演技ゆえにかえって信じづらく、あまりの胡散臭さに鼻が駄目になってしまいそうだぞ！

「あー、悪い悪い。あんまりからかいやすそうだったからつい調子に乗っちゃった」

元から誤魔化す気すらなかったようですぐに胡散臭い喋り方を止め口調を直す赤髪。そんな捻くれた性格だからぞんざいな口調が似合いすぎておるのだ。真面目に喋るたび周りの者から失笑されてしまえ。

「まったく、調子に乗りすぎだ。我ほど寛容でなければ決闘が始まっておるぞ」

「随分な力で叩かれた気がしたんだがな。随分寛容なことだ」

「オホン……我も名乗ったのだからそろそろ名乗って欲しいのだが？」

赤髪は腰に手を当て喉で笑う。

「それもそうだな。俺はアルドⅡヴェルニス、アルドでいい。よろしくな」

少し腰を曲げ差し出された手は先ほどの態度からは信じられないほど気のいいもので、意外なほど自然と握ることができた。

「結局お前は何で俺を呼び止めたんだ？」

「先ほどの露天での行いを褒めたかったのと、なぜそんな似合わぬことをしたのか気になってな。だがそれについては分かったからもう良いぞ」

どちらともなくふらふら歩き始めやっと本題に入った。

これまでの恨みをのせて言葉の中に嫌味を混ぜるが、そんなものはどこ吹く風とアルドはまったく気にしていない様子だ。

「へえ、お前に会ってから理由を言った憶えはないんだがな。どんな理由だと思ったんだ？」

「どうせ人助けでなく店主に腹が立ったとか太陽が目に入ったとかそんな理由に決まっておるわ」

自分で考えついた理由だが不思議なほど違和感なく思える。むしろこのタイミングで「騙されそうな人を放っておけなかったから」など言われてもまるで信じられん。

「くくっ……あながち間違っただけから始末が悪い」

おそらくこやつはクセなのだろう。また腰に手を当て喉で笑っておる。

「まあそれはいいとして、お前は今の時間に何やってんだ。店開いてるんじゃないのか？」

なんだその笑みは。もしや我が仕事を抜け出してこの辺りをうろうろしておったと思っておるのではあるまいな。

「我はサイトウに頼まれ商売のためになるものはないかと探しておるのだ。暇そうにしておるおぬしとは違うわ」

「そりゃ悪かったな。まあ許せ」

「うむ、分かればよいのだ」

半ば理由付けのようにサイトウがくれた目的だが思わぬところで助けられた。こやつの前で目的もなくふらふらしていたと言おうものならどんなことを言われるか分からんからな。サイトウよ、感謝するぞ。

とはいえこの理由を盾にするのもサイトウの善意を利用しているようで心苦しいものがある。これ以上何か言われる前に早く話題を変えよう。

「ところでアルドは一体何をしておるのだ？」

「俺もお前と同じようなことだな」

「なんだおぬしも商人だったのか」

「……似たようなもんだな」

そう言うときアルドは苦笑を漏らす。

なるほどだからアコルという植物についてもあそこまで詳しく知っておったのか。

アルドに質問しながら露天見学をしていたのだがこやつの説明が簡潔すぎることもあり、しばらくすると広場を一周して我が入って

きた辺りまで戻ってきた。一通り露天も見て回りいい時間になったのでそろそろ行くかと思ったところに首飾りを売っていた店が目に入る。

「アルドよ、あの店で売っている首飾りは本当にそこまで人気があるのか？」

それを聞きアルドはそちらに目をやると興味を無くしたかのように目を逸らしこちらを向いた。

「少なくとも俺は知らんな。というかそもそも人気があるとは言ってねえだろ、あれ」

「満を持して王都からやってきたのではないか？」

「満を辞すってのは十分に準備をして機会を待つって事で人気があったから来たってことじゃねえよ」

なんと！ ……だが確かに言われてみれば必ずしも人気があるという意味にはならんな。まったくなんと紛らわしい言葉遣いをするのだ。

「あの店には文句を言いに行かんのか？」

「『勘違いする人がいたら可哀相だから』ってか？」

むむむ。まるで私の心を読んでおったかのような、嫌味溢れる返答をしてくるでないわ。

「あれぐらいは店側の経営努力だ。あんなもんにまで文句言ってた

ら息苦しくて仕方ねえよ」

「ふーむ、そんなものか」

森でも商売しているものはおったが、あんなことを言っておらんかったからいまいちしくり来ぬな。だがまあここは森ではなく人間の街なのだ、それぐらいの違いはあつて当然だろう。

「アルドよ、世話になったな。我はもうそろそろ昼食に行こうと思うがおぬしはどうする？」

「俺はまだ行くところがあんだよ。ガキはさっさとどっか行つてろ」

「ええい、うるさいわ赤髪よ！」

この期に及んでまたガキ呼ばわりとはなんと無礼な奴だ。もう一度叩いてやろうかとも考えたがアルドの言葉を思い返し手が止まる。アルドはまだ行くところがあると言つておった。それはつまり行くところがあるにも関わらず我に付き合ってくれたということ。もちろんあやつも露天をすっかり見ておったから我に付き合うためだけに回っていたわけではないのだろうが、余計に時間がかかったのは間違いない。

そんなことを考えておると叩く気がどんどん無くなっていくが、かといってガキ呼ばわりされた後に再び礼を言う気にもなれん。

しばし固まりどうすべきか考えた後、アルドにくるりと背を向け歩き出す。うむ、その礼ということで先ほどの無礼を許してやることにしよう。

自分が文句を言つた後という事実を頭の隅に追いやり若干足を速めると逃げるようにその場を後にした。

中央広場を離れておよそ二十分、やっこのことでザックの店にたどりついた。ザックから説明を受けたところまでは問題なく進めたもののまったく知らぬ道はそうはいかない。不安になり歩いていた者に聞いてみると道が一本違う始末。これはザックに一品奢ってもらわねばな。

ザックの店である＜闘魂亭＞に入ると、昼には少々遅い時間だというのに多くのものが食事をしていた。皆幸せそうに料理を食べていることからこの店が繁盛しているだろう事が分かると言うものだ。

知っている者がうまく知っているのを見て嬉しくないものはいまい。

周りの客の顔に目をやり、笑いながら店の奥に進んだ。

「おう、アスじゃねえか！ 遅かったな！」

「そう思うならもっと詳しく場所を言っておかぬか」

カウンターの奥から声をかけてくるザックに返事をする。

それを聞くとザックが反応するよりも早くカウンターにいた者たちが笑い始めた。

「お前また適当な道案内したのかよ！」

「俺もお勧めの店聞いたとき、まっすぐ行けばまあ分かるだろとか言われたもんなあ」

どうやら前にも同じようなことがあったらしい。なんともザックらしいと言うべきか。

「それにしてもこの子はどうしたんだ？」

「確かに、こんな可愛い子とお前の接点がるで思いつかん」

「そいつはこの前できたエバンス商会の新しい店舗で働いてんだ。お前らの食ってるラーメンもその店で材料買ってんだぞ」

ザックの言葉を聞き見てみると確かにこの者たちの手元にはラーメンの器が置いてあった。改めて見回してみるとこの客たちのほかにもラーメンを食べているものはちらほらいる。

味から考えれば当然のことだが、なかなか人気なようで何よりだ。

「そうなのか！ いや、見慣れない物ばっか売ってるらしくていまいち行く気になれなかったんだが今度行ってみるよ」

「そうしてくれ、歓迎するぞ」

「アスちゃんだっけ？ 俺も行くから歓迎してくれー！」

「うむ、ただしちゃんと買っていくのだぞ？」

「お前らそれぐらいにしとけ。アス、お前もそろそろ注文したらどうだ？」

言われてみれば店に入ってから話してばかりでまだ注文していなかったな。

カウンターに座り壁にでかかど書かれている日替わり定食を注文する。

「あいよ！」

大声でザックが答え料理を作り始める。

料理を待つ間はこうしたものかと思っていたのだが、先ほどの客が親切にも話しかけてきてくれ全く退屈することはなかった。

その客はこの街に来てまだ日が浅いことを話すといろいろな場所について説明してくれ案内までかってでてくれたが、さすがに初めて会った者にそこまで迷惑をかけるのも悪いので礼を言いながらも遠慮する。相手もやけに残念そうにしながらも笑いかけてくれた。

「日替わり定食お待ち！」

ザックが間を割るように定食を出し話は一時中断となった。出された定食はいい匂いをさせており早く食べろと訴えてくるようだ。

「ではいただくぞ！」

食器を持つと定食の願い通り早々と料理に取り掛かった。

「じゃあな、また来いよ！」

威勢の良いザックの声に送られ＜闘魂亭＞を後にする。食べ終わった後もつい話を聞いてしまい帰るのが遅くなってしまったな。

もうそれなりの時間になってしまったため大回りしながらも直接家に歩を進める。

今日聞くことのできた話は非常に興味深い物が多く最後まで全く飽きることなく聞くことができた。

中でも絶対に見ておくべきと言って紹介してくれた場所は特に興味深く、迷惑も考えず話してくれた者に案内を頼んでしまいそうになったほどだ。

さまざまな物に目をやりながら歩いていると日が傾きかけた頃に家までたどり着いた。改めて家を見ると我だけが楽しんでしまったという罪悪感のようなものが頭をもたげるが何とかそれを押さえ込む。

サイトウはきつと我が遠慮しながら帰ってくることを望んではない。ならば我がすべきことは申し訳なさそうにすることではなく、サイトウが楽しくなれるよう面白い話をたくさん聞かせてやることだろう。

扉を開け家に入ると笑顔のサイトウが我を迎えてくれた。その笑顔には卑屈なところはまるでなく、ただ純粹に我を迎えてくれ今日は楽しかったかと語りかけてくるようだった。

その気持ちが嬉しくて、その心が好ましくて。我は自然と表情をゆるめる。

「さあ、サイトウよ。話したいことがたくさんあるぞ。覚悟するが
良い！」

明日の朝は頑張って起きねばな。(後書き)

たくさんのお言葉ありがとうございます。
どうぞこれからもよろしくお願いします。

お久しぶりでございます。

「準備は良いかしら〜？」

椅子に座るミリアが問いかけてくる。

改めて店内を見回して確認する。定休日の看板は出したし、鍵もしっかりかけた。火の元は問題ないし頼まれていることもない——うん、問題なしと。

「はい、よろしくおねがいします」

今日はサンライズに来てから初めての休日ということで、王様への報告や『ベイビーバード』の食材補給も兼ねて森に帰ってゆっくりすることになっている。別に森を出てからいくら経っているわけではないのだけど森のみんなに久しぶりに会うような気がしてとても楽しみだ。

「じゃあ手を繋いでね〜」

椅子から立ち上がったミリアはこちらに歩いてくると、俺とアスの間に入り二人の手を握る。

「行くわよ〜」

「うむ、頼むぞ！」

ミリアはあまりしないような真面目な顔をすると目を瞑り集中力を高めた。一呼吸、周りに光る円が現れ光が舞い上がる。それらが

一瞬強く光ったかと思うと、周りが森の景色に変わっていた。

「＜森の境＞に到着よ」

「ああ……ほんとだ。やっぱり転移魔法ってすごいなあ」

以前サンライズに行くときにも転移魔法は体感しているのだが、それでもやはり驚きは隠せない。ミラが転移の魔具を作ろうとしているらしいが、確かにそんなものが実現したらエバンス商会を立て直すことぐらいいけないだろう。

「確かにそうなんだけど万能って訳でもないのよ？ 私の転移魔法はこの森の近くでしか使えないしね」

「そうなの？」

「サンライズぐらいまでなら何とか使えるんだけど、あんまり離れたちやうと転移できる距離が本当に短くなっちゃうの。それに転移は連続で使うこともできないわ」

確かに制約もなく場所に構わず転移ができるならジルさんが放っておくはずないか。

それにしても転移なんてすごい魔法のわりにはやけに制約が軽い気がする。こちらなんか家から出られないなんて呪い染みたものなのに……。そこのところどうなんでしょう、神様？

「じゃあもうそろそろ転移できるから＜ミケの丘＞に行くわよ」

「＜タマの丘＞かあ。久しぶりにタマに会えるかな？」

「あの場所は＜ミケの丘＞だぞ？」

「あそこで魔物ミケにタマって名前付けたよね？ だから俺の中ではあそこは＜タマの丘＞なんだ。そう＜タマの丘＞」

森の住人たちからすれば＜ミケの丘＞で当然広まっているだろうし、いきなり何を言い出すんだという感じだとは思うけどしっかり主張しておく。大切なことだから繰り返しも忘れない。

始めは不思議そうな顔をしていたアスとミリアだが、俺がタマを溺愛していた様子を思い出して納得したのだろう。おかしそうに笑いながら理解の色を示す。

「ふふっ。じゃあ改めて＜タマの丘＞に行くわよ」

くすくすと笑いながらミリアが手を差し出す。今回の転移は先ほどのように集中することもなく気軽な雰囲気が漂う。おそらく森の中ということや距離的に短いということが大きいのだろう。手を繋ぐと一呼吸置いたりすることもなく＜タマの丘＞に転移した。

転移の光が収まり視界に入ってきた＜タマの丘＞は、以前来た時とまるで変わりにく豊かな自然に溢れていた。そりゃ大して期間も開いていないし当然といえば当然なのだが。

「タマー！ 出ておいでー！」

いつもこの場所にいるわけではないだろうがとりあえず森に向かって呼びかけてみた。この場所に来たのにタマに会えないなんて悲しすぎる。

呼びかけてしばらくすると森の中からガサガサと音がし始めた。

音の感じから行っても相当に大きい。来てくれたかと期待してみていると森の中から一匹の黒猫が現れた。

「なっ……！」

俺は思わず声を漏らす。その猫があまりに美しすぎたのだ。ビロードのような美しい毛並みに端整な顔立ち、その上にある耳は形よく尻尾は優雅な曲線を描いている。まさに美猫。非の打ち所のない美猫だった。

「ほう……！ 全身が高貴なる黒とは……もしやミケの王族か！？」

「……おそらくそうね。私もこの森に暮らして長いけど初めて見たわ……！」

後ろのほうでアスとミリアが何か話しているようだが俺の耳には入らない。俺の関心は目の前の黒猫に注がれっぱなしである。

とりあえず撫でてみようと思えば飲み込み、ふらふらと光に群がる蛾のように猫様に近づいた。

猫様は森から出てきた後、背筋を伸ばし座ったままじっとこちらを見ている。残念ながら頭には手が届かなかったため、その美しい前足を撫でようと手を伸ばしたが――ぺしん。尻尾ではたかれた。

「!？」

驚愕しながら目を上に向けると猫様が「気安く触るでないわ」とでも言いたげな目でこちらを見ていた。その姿はあまりに堂に入っており、見ただけで気高さ、高貴さが感じられる。

猫様を見つめたままわなわなと震えていると再び森の中から音が聞こえてきた。

ニャーオ。

現れたのは白猫である我らがタマ。愛らしい姿は今日も健在だ。
黒猫様から視線を外しタマに駆け寄ると顔を抱いて撫で始める。
タマも俺のことを覚えててくれたのか嬉しそうに鳴いた後、顔を摺り寄せてくれた。

ニャー。

この世の春を満喫していると後ろのほうから鳴き声が聞こえる。
振り返ってみてみると先ほどの黒猫様がこちらに歩いてきてタマに声をかけていた。

ニャーン。(黒)

ニャー、ニャーン。(タマ)

ニャン、ニャーオ。(黒)

俺には分からないがなにやら会話をしているらしい。もしかしたら二匹はお友達なのだろうか？

「王族であろうミケとあそこまで親しそうだ？　タマとは一体…」

「分からないわ。ただ普通のミケとは一線を画することだけは間違いないわね……」

黒猫様とタマはしばらく会話をするとこちらに視線を投げかけて

きた。ドキドキしながらも見詰め合っていると黒猫様のほうがこちらに歩み寄ってくる。

（また尻尾ではたかれるのか？ いや次は猫パンチかも……くらっても大丈夫だよね？）

猫パンチなぞくらったら一発でノックダウンさせられてしまうのではないかと不安になりながらも黒猫様を待ち受ける。そんな俺の心配をよそに黒猫様は優雅に近づいてくると、スッと俺に向かって前足を差し出した。何かよく分からないながらも片膝についてしゃがみ、両手を差し出し前足をそこに乗せていただく。

一般的な常識からしてみればそれは黒猫様がお手をしているように見えるだろう。しかし俺からしてみればそう、まるで王女様に手の甲を許していただいたかのような感じを受けた。とりあえず感覚の赴くまま前足に口づけするふりをして敬愛を示してみた。

ニャーゴ。

するとどうだろう、黒猫様は一鳴きすると前足を俺の頭の上にぽふんと置いてくれたのだ。

「もしかしてタマが何か言ってくれたのか？」と感動する俺から黒猫様は前足を下ろすともう一鳴き。そうするとその鳴き声に応じるかのように森のあちこちから三毛模様のミケが姿を現した。

「……まさか囲まれておったとはな。まるで気づかなかったぞ」

「温厚とは言えさすがは魔獣と言ったところね……！」

二人が何か言っているようだが俺はミケたちが黒猫様を中心とした隊列を組むのを眺めながら「そういえばミケと言いながら三毛模

様見たのは初めてだなあ」とか「三毛猫はほとんどオスいないって言うけど、このミケたちは女性部隊みたいな感じなのかなあ」といったどうでもいいことをボケっと考えていた。

ニャー。

隊列が組み終わると黒猫様がこちらに目をやり語りかけて（？）きた。別段敵意のようなものも感じられないし「何をしに来たのか」とでも聞いているのだろうか？

首を傾げながら考えているとアスとミリアが進み出てきて黒猫様に答えた。

「我は獣人族の王女、アスフェルという。今回は移動の最中に立ち寄っただけでそなたたちと争う気はない」

「私は獣人族のミリアと申します。王女のおっしゃる通り私たちはあなた様方と争う気はなく、むしろ友好的関係を築きたいと考えております」

バカに丁寧な言葉遣いが気になるが、二人の言葉を聞くに黒猫様は用件を聞いているようで間違いないのだろう。今度ミケ語の聞き取りについて教えてもらおうと心に決め俺も会話の流れに加わった。

「私はサイトウユウと申します。私としましても是非友好的関係を築きたいと考えております。つまらないものですがこれをお納めください」

友好的な関係を築きたいとか堅苦しい感じで言っておいて贈り物なしというのも格好つかないだろう。そんなことを考え創造魔法を發動させると、くわえて運べるような帯付きのかばん出し中いっぱい

にマタタビの実を詰めた。

ミケたちはいきなり現れたかばんにざわざわとしていたが、黒猫様が指示をだし一匹のミケがかばんに近づく。ミケは前足と口を器用に使いかばんを開けると中の匂いを嗅ぎ始めた。

にゃあーん。

匂いを嗅いでいたミケが突然とろんとした声で鳴き始める。酔っ払ったような表情はいかにもマタタビを嗅いだ猫のもので、やはり大きくても猫は猫だと自らの考えに確信を深める。しかしさすがはお付きっぽいミケということだろうか。そのままごろんと寝転がっても良さそうな状態から首を振って表情を元に戻すと、かばんの口を閉め大事そうにくわえ黒猫様のところに運んでいった。

ニヤツ、ニヤニヤニヤ！（ミケA）

ニヤーオ？（黒）

ニヤーニヤ！（ミケA）

「ユウくんすごいわ。調べたミケが素晴らしいものって大絶賛してるわよ」

笑顔のミリアが耳打ちしてくれる。確かに気に入ってくれただろう事は雰囲気で分かるんだけど、素晴らしいものって言うてくれているのは分からない。いや、ほんとにミケ語の聞き取り教えてください。お願いします。

ニヤー。ニヤニヤーニヤ。ニヤン。

「気に入っていただけたようで幸いです。それでは本日はこの辺りで失礼いたします」

黒猫様が俺に何か語りかけると言葉が分からない俺に代わってミリアが返事をする。俺も言葉が分からないなりに失礼にならないよう黒猫様に頭を下げた。

ミリアはその姿を確認してから俺とアスの手を握り転移を開始する。そうして光が舞い上がった次の瞬間、俺たちは浮遊感と共にベイビーバード二階の住居スペースに転移していた。

「って転移しちゃ駄目じゃん！」

「な、何だサイトウ……何か忘れ物でもしたのか？」

「そうじゃなくって！」

ミリアの自然な話し運びに流されてしまったけど、せっかくタマが会いにきてくれたというのに遊ばずに帰るなんてなんという失態。しかもマタタビをタマにはあげていない。ああっ、タマがへそを曲げてしまったらどうしよう！

「ユ、ユウくん落ち着いて。とりあえず深呼吸して……ね？」

セリフのたび空中にツツコミをするほど錯乱していたが、ミリアの言葉に従い深呼吸をしていたら落ち着きを取り戻してきた。とはいえ残念なことに変わりはなく微妙に肩のラインが下がる。

「二人ともごめん。ちょっと錯乱してたみたい」

「あそこまで興奮したサイトウは初めて見たぞ……」

確かに自分でもあそこまで混乱するのは珍しいと思う。きっとミケたちは魅了とかその辺の魔法を標準装備しているに違いない。猫の姿に魅了の魔法とは人類に抗う術のないなんとも卑怯な組み合わせだが、そうであれば俺の混乱も納得いく。しゃーない。

「皆さん帰ってきたのですかな？」

「ミックよ、久しいな！」

「お久しぶりです。転移で飛んできといてあいさつもせず騒いで申し訳ありません」

階段を上がりこちらに声をかけてくるミックさんにあいさつをする。

転移でやってきた側だったので気が回らなかったが、急に現れておいて騒ぐなんて配慮が足りなすぎる。ミックさんからしてみれば突然二階から音が聞こえて一体なんだと思ったことだろう。

「いえいえそんなに気にしないでください。今日帰ってくるとは聞いていましたし……慣れておりますからな」

定年間際の老刑事張りの哀愁を漂わせるミックさんに口元を押さえる。……あなたも某狐さんの被害者だったんですね。これいっそ被害者の会でも作ったらなかなか有意義な——こともないな。背後から聞こえる笑い声に道を踏み外すのを防いでいただきました。

「とりあえず店舗に移動してはいかがですか？　何か飲み物でも準備しましょう」

ミックさんの提案を受けぞろぞろと階下へ移動する。見慣れた、というほど長く住んでいた建物ではないのだが階段を降り辺りを見回すとなんともいえない安心感に満たされた。

大きな目のティーポットに入れられたたっぷりの紅茶をみんなで飲みながらミックさんが焼いたクッキーに舌鼓をうつ。クッキーは甘すぎず硬すぎずつい最近までクッキーを知らなかった人のものとは思えないほどの出来栄だ。

「このところ『ベイビーバード』の営業はどうですか？」

「大きな問題もなくうまくいっていますよ。本当に楽しく働かせてもらっています」

ミックさん曰く今までほとんど自分の楽しみのためにしか料理を作ってこなかったが、ここで誰かのために料理する喜びを知ったとのこと。引継ぎを頼めそうな人として半ば強引に頼んだ気がしないでもなかった俺としてはそう言ってもらえんとすごく嬉しく、ミックさんがいてくれてよかったと笑みがこぼれる。

「さて、私はそろそろ下ごしらえに戻らせていただきますね」

「俺も手伝いますよ」

「いえいえ、サイトウさんは座っていてください」

このままではミックさんと押し問答が成立してしまいそうになったので、とりあえず食材の補給ということで厨房についていく。久しぶりに入る厨房は以前と変わらないどころか少々きれいになっており、ミックさんが大切に使用してくれていたことが伝わってきた。

た。

なんとなく嬉しい気分になりながらカゴやフリーズボックスの中に食材を次々補給していく。これだけ出しておけば一週間はもつだろうというだけ出し終わると下ごしらえをしているミックさんに近づいていった。

「これってビックベアーの肉ですか？」

「はい、試しに醤油を使って煮込んでみましたらとても美味しくなりました。それからは店の方でも出しているのですよ」

他にも調理台の上には俺の知らない食材が「あ、おいしそう」と思えるものから「人間には無理そうですね」というものまで数多く並んでいた。中でも特に目を引いた蛍光ピンクのキノコはクセはあるが一度なれるとやみつきになるのだそう。それってダメな成分入ってるんじゃないかと心の底から心配になったが、この森では昔から食べられているキノコでおかしくなった人もいないらしく一安心。これを初めに食べた人はきつと餓死寸前だったのだろうと名も知らぬ先人に思いを馳せた。

それから給仕をしにきたモールやミリアから連絡を受けたというグランさんとあいさつを交わした。

大した期間離れていたわけでもないし当然といえば当然なのかも知れないけど二人とも元気そうで何よりだ。給仕をしているモールが華がなくなったと文句を受けているらしいが……まあ問題ないでしょう。

しばらく話していると営業時間になりお客さんがやってくる。ミ

ツクさんは遠慮していたがせっかくなので久しぶりに厨房で働かせてもらった。調味料などの配置は変わっていなかったものでそれなりにできたと思うのだが、予想以上に厨房を使いこなすミックさんに正直あせる。ウサギハンドに負けてたまるかど気合と根性で何とか頑張るが肩を並べるのが精一杯。サンライズに戻ってから料理を続けようと心に決めた。

戦々恐々とした営業が終わるとアスは家に帰り、ミリアとグランさんは仕事に出かけた。そして俺はというとミックさんやモールと一緒に仕事の疲れを癒すため紅茶を飲みながらのんびりしている。昼の時点でやるべきことがなくなるなんて久しぶりで、まだまだ体力的にも余裕がある。せっかくミックさんもいるので前々からの懸念事項について切り出してみた。

「ミックさん、申し訳ないんですけど俺に読み書きを教えてもらえませんか？」

「それは構いませんが……いえ、何でもありません。共通語でよろしかったですか？」

なんでも森では昔からなぜか知らないが共通語と呼ばれる言語が使われているらしい。ミックさんも世界中を旅したわけではないので詳しくは知らないそうだが、どうやらこの言語は広く大陸中で使われておりこれさえ覚えておけばほとんどの場合大丈夫だそうだ。英語一つ覚えるのにもひーひー言っていた俺としてはなんともありがたい話である。

「はい、共通語をお願いします」

「分かりました。では今日はメニューを使って勉強しましょうか」

生憎この家には紙もペンもなかったので庭に出て小枝片手に練習を始めた。

練習していくうちに分かったのだがどうやら共通語はローマ字に近いようなルールをしているらしい。無論特殊な使い方や例外もあってそこまで簡単というわけではないが、現状としてすでに話すことができているので大学で第二言語を勉強し始めたときのような絶望感はない。

「なかなかサイトウさんは物覚えがいいですね」

「こ……そうですか？　ありがとうございます」

日本では10年以上もこういった勉強をしていたため、「こういうものを覚えるのは慣れてるんですよ」と思わず口走りそうになるが何とかとどめる。なにせその後、「ほう、一体どのようなことをされていたのですかな？」とか話を繋げられたら目も当てられない。

「ほんとに早いと思いますよ？　俺なんてここまで覚えるのにどれだけかかったか……」

なにか恐ろしいことでも思い出すかのようにモールが震えながらそう言った。なにやら呟いていたので耳を傾けると「兄さんも覚えてないからって晩飯奪わなくなつて……」など数々の恨みが聞こえる。おそらく過酷な家庭環境なのだろう。不憫に思い……聞かなかつたことにした。弱い俺を許してくれ。

「さて、こんなところですか。今日はこのぐらいにしておきましようか」

「そうですね。ありがとうございました」

「いえいえ、楽しい仕事を紹介していただいたほんの恩返しですよ」

一通り教えてもらったところで今日の授業はお開きになった。久しぶりに頭を酷使したのでなんだかぼーっとしてしまう。

こんなときには甘いものということで、途中でリングの手入れに向かったモールも呼んでお礼も兼ねたティータイムにした。

「んー、やっぱり疲れたときには甘いものですねー」

「今日はかなり詰め込みましたからな。まあゆっくり覚えていけばよいですよ」

「そうですね。そんなに一気にやるなんてサイトウさん真面目すぎですって」

そうは言っても店を開いていながら読み書きができないというのはいかなものか。幸い魔法やジルさんのサポートのおかげでなんとなつてはいるものの早く覚えなければいけないところだ。そして何か読んでもらうときアスに、「やれやれ我が助けてやろうではないか」的な空気を出されるのも大きな問題である。君に分かるかあの屈辱がっ。

「では私はそろそろ帰らせていただきますでしょうか。明日は会えないでしょうがサイトウさん、頑張ってください」

「じゃあ俺もそろそろ帰りますね」

少々なごり惜しいがこれ以上引き止めるのも悪いので、授業の礼にバナナやオレンジといった森では出していなかった果物を渡し二人を見送った。

二人の姿が見えなくなり部屋の中に戻るが先ほどまでと違い静かだ。おまけにいい具合に傾いている太陽がもの寂しさまで演出している。なんの嫌がらせだろうか。

「アスは王様のところだし今日は俺一人か」

なんとなく口に出して現状を確認する。別に寂しいなど言うつもりはないが、サンライズにいる間ほとんどアスと一緒にいたので静かな部屋になんとか違和感を感じる。

自分でもアスに毒されすぎかと思うが、違和感を感じることができるだけでもきつとありがたいことなのだろう。呪いで外に出られない俺は一步間違えればこれが日常になっていたのだから。

「あー、やめやめ」

時化り始めた思考を首を振って頭の外に吹き飛ばす。まったくこんなこと考えてるのを知れたらアスになにを言われるか。きつとありがたくもイラッとするような言葉をいただけるのだろう。

そんな光景を想像しくすくすと笑う。

「それにしても今から何をしたものか」

一人となれば誰かと話すこともできないし、日本にいたころこの場でできるような趣味は持っていなかった。棚に置かれたオセロが手招きしている気がするが無視。さすがに一人オセロは正気に戻ったとき精神が崩壊しかねん。

しばらく考えた末、あらん限りの労力を使って料理を作ることにした。無駄に手間暇かけたアスの食べたことない料理、頑張って作ったりしようか。

アスがどんな反応をしてくれるか楽しい妄想を巡らせながら、料理に使うにんじんを星型に切り始めた。

実は俺たちってスキャンダルだらけ？

翌日は定休日でもないのに、アスとミリアがやってくるとすぐにベイビーバードを出発した。ここからサンライズまでは結構離れているだろうに、転移のおかげで早起きする必要もなくなんともありがたいことだ。

中継で＜タマの丘＞まで行ったときにはタマや黒猫様を呼びくなくなるが我慢し、万一にも安眠妨害にならぬよう静かにサンライズまで移動した。

店まで移動するとミリアは用事があるらしくすぐに森へ帰って行った。何でもいろいろ採集の依頼を受けているらしく今日は忙しいんだそう。これはまた今度油揚げのフルコースでもご馳走せねば。

ミリアを見送るとアスともども開店準備を始めた。この辺りは二人とも慣れたもので、特に声を掛け合うこともなく自然と決まっていた自分の仕事を黙々とこなしていく。

「おう、今日はしっかり営業してるみたいだな」

「当然であろう。店を無断で休むわけにはいかんからな」

窓口の内側を掃除しているとなにやら外から声が聞こえてきた。このドスの聞いたザックさんだろう。外を覗くと案の定、絶対にケンカしたくない巨体が見えた。

「どうだ、昨日はしっかり休めたか？」

「おかげさまで元気いっぱいですよ。今日はどうしたんですか？」

「ラーメンの材料を売ってもらおうと思ってな」

なんと、それは嬉しい。類似品すらないまったく新しいラーメンがこんなに早く売れるとは。きつと店でかなりプッシュしてくれたのだろう。

「ありがとうございます。量はどのぐらいにしましょうか？」

「そうだな……三百食分ぐらい頼む」

「さ、三百ですか？」

森での経験しかないためよく分からないが、二回目の仕入れで三百なんて俺としてはびっくりするほど多く感じる。本当に売れ残ったりしないのだろうか？

「おうよ。またそのうち買いに来るぞ」

ザックさんは嬉しそうにガハハと笑う。

「そんな売れるなんてどうしたんですか？」

「まあラーメン自体がうまくいったのが第一だな。あと初日に運よくフィオナが来たんだよ」

「フィオナ？」

なんでもフィオナとは新聞記者のようなことをしている人らしい。週に一度彼女によって発行される新聞は別に政治や経済を扱ってい

るわけではなく、サンライズ内で彼女が面白そうと思ったことが書いてあるんだそう。それで新聞として成り立っているのか不安になるが、すでに一年以上続いているということなので俺が心配するまでもなく大丈夫なのだろう。

「お前も興味あるなら新聞とってみたらどうだ？」

ザックさんはそれだけ言うとは荷物を負い忙しそうに帰って行った。

「ラーメンとかいうやつ材料とりあえず二十食分！」

「俺は三十食分だ！」

「皆のもの一列に並ぶのだ！ 横入りは許さぬぞ！」

一体これは何なんだろう。

開店間近になるとどこからともなく人がやってきて、どこかの店で売り出しでもやるのかと思っていたらうちの前に並び始めた。

頬を引っ張ってみる。……うん、夢じゃない。

「サイトウよ、遊んでいないでさっさと働くのだ！」

「イエッサー！」

店員さんに注意され慌てて再起動。くっ、これではまるで俺がお手伝いさんではないかっ。

ばたばたと店内に入り魔法を発動。この流れならおそらくほとんどの注文がラーメン関係だろうと予想し、多めに創造して運んでいった。

「お待たせしました。二十食分です」

「なあにいちちゃん。ラーメンの作り方大体でいいから教えてくれよ」

「スープの中に茹でた麺を入れた料理です。スープのベースには醤油や味噌、塩なんかが有名です」

ちなみに諸々の関係でとんこつはなし。

後ろに人も並んでるので手早く説明していく。

「後はいろいろなものからダシをとったりして研究してください。あとは＜闘魂亭＞で出してるみたいですからどんなものか食べてみるのもいいかも知れないです。作り方次第で本当に味が変わりますから、頑張って美味しいのを作ってくださいね」

我ながらなんとも大雑把な説明だとは思うけど、せいぜいインスタントラーメンしか作ったことのない俺にはこれが限界。こんな説明で見事にラーメンを作り上げたザックさんのように頑張ってくださいと祈るばかりである。

「なるほどなあ。うまいの作るからまた食いにきてくれよ」

「美味しいのできたらほんと食べに行きたいですよ。ありがとうございます。次の人どうぞー」

やはりというべきかこの人は料理人だったらしい。だってラーメン

ンを知って自分で作ろうと二十食も買っていく素人さんがいたら驚きだし。

そんなことを考えながら次の人の注文に従い、三十食分の材料を準備し始めた。

「ありがとうございますー」

最後のお客さんを見送りアスともども一息つく。結構なハイペースでさばいていたので時間こそ掛からなかったが精神的な疲労は大きい。

「まったく。急なことでびっくりしたぞ」

「ほんとにね。フィオナって人の新聞、予想以上に影響力が大きいみたいだ」

というのも急な繁盛が気になってお客さんに尋ねてみたところ、ほとんどの人がフィオナ印の新聞でラーメンのことを知ったといっていたからだ。

とは言え新聞で紹介していたから鵜呑みにして買いに来たというわけではなく、とりあえず店の人を食べに行かせてからきたそうだ。それでもたいそうな影響力ということに変わりはないが。

「我も一度見てみたいものだな」

「俺も見てみたいよ。ジルさんに頼んで新聞取ってみようか？」

外に出られない上まともな仕入れルートを持っていない俺としてはめっちゃ役に立つとかそういったことはないと思うけど、何かと便利だろうしアスのためにもなるだろう。あとは安いことを祈るばかりだ。

「それなら一部五百フォルになりますよ？」

「えーっと？」

ふらふらと近づいてきて、いきなり声をかけてきたのはおそらく面識のない女性。

金髪のショートカットに明るい碧眼、猫のような愛嬌のある笑顔で笑いかけてくる。

「はじめまして！ サン・タイムズを編集してます、フィオナⅡオルランドといいます」

フィオナさんはピンと背筋を伸ばし自己紹介した後、きびきびとした動作で頭を下げた。

こういった態度はこちらの世界に来てから初めてなので少し面食らう。

「こちらこそ始めまして。エバンス商会で働かせていただいてるユウⅡサイトウといいます」

「サイトウの手伝いをしておるアスフェルという。よろしく頼むぞ」

「はい、それはもう！ よろしく願いますね」

フィオナさんはアスの言葉に反応して、やたら不安な気分になる

ほど目を輝かせてこちらを見てくる。

興味深々ということを目だけでここまで伝えてくるとは大したものだと思うよ、ほんとに。

「今日はお客さんとして来てくれたんですか？」

「はい、おもしろそうなものがあれば売っていただこうかと。あとはちょっと取材させていただけるとうれいなー、なんて思ってた」

故意か天然かは分からないけど、圧倒的破壊力を持った上目遣いでこちらを見てくる。アスがなんとも言えない表情でこちらを見ていなければ一瞬でやられていただろう。

これは気をつけなければなるまい。

「そうですね、営業が終わった後でいいんですからお受けしますよ」

「ありがとうございます！ ではまた営業が終わった頃にお伺いいたします」

フィオナさんはなんとも嬉しそうな笑顔で頭を下げる。

あんまり嬉しそうにしてくれるものだから、許可したはずのこちらまで嬉しくなって笑ってしまった。

その後フィオナさんはこの店にあるものの中で珍しくかつ比較的人気のあるものをいくつか買っていた。

なんでもそれらを材料に今から記事を書き始めるらしい。なんとも凄まじいバイタリティだ。

「なんだかやけに気持ちのよい者であったな」

「そうだね。でもそれにつられて言っちゃいけないことまで言わないようにしないと」

なにせ俺たちには新聞に載せるべきでないようなことがたくさんあるのだ。

例えば俺たちが森から来ているということは現時点では伝えるべきではないと思うし、俺がこの家から出ることができないというのもどんなことがあるか分からないので新聞に載せるべきではないだろう。それにジルさんとの約束もあるのでこの店の商品が魔法によって作られているということも言うべきではない。

ただそれらにさえ気をつければメリットも大きい。店の宣伝になるのはもちろんのこと、好印象の記事を書いてもらえば後々俺たちが森からきたということを明かすときに役に立ってくれるはずなのだから。

「我もついてやるから大船に乗ったつもりでいるが良い」

さきほどもアスの視線がなければ今からでも取材をどうぞと言っ
てしまいそうだった手前反論できないのが悲しいところだ。

「……それじゃあ頑張って営業しますか」

「ありがとうございましたー」

本日最後のお客さんを見送り頭を下げる。

今日の営業をまとめると忙しかった、これに尽きるだろう。

基本的にラーメンの材料を買いに来る人は午前中に終わったのだけど、午後からも何か珍しいものを売っていると聞いた人たちが来てくれたのだ。

もちろん「何か珍しいものがあるらしい」といった気分で来てくれた人が多かったので一つか二つ買って帰る人が多かったのだけど、ほかにお客さんがいないときにはいろいろな話を聞くことができたしこの店のことを知ってもらうことができたので大満足だ。

「こんばんは。営業お疲れ様でした!」

おそらくこの辺りでぶらぶらしていたのだろう。最後のお客さんが見えなくなると朝と変わりなく、いやそれどころか朝よりもいい笑顔でフィオナさんが話しかけてきた。

「こんばんは。どうぞ中に入ってください」

フィオナさんはそれを聞くと嬉しそうにお辞儀をしてくれた。そして店先の片付けをしているのに気が付いたのか自分も手伝うとアスに申し出る。

「うむ。心遣いはありがたくいただくが我一人で大丈夫だ」

アスは営業が終わったらすぐに片付けを始めていたため後は家の中に机を運ぶだけだ。手ごろな机がなく結構しっかりした机を使っていたため手伝いを申し出てくれたのだろうがアスならば一人で十

分である。

案の定アスは手伝いを断わり一人で机をひよいと持ち上げた。

「えっ……。あ、アスフェルちゃん力持ちなんだね」

「ふふふ、もっと褒めてよいぞ？」

ぽかんと口を開けフィオナさんはアスが机を運ぶ光景を凝視する。見ているものが信じられないといった姿は昔の俺を見ているみたいで面白い。しかし女の人の顔を面白がって眺めているのは趣味がいいとは言えないだろう。自分は何も見っていないとばかりにフィオナさんに声をかけ家の中に招き入れた。

「失礼します！」

「どうぞお茶でも用意するのでその椅子に座っててください」

玄関から入りどうしたものかと手持ち無沙汰に立っているフィオナさんに声をかける。俺とアスが片付けやお茶の準備をしてる中で自分だけ座っているというのも居心地が悪いだろうけど、まあその辺りは我慢してもらおう。

お茶を準備し終え、お尻をむずむずと動かしているフィオナさんと根でも生えているかのようにとっかかりと椅子に座るアスの前にお茶を置いた。そして自分の前にもお茶を置き、茶請けのようなものを机に出してようやく俺も椅子に腰を落ち着ける。

「こんな準備までしていただきありがとうございます。私の方は時間もありますので、お疲れでしたらしばらく休憩なさってください」

「ありがとうございます。まだまだ大丈夫ですので取材を始めていただいても結構ですよ」

「うむ、この程度でへこたれるような軟弱な身体ではないからな」

「はは、確かにアスちゃんは軟弱とは言えなさそう」

アスが力こぶを作るようなポーズを取り軟弱ではないとアピールし、室内に和やかな空気が流れ始める。

こういった場面で空気を作ってくれる存在は非常にありがたい。今までの流れから今日の取材はきっちりとしたものになってしまいかと少々心配していたが、これなら世間話の延長のような形にできるはずだ。

「ちなみに今日の取材はラーメンのことですか？」

「いえ、それもあるんですけど今日はこの店のことを取材させていただきたいんです。

この辺りで見えたこともないような商品に新しい料理。きっと面白い記事になると思います！」

「え、ええ。こちらからも是非お願いしたいです」

セリフが後半になるにつれフィオナさんの目の輝きが増していく。言っている内容はこちらにとっても良いことなのだが、思わず腰が引けてしまう。

「とは言っても商売上の秘密で答えられないこともありますのでそれはお願いしますね」

「もちろんです！」

いい返事をしてくれるがさすがに額面どおり受け取るわけにはいかない。

記者として簡単に引いてしまっただけは面白い記事なんて書けないだろうことは想像がつくからだ。

だから多少の追求は承知の上。それでも我慢できないほどでない限り長く付き合っていきたいものだ。

「ところで取材とはどのようなことをするのだ？」

「こちらから質問していくので世間話のつもりで答えていただければ大丈夫ですよ」

フィオナさんは笑顔で答え、鞆からメモ用紙のようなものを取り出す。

魔法があるといってもこの辺りは日本とあまり変わらないようだ。そう思ってフィオナさんを見ていたのだが、いつまで経ってもペンが出てこない。

「ペンお貸ししましょうか？」

「ありがとうございます。私筆記系魔法持ちなので大丈夫です」

「そうなんですか？」

「はい。脳内転写^{コピペ}っていうんですけど、手をかざすだけで文字が書ける優れものなんですよ」

フィオナさんは先ほど取り出したメモにゆっくりと手をかざす。するとどうだろう、メモに次々と字が浮かび上がり文章を形作っていった。

印刷なんて技術がなさそうなこの世界にどうして新聞があるのか不思議に思っていたが、どうやら技術でなく魔法の力で成り立っているようだ。

しかしそうなる疑問が浮かび上がる。この世界で魔法というのはどれぐらいの希索性・汎用性があるのだろうか？

森で店に来てくれた人たちに聞いた感じでは魔法持ちはそんなにいない印象を受けたのだが、技術の代わりに魔法に頼っている部分を見ると実際は俺の想定よりも多いのかもしれない。

魔法を使える身としては是非知っておきたい情報だ。

「それでも新聞を一人で書くのは大変ですよ。他にもサンライズで筆記系魔法を持って手伝ってくれる人がいるんですか？」

「名持ちの人はいないんですけど筆記系魔法を使える人はいるので、そういった人には手伝ってもらってますよ」

「む、名持ちとは何なのだ？」

知らない単語が出てきたところでどうしたものかと悩んでいるとアスがポンと質問してくれた。

俺ぐらいの年齢になって常識的かもしれないことを聞くと怪しまれるかもしれないが、アスならば聞いても幾分マシだろう。このアシストを生かさなくては。

「普通に魔法名を持ってる人ってことですか？」

「すみません、アスの住んでいたところはそういったことをちゃんと知ってる人がいなかったみたいで……。良かったら詳しく教えてあげてくれませんか？」

「ああ、そういうことですか。えっと、魔法は筆記系とかいくつも系統があるんですけど、その中である程度強力なものは魔法名があるんです。それで名持ちっていうのはその魔法名を持っている人のことを言うんです」

なるほど、つまり森では分からなかったけどこの世界での魔法は使える使えないに分かれるだけでなく、使えるけど効果が薄いという状態もあるわけか。

「そうなのか！ では私も魔法を使えるかも知れないということだな！」

「あんまり期待しないほうがいいと思いますよ？ 私が知ってる中では数ミリしか移動できない転移系とか聞いているこっちが悲しくなるようなものもありましたから」

喜色満面といったアスの顔が微妙に引きつる。そりゃ魔法が使えるかもと期待した瞬間にそんな例を挙げられたら固まりもするだろう。

しかしそこである違和感に気付く。

アスの反応を見た瞬間は演技をしてくれているのだろうと思っていたのだが、よくよく見続けているとどうも本当に今知ったようにしか見えない。もしかして魔法は獣人の間ではそこまで研究が進んでいないのではないだろうか。

フィオナさんが帰った後一度アスに聞いてみたほうがいいだろう。もし魔法についてあまり知識がないのならば、サンライズで調べて知識を森に持ち帰ればきっと役に立つはずだ。

「むう、だが知るだけは知っておきたいぞ。どうやって調べればよいのだ？」

「名持ちであればほとんど感覚的に分かるんですけど、そうでない人は測定用の魔具を使います。残念ながら私は持っていないので魔具を扱っているお店で調べてみてください」

「うむ、一度調べてみるぞ。情報提供感謝する」

「いえいえ、こちらも取材させていただけるんですから気にしないでください」

話に一区切りがついたため二人とも目の前のお茶を含む。

時計に目をやるとフィオナさんが来てからすでにある程度時間が経っていた。思いがけず質問に答えてもらい予想以上の時間を取ってしまったようだ。

「時間とってしまって申し訳ないです。じゃあもうそろそろ取材を始めてくださって結構ですよ」

「ありがとうございます。それでは始めさせていただきますね！」

実は俺たちってスキャンダルだらけ？（後書き）

お久しぶりです。

最近想定していた展開にミスを見つけて悪戦苦闘してます。プロットもっとしっかり作っておけば……。連載していらっしゃる方はこういうったことにご注意ください。

あと最近コメディ分が足らなかったので短編書いてみました。よろしければ見てやってください。

人事を尽くしたので天命を待ちましょう。

フィオナさんの元気のいい声で始まった取材は急にきっちり始めることもなく、今までの世間話とほとんど変わらないような雰囲気に進んでいった。

真面目な感じになってしまふとまともに話せたかどうか怪しい俺としては非常に助かる話だ。

「初めて知ったとき驚いたんですけど、このお店ってとても珍しい商品を扱っていますよね」

「エバンス商会の別館のような形で始めた店なので普通のものは本館で、ちよつと変わったものはこちらで買っていただけだと思いますよ」

「なるほど。本館と別館を組み合わせでの買い物想定しているというわけですね」

もちろんの事ながらそんな立派なことは考えていない。せいぜい「本館が近くにあるからそこにないようなもの売ったほうが売れるよね」ぐらいだ。

取材が決まってから必死に考えてた理由だけど納得いしてくれたのなら問題ないだろう。

「それにしても本当に珍しい商品ですよ。記者なのに恥ずかしいんですが、全然知らないものばかりだったんですよ。一体どこから仕入れているんですか？」

やっぱりくるよなあ、その質問。創造魔法のことを知られないよ

うにするためにも注意しなくちゃならないから、分かっているても緊張してしまう。

アスも意識していたのか隣でピクリと反応している。

「申し訳ないんですけど、商売上の秘密ということで。他の店でも扱われちゃうと大打撃になっちゃいますからね」

「うーん、そうでしょうけど……残念です」

「フィオナよ、すまん」

しょんぼりしているフィオナさんを見ていると教えたくなってしまっうけど、ジルさんとの約束があるのでここは我慢だ。

「いえいえ、仕方ありません。でも他の質問にはしっかり答えてもらいますから覚悟してくださいね？」

「はは、お手柔らかにお願いします」

「じゃあズバリ、ラーメンってどこの料理なんでしょう？」

了解の返事をした途端、待つてましたとばかりにフィオナさんがラーメンについて質問してきた。

思いのほかあっさり先ほどの質問をあきらめてくれたことを考えると。もしかしたら初めからこちらが本命の質問だったのかもしれない。

なんだかしてやられたような感じがするけれど、普通に考えて商売上問題になるような情報でもないし、つい先ほど質問に答えるといってしまった手前このタイミングで聞かれてしまったては答ええないわけにもいかないだろう。

「ちょっとどこの料理かは覚えてないんですけど、以前旅をしていたときにこんな料理を見かけまして。自分なりに工夫をしていたら美味しくなったのでザックさんに紹介してみたいですよ」

とは言えおそらく聞かれるだろうと想定していた質問だけに答えは用意してある。本当のことを話すと日本のことを話さないといけない手前アスにも相談できなかったのだけどこの理由ならばはっきりと怪しまれることもないはずだ。

「そうなんですか。じゃあサイトウさんは料理も得意なんですか？」

「うむ、サイトウの料理はとても美味しいぞ」

「俺の代わりに答えない。せいぜい素人に毛が生えたようなものですよ」

とんでもないことを口走るアスの頭に軽くチョップを落とし、即座に間違った情報を訂正した。

実際のところ皆さん評価してくれてはいるが俺は日本での料理に関する知識を持っているだけで、料理の技術や常識的な知識などに関してはいたって普通なのだ。ここでフィオナさんにあらぬ誤解を受けてしまうとどんなことが起こるかわかったものではない。

「そんなご謙遜を。ザックさんも取材したとき分かりやすく教えてくれたって褒めてましたよ」

いやいや、それはザックさんの理解力がすごいだけですから。

「あー、もうその話は終わりにしましょう。次の質問とかないです」

か？」

「そうですか？　じゃあラーメン以外にもこれから広めようと思っている料理とかがあればお聞かせ願いたいです」

とりあえず隣でケタケタ笑っているアスのわき腹をつつついてと。
あーあー苦情は聞きません。

「うーん、今のところは分かりません。候補になるような料理はいくつかあるんですけどサンライズで受け入れてもらえるかどうか分からないので、ザックさんと話し合ってからですね」

「なるほど、じゃあまた広めるような料理ができたらし非食べさせてくださいね」

「我は広めなくても食べさせてもらうがな！」

いつも通りというかなんと言うか……。

アスの堂々とした発言に俺とフィオナさんは目を合わせ、くすくすと笑い合った。

それからしばらく笑っているとフィオナさんはゆっくりと話し始めた。

「サイトウさんたちが話しやすい人で本当に良かったです。悪い人には見えなかったんですけど新しくこの街に来た人ですから、どうやって取材したものか悩んでたんですよ」

「そう言ってもらえて嬉しいです。俺たち取材を受けるのなんて初めてで緊張していたんですけど、フィオナさんのおかげでまともに話せて本当に助かりました」

記者をしているような人だから話しやすくって当然なのかもしれないけれどここまですらともに話すことができたのは間違いなくフィオナさんのおかげだ。

少々お世辞の言い合いのようになってしまっているが偽りない本音である。

フィオナさんは「いえいえ」と手をばたばたさせているが、少し笑みが深くなったところを見る限りまんざらでもないのだろう。

「そういえばサイトウさん達は自分たちの噂ってご存知ですか？」

「え……俺たちなんか悪い噂でも流れてるんですか？」

ちょっと待ってよ。俺たちって何か悪いことしたっけ？

サンライズに来てからだって清く正しく生活しているし、接客だって悪評が立つほど酷いものとは思えない。もしかしてあれか、俺が外に出てないことが知られて引きこもりじゃないかって噂になってるのか。

「悪い噂なんて流れてないですよ！……まあ確かにサイトウさんについてはいろいろ言われてますけど」

「えっと……どんなのが？」

「黒髪は珍しいんですけどアスちゃんと血が繋がってるはずがないと断言されてますし、いつも店内にいる人とかも言われてますね。あと笑っちゃうのですと犯罪者予備軍って疑惑もあるんですよ？

——ちなみにご血縁関係は」

「……ないですけど」

フィオナさんやめて、そんな顔で俺を見ないで。そりゃ改めて考えてみれば今の俺とアスの状態って結構珍しいと思うけど、アスの両親からも許可いただいてますから。

「アスさん俺たちの関係を説明してやってくださいよ」

「なんと説明するのだ？」

そう言われてみればなんと説明すればいいのだろうか。家族じゃないし、友達というのも微妙に違う気がするし……。

「女の子と近所のおにいさん？」

「フィオナよ、確かに我らは女の子と近所のおにいさんと言えなくもないぞ」

フィオナさんやめて、そんな顔で俺を見ないで。そりゃ改めて考えてみればその関係って疑惑を解消していないどころか煽ってる気すらしますけれど。

断固として誤解を解かねばと考えを巡らすがどうにもいいアイデアが出てこない。

本気で焦りながらうんうん唸っているとフィオナさんがプツと笑い始めた。

「そんなに焦らないでいいですよ。初めから問題があるなんて思っていないから安心してください」

「……それはありがとうございます」

どうやら冗談だったようだが何とも性質たちが悪い。この店に来られるお客さんがちなりとアスを見た後、さっきのフィオナさんのような表情でこちらを見てくる光景を想像してしまったじゃないか。

「冗談にしてもちょっとひどいですよ。そんな噂があるのかと本気にしちゃったじゃないですか」

「え、噂があるのは本当ですよ？」

「誤解だと広めてください。お願いします」

椅子に座っていないなかったらためらいなく土下座したんじゃないかと思うぐらいの勢いで頭を下げた。

「わ、わかりましたから顔を上げてください！」

フィオナさんが広めてくれるならおそらく噂も鎮静化するだろう。やはり何かを人をお願いするときは誠意が大切だと思うんだ。

「ところで店のほうには何か噂はないのか？」

「この店でしたらいい話をたくさん聞きますよ」

「ほう、それは聞かせてもらいたいぞ！」

フィオナさんの言葉にアスが勢い良く食いついた。そりゃいい話って分かってるなら早く知りたいよね、その気持ちは分かる。

「この際だから本当のこと言っちゃいますけど、始めのうちはよく分からないもの売ってる変わった店っていう話が多かったんですよ」

「むう、みんないいものなのだぞ……」

今まであった系統の新商品を売り出した店ならまだしも、まったくなかったような商品を扱えばそうなるのも無理のない話だ。頭では簡単に理解できるんだけど面と向かって言われるとくるものがあるよなあ。

「そんなに落ち込まないでください。今のはできてすぐの噂です」

「最近はどうなのだ？」

「変わってるけどいいものを売っている店とか、変わってるけど期待できる店、辺りが有力ですね。まあ変わってるっていうのは固定みたいですけど」

フィオナさんはそう言ってクスリと笑った。

変わってるというのが固定というのもどうかとは思うけど、フィオナさんの様子を見る限りそこまで悪いものではないのだろう。思わずホッと息をついた。

「そうか……だんだん認められてきておるのだな！」

「はい、間違いないですよ」

アスも握り拳をふるふるさせながら嬉しそうに声をあげた。サンライズに來た当初はほとんどお客さんが来てくれなかっただけに、はつきり言ってもらえるのがよほど嬉しいのだろう。

その様子を見て俺もにやけながらお茶に口をつけた。

「じゃあもうこの辺りで取材も終わりにしますね。ご協力ありがとうございました」

「いえ、こちらこそいろいろ教えていただきありがとうございますでした」

「感謝するぞ」

取材が終わりお互いに頭を下げてあいさつをした。この辺りは基本である。

フィオナさんはあいさつが終わるとメモ帳などを鼻歌を歌いながら片付け始めた。

さて取材は終わったのだが俺たちには後一つ、聞かなければならないことがある。

フィオナさんからしてみれば取材が終わった今、もう後は帰るだけだと思っているのだろう。

しかしもう少しだけ付き合ってもらわなくては。

俺は努めてつい今思い出したというように、何気なく声をかけた。

「そういえばサンライズって近くに『魔物の森』がありますけど、どういうところなんですか？」

「『魔物の森』ですか？」

フィオナさんは顎に手をあてて考え始め、俺とアスは普段と変わらないような表情で、しかし一言も聞き漏らさないように耳を傾けた。

実は今日の取材が終わったら森について聞いてみようと思おうとアスと二人相談していたのだ。

サンライズと獣人の交流のために今森がどう思われているか知っておく必要があるのだが、闇雲に聞いて回るのもなにかあると怖いし知り合いだけでは情報が偏ってしまう。そのため幅広い情報を知っていそうなフィオナさんに白羽の矢が立ったのだ。

「あまりよく分かっていない森なんですけど、奥から時折魔物が出てくるので『魔物の森』と呼ばれています。そのため危険も多いんですけど、森でしか取れないものも数多くあってそれらがサンライズの特産品になっているという一面もあるんですよ」

「でも森のものを採りに行くのって危なくないんですか？」

「もちろんです。ですから森での採集を専門にしている人たちがチームを組んで行きますね」

ここまでは以前ジルさんが言っていたのと基本的には変わらないか。

じゃあここからが本番だ。

「……そういえば森の中に獣人が住んでるって聞いたことがあるんですけど、その人たちに採ってきてもらうことってできないんですか？」

フィオナさんは聞いた瞬間こそ意表をつかれたような顔をしたがすぐに苦笑し始めた。

「採ってきてもらうこと自体は可能でしょうけど障害があまりにも

多すぎますよ」

もしかしたら「とんでもない！」など強烈な反応が返ってくるかと覚悟していたのだが、苦笑という思いのほか軽いフィオナさんの反応にもしかして意外と簡単にいくのではないかという期待が膨らんだ。

俺がサンライズと獣人との交流でもっとも恐れていたのは、なんとなく怖いといった理由のない忌避感だ。

『実際には見ていないけれど見た人が怖いといっていたからきつと怖いのだろう』。『魔物を簡単に倒してしまうと聞いたし、そんなことができるのならきつと乱暴に違いない』。

そういったイメージが先行してしまえば少し何かあるだけで「やっぱりそうだ」といった扱いになってしまいうし、最悪話し合いすら拒否されかねない。

そんな心配をしていたのだが反応を見る限り少なくともフィオナさんにそんなことはなさそうだ。

「その障害って森を越えなければならないうってことですか？」

とりあえず障害と聞いて真っ先に浮かんだものを聞いてみた。

「それも大きな問題です。今のところ獣人たちの住んでいるところもわかっていないので探さなければいけませんし、おそらく普段採集をしているところよりも奥にあるでしょうから見つけたとしても移動が大変です」

俺たちはミリアの転移があるから森からの移動も楽なものだが、転移がなければ魔物が出てくる森を抜けていかなくはならないのだ。交流する以上は荷物も運ばなければならぬしサンライズ側か

らしたらとても大きな問題だろう。

ただこれについては俺たちが協力することでもかなり楽になるはずだ。獣人の住んでいる場所は信頼できるのを確認した後王様に許可を得てから教えられることだし、獣人側に働きかけて採ったものをどこまでかはわからないが運んでもらってもいい。身体能力的にも人間が獣人の住んでいるところに来るよりはるかに楽になるだろう。

そのためこの問題についてはそれほど深刻に考えていないのだが、フィオナさんの言葉である一部分が気になった。

「『それも』ってことは他にも何か大きな問題があるんですか？」

「サイトウさんはご存じないかもしれませんが、サンライズの現市長が王国の貴族なんですよ」

なんとも難しそうな顔でフィオナさんはそう言った。

正直俺からしてみれば「王国ってどこ？ その貴族だとなにかまずいの？」という話なのだが、それがわからないのはまずそうな雰囲気だ。

答えるすべもなく空気を読んで口を閉じ、難しそうな顔を作っておいた。

「それでは獣人との交流などあり得ぬではないか！」

アスは意味が分かっていたようだがどうやらかなりまずいことのようなのだ。眉間にしわがより演技でしていた難しい顔が本物になってくる。

「アスちゃん急にどうしたんですか？」

アスの急激な反応にフィオナさんは驚いているようだ。おそらくサンライズでは獣人との交流を熱望している人は少ないはずだからフィオナさんが驚くのも無理はない。

あまり怪しまれてもまずいので、よく事態が呑み込めていないがアスを背中をぽんぽんと叩いて落ち着かせた。

「悪かったな。獣人との交流に興味があつたものだからつい興奮してしまった」

「そうだったんですか……」

「なに、大丈夫だ。市長が貴族では街ぐるみでは無理だろうが、個人的に交流すればよい話だからな」

話の流れからするとおそらく王国の貴族とやらは獣人を嫌う風潮があるということなのだろう。

この場で聞いただけなのでいまいち実感がわからないが、確かにその風潮が根強いものならば街ぐるみでは諦め個人的に交流をしていくしかない。

「でもなんでそんなに興味を持ってるんですか？ 魔物の森の獣人といえば普通の獣人よりはるかに強いとかで修行者の方たちには有名ですけど、それ以外では興味をもたれるどころかむしろ避けられるようなものだと思うんですけど」

「そうなのか？ 我はただ今まで深く関わったことのない者たちと関わるのが楽しみで仕方がないだけだぞ」

おそらくそれが獣人としてのアスの本心なのだろう。よどみなく出てきたその言葉は確かな説得力を持っていて事情を知っている俺でさえも「なるほど」と納得しそうになってしまった。

「……そうか、そうですね。よく知らない人たちが近くにいたら実際に会って話してみたいですもんね。本当にその通りです」

フィオナさんは何か思うところでもあるかのようにうんうんと頷いた。

「もし獣人の方たちと会うことができれば私にも取材させてもらえませんか？　今は獣人の方たちについては噂が一人歩きしているような状態なんですけど、例えいい人でも悪い人でも本当のことを皆さんに伝えたいんです」

「うむ！　ぜひ皆に広めてやってくれ。きっと良い者ばかりだろうからな」

「俺もきつといい人たちばかりだと思いますよ」

「はい、そうだいいです！」

フィオナさんはそう言ってにこやかに笑う。

「じゃあ引き止めて申し訳ありませんでした。いい記事期待してますね」

「できたら発行する前にお見せしますね。楽しみにしててください」
そう言ってフィオナさんは頭を下げると荷物をまとめ軽い足取り

で帰って行った。もう一日も終わりだというのに大したバイタリテ
イだ。

フィオナさんが出て行き静かになった室内で帽子をとりくるくる
と回しているアスに話しかける。

「お疲れ。フィオナさんの記事は期待できると思う？」

「獣人について良くても悪くても本当のことを伝えたいといったの
だ。きっと期待できるであろう」

「だよね。俺もそう思うよ」

今日のフィオナさんを見る限り少々未熟だとか指摘を受けること
はあるかもしれないけど、理不尽な批判を受けたり不当に貶される
ようなことはないように感じた。

アスも心配していないのならおそらくこの考えは間違っていない
のだろう。

「じゃあそろそろおなかも減ってきたしご飯にしようか」

「うう……もう空腹で仕方がないぞ。早く食べようではないか」

アスは耳をへたりとさせてお腹を押さえた。

よほどお腹が減っているのだろう。

「ならちやっちゃんと支度しちやおうか。手伝いはよろしく」

なんとも気合の入らないアスの返事を背中で聞き、頭の中で早く
できるメニューといえどどんなものがあったか考えながらキッチン
へ向かった。

お返しはしっかりしないとね。

次の日、朝の着替えを済ませ一階に降りていくとアスが既に起きて紅茶を飲んでいた。普通であれば起こしに行つて、悪ければ起こしに行つてしばらくしてから起きはじめるアスにしてみれば珍しいことと言える。今日は雪でも降るのだろうか。あったかいけど。

「おはよう。今日はえらい早いね」

「うむ、少々楽しみなことがあつて早く起きてしまったわ」

はて、今日なにかあつただろうか。思い当たるのといえばフィオナさんの記事ぐらいだが、さすがに翌日に完成して朝から店に持つて来てくれるようなこともないだろう。

「今日なにかあつたっけ」

「なにかあるというわけではないのだがな。サイトウよ、昨日フィオナが店の評判について言つておつたのを覚えておるか」

「もちろん。変わつてるけど期待できる店みたいなのを言つてくれてたね」

昨日のことだし個人的にも非常に嬉しかったので当然覚えている。アスはそれを聞くと神妙に頷いた後にんまりと笑った。

「つまり我らはこの場で立派に店を経営しておるということだ。少し前から感じておつたがフィオナに言われて確信したのだ」

「なるほど。だから今日店を開くのが楽しみで仕方ないってこと？」

「それもあるのだがな、店を立派に経営できていると分かった以上あいさつに行かねばならぬところがあるではないか」

アスはてくてく店の窓口まで歩きカーテンを開けると、親指で店の前にある今は無人の露天を指した。口から八重歯のように犬歯が覗く。

「ああ、それは————楽しみだねえ」

アスが指すのは俺たちが店を開いた当初、ありがたいご高説をしてくださったおやじのやっている露店。確かに立派に経営できていると確信できたのなら一度はあいさつに行かねばなるまい。

アスの笑みが感染したかのように俺の顔にも笑みが浮かぶ。今の俺たちはきつとなかなか悪い顔をしいてるのだろう。

「だから朝一番にあいさつに行こうと思ってな」

「いやいや、朝早く行ったら迷惑だろうから昼休みにでも行っておいで」

この店は一般のお客さんも来てくれるがラーメンの関係もあり飲食店を経営しているようなお客さんの方が多い。そういったお客さんは朝のうちに来てくれることが多いため、繁盛していることを見せるためにもあいさつは午前の営業が終わってからの方が効果的だろう。

アスもそのことに気づいたのかより一層悪い顔になる。

「確かに相手に迷惑をかけてはいかんからな。……サイトウよおぬしも悪いやつだな」

「いえいえ、王女様ほどでは」

爽やかな朝の店内に二人分の高笑いが響き渡った。

そしてやってきた昼休み。

午前中の営業のときからちらちらと視線を送っておいたので向こうも何かあるんじゃないかとこちらを意識しているだろう。

「では行ってくるぞ」

「頑張ってねー」

帽子をしつかりとかぶり服装に乱れているところがないか確認した後、ゆつくりと出て行くアスを見送る。

非常に残念だが俺はあいさつに行くことができないので涙を呑んで店の窓口から様子を見ていることにした。ああ、ポップコーンとコーラが欲しい。

店から出て行ったアスは一部の隙もない優雅な足取りで露店まで歩いていき、怪訝な顔をしているおやじにこれまた一部の隙もない優雅な様子で話しかけた。

おそらくこれが生まれ持った気品というやつなのだろう。そんな大層なものをこの場面で惜しげもなく披露するアスさんかっこいいです。

「いい感じだね」

ここからでは何を言っているのかは聞こえないがアスが絶好調で露店のおやじがぐうの音も出ていないのは見ていて分かる。さらに見せ場を作ってくれたのか途中でアスが指差しおやじがこちらを向いたののにこやかに手を振っておいた。楽しい、楽しすぎる。

「さて、そろそろ終わりにしたほうがいいかな」

もともと不愉快だったぐらいだし、こういったことはやられて相手が「くそう」と思うぐらいでちょうどいいのだ。

呼び戻そうと息を吸い込むが、おそらくアスも同じことを考えていたのだろう。俺が声を出す前に弾む足取りでこちらに歩いてきた。そして店の中に入ってきたアスと無言でハイタッチ。

「お帰り。なかなかいい眺めだったよ」

「ふふ、我らを侮るからああいうことになるのだ」

二人でニヤニヤと笑いながら口々に感想を言い合う。実に楽しい時間だけど午後からも営業がある以上そう長々とは話していられない。

「もう少し余韻に浸りたいところだけど、もう昼食にしないかね。今日は時間もないし自分ではさむサンドイッチだよ」

「おお！ タマゴとマヨネーズが我を呼んでおるぞ！」

こうして二人とも上機嫌で食事の支度を始めた。

昼食を終え眠くなってくる昼下がり。睡魔と闘いながら午後の営業をしているとエバンス商会からジルさんがこちらに向かって歩いてきた。

朝のうちに商談か何かで出て行くジルさんを見るのは毎日だけど、この時間にこちらにジルさんがやってくるなんて珍しい。

「ジルさんこんにちは。今日は何かあったんですか？」

「用がなきゃあたしはこっちに来ちゃいけないのかい。つれないこのうねえ」

「いや、すいません。いつも忙しそうだったのでつい……」

「最近忙しくてあたしがこっちに来るのも久しぶりだから仕方ないか。時間に空きができたから世間話でもしようかと思ってきたんだよ」

ジルさんはそう言って笑うと肩をすくめた。

「しかしジルに空き時間ができるとは珍しいな」

「そんなに長くはないんだけどね。思ったより準備が速く終わって次の商談までちょっとあるのさ」

準備が早くできたから時間が空いたなんてジルさんは今どれほど忙しいのだろうか。

朝は早いし夜も遅くまで部屋から魔力灯の光がこぼれているのを見ている。その上昼もこの調子ではいつか体を壊してしまわないか

心配だ。

「忙しいのはいいですけど体は大事にしてくださいね」

「ありがとね。ま、私のことはいいとしてあんたたちのことを話そうじゃないか。売り上げの報告は見させてもらってるけど最近かなりうまくいってるみたいだね」

「……そうですね。ザックさんの助けもあってラーメンの材料を販売したら飲食店の人を中心にかなり売れたんですよ」

「あんたたちの商品は受け入れられさえすれば販売を独占できるからねえ。あたしのほうでも取引先には宣伝してるから、また何か新しく売り始めることになったら逐一教えておくれよ」

「はい、よろしく願います」

それからは特に変わったことを話すでもなくお互い近況報告のようなことをしていた。

ジルさんは最近忙しくて仕方がないと言ったようなことを話し、俺は前の露店にあいさつしたことを話す。後から考えてみると少々大人気なかったかと思わないでもないが、あまり後悔もしていない。ジルさんも大いに笑ってくれていたので問題ないだろう。

「そういえば最近ミラを見なかったかい？　いつもならちよくちよくうちにくるんだけどこのところ来てないんだよ」

「うーん、申し訳ないけど見てないですね」

俺たちがミラに会ったのといえばジルさんのことを相談されたと

きが最後だ。会った内容からして言わないほうがいいだろう。

「あの子研究に熱が入りすぎると引き籠もっちゃうことがあるからね。魔具の勉強も兼ねてよかったら見に行ってみてやってくれないかい？」

「うむ、一度行ってみよう」

「頼んだよ。じゃあそろそろあたしは行くね」

ジルさんはそれだけ言い残すと駆け足でエバンス商会の本店まで戻っていった。

おそらくこのところ会っていなかったから無理して時間を作ってきてくれたのだろう。来てくれたことは嬉しいのだがどうしてもそこまで無理しなくて良かったのに思ってしまう。

「忙しいだろうにありがたいことだね。俺たちはせめて頼まれたことだけでもしっかりとやろうか」

「そうだな。この後すぐにでもいこうと思うがいいか？」

「問題ないよ。行ってきた」

今まで会った感じからしてミラは研究に没頭してしまうと食事を疎かにする人である可能性が大いにありえる。これからの時間帯はあまりお客さんも多くないことだし早めにいってもらったほうがいいだろう。

ミラに会うのが楽しみなのかいそいその支度を整え出かけていったアスを見送り一人店番を始めた。



高い位置にある太陽が容赦なく照りつける道をミラの店に向かって一人歩く。以前ミラとともに歩いたときは夜だったが昼に歩くと同じ道でもここまで違うものなのかと感心してしまう。

道には以前買い物に言ったときのように人が溢れておるし、道端の建物も今は何件か開いており呼び込みに精を出している。森も昼と夜とではまるで雰囲気が違うものだが人の街は確実にそれ以上の変化だろう。

そんなことを考えながらも道を間違えぬように進んでいくと前よりも速度が速かったからだろうか、思いのほか早くミラの店までたどり着いた。傍から見る店の雰囲気は他のところと比べるとあまりに活気がないように見えたが、扉を開いてみると鍵がかかっていなかったのでもとりにあえず入ってみることにした。

「ミラよ、いないのか？」

心なしか薄暗く、がらんとした印象を受ける店舗部分でミラを呼びかけるが返事がない。

しばらく待ってみてもまるで返事がなかったので悪いとは思った

が以前案内された工房まで入ってみることにした。

お世辞にもきれいとは言いがたい通路を抜け工房に着くと作業台に突っ伏しているミラが目に入った。

「ミラよ大丈夫か!？」

昼間から作業台に突っ伏しているなどそうあることではないだろう。急いで駆け寄り声をかけるが私の焦りとは裏腹に返ってきたのはなんとも落ち着いた声だった。

「アスちゃん? ……おはよう」

「おはようではないわ! 一体どうしたというのだ」

「研究していて寝てしまった。よくあること」

ミラは平然とそう言うが、こんなボロボロになるまで研究とやらをすることがよくあるとは我にはとても信じられぬ。目の下にはしっかりと隈ができているうえ以前見たときよりもやつれている。この調子ではあまり食事も取っていないのだろう。

「言いたいことはいろいろあるがまずは何か食べて寝るがよい!」

ミラはのろのろと動き作業台近くにある机の上からやけにカラフルな箱を手を取った。

たしかあれは我がもらった菓子の箱だったはず。うまい菓子だったのは間違いないが腹が減ったときに食事として食べるようなものでもあるまい。

「そんなものを食べてなくて今はもっとちゃんとしたものを食べるのだ」

「……食べ物はいしかなない」

「なに!？」

こんなことがありえるか。我は研究のことはよく知らんが、何かをしようと思うのならしっかりと食事と睡眠を取り万全の体調で取り組むべきであろう。だというのにこんな状況ではまともな結果など出るはずがないではないか。

「ええい、今からサイトウのところに行って食べ物をとってくるからおぬしは体を拭いて着替えておくのだ!」

ミラが何かを行っているようだが気にしない。人目があるため全力で走れないのがなんともどかしいが、おそらくこれぐらいなら大丈夫だろうという速度でサイトウの元へ走った。

サイトウから残り物のサンドイッチをもらって返ってくるとミラがちょうど着替えを終えたところだった。着ているのは何の飾りもないこれでもかと言うほどシンプルなもので、衣服にあまり関心がないことが見て取れる。

「腹が空いたであろう。これをもってきたから食べるがよい」

「ありがとう」

ミラはサンドイッチの入ったカゴを受け取ると散らばっている物

を隅にどかし机の上に置いた。

「紅茶、飲む？」

「いただきます」

どうせ飲み物なしでは食べられぬであろうからミラの好意を素直に受け取ることにした。勧められた椅子に座り待っているとミラが二人分の紅茶を持ってやってくる。

「すまぬな。ではしっかり食べるがよい」

ミラは無言で頷きサンドイッチを手に取り食べ始めた。一口一口は小さいがその速度はかなりのもので、相当に空腹だったということが伝わってくる。

しばらく紅茶で喉を潤し、ミラがいくつか食べ落ち着いただろうタイミングで話しかけた。

「それにしてもこんなになるまで一体どうしたというのだ」

「……研究がうまくいかなかった」

「そうだとでももう少しやりようがあるだろう」

少々厳しい口調で聞くがミラは力なく首を振る。

「もう時間がない」

はて、時間がないとはどういうことなのだろうか。我が思い当てることといえばジルの借金のために作っているという転移用の魔具

ぐらいだが、以前相談を受けたときには時間がないということなど言っていなかった。他の魔具のことであれば問題はないのだが、そうでないのなら一度聞いておかねばならんだろう。

「もしやその時間がないというのは転移用の魔具のことか？」

話ながらも食べ続けていたミラの手がピタリと止まる。

「……………そう。でもアスちゃんたちはあせることない。魔具はできるときはすぐにできるけど、できないときはまったくできないもの。だからなるべく急いでいるだけ」

ミラは再び手を動かし何事もないように食事を始めた。

我は魔具のことをまったく言っていないほど知らないため、そう言われてしまえば反論する材料はない。どうにも納得いかないもののミラの様子からしてこれ以上聞いたところで答えてくれはしないだろう。

一度深呼吸をして紅茶を飲んだ。

「それで今のところ魔具はどの程度までできておるのだ？」

「核になる部分に転移の魔力が定着しないからあまり進んでいない。定着しても調整があるからまだ時間がかかると思う」

「悪いな。そのあたりについて我は頑張ってくれとしか言えん」

「それで十分」

ミラは最後の一口を食べ終え紅茶を飲み干した。少々足りぬかもしれないがこれだけ食べれば体調を崩すようなことはないだろう。

「さて、これで後はしっかり寝るだけだな」

「そんな時間はない」

ミラはふるふると首を振るが我としてもこれは譲るわけにはいかないのだ。

「そんな頭で考えてもなかなかいい考えも浮かばないだろう。ここは気分転換も兼ねて一度寝ておくのだ」

「でも」

「寝ておくのだ」

「……わかった」

ミラはあまり納得言っていない様子だったが、一応頷いてくれたのでもう安心だろう。

サンドイッチのカゴを持ち椅子から立ち上がる。

「では我は帰るとしよう。今日のようなことはもう遠慮したいぞ」

「なるべく気をつける。今日は……ありがとう」

我としてはそんな大それたことをしたつもりはなかったので、ミラの真摯な言葉に気恥ずかしくなり笑って頷いておく。

その後わざわざ入り口まで出てきてくれたミラに見送られながらセフィラス魔具店を後にした。

「お疲れさま。ミラは大丈夫だった？」

詳しく説明もせずにサンドイッチだけ受け取り出て行ったものだから心配していたのだろう。店に着くとすぐにサイトウが問いかけてきた。

「うむ、かなり疲れていたようだが自分で食事も取っていたしそう心配するほどではないと思うぞ」

「そっか。アスがすごい勢いで駆け込んでくるから何事かと思っちゃったよ」

「むう……」

確かに慌てすぎだったかも知れんがサイトウだってあの場面に遭遇すればきつと同じように慌てていただろう。そう、あれは仕方なかったのだ。

「それにしても人間にはあそこまで何かに熱中するものがあるのだな」

「寝食忘れちゃうような人はよっぽど珍しいけどいるにはいるね。アス達から見るとおかしく感じるかもしれないけど」

「変わっているとは思いますが我からしてみるとすごいと思うぞ」

我ら獣人は何かに熱中することはあっても食事などを忘れるほど

没頭することはまずない。それを考えれば全面的に賛同することはできぬにせよ、そこまでして何かを成そうとすることは好ましく映る。

「まあ時々見に行つてあげてよ。そういう人つて言つてもなかなか直らないからさ」

「やれやれ、ミラも仕方のないな」

苦笑したようなサイトウの言葉に肩をすくめながら返事をした。実のところやれやれとはいいいながらも世話を焼くこと自体嫌いではないので楽しみなぐらいなのだがな。

話していると何かに気付いたのかサイトウが目を逸らし外に笑顔を向けた。

少々話すぎたようだ。まだ営業時間なのだから、そろそろ我も働くとしよう。

二階の自室に戻り外出用の服から店用の服に着替えると、パタパタと急ぎ足で店先に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7736p/>

むりやり自宅警備員

2011年11月5日22時39分発行